
主人公にはなれない

翠寵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公にはなれない

【Nコード】

N6502H

【作者名】

翠寵

【あらすじ】

ここは不思議な・・・間違えた、変な世界。

どこか陰のある主人公の少年、キサラ。

キサラには大きな秘密が。

そんなキサラはある日不思議な青年と出会った。

なんとその正体は冷酷非道な絶対的支配者・魔王。

の、ハズ。そして魔王が地上に出てきたことでキサラは過去と前世の出来事に翻弄される。

勇者、魔王、魔女、側近、腹黒、ブラコン（！？）が中心の物語。

だと思う。たぶん。

主人公の周りの奴らは主人公のことで頭がいっぱい。

もっとやるべきことあるだろうがしっかりしろお前ら。

ぐだぐだゆるゆる進んでいくわりに時々シリアスだったり。

主人公、とりあえずさっさと勇者になれ。

※タイトルが変わりました。

L v. 1 噂

なにも、欲しくなんてなかった。

最期までお前は信じてなんてくれなかったけど。

「おい、聞いたか？あの噂。」

ポツリポツリと人々の話声が聞こえた。

「ああ、聞いたさ。」

「何？なんだ？何の噂だ？？」

噂話にはどういふわけか魅力を感じる。どんなにささいな噂も、一気に広まっていくから。

「いいか？誰にも言うなよ？」

誰もがそう言うが、誰もがその約束を破るからだろう。

そして「これはしてはいけない」と言われると、更に人々の心は掻き立てられる。

「魔王っていう怪^{あや}しの力を持つ奴が、遠くの城に来たんだと。」

その噂はやがて街から町へ、町から村へと広まった。

村にまで噂が広まりきった頃、最初に噂が広まった街は既に火の海と化していた。

人々は、魔王の恐ろしさを身をもって知ることになった。

「ああ、魔王様。やはりこの世界は居心地がいいでございますな。」

手下の一人が言った。

「魔王様、いっそ全ての者を殺すのはいかがですか？」
もう一人の手下が言った。

その時、玉座に座る魔王の後方から刃が飛んできた。

「ゲッ……」

生々しい声を上げて、先ほどの手下が床に倒れこんだ。

次いで、魔王の後ろから側近の一人が出てきた。

「魔王様に意見するな。人間にも化けられない下等生物が。」
ゲヒゲヒと魔王の目の影たちが揺れた。

「死んだ、死んだ。」と歓喜の声を上げる者、「馬鹿者が」と死体を見下す者もいた。

ただ、その中に手下の魔物を哀れむ者は一人としていなかった。

「全てを滅ぼすもよいが、悲鳴を聞くのもまた良い……。」
酔いしれるように魔王は言った。

「おい、キサラ聞いてるのか？」

「うえ?! あ、ごめ……聞いてなかった、何？」

「キサラー、お前本当に抜けてるよなー」

「……ごめん。何かボーっとしちゃって。」

少々天然気味な男、名をキサラ。

この世に生を受けてから十八年、誰よりも自然を愛した。
年齢相応の背格好、容姿はそこそこ。

ただ、思考回路は他人と違い、同年齢の者よりもやや低め。

「お前、どうせこの間見つけた半獣のガキどうにかしてやろうとか
思ってたんだろ。」

「う……。(す、鋭い)。」

「やめとけ、やめとけ！あのガキ生意気だぞ。」

「でもちゃんと言うこと聞いてくれるし、家の手伝いとかしてくれるんだぞ。」

「キサラ、お前これで二匹目だぞ？一匹目は猫っぽい奴、二匹目はケンタウルス??」

「やめろよ！一匹とか半獣とか呼ぶの。だから反発するんだぞ。」

「俺はなあ、お前が変わり者扱いされてるのが我慢できないわけだよ。わかる?」

「兄さんにはわかんないよ。いい奴ばっかなのに。」

「兄弟としては弟が変わり者扱いされたら嫌なの。わかれ。」

「それは兄さんも同類だと思われるのが嫌だからだろ?」

「あったり〜。さすが弟、わかってんじゃーん。」

(こんなときばっか弟って……。面倒なだけなのに。)

会話に疲れたらしく、兄は家の方に戻って行った。

「第一、魔王ってなんだよ……。」

一応兄の話は聞いていたのだが、聞き取れたのは魔王というものすごい奴が来たということだけだった。

「魔王って人、ちゃんとした名前あんのかな。」

小さく呟いてから、家とは反対側にある小屋に向かって歩きだした。

L v. 1 噂（後書き）

まだ終わっていない連載があるんですけど、始めちゃいました。
・・・馬鹿だな自分。

楽しんでいただけたら幸いです。

L v. 2 パン

「「遅いー!!」」

「おわっ!？」

小屋の扉を開くと、二人(?)の子供が勢いよく飛び付いてきた。

「キサラの嘘つきー今日は早く来るって言ったのにー」

半獣の少女・シーラが言った。

「そうだよ!なんでこんなに遅いのー??」

半獣の少年・タスラが言った。

「あの男に捕まったの??」

シーラは心配げな顔で、キサラに聞いた。

ちなみに、あの男はキサラ兄。

少しだけキサラの視線が宙をさ迷う。

(えーと・・・なんて言おう・・・)

さっきの兄の言葉をこの二人に言うわけにもいかないし・・・。

(あ、そうだ。)

「ちょっと噂話を聞いてさ。聞く?」

(これなら喜ぶかも。外の話だし。)

「えっ、何???」

「噂?噂?」

普通に興味を持ったようだ。成功。

扉を閉めて、二人をベット代わりの干草に座らせた。

「えっとねー確か、かなり遠いんだけど、大きなお城 (・・・

ってなんだろう）が、突然現れたんだって。魔王ってゆう人と一緒に。」

瞬間、シーラとタスラの顔が蒼白になった。

「え……？」

「魔、王……？」

「？どうしたの？二人とも。お腹減った？」

全く関係ないことを心配するのがキサラである。

そのためか、少しだけ顔色が良くなった（ようにキサラは見えた）。

「ほら、今日のご飯。結構人気のパン。余り物だけど、もらってきたよ。」

二人においしそうな、まだ湯気の立つてきたてのパンを差し出す。

「……………」

二人は顔を見合わせた。

（キサラって……………）

（嘘下手だね……………）

小声で話しているためか、キサラには聞こえず、キョトンとした顔で二人を見ていた。

「結構人気のパン。」

もちろんそのパンが余るわけがない。しかもできたて。

そんなものが、もらえるはずなどない。

「いない？」

少し困った顔でおろおろしだしたキサラ。

「大丈夫？具合悪い??？」

二人の顔を交互に見て、本気で心配そうにしている。

その様子をみて、二人は笑顔になった。

「「ありがとう。」」

もらってきた、というパン。

家計が苦しいキサラ。

いつも真面目に、一生懸命働いている姿を、二人は見てきた。

毎日、早朝から深夜まで。

それでも、貰えるお金は少ない。

それを、二人のために時間をつくって。

二人のために大切なお金を使って。

もらってきた、と言ったのは、多分二人のために。

その優しさが、二人はとても嬉しかった。

「ありがとう。」

「おいしいよ。」

「うん、よかった。」

とても嬉しそうに、キサラは笑った。

L v. 2 パン（後書き）

放置期間がハンパないです。

いや、テスト地獄はホントにキツイ・・・。
また数ヶ月放置しそうな予感が・・・（一口！；）

これも地道にいきます・・・。

L v. 3 二人の側近

「愛しているぞ。」

感情のない言葉。何回も繰り返された、その言葉。

なのに、飽きないのは何故・・・？

飽きる程、同じ言葉ばかり聞かされてきた。何度も、何度も。

「心にも無いことをよく言えますね、魔王様？」

出てくる言葉は憎まれ口ばかり。こんなこと言いたいわけではないのに。

こういうとき、自分の性格が嫌になる。・・・なんでだ。

(本当は・・・・・・・・)

その先は、言わない。その言葉がこの人に聞こえずとも。

「魔王様、今日は何をなさいますか？」

「なんでも良い。勝手にせよ。」

冷笑を浮かべながら、その者の主君は言う。

陰の存在とは思えぬ美しすぎる、その笑みを。

それを見るのが、至福のときだった、が。

「貴様の性格のままにやってみたらどうだ？」

後ろから、声が聞こえた。

声が聞こえた瞬間、魔王様の顔の笑みが消える。

「魔王様。側近はそこに居る者だけではありません。」

不愉快な声が玉座に響く。

「今呼ばれてるのは誰だと思いです？退出願いませんか。」
「にっこりと殺意を笑みに練り込む。早く出ていけ。」

「嫌だ。」

（即答。予想通りの反応ですね。（イラッ）

「今なら半殺し程度で許して差し上げますよ？それが嫌ならすぐに退室なさってください。」

「ふん。魔王様の前では良い子ぶるのか。いやらしい男だな。」

「貴女に言われたくはありませんね。女らしくしたらいいかがです？」

二人の間で火花が散る。

魔王は玉座にてそれを面白そうな目で眺めていた。

「魔王様もどうか言ったらいいかがです？」

とりあえず、主君に追い払ってもらうようにした。

（卑怯？聞こえませんか。）

「ふむ。」

魔王はそれだけ呟いて、座りながら何事か綴りだした。

「どうだ？」

魔王の手から、何かが滑り、フワリと浮き上がる。

「これは……？」

「地上の世界に何をしようとかまわん。全権の取得をお前に命じる。」

「なっ……！！」

思わず、声が零れる。

「それは……！！」

（それは、私の……っ！）

本来ならば、自分にくるハズの仕事。

「文句か？アリファス。随分と偉くなったな。」

勝ち誇ったような笑みを浮かべて、ディジラウが言う。

「く………！」

「お任せください。魔王様。」

「………早く行け。ディジラウ。」

「はっ！」

そう言うのと、ディジラウは部屋を出た。

一瞬、こちらに笑みを閃かせて。

L v. 3 二人の側近（後書き）

側近は仲悪いよっという話ですね。（ ）

魔王様二人に無関心のくせに、敬語野郎に
アリファス
「愛してるゾ。」を連発してやがります。↑

・・・側近、ドンマイ。

L v. 4 嫉妬と支配者

「魔王様!!」

ディジラウが部屋から出たすぐ後、アリファスは説明をするように促した。

「何故・・・あの女に？」

「アリファス」

静かに、魔王の声が部屋に響く。

「お前は、余の傍におれば良い・・・。」

たった一言だけアリファスが望む答えを魔王は述べた。

「はい・・・。」

いつの間にか、唐突に言われる「愛しているぞ。」という言葉が日常になっていた。

毎日言われるからか、自分が望んでいるのか。

魔王の感情のない愛の言葉をかけられなければ、アリファスは不安になるようになっていた。

「魔王様。」

傍に居ると言われたことが、もしかしたら生きてきた中で一番嬉しかったかもしれない。

「ありがとうございます。」

アリファスの呟きは、魔王の耳に届くことなく床に落ちていった。

「お前たち!今この瞬間から、お前たちは私の配下だ!!」

ディジラウの声が広間に響き渡る。

疑問の声が広間の端々からのぼる。

すると、ディジラウは先程アリファスに見せた、勝ち誇った様な笑みを浮かべた。

「ここに、魔王様直々に綴られた命文がある！！よって、私には地上の魔族全てに命を下すことができる！又、地上の指揮権など、全権は私にある！！側近の、名の下に。」

最後の言葉に、広間全体が揺れる。

「お前たちは私の配下であるということに異論は者は？」

こうして、地上の魔族はディジラウの配下として活動することになった。

（アリファス・・・！お前を側近の座から引きずり降ろしてくれ
る！）

地上での全権がディジラウのものとなった今、それは確実に近づいた。

そう思っているのは、ディジラウのみである。

「でもですね、全権渡す必要はなかったのではないですか？」

「文句でも？」

「いえ・・・。ただ・・・。」

「側近であるものには、命は下せぬと書いておいた。」

「！！」

（き、気づいていたんですか・・・！！どこまで性悪なんですか！！）

「お前には影響はないだろう。」

「はぁ・・・。でも、気づいてたんですね。」

「配下の一人の意も汲めず、支配者などできるものか。」

「おっしゃるとおりで・・・。」

我が主でありながらなんて人（正確には魔物）ですか・・・。

今、魔王の瞳には何も映ってはいない。

何も。

世界も、自分を慕う側近や、配下のものすらも。

果たして、彼の瞳に映りえる者は現れるのだろうか。

妖しく、何かが闇の中で揺らめいた。

L v. 4 嫉妬と支配者（後書き）

サブタイトルに特にこれといった意味はないです・・・。

今回短いですね（↑今気づいた

それにしても、魔王様相変わらずひどいです。

アリファスとかがどんなに好きでも興味なしです。

地上とかどうなっても「ふーん」（棒読み）に違うない！！↑

・・・次回は勇者のターンです。

L v. 5 頼みごと

「ねえ、キサラ。」

シーラはいつもより真剣な顔をしてキサラを呼んだ。

「んー？何？おやつ？？」

が、やはり変なところに気を使うのがキサラである。

「・・・ちよーだい。」

それでもやっぱりおやつが欲しいシーラ↑食欲に負けた。

食べながら頼みごとをすることにした。

「お願いキサラ。私とタスラを魔王様の所に連れて行って！」

簡単に、それだけ。

「んー？危ないよ？そこまで行くの。」

「え？」

「いや、別に行ってもいいんだけどね。そこまで行くのにはさーほら！怖い人とかでるでしょ？」

「それは・・・。」

「だから、守りきれないかもしれない・・・頑張るけど。」
そう言ってキサラは勢いよく立ちあがった。

「や、でもあれだよ！？僕が弱いってわけじゃー・・・わ、わかんないけど・・・。」

ダラダラと冷や汗を流して弁解する。説得力皆無。

どうやらキサラはシーラやタスラを守り切れるか不安なようだ。

「反対・・・しないの？」

「？何で反対するの？」

「え．．．．．」

「あ、怪しいだろ??」

そこに、タスラも入ってきた。

「んー?? でも僕からしてみれば兄さんの方が怪しいんだけど。」

「．．．．．」

それもそれでどうなんだ。二人は心の中で激しくキサラに突っ込んだ。

「危ないと思うけどさ。二人が行きたいんでしょ？」

「．．．うん。」

「．．．．．行きたいよ．．．．．」

「じゃ、行こうよ。」

優しい笑顔でキサラが言った。

「理由．．．聞かないの？」

「．．．んー。二人が行きたいって言うんならそれが理由じゃない？」

少し困った顔をして、キサラが言った。

二人はその言葉にとっても嬉しくなった。

何よりも優先的に自分たちのことを考えていてくれる。

半獣の．．．自分たちを。

「「ごちそうさまー!!」」

「うん。今日も良い食べっぷり。」

はははーとキサラは笑って仕事に出かけた。

「タスラ。」

「シーラ。」

「キサラには．．．」

「うん。迷惑かけないようにしよう。あのことも、秘密にしよう。」

キサラはこの日、いつも以上にちゃんと兄の言うことを聞いた。

L v. 5 頼みごと（後書き）

・・・ここまできると天晴れだなキサラ。

ちょっとは疑うとか何で？とか聞けばいいのに（オマエ
さて、なんやかんやで魔王と勇者が接近できそうですね！
・・・1cmだけ。（ライ

次は勇者と勇者兄の話です（予定）

魔王より怪しいキサラ兄・・・よし、名前考えよう。↑

L v. 6 嫌な相談

「なあ、キサラ。」

「何？兄さん。」

キサラの天敵その1。キサラ兄。名をテイザ。

この世に生を受けてから二十年、誰よりも女を愛した↑単なるタラシ年齢相応の背格好。しかし少し高め。

容姿は・・・よくわからないが、良い方らしい。（何故か）女にモテる。

思考回路は女、女女女たまにキサラ。^{うたうた}とにかく女好きで、弟ばかり働かせる。（とキサラは思っている）

「俺はどうしたらいいと思う？」

「は？」

唐突な言葉。当然ながら理解不能である。

とりあえず、兄からの言葉を待つことにした。

「や、あれだ・・・。俺さ、好きな奴がいるんだわ。」

「ふーん。」

心底どうでもいいと思う。

キサラは生まれて一度も恋をしたことがない。

色恋沙汰はからつきしむりだ。

（何で僕に聞くのかな・・・？）

兄さんならとつくに解っていそうなものだけど・・・他の人じやまずい、とか？

「で、困ったことがあった。」

「困ったこと？」

「そいつはなんと、女が好きなんだ。」

いきなり理由をぶっちゃけた。なんてことだ。

「あー……。」

言葉が出ない。女が好きな人なら、兄さんがどんなにカッコイイの部類に入っても無理だ。

「ん？あれ？同じ性別の人が好きってこと？？」

キサラが聞くと、何故かティザは顔を赤らめて少し困った顔になっている。

（？焦ってる？というかなんで兄さんが赤くなるの……ええー……。）

どんどん解らなくなっていく。どこことなく不安を感じる。

「そ、それ……は……。」

ティザは目線を泳がせた。……不自然。

「兄さん？」

「……それは、置いとけ。」

「う……え？うん？」

ここまで動揺気味のティザを、キサラは初めて見たので、驚きからか、兄に流される。

「で、どうしたらいいと思うよ。お前。」

（僕に振らないで————っっっ！！）

解らないものは解らない。自分で解決してほしいものだ。

「その人が喜びそうなの……こと？を、してあげる、とか……？」

「無理。」

「え……っと、プレゼント？」

「無理。」

「ええええええええええ……。」

かなり定番そうなのを並べた。からかもしれないが、兄は即刻却下してくる。

(な、何ならいいのさ————!!?)

キサラの苦悩は、幕を開けたのである。

L V. 6 嫌な相談（後書き）

・・・兄さんはハードルの高い人に恋をしている様ですナ。↑

いきなりレズっぽい話でしたが、苦手な人すいません。

段々とBLまたはGLともれそうな感じになります。

苦手な人は・・・

逃げてくださいます。非難してくださいませ。・・・。

L v. 7 隠し事(前書き)

今回いつもより若干文字数多めでお送り致します；

L v. 7 隠し事

「魔王様。」

「・・・・・・。」

「魔王、様・・・・・・？」

「・・・・・・。」

返事が一向に返ってこない。

不安になったアリファスは、様子をみようと試みた。

（や、やはりやめた方が・・・・・・？）

ちなみに、現在、魔王自室前で、アリファスが晚餐の用意ができたことを知らせに来たのである。

が、魔王からの返事は皆無。物音一つすら聞こえない。

晚餐自体はどうでもいいが、冷えた料理を主君に食させるのは自分のプライド（？）が許さない。

「入りますよ？」

ため息混じりにそう言って、部屋の中へ入って行った。

「魔王様？」

「・・・・・・お前か。」

やっと気づいたらしい。こちらを見て、少し眠そうな目を擦っている。

「何をしていたのですか？」

「・・・・・・。ああ。」

魔王は寝台から降りて、ゆっくりとアリファスに歩み寄った。

魔王は、アリファスの耳元で囁いた。

「魂を飛ばした。」

「・・・・・・！！」

これにはアリファスも驚きを隠せなかった。

魂と肉体を離す方法は知っているが、それには莫大な量の魔力が必要だ。

それを遣って退けて尚も、平然としていられる。（少し眠そうではあるが）

「た、魂を飛ばして何を・・・・・・？」

「知りたいか？」

魔王は言いながら、アリファスのアクアマリン（藍緑色）の髪に指を絡ませてきた。

後ずさるアリファスを逃がさないよう、魔王は腕の間にアリファスを閉じ込めた。

「あ・・・・。」

抜け出そうとして顔を上げると、魔王の紫がかった目と目が合った。瞬間、ドキリとした。

透き通るような眼は、ゾツとするほど美しくて。

身長の違いのせいか、自分を面白そうに見下ろす。

魔王の漆黒の髪が、なびいた。

魔王の背まである長い髪に、アリファスは自分の指を絡ませた。しかし、全く指に引っかからない。

（なんでこんなにサラサラ・・・・・・！！！？）

わずかに動揺してしまう。

「で？何の用だ・・・？」

アリファスの髪を面白そうにくるくる指に巻きつけながら、魔王は聞いてきた。

瞬間にハッとした。そうだった。

「晩餐の用意ができました。それをお伝えに・・・」

「それだけか？」

魔王の心地よい声が耳に響く。

「あ、いえ・・・何ありません。」

「余に隠し事か？」

「う・・・あ・・・ちがつ・・・」

どうも歯切れが悪い。

魔王に露骨に嫌そうな顔をされた。

「・・・アリファス。嘘をつくのを上達させた方が良さそうだな。」

「・・・しょ、正直に生きてるんです！」

半ば逆切れ気味に叫ぶ。

「悪魔が正直というのは珍しい。さては珍種か？」

「ち、違います。」

このやりとりを、デイジラウが聞いていたことを、このときのアリファスは知る由もなかった。

L v. 7 隠し事（後書き）

盗み聞き（笑）

魔王様の所に来たのは一人だけではなかったという。（何

・・・全く何がしたいんだ！（爆）↑

魔王と勇者の距離が近づきました^^3mm↑オマエ

とりあえず、変な雰囲気から逃げるべく、次回は勇者の近況でも・・・。

L v. 8 嫌がらせという名の・・・(前書き)

若干変な方向に走っています；

L v. 8 嫌がらせという名の……

「旅に出る!？」

キサラ自宅に、テイザの声が響いた。
というか、テイザの部屋。

「う、え……はひ。」

どうも、おはこんばんわ。キサラです。

都まで行きたいという旨を伝えた途端に、兄さんの眼が血走り始めました。

こういうときは一発脳天に拳をブチ込んどけばいいんですかね……？

あ、すいません。こっちの話です。

「俺は許さないぞ。」

「へ……? あ、ごめん。兄さん。どうしても行きたいんだ。」
「……………」

珍しく考え込んでいるようだ。テイザは黙ってしまった。

「俺も連れて行け。それが条件だ。」

「え……!？」

「不満か? それともあいつら居るからか？」

「あいつらって？」

「お前……本当トロイな。半獣だよ、半獣!」

半獣という言葉に、キサラは一瞬固まった。

「……兄さんのバカ。」

「……キ、キサラ……？」

焦ってるけど許せない。

「兄さんなんて連れてってあげない！」

みるみるうちにテイザの顔が青ざめていく。

（そ、そんなに都に行きたかったのかな……？）

いや、でも今のは兄さんがいけない。

そう思い直してクルリと背を向けた。

「キサラ……。」

耳元で、自分の名前が囁かれた。

当然、僕は驚いた。驚いたけど、動けない。

「兄さん……？」

「テイザだ。」

いや、知ってますけど。

心の中でツツコミを入れた。や、何年一緒に居ると思ってるんだ。

「お前の腕は本当に細いな。」

甘い声色で囁かれる。

はい、皆さんのご想像とおりです。腕を掴まれています。

でも何かぞわぞわ……ん？ぞくぞく……する。

テイザは右手でキサラの腕を、そして左手をキサラの腹部に滑らせ

た。

「ちょ．．．！兄さん！？」

「テイザだ。」

「知ってるよ！！」

頑張って抜け出そうとするけど、さすが、力が強く振りほどけない。

「兄さん！僕は女の子じゃないよ！？」

「知ってる。」

え．．．．じゃ、何がしたいの。

頭がぐるぐるしているうちに、一瞬、ふわりとキサラの体が宙に浮いた。

そして、ベッドの上に優しく下ろされた。

ん．．．？ベッド．．．？

テイザの右手が、キサラの頭の横に降りてきた。

左手は、キサラの髪に伸びる。

「なあ、お前、俺が無類の女好きだと思ってねえか？」

「もちろん．．．じゃなかった、そうデス。」

「．．．．。」

「俺は、そんなにいい加減な男じゃねえよ。」

初耳。ていうかその甘ったるい声色をいい加減にやめていただきた
い。

「キサラ．．．．。」

ベッドがきしむ音がする。

(え・・・ちよっと待って僕どうなるの・・・?)

テイザによる嫌^{セクハラ}がらせが、本格化を迎えようとしていた。

L V. 8 嫌がらせという名の・・・・・・・・（後書き）

夢で、同性愛を語るならこれぐらい入れろ！
というテイザの声を聞きました。（↑重症）

まあ・・・・・・・・ごめんなさい。。。。

L V. 9 ブラコンな兄（前書き）

タイトル見て「ダメだ」と思った方、回れ右。
（左でも可）

Lv. 9 ブラコンな兄

「兄さん!! ちょっと・・・っ・・・!!」

キサラです。ピンチです。

兄さんがそっちの世界へダイブしそうです。（僕は道連れ・・・??）

こういうときは、急所に蹴りでも入れれば万事解決ですね☆（↑混乱中）

「やめ・・・!!」

「なあ、知ってるか？」

「知らないいいいい!!」

「・・・まだ何にも言っていないんだけど。」

ロクなこと言わない気がするため強制終了したまでだけど。
何この展開、兄弟設定とか無視ですか？ていうか設定って何。

「そんなに暴れるな。・・・食いたくなる」

不味いですよ。人肉なんて。・・・食べたことないけど。

（どこの悪魔かこの男はっっっ!!）

天敵が前にいるからか、キサラは口調も性格も穏やかとは離れていく。

ただ・・・

「人肉は食べちゃ駄目なんだよ! 兄さん!! 食べるなら豚!!」

「食えるか!! いや、食えるけど意味違うぞお前・・・。」

「え？」

天然(?)など、思考の幼さは健在である。

そして、この年ごろには珍しい、健全男子なのである。

「さっきの話に戻すが、暴れられると余計に掻き立てられるぞ。」

「食欲が!？」

「・・・お前の思っている意味とは違う食欲だな。」

クスクスと笑って、テイザはキサラの頬に指先を置いた。

「お前本当に男か？」

「何言ってるんだよ、風呂いっつも乱入してくるくせに。」

「・・・／／／」

思い出したらしい。

なんだかプルプル震えてる。寒いのかな??

「あ、キサラ・・・」

「?何。」

「他の男に何かされたら言えよ。」

「・・・?」

「や、だからな。あれだ。その・・・変に見られてるとか。」

「そんな、兄さん程すごい人いないよ。」

「ふん・・・。」といってから、テイザが物凄い剣幕でキサラを見る。

「見られてんのか!？」

「え? ああ、着替えとか。」

みるみるうちにテイザの顔が赤く染まる。

(な、なんで怒ってるの?!)

「それで？」

「『細いな』って言って……それで……その……」

「そ、れ、で????」

なんだか言いづらくなってきた。
キサラの頬がうつすら赤くなる。

「だ、抱きあげられた。」

「高い高い」とか言われながら。
恥ずかしい。まるで赤ちゃんじゃないか。

がばっと起き上がって、テイザがズカズカとドアに向かって歩き出した。

「クロス……」

一瞬キサラはその顔を見てしまった。

(あ、悪魔……!!?)

なんかすごくこわい顔だった。

「兄さん、旅……俺も連れて行け。」

こんなやりとりをして、テイザはドアを開け、部屋から出て行った。

「はぁ……助かった……のかな？」

よく意味はわからなかったが、どうやら食われるのは逃れられたらしい。

キサラです。急所蹴らなくても万事解決できましたね。

なんだかんだ言って都に行く許可も得たし。

よし、準備に入ります！

L v. 9 ブラコンな兄（後書き）

ブラコンですよ。ブラコン。

やー、伝わったか微妙ですね。いいですけど。

本編とはあんまり関係ないんで。↑

本当は、許可おりたことが中心だったんですけど、やっぱり
テイザの「俺はブラコンっていうのはどうだ？」という
お告げに従いました。↑前回に引き続き重症。

あー。さっき地震きました。グラグラ揺れてるけど
カタカタしたいから放つといた。（ー）

震度なんだったんだろー。

わーすいません。次回も見てくれたらうれしいですへへ

L v. 10 隣のぬいぐるみ

「シーラ、タスラ！」

小屋の扉を勢いよく開け放つ。

シーラもタスラも、キサラを見つけて嬉しそうな顔をした。

「行ってもいいって！都。ただし、兄さん付き。」

シーラもタスラも、行ってもいいという言葉で喜びを隠すような顔をしていたが、

「兄さん」という言葉に露骨に嫌そうな表情をした。

「あの男付きって、なんのいじめ？」

「いや、これがあの男のやり口というやつじゃないのか？」

なんだか二人が怖い顔をしている。どうしよう。

「大丈夫だよ。二人には何も嫌な思いはさせないから。」

優しく笑って見せたつもりではあったが、ちよつと失敗した。

二人が心配している。

「無理はしないから。」

「本当？」

「無理したら怒るよ？」

二人が心配そうな顔をしている。

心配してくれているのは嬉しい。でも、そんな悲しい顔をしてほしくもない。

（ちよつとだけ複雑だなあ。）

「大丈夫。二人とも心配しないで。お菓子はちゃんと持ってきたから。」

安心させるため、というわけでもなく、素のキサラの言葉であった。話がずれてる以前の問題。二人はあきらめてお菓子を平らげた。

「出発は明日にしようか。」

「うん。」

「早い方がいいもんね。」

「よし、決まり。」

（兄さんにも言うておくか。一方的に。）

「じゃ、二人とも持っていきたいもの用意してね。」

「わかった。」

「すぐ終わるよ。」

二人は早速、お気に入りのぬぐるみを手に取った。少し土で汚れてしまったが、大切なぬぐるみだった。キサラが慣れない手つきで二人に作ってくれたぬぐるみだった。

シーラにはタスラの形。タスラにはシーラの形。

それぞれ二人の形をしたぬぐるみ。

例え今は同じところで暮らしていても、離れてしまう日が来ってしまう。

でも、二人の形のぬぐるみをそれぞれに渡すことで、忘れないでほしいという願いも渡せた気がした。

（二人とも、大切な家族だから・・・。）

あの二人のためなら、あの二人が望むのなら、自分が願いを叶えてあげよう。

自分の自己満足でもいい。二人のために。家族のために。

（そのためには兄さんの悪質な嫌がらせにも耐えてみせる！！）

家族を大切に行っている割には、一番の天敵も家族。

その矛盾は、どこか心地よくも感じられた。

キサラは自分も旅支度を整えようと自分の部屋に向かって行った。

と、――――。・・・。

「聞いちゃった♪」

年若い女の声が、小屋の窓付近に落ちる。

ぬいぐるみに夢中になっていたシーラとタスラはその声を聞き取れなかった。

「キサラに近づきたいチャンスね。よし！」

キサラには新たな苦悩が迫っていた。

L v. 10 隣のぬいぐるみ（後書き）

キサラに新たな苦悩発生。と、その前に魔王サイドにいきたいですね。

魔王サイドは連続で無かったので。

アリファスと魔王のやりとりを見たディジラウは？

魔王の本名は？

魔王と勇者の接点はどうなる？

自分でも「？」ばかりなので、消化していききたいです。^^

L v. 11 天敵現る

出発の日、どういうわけか兄さんが起きてこなかった。

「何してるんだろう、兄さん。」

「いいよもう、キサラ行こうよ。」

「そうだよキサラー。タスラの言うとおりでよお。」

二人に言われるまでもなくそうしたい気持ちで山々だ。

もしも自分の兄でなかったらすぐに縛り首にしてみよう。

「あん！？なんだとこのガキ！」

いつもより機嫌の悪そうなテイザがひいっとタスラの服を引っ張り、持ちあげた。

「うわあああん！キサラー！！」

勢いよくタスラがキサラに飛び着く。

タスラの足は馬なので、動きが早いし、音が響く。

と、まるでその音が合図かのように、一人の女が現れた。

「ちゃおう！キサラ君♪」

「「「げ。」「」」」

現れた女以外全員がハモった。

（何でここに！！？）

テイザが遅れてきたとか飛び着いてきたタスラの勢いが凄過ぎて体が痛いとかそんなことはどうでもよかった。

それくらい、この女が出てきた衝撃はすごかった。

「ななななああああ!?!」

テイザが本気でビビっている。この時点ですごい女だということがわかる。

「タスラ、私悪夢に迷っちゃったみたい助けて。」

「シーラ、俺もなんだけどあと、あの男がキモイよ。助けて。」

「こら、二人とも失礼だぞ。・・・僕も逃げていいか。」

「「キサラ!」」

「何、お前ら動揺しすぎだ。や、でも俺は花嫁姿のキサラを連れて逃がたい。」

「ちょ、兄さんが一番動揺してんだけど；誰が花嫁だ変態が!!」

「「「キサラは私（俺）の嫁」」」

「ちよつと待て。なんで皆変態へ突っ走ってんの!?!」

では、この辺でとにかくすごい女の説明を・・・。

キサラの天敵その2。キサラの幼馴染。名をシュヒアル。

本名は別にあるというが、幼馴染であるキサラにすら告げていない。皆は縮めてシュヒと呼んでいるが、本人は嫌がっている。

キサラより年下。（容姿だけ。）

実年齢は、本名と動揺不明。とにかく謎だらけの女。

思考回路はキサラ、魔法、キサラ、キサラで、脳内の半分以上はキサラをしめている。

が、キサラ本人は苦手意識が高いうえに、滅多にいない天敵指定の女なのである。

（あ、相変わらずすごい格好だな・・・。）

ひらひらの黒いスカート。首元にはきらきら光る黒い真珠のネックレス

レス。

右手首には派手なスカーフが巻いてある。

袖口には細かい装飾（に見える）レースがある。

田舎には不釣り合いなでかい屋敷に住んでおり、養女として引き取られた身の上。

来たときから既に悪魔と契約を結んでおり、魔法の使用が可能であった。

初対面の時点では、キサラ、テイザ、シーラ、タスラの誰もが彼女を苦手だとは思っていなかったが・・・

ある日突然前触れもなく、キサラに惚れ薬を飲ませようとしたり、キサラを屋敷の小部屋に監禁（？）したり、

バイト先への出現率、妨害率が共に高く、苦手になるのにそう時間はかからなかった。

キサラ、シーラ、タスラは以上の出来事だけだったが、テイザは＋αで嫌なことがあったらしい。

「おい、お前まさか・・・。」

「あんたに話しかけてないでしょ。私はキサラに話しかけてんのよ。バカ兄。」

「俺はお前の兄になった記憶はねえぞ。」

「ああ、ごめんなさいね。義兄様。」

「誰が義兄様だ！！キサラはやらん！俺がもらう！」

「どさくさにまぎれて変態発言してんじゃねー！！」

今は亡き、父さん、母さん。

僕は今ものすごく不安でいっぱいです。

願いが叶うなら、兄さんの、脱・変態☆に協力していただけますか？

あの軽すぎる頭に脳を詰め込んでいただけですか？

心の中で両親に（結構ひどいことを）語りかけるキサラであった。

L v. 11 天敵現る（後書き）

予告と大幅に変わりましたね。^^;

ここは笑ってごまかします。アハハ、エヘヘ（キモイ

・・・すいません、自分のキモさに今にも死にそうです。

・・・じ、次回こそ！次回こそは魔王様をつ！！

側近敬語男VS側近男気全開女の戦いを・・・！！（書けないですけどね！↑

なんでしよう、こう、今回の話は変態がどうかでてましたが、
こういうのって書き手に反映してるのでしょうか？

それとも話に書き手の人物像が反映するのでしょうか？

・・・この謎は解けるとマズイ気がしてならないのであえてスルー
します。

頭の中では結末までできてるんですけど、そこまで書きあげるのが
大変そうです。（当たり前ですね、すみません。ホント。

話をどうもっていくとかそのときそのときで変わっていくので、
話の流れがいまいち自分でもつかめない感じがします。（何が言
いたいのかはその・・・察していただければありがたいな～ん
て・・・。

うあ、このままいくと本編よりも文字数とか多くなりそうなのでこ
の辺で・・・。

次回も読んでくださることを願って・・・では^^

L v. 12 いつまで

何故、何故、何故・・・!!?

悔しさは時が流れるのと比例するように膨らんでいった。

魔王を想えば想うほど、彼を取り巻く全てのものが妬ましくなる。特に、両性を捨て、男となった殺戮者の側近・・・。

「アリファス・・・!!」

(許さない・・・!!)

見てしまった光景。

聞いてしまった優しい声音。

普段は見せないその表情。

(どうして・・・)

歩いていた足が、意図せず止まる。

(アリファスは役立たずだというのに。)

彼が、男になってしまった時点で。

それは彼らが出会う前からだったはず。

本来、魔族は階級が魔力の強さにより決まる。

そして性別は階級が上の者だけが両性であり、各々好きなように決めることができる。

通常、戦闘を好む者は大抵男の性別を選ぶ。

例外は、女。

階級が上であるにも関わらず、力を振るうことを毛嫌いする者が女となる。

しかし、ディジラウは例外中の例外。

戦闘をこのうえなく好むが、女となることを選び、両性を捨てた。

いわば、アリファスの逆である。

アリファスはかつて、強大な魔力を使い、戦闘をしていた。

それ故、戦闘を好むあまりに、男となることを選び、両性を捨てたことは言うまでもない。（言ってるけど

力、魔力の攻撃性は共に男の方が確実に上であり、また自然と体に備わっていく。

それに反して、女は力は弱く、繊細な魔法、回復術に長けていく機能が、自然と体に備わっていく。

以上を理解したうえで、階級が上の者たちは、自分の性別を選んでいく。

そして、歴代の魔王たちは代々、両性を捨て、男となる。

ちなみに、現在の魔王、ダーラック・ナトスこと、

ダーナック・ナトス・ラデル・ビ・ラドディエクはまだ両性である。

とまあ、以上の理由から、後々当代の魔王が男になるのは明白であった。

歴代魔王は代々から、側近のみの婚約が認められている。

忠誠を誓った者であれば、万が一のことがあっても裏切られることはないというのが理由の一つだ。

現在、魔王の側近は二人。

その内一人が男。もう一人が女。

どう考えても、次期婚約者となるのはディジラウのはずだ。

しかし、その考えとは反して、城内ではディジラウにとって好ましくない噂まで流れ始めた。

王の、アリファス寵愛。

確かに常に一緒にいるが、側近であるから故のことだと思っていた。だが、突きつけられた現実はその噂を信じるほかないような光景であつた。

「何故だ！」

男を選ぶより何より、魔王に全てを捧げてきたつもりでいた。

アリファスに劣るものはないと、自負している。

それに、地上を支配するにあたって、ディジラウは意図せずして全権取得もした。

手に入れなければならないものは手に入っているつもりだ。

現に、今の状況からして、同じ側近でもディジラウの方が優位に立っている。

（これ以上、何が足りないと・・・！！）

権力？アリファスよりも上だ。

資質？同じくらいじゃないか。

性格？質の悪さは同じだろう。

人望？誰かに恨まれていない。

実績？大体同じくらいだろう。

自問自答しても、何も見えてこない。

自惚れているのかもしれない。

でも・・・・・・・・

（アリファスには、負けたくない。）

かつての殺戮者、機械的な人形が、優秀な側近に化けたときから、その思いは芽生えていた。

魔王様のために尽くし、期待に添える結果を出せるのは自分のみだ
と。

もしも、自惚れてもいい日がくるのならば――――・・・・・

そのときは。

貴方様の隣に。いつまでも。

彼女の願いが届かぬと解る日は、そう遠くはなく。

冷酷な魔王様に、心からの祝福を。

B
y
w
h
e
n
m
a
y
I
b
e
n
e
a
r
b
y?

L v. 12 いつまで（後書き）

うん。（何

ちよっとやりきった的な表情を浮かべています、すいません。

デিজラウの気持ちに、魔王様気づいてます^^↑
もちろん、アリファスの気持ちにも。

何故彼がどちらも選ばないのか、後々明かしていきたいなあと。

ちなみに、最後の英語は、翻訳すると

By when may I be nearby?・・・いつまでそばにいてもいいですか？

という意味です。（得意げ

でも、英文は自分で作ったわけもなく・・・。
ネットって便利ですネ。↑

あ、書き忘れましたが、魔族&魔法に関する記述はこれまでもこれからも

全て創作です。いや本当に。（超重要。

まあ、勘違いする人いないと思いますけどね。
では^^

L v. 13 知りもしないで

魂を飛ばして、知ったことがあった。



（久しいな……）

普段よりも多い、魔力の消費感覚。
久しぶりの上級魔法。

魂が口からすつと抜けていく。

瞬間、彼の魂は何か引き寄せられた。

（……なんだ……面倒な。）

地上の最大権力を見に行こうと、魂を飛ばしたのに、引き寄せられたのは……。

「……………」

予想外過ぎて言葉も出ない。

ド田舎な村の上を、魔王の魂は浮遊していた。

（何故、こんなところに……）

引き寄せられた理由が全く分からない上に、城から遠すぎる。
偶然などではないことが容易にわかる。

「ここに何があるというのだ。」

誰にともなく呟いた。

しかしまだ、彼の魂は何か引き寄せられる。

とりあえず、何かに“憑く”ことにした。
辺りを見回すと、本当に田舎で何もいない。
呆れていると、向こう側から黒猫が一匹歩いてきた。

「フム……。」

他に手ごろな肉体が見つからなかったので仕方なく黒猫に“憑いた”。

（余に、しばらく肉体を捧げよ。）

一つ、鳴き声がして黒猫の精神を押しつけ、ナトスが出てきた。

（なんだ、まだ……。）

肉体に憑いても尚、ナトスの魂は引きずられる。

（仕方がない、か。）

どうせ、時間は腐るほどある。

ナトスは魂が引かれるがままに、道を進むことにした。



（何もないではないか。）

目の前にそびえたっているのは、小さな小屋で。

猫の視点だからか、小さな小屋でも大きく感じる。

（小さい小屋だな。）

と、――――。

「なんだ、また来たのか。」

ひょい、と抱きあげられる。

「!？」

気配を感じなかったどころか、逃げる隙すらなかった。不覚。

（一体誰・・・）

「うわ、どうした!？」

それは、猫がその人間と目が合ったほんの一瞬で。

黒猫の意識は、文字通り吹っ飛んでしまった。

◇

「あの男は・・・」

抱きあげられた瞬間、雷に打たれたような衝撃を受けた。

優しい笑顔と、澄んだ瞳（に魔王には見えた。）

目が合った瞬間に、何も考えることができなくなってしまっ

・

思わず、魂を肉体へ戻してしまった。

何か、温かいものが、ナトスの胸に宿り始めている。

（何をばかな・・・。）

アリファスを捕まえても、尊敬の念が込められた眼差しを向けられ
ても、満たされることのなかった心。

無関心は自然とできる。本気でどうでもいいのだから。

しかし、あの男だけは・・・。

ナトスの頭から離れなかった。

◇

魂を飛ばして、知ったことがあった。

名前も知らない、誰ともわからない得体の知れないものが、頭の中を独占していくことがあると。

初めて見た、皮肉もなく、作りものでない本当の笑顔は、とても温かいものであると。

誰かの目に、何の肩書もない自分が映った時、これ以上無い至福に似た感覚が訪れるのだと。

どれも衝撃的で、初めての感覚。

でも、一番は・・・・・・・・

何事にも無関心であったはずの自分も、何かに関心が持てるということ。

ナトス自身が知りえないことが、このとき起きていたとも知らず、彼はいつもの仮面をかぶる。

残酷すぎる程残酷。冷酷なまでに冷酷。

命を命とも思わない、孤独な覇王。

事実であるはずなのに、その自分が嘘のようにも思えて。

それすらも、彼にとっては初めての感覚。

・ it is possible to meet again.

その時は、自分を見てほしい。

Lv. 13 知りもしないで（後書き）

今年初投稿ですね。

新年の初めがこんなのでいいのやら・・・。

さて、今回本編で初めて、魔王が人間と遭遇しましたね。

そうです、遭遇したのはあの人です（何だコレ

解らない方のために、後々正体を明かしましょう。忘れてなければ↑

私が英語を恒例化したいので、今回も入れました。

なぜなら英語が苦手だから！覚えたいのです！！（結局お前か！

はい、翻訳しますと、

・ it is possible to meet again.

・・・もう一度、会えるのなら

という意味です。（今回も得意げ

魔王サイドが連続ですね。

ぶっちゃけ魔王サイドと勇者サイドってどっちが面白いのか・・・？

あ、マシという意味です面白いとかいってすいません、その方石投げないで！！

・・・感想とか欲しいなあなんて。あ、ごめんなさい調子乗りました。引かないで！

こ、今年もこんなテンションです。切りが良いのでこの辺で。では
^^

L v. 14 恋情は鎖（前書き）

・・・BLぽいです。苦手な方は回れ右。（左でも可）

L v. 14 恋情は鎖

愛してもいいのなら。

自惚れてもいいのなら。

どうか、貴方の傍にいさせて。



「へー。大体のことは解ったわ。」

結局、シュヒは事情を聞かないと帰らないと言って聞かなかったため、事情を話すことになった。

簡潔に、二人が城に行きたがっていることだけ省いて。都に行きたいと。

「そういうことなら、家の馬車あげるわよ。いかが？」

（（金持ちめ・・・。））

シーラとタスラが同時に鋭い視線をシュヒに向けたが、本人は涼しい顔をしている。

「う、ん。気持ちは嬉しいよ。でも、悪いから。」

「えー?? いいのに。キサラ君のためならたとえ火の中水の中♪」

「・・・・・・。」

キサラがそのままの顔で固まった。引いてる。

「尽くしてくれるのはありがたいけどキモイ。」

「何?! ちょっと! アンタに言っていないでしょ!」

「俺は丁寧なキサラの気持を翻訳してあげたまででございますよ。」

お嬢様。」

（屋敷の若い執事がやるみたいな）跪くような仕草をしながら、キザったらしくテイザが言う。

優雅な仕草は妙に似合っていた。（台詞は変だけど）

「馬車の件はありがたくいただくとして……なんでここまで憑いてくるよ？」

「イントネーションがおかしいわよ。憑いてくるじゃなくて付いてくるでしょ？」

「えー、この魔女っ子が。同じ様なもんだろ。妖怪と魔女って。」

「ちよっと並べるものがおかしいわよ。この変態シヨタコン!!」

「違う！俺はシヨタコンじゃない！男なんて嫌いだむさ苦しい！（一人を除く。）」

二人の罵り合いには軽く引っ掛かるところがいくつかあったけど、いちいち気にしていると何だか疲れそうな気がしたので、そのままにしておくことになった。（シーラの案。）

「あ、馬車あったわよ。」

「「「!!」」」」

啞然。馬車なのかこれ。

「お、大きくない？」

「んーん。そこまでないわ。中古よ、ちゅ・う・こ！」

（（金持ちめ……!!））↑シーラ、タスラ、テイザの心の声。

「じゃ、出発〜!……といきたいとこだけど、途中で人乗せていくわよ。」

「人？誰?？」

「んゝ内緒☆キサラ君だけに教えてあげるねー♪」

シュヒの切なげな視線を華麗にスルー。さすが俺の弟。

テイザの顔がヤバめなことに気付いたタスラが、キサラに駆け寄る。

「うん。そだね。」

「ん?? 眠いの?? 毛布あるよ?」

斜め47度ぐらいズレている心配をするのがキササである。

「魂を飛ばす。しばらくここに来るな。」

今言われたことが理解できないアリファスは固まった。

「気になることがあつてな。」

（魔王様が……？）

それは、とても久しぶりの出来事。

かつて、初めて彼が興味を抱いたのはアリファスで。
しかし、そこまで長く興味は続かなかった。

――嫌、・・・だ。

誰にも、何にも、興味なんて持たなかったのに。

自分だけが、その唯一の価値のあるものだったのに。
誰かに、何かに、その大切な位置を取られてしまう。

させませんよ？・・・嫌、ですから・・・。

「魔、王さ・・・」

見れば、魂を飛ばす術を始めているところだった。

誰かのもとに、行ってしまう。

皮肉の一つでも言えば、留まってくれるだろうか。

行かせませんよ。どこにも。

貴方だけは。

何も考えていなかったのに、足が前に進む。

勢いよく、ナトスの手首を掴んで。

t h i s c o n d u c t o n e s e l f
B e c a u s e i t w a n t s y o u
t o b e i n

彼の唇に、触れるだけのキスを落とした。

L v. 14 恋情は鎖（後書き）

勇者は馬車を手に入れた！（たんたたんーん☆）

今回のサブタイトルは魔王よりです。

悩んだ末がこれです。後悔はしてますよ？（反省はしていない）

魔王サイドのサブタイトルが、「恋情は鎖」で

勇者サイドのサブタイトルが、「馬車と令嬢」です。

魔王サイドの方が回れ右をしやすいと思ひまして。

描写で直接的にというか（間接的にってのもどうなんだ）キスという描写をしたのは人生で初めてです。書いてて恥ずかしかったんですけど、

アリファスのナトスを繋ぎとめようという必死さを出すにはこれしかなかったという感じでして……（長いわ！

サブタイトルの意味は汲んでいただけでしょうか？

それなりに意味を込めたつもりでいます。（私が。↑

解釈の仕方は自由です。では^^

追記

英語の意味載せるの忘れてました^^;

Because it wants you to be in
this conduct oneself

……此処に居てほしいから、という意味です。

L v. 15 登場の序章（前書き）

L v. 15 登場の序章

カラカラと馬車が動き出したのは、数時間前のこと。都に近づくにつれて、段々建物が多くなってきた。

田舎の殺風景な景色とは、また違う景色で。

戸惑いを隠しきれないキサラ、シーラ、タスラであった。

「うわ、全然違うね。ちよつとしかたってないのに。」

「結構たってるよ。どのくらいかはわかんないけど。」

馬車に揺られながら、シーラとタスラが会話をする。

先程から妙にワクワクしていて、二人の会話は途切れることがなかった。

「実に微笑ましい光景だな。キサラ。」

言いながらテイザがキサラの肩を抱いてきた。

（何考えてんだか……。変態兄め……。）

「そうだね。（兄さんが邪魔で見えなくなったけど。）」

「あら、貴方さえいなければもっと良くてよ？」

シュヒに賛同、約三名。

（ていうかシュヒもいなりやもつといいよ。）

タスラの心の呟きを読んだが如く、シュヒの杖がタスラの背中に落ちた。

「痛ッ———!!」

「タスラ？だ、大丈夫？ちよつと、シュヒ！」

「冗談よ。あれー痛かったあ？」

意地悪な笑みを閃かせ、シュヒがタスラを見た。

「キサラー痛いー。」

タスラがキサラに抱きつく。

「大丈夫？」

先程杖が当たった場所をキサラが優しく撫でた。

「ありがとー。」

言いながら、ニヤリとシュヒを見る。

（こんのガキー！！）

シュヒが笑顔で威圧するが、タスラはキサラに思いつきり甘えていて気付かない。

「おい、お前羨ま・・・じゃなかった、どけ！」

「あんたいつかR指定憑くわよ。」

「・・・イントネーションがおかしいぞ。付くだろ。」

「そうとも言うわね。」

（いや、R指定って・・・。）

キサラが危ない。タスラとシーラはキサラを守ることを共に誓うことにした。

ブラコン（シヨタコン説あり）男がいつ調子に乗るかわからない。

「というか貴方ケンタウルスでしょ？お馬さんと一緒に馬車を引いたら？」

「シュヒ！」

キサラが眉根を寄せながら言った。

（怒ってる・・・？）

「ごめ・・・。」

ッ。

「シュヒ!？」

杖に乗り、シュヒは瞬間に上空へと飛び立ってしまった。



「あれはあいつが悪い。気に病むことないぞ。キサラ。」

テイザがキサラの心中を察したかのように、キサラが望む言葉を言ってくれた。

しかし、テイザも少々気になっているようだった。

（まったく、キサラに心配かけるなんざ百万年早えーよ。）
自分ですら心配をかけたことはないというのに。

「でも・・・夜になっても帰ってこないなんて・・・。」

「どっかで道草食ってんだろ。ほっとけ。」

「そんなこと言って良いのかしら？お義兄さま？」

「うわ、最悪だお前空気読め。」

「あら、どこまでお馬鹿さんなのかしら。空気は吸うものよ？」
二人の間で見えない火花が散っている。（とキサラは見えた。）

「シュヒ、さっきは・・・」

「ごめんなさい。私あの子のこと考えてなかったわ。すごく恥ずかしい。」

そう言うシュヒの目は、わずかに赤みがかかり、腫れていた。

「シュヒ・・・。」

「おチビさん達は寝ちゃった？謝りたいのだけど。」

「あ、ごめん、はしやぎすぎたみたいで・・・寝ちゃってる。」

「キサラ君が謝ることないわ。いいの。明日ちゃんと謝るわ。」

「うん。ありがとう。」

ふんわりとした空気が流れる。明るい雰囲気になってきた。

「で、お前どこにいったんだ。」

「あらお義兄様。」

すたすたと足早にテイザに近づく。

どす黒い表情をしていることにキサラは気づいていない。

「バラすわよ？このブラコン。」

テイザを完全に屈服させる魔法の呪文（という名の脅迫）を、シュヒは唱えた。

こうして、テイザは（少しだけ）態度を改めることになった。

◇

「途中で乗る人ってどこで待ち合わせしてるとかあったりする？」

「ええ、次の町よ。ごめんなさいね。今日あまり進まなかったわね。」

「は？結構進んでただろうが。距離考えて言ってるのか？」

「・・・私を探さずにここまで来るとはいい度胸よね。人の馬車乗りまわしという。」

「二人とも、もうちょっと静かに・・・タスラとシーラが起きちゃう。」

「大体ねーいい加減なのよあんた。本当にキサラと血の繋がりがあって？」

「何だと！？いい加減なのは認める、でも血の繋がりが無かったらとっくに・・・」

「二人とも？静かにしてよ。脳天に一発キメるよ？」

（あ、今聞きなれない科白が……しかもキサラの口から……）

「……いつぶり？」

「三年ぶり。まだ生きてたのか。」

「当たり前♪」

この日、馬車から遠く離れた場所から、（タスラが）テイザ（らしき人）の悲鳴（？）を聞いたのだった。

L v. 15 登場の序章（後書き）

最後、謎の人物が登場しました。^^

・・・文字数にビビって今回英語が入りませんでした。（ヘタレ再び恒例化するか！？と危うい気がします。私的に（またお前か

キサラ本人は兄がブラコンだということを知りません。

知らない方が幸せなことってありますよね。^^↑

で、シュヒが気づいている、と。（ライバル意識あり。）

今回のサブタイトルは、「登場の序章」です。

何が登場するかはお楽しみです。

一気にどわっとかもしれないし、一話ずつ分けてとんとんとも・・・。

最近英語が楽しいです。（塾）

しかしあまり成果出ず・・・どういことなのやら。

さてと、今回はこの辺で。では^^

L
v.
1
6
d
o
n
'
t
l
e
a
v
e
m
e
.
.
.
(前書き)

L v. 16 d o n ' t l e a v e m e . . .

何も、感じなかった。



尊敬の眼差しがいつからか恋情に変わっていたことも、知ったのはキスをされたときだった。

慕われているかもしれないということは何となくわかっていたつもりだった。

けれど、それは自分にとって不測の事態。計算外の感情、狂おしいほどの欲望でもあり。

彼にとっては邪魔でしかない。

知っているはずなのに、目の前の賢い側近は自分の感情を抑えきれていなかった。

自分がしたいことをしたはずなのに、今にも泣きそうな顔をしている。

（理解できないな・・・。）

自分のしたいことをしたいままにしたというのに。

何故悲しいという感情がでてきたのか。

王である彼には何一つとして理解できなかった。

彼が王であろうが王であるまいが、関係があるのかすらもわからないのだが・・・。

『心にも無いことをよく言えますね、魔王様？』

照れ隠しの様に憎まれ口を発していた男。

その反応が面白くて、つい何度も言ってしまった。

「愛している」と。

まるで心からその言葉を言って欲しいかのように、彼は何度も同じ言葉を返してきた。

何故心にも無いことが平気で言えるのか、と。

（本当にそうだったとは。）

予想外どころの騒ぎではない。

（これは・・・・・・。）

優秀にして忠実な側近。出会ってからすぐに要領よく、望む立場に上り詰めてきた男。

出会う前にすでに両性は捨てていたが、だからこそ利用価値を見出した。

なのに、いずれは男として、王に君臨する自分に恋情を抱くなど・・・。

（余は・・・・いつ誤った。）

自分の言葉に簡単に靡かないモノを選んだはずだった。

簡単に自分に支配されない、反逆的な歪んだ忠誠を掲げるモノを。

いつ、自分は見余ったのだろう。

目の前の男は、いつからか自分の言葉どころか、自分の存在に支配されていた。



何も望むつもりはなかった。

王の側近として、傍に在るだけでよかった。

愛されなくても、自分を見てくれなくても。

愛してるの言葉が偽りでも。

それを向けてくれているのが自分だけなら、それでいいと思っていた。

それだけで、満足していたはずだった。

なのに――――・・・・・

求めてはいけないこと、抱いてはいけない感情を、彼は自分の主君へ向けていた。

報われない自分の気持ちを、押し込めなければいけない感情も。

たった少しの不安で、理性は脆くも崩れ去ってしまった。

（私は、何を・・・・）

気づいた時にはもう遅くて。

自分に向けられた瞳は、初めて会った頃の、何も感じていない、冷たい瞳。

感情を込めれば込める程、彼からは感情を感じなくなっているというのに。

感情を忘れることができない。

「魔王様。」

「……………」

「私を、愛していますか？」

「……………」

涙は、出なかった。

流してしまえば、彼は自分を殺してしまうから。



ナトスは、無言で寝台に近づいた。

後ろで、アリファスが口を開く気配がする。

（言いたいことがあるなら言えればいいものを……）

何故いつもはつきりしないのか。

「先程言ったことは覚えておるな？」

「はい……………」

「誰も此処へ近づけるな。」

「で、ですが……………！」

アリファスの言いたいことはわかっていた。だが、答えている暇はない。

詠唱なしで、術を発動する。

「魔王様！」

防御魔法と、魂を飛ばす魔法を同時に。

何度も何度も、後ろでアリファスが自分の称号を呼ぶ。

（忘れたわけでもあるまいに・・・。）

誰も自分の名前を呼ばない。

必要とされているのは、称号のみで。

（そうか・・・。）

アリファスが欲しているのは、魔王である自分。

魔界の頂点に君臨する、孤独の霸王。

魔王という血塗られた仮面をかぶり続けている自分。

そして、ここにきて初めて、アリファスに期待をしていた自分に気がつく。

もしかしたら、自分を見ている部下かもしれないと。

げせんのため
ディジラウの様に、魔王として玉座に在る自分を見ていないのではないのかと。

きつとそれは、自分のエゴ。

でも結局は彼の瞳に映っていたのも魔王だけであっただけのこと。

（それがどうした。）

心の拠り所に使っていたのは自分。

心の拠り所が見ていたのは魔王。

キスをされたとき、側近には期待も興味も失い。

失望。これほど今の心境にピタリとハマる言葉が他にあるだろうか。望みを抱いていた自分すら笑えてくる。何の冗談だ。

「待つ………!!」

アリファスの声も虚しく、彼の耳に届くことなく。

ナトスは、目に焼きつき離れない男の場所へと、魂を飛ばした。

How do you do in case of you?

Lv. 16 don't leave me . . . (後書き)

やりましたね。これは^^;;
活動報告の予告(?)とは違^{たが}ってしまいました。

今回魔王サイドですね。

なのにディジラウ出番なし。ごめんよ、ディジラウ . . .
アリファスとナトスだけで一杯だったんだ . . .
あのまま君も出していたら文字数が . . . (例の如くヘタレ。

さて、今回は前回の分も!ということでサブタイトルも英語です。

えっと、意味は . . .
don't leave me . . . 私を置き去りにしないでくだ
さい。です。

アリファス視点なサブタイトルになりました。

あと、最後の英語の意味は . . .

How do you do in case of you? . . .
・貴方ならどうする?です。

最後の英語は若干魔王視点です。

貴方ならどうする?というのは、記憶の中の男に語りかけている言
葉です。

貴方なら、自分を見てくれる?という取り方をしていただくとあり
がたい^^

次回は勇者サイド(予定)です。では^^

L v. 17 飢えた殺戮者（前書き）

B L っぽいです。注意。

L v. 17 飢えた殺戮者

彼の唇に触れた時に感じたのは、確かな高揚感。

彼の唇から離れた時に感じたのは、僅かの後悔。

彼の唇を思い出す時に感じるのは、不確かな余韻。

『私を、愛していますか？』

いつものように言え。

「愛しているぞ。」と。

あのと時の様に言え。

「此処にいて欲しい。」と。

愛して欲しいのに、求めているのは貴方だけだというのに。

そうして、冷たい瞳で私を突き放してしまわれるのですか？

それは、私が男だからですか？



それは、過去のこと。

その双眸に映った自分を見たとき初めて、自分はこのときのために、この人のためだけに生まれたのだと思った。

「尊敬」「恋」初めのうちは、どれも違うようで近い感覚だった。

嗚呼・・・貴方様のために・・・。

「全てを捧げましょう。」

初めて会ったのは、自分が生まれてから、呼吸をする如く当たり前のように殺戮を繰り返していたときのこと。

最後の獲物は力尽きる前に、自らを殺す者に深手を負わせた。そのとき、初めて自分に“死”が迫った。

恐ろしさは感じず、ただ静かに、時に呻きながらそのときがくるのを待った。

息をするだけで体全身に鋭い痛みが駆ける。

しかし、苦痛ですらも彼の心を占領することはできなかった。

彼の心に在るのは殺戮のみ。

命あるものを壊すことほど、滑稽で暇つぶしになるものなどない。

そう・・・彼は思っていた。

(・・・何だ?)

空気が明らかに変わった。

ビリビリと空気が張る。

「・・・お前か？」

眼前に立つは、一人の女だった。

「何、の・・・こ、と・・・だ・・・。」

それは、彼にとって初めての感覚だった。

声を、姿を見ただけで、心の底で恐怖が渦巻く。

“死”ですた彼の心を支配することは不可能だったというのに。そこに在るだけで、彼の全てを支配する。

「死の山を作りあげたモノはお前か？」

「・・・。」

声を出すことも、息をすることも忘れた。
やがて、鼓動が速くなる。

「気に入った。お前にしよう。」
ただそれだけ告げると、女はフワリと消えた。

「な、ん・・・。」
そのとき、ようやく自分が息をしていなかったことに気づいた。
そして次の瞬間、鈍い音と共に、彼の意識は途切れた。
「ようこそ。とでも言っておこうか。」



あのと看、確実に魔王は自分に興味を持っていた。
殺戮を繰り返す獣のような自分に。
始まりは、あの瞬間からだったようにも思う。

眼前に立つ女が男に変わったとき、
「ああ、この人だ。」と思った。
自分の仕えるべき主人がそこにいるのだと。

過去の余韻に浸っていると、勢いよく、自室の扉が開け放たれた。

「アリファス！魔王様は何処だ！」
「いきなり何ですか？もう少し上品にお入りください。はい、やり直します。」

「何を言っている！早く答えろ！」
「ちゃんと礼儀というものを示していただけましたら、お答えいたしますしょう。」
「タヌキが！」

「狐の方が私的には好みですけど？」

渋々とディジラウが部屋から出てやり直す。

その様を見ながら、アリファスは揺ぎ無い忠誠を誓わせた主君を思い出していた。



「ふはははは！下僕どもが！いいぞ、跪いくがいい！」

「ちよっと、三年ぶりって言ったじゃない！絶対いつも出てるでしょ！」

「三年ぶりだ！完全復活しやがったなああの野郎。」

「下僕その1ブラコン野郎！何か言ったか？あゝ！？」

「・・・何も言ってませんよ。（地獄耳め・・・）」

ああ、愛くるしいキサラの顔じゃなけりや、殴ってやるのに・・・。

「あのさー解ってないようだから言っておくけど、俺はもともとキサラなわけよ。」

その言葉にビクリとシュヒとテイザが反応する。

「そ、それは知ってた・・・です。」

「ふーん。」と言いながら、座っていた干し草から降りる。

「キサラだけ俺はキサラじゃない。お前ら俺のこと何て呼んでんの？」

「「裏キサラ。（黒キサラ）」」

「脳天に一発いっとく？」

「冗談だ。何て呼ばれたいんだお前は。」

「んー。あ、反対から呼ぶのはやめてね。芸がない。」

少し悩んでから結局、呼び方は任せるとのことだ。

「そうだなー。ウラキってどうよ。」

「あー。裏キサラだからウラキ。まあいいよ。ふざけてるけどな。」
ツカツカとテイザに近づく。

殴られると思ったテイザは咄嗟に身構えた。が、

「こういうこととして欲しいんだろ？キサラに。」

「な、なっ……………／＼／＼」

（近い近い近い……………！！）

「名前くれたごほーび。」

そう言いながらキサラはテイザの頬にキスをした。

混乱したテイザは嬉しさなのか（キサラだけどキサラじゃない）悲しさからか、

悲鳴（世に言う奇声）をあげたのであった。

May I have the dream?

せめて幸せな夢を。

L v. 17 飢えた殺戮者（後書き）

同じ日に2つも投稿してしまいました。

うはあ、受験勉強進まないー。（はよ勉強しろ。

謎の人物Ⅱウラキ。

ネーミングセンスに嘆く前に勉強が進まないことを嘆きます（書いてるからだ！

一般的に認知度が高い言い方をしますと、

二重人格。（ここでの正式名称、解離性同一性障害）

※必ずしも二重人格というのがこの解離性同一性障害患者のことを表しているわけではないです。

キサラ君は過去に心的外傷を受け、俗に言う二重人格になってしまったわけですが、もしかしたらその文面を読んで、不快な思いをされるかたがいるかもしれないということで、過去の描写はしません。

また、解離性同一性障害（二重人格）について不快な思いをしてしまった方が

いらっしやいましたら、直接的描写は避けようと思います。

最近アリファス視点が多いですね。（主人公を差し置いて。↑

！文字数が多いのでこの辺で。では^^

Lv. 18 who are you?

「あれは・・・夢か？」

「兄さん？どうしたの？」

「！！・・・／／／」

今朝から変だなー・・・（もともと変だけど。）

「ねえ、タスラ。買い物に行こうか。」

「・・・何しに？」

「んー。新しい服を二人にと思って。」

「わー！本当に？行くー！！ねえ、タスラー！！」

シーラが嬉しそうにクルクル回った。

尻尾と耳がピコピコと揺れる。

（あー。癒しだなあ。すっごく可愛い。）

耳が猫の耳だというところが特に。

いや、シーラは耳とか尻尾が無くても充分可愛いんだけど（親バカ）

「・・・。。。」

タスラが、鋭い視線でキサラを見ていることに、このときは誰も気が付いていなかった。



「わー！かわいいー！これがいい。キサラ、買ってー！」

「うん。あ、せっかくだから試着してみたら？」

「そんなあるんか！この世界・・・。」

「ん？タスラ何か言った？？」

「何でもないけど・・・。」

シーラが店の奥に入って行く。

そしてその後ろ姿を、父親が娘を見るような優しい眼差しでキサラは見ていた。

（うーん。結婚して娘ができたならこんな感じかな。）

いや、妹・・・？でもその場合・・・

「キサラ、話があるから後で二人になれる？」

「うん？何なら今・・・。」

「後で！後でじゃないと駄目なの！！」

いつもより強い調子でタスラが言った。

そして、選んだ服を取って走り出す。

「おーおー。いい度胸だな。あのガキ。」

「兄さん・・・。」

「反抗期かー？ガキのくせに精神の成長が先走ってるなー。」

「兄さんは精神の成長どころか退化してるよ。」

「え・・・（ガーン）」

（でも反抗期なんて・・・昨日まで普通だったのに。）

悲しい。寂しいというのもあってる。

成長したことに對して喜ばいいのか嘆くべきなのか・・・複雑。

「どうどう？キサラ。」

「うん。似合ってるよ。」

「ほら見て！タスラも似合ってるでしょ？？」

「うん。二人とも似合ってるよ。」

そういうと、シーラは「えへへ」と言ってから、シュヒの残っている馬車の方角へスキップしだした。

「おーおー。喜んでるな！。じゃ、俺支払してくる。」

「うん。ありがとう兄さん。」

「いやーお前のためならたとえ火の中水の中な「ありがとう兄さん。」

（棒読み）」

その科白は前にも聞いたよ。違う人だけどな！

「あ、タスラ、話って？」

「後で。キサラにはこっちからちゃんと言うから。」

「そ、そう・・・？」

どこがどうというわけではないが、いつもの言い方よりも棘がある気がする。

・・・・・・まさか・・・。

——————嫌われてる・・・・・・？

そういえば、今朝から態度が変わった。

いつもより感じがトゲトゲした感じだったし、愛想なんて欠片もない。

可愛らしい笑顔も、シーラ以外には見せていない。

（なんで、だろ・・・？）



「気がつかないうちにキサラおまえがタスラを傷つけたんじゃないか？」
意識の端で、自分の声がする。

自分の声なのに、全く別の誰かが自分の声を使ってる。そんな感覚。

「キサラおまえはいつもそうだ。」

（一体何が・・・いつもそうなの？）

「どうして自分のために生きようとしない？」

（満足のいくように生きてるつもりだけど・・・。）

「じゃあ何で俺が居る!!」

（そ、そんなの・・・）

「『知らない』か？随分とお高くとまっているなあ？おい。」

（そんなつもりじゃ・・・。）

「無知な奴はいいよなあ。何でも知らねえ顔して、涼しい顔だ。それとも知って知らないふりか？」

（そんなことない・・・。）

「ならなんだ、知らないから己に罪は無いと？馬鹿が！お前は神にでもなったつもりか？あゝあ？」

（なんでそんなこと言うんだ!!）

「知ってる知らねえは関係ねえんだよ！許されるとでも思ってるのか！？罪の無い神気分か。」

(罪ってなんだよ！僕のこと何も知らないくせに……！！！)

「知ってるさ。」

(……！！？)

「お前は偽善者だ！！！」

(――――ッ！！！)



深い。深く深くに、声は刺さる。

目の前に居る男は自分であって自分ではない。

暗がりの精神世界の奥深くに、二人は居た。

何故一つであるべき精神が隔離されたのか。

主人格のキサラには、それを知る術もなく。

タスラのこと、もう一つの自分の声のこと。

渦巻くのは恐怖のみ。何に対する恐怖か、判別すら不可能になっていた。

目を開いているはずなのに、眼前に広がるのは色濃い闇で。

――――怖い………ッ！！

(誰か……！！！)

救いを求めて、手を伸ばす。

キサラの手を、優しく握ってくれる手があった。

本当は温かいのに冷たい手。

精神世界で、居るはずのない存在に、キサラは優しく抱きとめられた。

I t i s n o t d r u n k i n t h e d a r k .
e a r p e r s o n .
D

この言葉は取って置こう。

消えてなくなるその直前まで。

Lv. 18 who are you? (後書き)

帰ってきました主人公!

いきなり重苦しい感じですが・・・ハハハ。(翠寵は笑って誤魔化した!!)

サブタイトルのw大文字だろ! っていうのはあれです。わざと(強制終了)

誰に向けての言葉か、パターンは二つですがどちらもキサラ視点になります。主人公万歳!(何だ

タスラの様子が変です。テイザは頭が変です。(大真面目

さて、例の如く英語が入りました。

翻訳しますと・・・

It is not drunk in the dark. Dear person.

・・・闇に呑まれないで。愛しい人。という意味です。

翻訳の仕方によっては、それは暗闇では飲まれません。人様。になります。

なんのこっちゃ!! (本当にな!

今までもそうでしたが、英語の意味はあくまでここでの訳し方です。それだけの意味ではなく、いくつかの意味があります。

そのところをご注意いただきたいです。紛らわしいかもしれませんね。すいません。

注意書き的なモノが多くなってきましたね。^^;
これからも読まれることを願います。では^^

L V. 19 溺れてはいけない (前書き)

BLっぽいです。

Lv. 19 溺れてはいけない

何か温かいものが、自分を包む感覚がする。



「はあ！？キサラが帰ってきてない？！」

一番最後に戻ってきたテイザが驚きのあまりに声を上げる。

確か、テイザよりも先に馬車に戻って行ったはずなのに。

道に迷ったのだろうと待っていたが、キサラは翌日になっても帰ってこなかった。

心当たりもない。一体どういうことだ。

「シュヒちゃんお願い、キサラを探して！」

「シーラちゃん・・・。」

涙を一杯目に溜めながら、それでも泣かずにシュヒに頼み込む。

「私もそうしたい気持ちだけど・・・。」

「お前魔法が使えるんだろ？魔法で探せないのか？」

「専門分野が違うのよ。あー、もう。こういうときのためにもう一人乗せてくつもりだったのに！」

「どういうことだ？」

シュヒは、素直にこれから乗せる予定の人物について細かく説明をした。

「わかった。それなら此処から近い。俺が連れて来る。」

「じゃあ、私はもしもキサラが戻って来たときのために此処に残るわ。」

「おし、ガキ共も此処で待ってろ。」

（俺、の・・・せいだ・・・。）

タスラの不安の声が、タスラを追い詰めようとしていた。

◇

（気持ちいい・・・。）

此処は何処だろう。

水の様な、液体の中に自分はいて。

（息ができる・・・。すごい。）

美しい、グラデーションのかかった液体の中では、不思議と息ができて。

液体の中での浮遊感と温かさはとても心地が良くて。

辺りを見渡す。キサラが動く度に泡ができて、上へ昇って行く。

その幻想的な光景が美しく、とても愛おしく思えた。

（何も無いんだな————・・・。）

すると、後ろから誰かに抱き寄せられた。

（え————・・・？）

優しい。そんな印象を受けた。

振り返ると、そこには紫がかった目があった。

（目が合っ・・・ちゃった・・・。）

瞬間、顔が熱くなるのを感じた。

（きれい、とか思っちゃ失礼だよな……。男の、人なのに。）

「お前、名は何だ。」

「え……。？」

「名は？無いのか？」

「いや、あるけど……。？」

「言え。名は何だ。」

「んーと、そういうときには自分から名乗るものだよ？えーと……。？」

「好きに呼べ。名はどうに捨てた。」

「捨てちゃったの！？」

目の前の小動物の様な少年は、目を見開いてそう言った。

男……。なのに可愛く見える。どういうことか。

身長差が原因かもしれない。明らかに少年は側近よりも背が低いから。

見上げられると、なんだか目の前の少年が幼く見える。

「あ、初対面なのに敬語じゃなくてごめん。えっと、直した方がいい？」

「そのままでもいい。敬語なんて使うな。」

「あー、よかったー。僕敬語苦手なんだ。他の人は敬語使えっとうんだけど。」

「それより、名を言え。まだ聞いてないぞ。」

「本当だ。僕、キサラ。よろしく。」

ふんわりと柔らかい笑顔に、顔が熱くなるのを感じた。

（な、なんだこれは……。）

「あれ？顔赤いよ？熱でもあるの？大丈夫？」

「熱など無い。」

そう言って、フイと横を向いた。

（・・・タスラみたいだなー。）

意地っ張りな感じなことか。ああ、そう思えば可愛い（親バカ再び）

「で、えっと、いつもは何て呼ばれてるの？」

その言葉に反応したのか、少しだけ瞳が揺れた。

（な、なんかまずいこと言ったかな・・・。ど、どうしょ。）

（まずいな・・・。）

まさか馬鹿正直に「魔王です。」なんて言えるわけがない。散々部下が地上を荒らしまわったせいで魔王は人々に恐れられているはずだ。

こういうことを配慮していたわけではないが、自身の魂の形を人間の姿にしておいて正解だった。

「呼ばれることは、無い。」

「そうなの？じゃー、えっと。」

しばらくの間が空いて、ナトスは考え込んでいるキサラの頭を優しく撫でた。

「え・・・？」

「いい。気にするな。考えを続けろ。」

（そ、そんなこと言われても・・・！！！）

普段は変態ショタコン説あり兄がふざけて頭を撫でたりとか体のあちこちを触ってくるが、それとはまたわけが違う。何故か緊張するし、鼓動も早くなる。

（や、なんで男の人にドキドキしてんのかな・・・）

あ。顔のせいかな。顔がこんなにきれいでしかも兄さんより遥かにか

っこいいからか。

「ん、そうか。」

「? どうした。」

「何か感じが似てるなーと思っちゃって。」

「・・・何とだ。」

「黒猫。」

「!!」

見破られるというか、直感がすごい。

(まさか、あの猫に“憑いて”いたことがバレるまいと思っていたが・・・)

もしかしたらバレてしまうかもしれない。何なんだこいつは。

「いつも家に遊びに来る猫んだけど、この前来たときはすごく綺麗な感じで。」

「綺麗・・・?」

「あ、ごめん! 失礼だよね、男なのに綺麗とか思っちゃって!!」
その言葉で、また顔が熱くなった。

「ナトス。っていうのでもいい?」

「!!」

「き、気に入らなかった? じゃ、じゃあ・・・。」

そこで言葉が止まる。思考停止。

気が付いたら、抱きしめられていた。

Do you think that you may believe the fate?

そんなに簡単な言葉で終わらせられるものではないのだろうけど。

L v. 19 溺れてはいけない（後書き）

D o y o u t h i n k t h a t y o u m a y b e l i
e v e t h e f a t e ?

・ ・ ・ あなたは、運命を信じることができますか？

L v. 20 拒絶とエゴと

彼にとっては、それはとても心地の良いものであった。



誰かの瞳に、肩書も何も無い自分が映っているのは初めての出来事。誰かの声で、称号では無く自分の名を呼ばれるのも初めての出来事。誰かの中で、敬語ではなく対等に接していることも初めての出来事。

何もかもが初めてで、ナトスにとっては刺激的な出会いであった。

初めて見たときに可愛いと思ったのは、きっと魔界に居たせい。他のものは邪悪なものばかりで、純粹なものなど皆無であった。仮に、純粹さを持ったものがいたとしても、それは歪んでいるだろう。

偶然か、運命か———。……。

彼の名を知らないはずの少年が、自分の名を呼んだ。

彼が捨てたはずの名を、再び自分に返し与えた。

それはたとい偶然であったとしても……。

それ程までに彼を翻弄するものは何一つとしてないだろう。

自分が自分で居られる場所。人が欲しがっている理由が、初めて知れた。

手に入るのならば、自分の手を汚してでも手に入れようという人の気持ちも。

そして、アリファスが何故あそこまで自分に執着したのかも。

（だが・・・）

アリファスが自分を求めている理由がわかったところで、自分はそれの思うままに生きることなどできない。

向こうが望むことをする気すらない。

自分がかつて彼に期待していたように、彼はまだ自分に希望を抱いている。

そしてそれは、アリファスのエゴ。

（私の知ったことか。）

押しつけがましい感情も、相思相愛でなければ意味がない。

片思いの相手に自分のエゴを押しつけても、相手にとってはそれは足枷にしかない。

何故、一番大切になっている人間の邪魔をするようなことをするのか、未だに理解は不能で。

それほどまでに欲さなければ、抱くことのない独占欲であること。

ナトスがその真実に行き付くには、まだ彼には感情が足りない。

『私を、愛していますか？』

それを拒んでいたのはお前だろうか？

キスをしたときと同じように、今にも泣き出しそうな表情で。
あんなに嫌がっていた「愛している」という言葉を求めるかのよう
に。

そしてそれすらも、ナトスは歪んでいることのように思えた。

目の前にいるこの男は、何を望むだろう。

何を見て、何を感じるのだろう。

アリファスも、ディジラウも、魔界も玉座も。

この男に比べれば、塵ほどの価値にも満たない。

それがきつと、新しい彼の投げ所。



「ああ、すまない。」

ゆっくりと手を解く。さすがにまずいことをした。

いきなり男に抱きつかれたら、誰でも固まる。

（しまった・・・・・・。）

自分は結構常識人のつもりで赴いたが、こういう面では非情にまず
い。

向こうの世界では、大半が元・両性であったためか、免疫があった。
が・・・・

（こちらではそんなものも無い、か。）
自分たちの常識と、相手側の常識。当然ながら全てが同一ではない
わけで。

「嫌な思いをさせた。」

「・・・えっと・・・。」

「だが、問題はない。」

「・・・へ・・・？」

急に靄の様なものに眼前が包まれていく。

不思議な液体の中を、絵具を垂らしたかのように、靄が広がる。

「な、何これ!？」

何も見えなくなった。というか問題はないとはどういうことか。

（ど、どうしろと・・・。）

しばらくして、靄が晴れて行った。

と――――。

「なんだ、随分と遅い。」

「――――!!?」

どういうわけか、そこにはさっきの男ではなく。

女が、いた。

先程の比にならない程に、キサラは動揺した。

（おおお落ち着け! 何でいきなり女の人が!?! というかさっきの男
の人は!?!?)

考えれば考える程解らなくなるばかりか、目眩がしだした。

「そうか、言っていなかったか。余は、両性だ。」

「両性——！……って何……？」

「……………」

（そこからか。）

どうやら、純粹無垢（？）な代わりに知識がかなり欠けているようだ。

過保護。そんな言葉がキサラの上に見えた気がした。

（どんな保護者か楽しみだな。）

「それより、もう時間が無い様だ。」

「え？時間？———あ！此処って何処！？」

「大丈夫だ。無事に帰す。」

「……ナ、ナトス！」

キサラが思いきって声を上げた。

「？何だ？帰らないのか？」

別に居てくれるのならそれはそれで……。

「また来る。ナトスはまた来る？」

「会いたくなったら来る。お前もここに引きずってな。」

「うん。わかった。」

「そのときはお前の悩みを言ってみろ。苦しみを取り除くことはできずとも、話を聞くことぐらいはできる。」

「……………ありがとう。」

そう言ったのを聞いて、キサラが何かを言おうとしたが、ナトスはそのまま送り返してしまった。

I t i s m y s e r i f .

やっと見つけたのだから。

L v. 20 拒絶とエゴと（後書き）

I t i s m y s e r i fそれは私の科白だ。

拒絶というのは側近の想いを魔王様が拒絶したことです。
エゴは側近のエゴのことです。（サブタイトル）

本編出てないのに出現率が高い ^^ ;

L v. 21 忘れさせて

利用してしまえばいい。簡単な話だろう？



「ディジラウ。そこで何をしている。」

自室の前で、側近の女が立っていた。

まるで足に根が生えているかのように、その女は動かなかった。

「魔王様、目的は果たせました？今日は珍しく女人ですか？」

廊下の陰から側近の男が具現化して出てきた。

「何のつもりだ。そこを退け。」

「嫌ですよ。私が待ってくださいと言っても待たないでしょうから。」

「・・・一理ある。」

「魔王様、こいつの言うことに耳を傾けては駄目になります。耳が。」

「どういう意味ですか？（イラッ）」

痴話喧嘩なら是非他でやっていただきたいものだ。

どうしてこんなところで足止めを食らわなければいけない。

「何故貴様らのために時間を割かねばならない。」

「お急ぎのご用事でも御有りですか？」

少しSっ気のある陰湿な笑みを浮かべてアリファスが言う。

（・・・優秀なモノにはロクな感性が備わらない。）
主人に対する心構え、気遣いが足りない。どこで教育を誤ったのか。
・・・もつと敬え。

「アレを見に行くだけだ。他に何の問題がある。」

「・・・何もございません。」

意外とすんなりアリファスが道を開けた。となれば残るは・・・

「ディジラウ。其処を退きなさい。魔王様がお通りになられません。」

他人のフリ見て我がフリ直せということか？何故もつと早く其処を退かんのだ。

（此処は落ち着かん・・・。）

「あの愚弟をご覧になってどうするつも「ディジラウ！」
ディジラウの言葉を掻き消すようにアリファスが声を荒げた。

「彼は仮にも王族。あの印を見なかったのか！」

珍しく、敬語が外れている。相当怒っているようだ。

「見たさ。だからこそだ。」

「どういう意味ですか。」

「少しは頭を使え。それでも魔王様の側近の称号を受け継ぐ者か。」

「ええ。古めかしい通り名も捨てましたしね。私はあの頃とは違います。」

（違うだ・・・？）

「殺戮の暗殺人形」これがアリファスの昔の通り名だ。

通り名こそ笑えるが、獲物を狩るときの動きは、まるで操り人形のようにだった。

そして、自分の欲望のままに殺戮を繰り返していた。

（何も変わっていないというのに。）
気づいていないのは、当人だけだろうか。

「さてと、もう一度だけいいですか？あの愚弟に何を期待してるんです。」

砕けた敬語。アリファスの様に硬く、しっかりとしたものではない。

「口を慎め。奴は紛れもなく王門一族子息だ。第二皇子であろうとも敬うことを忘れるな。」

「……っ！……はい……。仰るままに。」

「貴様は私の側近であり、全権を委ねている。上位階級の貴様の態度、下位の者が見たらなんとする？」

「……同じ、ことを……。」

「そうだ。」

「ですが!!」

「……アリファス。良い。」

気づけば、ディジラウの首元には、鋭利な刃先が突きつけられていた。

口答えをする者が何であろうが、排除するのがアリファスの役目でもある。

（全く、忠実な番犬だ。）

「どうします？殺しますか？」

「良いと申した。二度も言わせるな。」

「……失言でした。以後気をつけます。」

コツコツと高い天井に反響して、辺りに音が響く。

一切の感情を、扉の外に置いて。

彼は、扉を開いた。

◇

『会いたくなったら来る。』

その言葉を残して、彼女は消えてしまった。

いや、正確には帰って来たとしても言うのだろうか。

「リョウセイってなんだろう……。」

気になる。性って性別の(?)だろうか。

(両方あるってことだから・・・男女？双子じゃなくて?)

何といっても雰囲気がそっくりだった。

静かで、落ち着いてて、どこか冷たさが漂ってて。

顔立ちは女の人の方が柔らかい印象だったけど。

綺麗なのに、どこか憂いがあって。

瞳の色が、何よりも一番綺麗だと思った。

(紫の目の人って、見たことないなあ……。)

「ってウワ————!!」

叫びながら起き上る。かなりすごいことが起きたぞ今!

さっきから二人(?)の顔がグルグルしてる。

(嘘、嘘うそウソ――!!?)
掻き消そうとすればするほど、声が、表情が頭の中にたくさん出てきた。

(何なんだよー、もう・・・)

兄さんに色々やられ過ぎてついに狂った??

男の人にドキドキしてる??女の人の顔が忘れられない??

おかしくなってしまったのではないかと思う。だとしたら兄さんのせいだ。

(アレ・・・?)

此処、何処だろう。さっきまで町のはずれまで歩いてたのに。

といっても、見える位置に場所に馬車があったわけで・・・。

今、馬車も何も見えない。服の店も、タスラも、辺りを歩いていた人も何もない。

「・・・・・・・・あれ?」

思わず首を傾げる。この際兄が変だとか兄が変態だとか兄が馬鹿でどうしようもないとかどうでもいい。

こういうとき、真っ先に頭に浮かぶのはやっぱり兄で。

(いつだったっけ・・・)

村は人が少なかった。子供はもちろんのこと。

なのに、そんな少人数にも関わらず、キサラは仲間外れにされていた。

よく理由はわからないけど。一番強い奴が、キサラばかりにちょっかいをだしてきた。

U n w i l l i n g l y

少しだけ、思い出に浸ってみる。

L v. 21 忘れさせて（後書き）

Unwillingly・・・

・・・不本意だけど。という意味です（小説内で

今回のサブタイトルは二人の視点です。

段々キサラが主人公らしくなってきましたね（気のせいだ。

今回はキサラオンリーのターンです。うへえ、すみません。間違えました。

キサラ過去編にサクッと入ります。

テイザがブラコンに目覚めたときのエピソードもついでに考えています

どうなることやら・・・二重人格になる際のエピソードは・・・

短編でも作ることにしますか・・・（気が向いたら。

久しぶりに後書きが長くなりました。ので、この辺で^^

L v. 22 幼い僕は

きつと兄弟離れができてないのは、僕の方。



思い出の中での、懐かしい記憶。

「おい、お前生意気なんだよ。」

俗に言うガキ大将。結構古いがそれがよくあてはまる男がいた。まだ小さいのに、いじめというものはどこにもやはりあるもので。

「僕、君に何かした？」

理由がわからないから、聞いてみる。

だって、知らないで生意気とか言われたくないから。

「……そういうところが生意気なんだよ!!」

その言葉が合図かのように、周りからわらわらと子供たちが現れる。ついでに、子供たちは皆男。数は5人程度。

でもそれも、1人に対してだと、結構多いわけで……。

言葉での中傷こそは無かったものの、たくさん痛めつけられた。6人に一気に取り囲まれたら、喧嘩をあまりしない子どもなんてあつという間にKO・される。

満足そうに、ガキ大将（名前忘れた）が僕を見下ろしてきた。

「お前、父ちゃんも母ちゃんもない癖に、なんでここに居られると思うんだ？」

父ちゃんと母ちゃんという言葉に、体がビクリと反応する。

少し前の、幼すぎる記憶。温かさが一気に冷たいもの変わる瞬間を、彼はただ一人見てしまった。

(パパ、ママ・・・・・・・・・・)

何処に行ったとか、何で居ないとか、そんなことはどうでも良かった。

でも、それよりも問題は・・・・・・・・。

(どうして、置いていったの――・・・・・・・・?)

ガキ大将は、キサラの様子に気がつくことなく、話を進めた。

「俺の父ちゃんや母ちゃん、村の大人たちに世話してもらってるからだろ？」

その言い方は、まるで。

「だったら、俺らの世話をしろよ。」

子供とは思えないような、気持ちの悪い笑みを浮かべて。

「お前は今から俺らの手下だ。」

吐き気がする。こいつらは、まるで・・・・・・・・。

――人の皮を被った悪魔だ。

人の傷口を、何とも思わずに広げていく。

広げて、抉って。心の中をぐちゃぐちゃに掻き乱して。それでも自分は関係ないと、心の底から言うのだろう。

「にい・・・ちゃ・・・」

「ああ？お前の兄貴は来ねえだろ。なあ？」

「ははっ・・・今頃女の相手でもしてるっの。」

（そうだね・・・。）

「おい、いいのか？」

（また君なの？・・・何が良いの？）

「やり返さねーのか？」

（そんなことはいいよ。）

「このままやられ続けていいのか？」

（この子達も、大変なんだよ。）

「じゃあ、こいつらの捌け口にお前になるのか？」

（・・・それは・・・。）

「迫害されても仕方ないってか？大変なら何でも許されるのか？」

それが、自己満足であることもよくわかってる。

地面に這いつくばってる今の自分が仕方ないなんて思えないけど。今僕が生かされているのは、この村の人のおかげだから。

そのために、まだ幼さの残る彼らは両親に相手にされないのだろう。普通の家庭から、少しずつ僕らの援助として、お金をくれるのだから。

だから、僕に怒りの矛先が向くのも当然のことだ。

「お前はそれでもいいのか？」

（ううん。でも、どうしようもできないから。）

声の主は、黙り込んでしまった。

愛想をつかしたのだろうか。いや、そんなもの初めからなかった。

「あんな女好きで顔しか取り柄のない男が兄貴だぜ？ お前も不幸だな。」

「・・・それは一番否定しきれないけど・・・。」

「女好きで顔しか取り柄のない男が兄貴で悪かったな。アホ。」
その声に、一斉に全ての視線が茂みの方へ向く。

「集団リンチ。はっけーん。」

口調も表情も楽しげだけど、僕にはわかる。目が笑ってねえ。
というか集団リンチって世界観的に・・・もごもご。

「なあ、ガキ大将君。男ならサシで勝負しろよ。カッコ悪い。」

「な、なんだよ。ガキ大将って・・・。」

（あ、それ僕と同じ呼び方だ・・・やっぱ兄弟なのか。）

「そこなのか？ いいのか着眼点がそこで？」

「ほれ、寝てねーでさっさと立て。弟君。」

「キサラだよ。（この馬鹿兄貴が！！）」

「ん？ 何か言ったか？」

「んーん。なんでもないよ。（営業スマイル）」

「で？ 話は聞いてたな？ サシってわかる？ 一対一の勝負。」

「わー頑張れ兄貴ー（棒読み）」

「残念だ弟よ。サシで勝負はお前です。お前とあのガキ大将です。」
「は？ え？ でもサシでやれって言ったのは・・・」
「ごちゃごちゃうるさい。沈めるぞ。」

・・・皆さん、帰ってもいいですか？

で、まあサシになったわけで。

「おい！そこは右から上へ斜めに拳をいれろ！よし、いいぞ！」
なんか心の声（？）の人が異様に指示を出してくる。
そしてその通りにやると技がキマルキマル。面白いほど無傷で相手をKO。お疲れ僕。

「ほら、いくぞ。キサラ。」

「たく、兄さんのせいでひどいめにあった。」

「何だ？ 兄貴のせいにしたのはこの口か？」

「ひだだだだだだ——！！！！ひはいひはい！」

それ以来、ガキ大将とその一味（？）はちょっかいをださなくなってきた。

むしろ僕を恐れているのだろうか？で・・・仲間はずれの状況は継続なわけで。

でも、兄さんのおかげで、痛い思いをしなくなった。



「懐かしいなー。」

あれ以降は、ティザが働いてくれて、色々と家計が助かった。

それに、父さんと母さんが亡くなってから会話が無かったのに、一気に増えた。

他にもたくさん助けてくれて。

今よりは昔の方がかつこ良かった気がする。

「僕も反抗期だったんだなー。」

そして、キサラは早めの反抗期のおかげで、十八になった今は真面目に、まるくなった。

今の穏やかな性格も、自然を愛し始めてから。

つい、ウトウトしてしまった。

キサラの意識は、優しい眠りに落ちていった。

Can you meet in the dream?
さっきの女の人と、男の人に。

L v. 22 幼い僕は（後書き）

随分と大人びてますキサラ君。普通ならやり返します（オマエ）。

しかし、テイザ可哀相でしたね。なんせ回想ででてきたのに夢で逢いたいとキサラが思ってた人魔王ですからね。

やはりキサラの中では他人以上、兄弟未満ってところですかね。（
（ヲイ

これ以上此処で語るとテイザが悲惨なことになりそうな予感がめちやくちやするので今日はここまでで許してあげよう（テイザを）↑

では^^

L V. 23 何も知らないままで（前書き）

魔王様サイド。シリアス展開です。

L V. 23 何も知らないままで

いつの間にか、それが普通のことになっていた。



「私どもは、全てを貴方に御捧げ致します。」

そう、いつも勝手に世界は巡る。彼を中心とした円は、ゆるゆると広がっていた。

本人は中心に添えられなくななどないが、周りは知ってか知らずか無理やりその位置に彼を持ってきた。

その瞬間に、彼は後悔した。今までしてきた全てのことに。知ってしまったことに。

「貴方様しかおられないのです。王たる者は。」

言われた時は、まだ誕生して五年。充分な成長を終えていなかった。それどころか、自分が何をしたのかすら、理解できてはいなかったというのに。

「貴方には、王たる血族の血が流れておいでです。」

その証拠が、自分の背に刻まれている。

切っても切れない、血の因果。血の宿命。血の束縛。

何故自分が選ばれたのか。それすら疑問には思えない程、彼は幼かった。

成長していくごとに、自分の役割を知った。

粛清。破壊。支配。束縛。非情。無情。冷酷。

そして、其れほどまでに自分に相応しいものも無く。

何故自分に、感情があるのか。不思議に思うしかなかった。

あるからこそ、冷酷にして残酷な霸王でも、気持ちも感情も、できるだけ大切にしようと考えた。

しかし、大切にすればするほど、自分が壊れていく音がする。崩れていく、完全なる崩壊に呑みこまれていく音が日に日に強まっていく。

「何故、余がやらねばならぬ。」

然るべきは、他にいるだろうに。

初めて、血が呪わしくなった。

初めて、何もかも壊してしまおうと考えた。

「何故、他人のために自分を犠牲にせねばならぬ。」

自己犠牲。彼はそれをするしかなかった。

「何故、神が全てをやらぬ。」

自分がしなくてもいいだろうに。

陰の存在が何をしようが、光にはわからないだろうに。

何もかもが呪わしい。妬ましい。

何も知らずに、平穩の中で暮らしている第二皇子が、恨めしい。全てを、玉座を押しつけて自分は逃げてしまおうとも思った。仮面を壊して、本当の自分になろうとも思った。

彼が彼で居られる場所も、もう既に彼にはなくて。

（今更、何も変わりはせぬか。）

そんな中で、「殺戮の暗殺人形」を見に行った。

ほんの気まぐれ。秩序を乱すそれを自らの手で粛清しに。

それは、静かに暗殺を繰り返していた。

獲物に気づかれないように。気づかれた時にはもう事切れているような、そんな素早さで。

自分を見ているような錯覚を覚えた。

何も考えずに、ただ刃を振るい、気づかれずに何かを傷つけゆく姿が。

何も感じなくなった獣が、悪あがきをしているようで。

傍に置いておいて、人の様になっていく姿に満足感を得た。

一瞬の満足感と、わずかな嫉妬。

自分と同じ獣が、少しずつ人になっていく。

忠実にして、従順な犬になった。

人ではなく、飼われる方に。

そこで、興味が失せた。

在ったのは、そのの近くにいるうちは、自分な居場所があるのではないかという僅かの期待。

それもすぐに崩れてしまったけれど。

そして。次に見つけたのは、綺麗な花だった。



それは部屋を出る直前の出来事。

小さく、呟く。

「利用価値はありそうだ。」
寝台の上で、低く低く。

新しい心の拠り所。しかし、そんなものがあつては邪魔だ。
そしてそれが許されないとこまで、ナトスはもう来てしまつて
いた。

（手遅れだ。）

自分の感情、気持ちですらも、もう要らない。

初めて抱いた感情だろうが、そんなものは捨ててしまおう。
今までの様に、何も感じることなく。
その手で握りつぶしてしまえばいい。

「・・・私も、堕ちたものだ。」

唯一、一人になる時は、一人称が「余」から「私」になる。それはきつと、最後まで自分の自我と自己主張の一部で。

それすら、今は邪魔で仕方がない。

何のために何をしているのか、時々忘れてしまいそうになる。

自分が自分として存在してはいけないものだと思ったときから、それは起きていた。

そして、腐った世界を自らも腐敗していきながら見てきた。

その中で腐っていない綺麗な花を見つけた。

(余は――・・・・・)

自分の気持ち、理解できない。

腐りきっていない花だけでも、美しく咲いていて欲しいと。

この破壊的衝動を、その手を汚して止めて欲しいと。

大きな矛盾であり。気持ちは消そうとしても消えなくて。

利用してしまえばいい。簡単な話だ。

本気でそう思えてしまっている自分に、自嘲気味の笑いが込み上げる。

(全く――・・・・・)

吐き気が、する。

「キサラ・・・か。」

恐ろしく純粋な少年。騙すのは簡単なこと。

きつと彼は、人を疑うということすら知らない。

「魂が、引きずられた。」

それ程までのものが、彼にはある。
これを利用しない手はない。

利用してしまえばいい。

――自分の気持ちも？

――自分の抛り所も？

――その心ですらも？

・・・・・・簡単だ。

殺してしまえばいい。自分自身を。

N o w , a n d i t d e s t r o y s a n d I w i l
l s h o w i t .

今までもそうしてきたのだから。

L v. 23 何も知らないままで（後書き）

魔王様自虐的です。（誰のせいだ

こ、コメディが書きたい・・・！（なら書け
なんといえますか、まだ魔王様はコメディいけませんね。
くう・・・テイザ、ブラコンになる。の話を書きたかったのに・・・。

いつからこんなことに！！（本当にな

あつと、忘れるところでした。

Now, and it destroys and I will
show it.

・・・さあ、壊してみせよう。です。

自分で自分を追い詰めるタイプの方です。魔王様。

うう、早くまたキサラに遭わせてやりたい・・・。（ちよ、

L V. 24 早期発見にご注意を（前書き）

ブラコン視点。苦手な方注意。

L v. 24 早期発見にご注意を

兄弟離れなんてしなくていい。したくない。



扉を開いたときに居たのは、一人の男。

「ああ、待ってました。随分と遅かったですね。」

ニツコリと微笑む顔。微笑んでるのに、何故か感情を感じない。椅子に座っていて、別段俺を不審がらない。

「シュヒアルから聞いてます。貴方ですね。同伴者とは。」

「ちよつと待て。聞いてるって何をだ。」

「ですから、旅に出るのでしょうか？都まで。」

「・・・他には何かあるのか。遅かったとはどういう意味だ。」

「へえ、チャラチャラしているわりには鋭いんですね。」

「貶してんのか？」

「誉めてますとも。」

（こいつムカつく。）

一番嫌いなタイプだ。キサラが関わって無かったら絶対に関わりたくないタイプだ。

敬語に、取り繕ったような笑顔。身だしなみは少し崩れているが、清潔感を覚える。

簡素で片付いた部屋。椅子の横の小さな鞆。そして・・・

「お前、その耳の。シャレてんな。」

「ああ、これですか。」

耳には透明な黄色、薔薇の蕾を象った耳飾りがつけてあった。
(これだけはいいな。他のは全部気にいらねーけど。)

「お急ぎの様子でしたけど、のんびりしていいんですか？」

「あ！そうだお前マイブラザーを探せ！！」

「・・・マイブラザーって・・・いいですけどね。」

やっと椅子から立ち上がる。椅子の横の鞆を片手に持ち、帽子をかぶった。

「さて、行きましようか。」

「おい待て。すぐに探せるんじゃないのか。」

「残念ながら、私貴方の兄弟さん知りませんし。遺留品とかないんですか？」

「ああ、これでいいか。」

テイザが取り出したのは、首飾りにできるように紐に結いつけられた小さな縦笛。

「なんですか？それ。」

「あいつが大事そうに持ってたから取り上げた。」

「最低ですねあなた。」

「どーとでも言え。」

「・・・。。。」

「おい、まだか？」

「・・・。。。。。。。」

話しかけても返事が来ない。耳飾りが小さく揺れる。

「ふう、見つかりました。」

「本当か！？どこだ！何処に居る！！」

興奮して、男の胸倉をつかむ。取り落としそうになった縦笛を辛うじて拾い上げる。

「落ち着いてくださいよ。彼は意外と近いですよ。」

「ど、こ、だ？」

「案内します。付いて来ていただいても？」

「いいにきまつてるだろ！」

こうして、二人は部屋を後にした。



ガキ大将君を倒して数日後。

見る間に弟・キサラとの会話が増えていった。

両親が亡くなって以来話をしていなかったが、元のとおり会話ができるようになった。

いや、心なしか以前よりも会話が心地いい。

「おい、キサラ。」

「ん。何？どうしたの？」

「今日遅くなる。早めに飯食って寝てろよ。」

「うん。わかった。兄さんも早めにね。」

どうも、兄貴という呼び方から、兄さんに変えたらしい。

だからどうというわけでもないのだが。

自然に目を向けるようになってから、少しずつキサラの印象が明るくなっていった。

仕事を終えて帰ってくると、いつも笑顔で「おかえり」と言う。ある意味、ガキ大将君のおかげ。少しだけ信用を得たようだ。

「ただいま。なあ、お前最近何してんの。」

特別興味があつたわけではないが、何気なく聞いてみる。

「植物を育ててる。食料に使えるのもあるし、売買のできるものもあるよ。」

そういうキサラの顔が、笑顔に満ちていて。

植物を育て、成長していく姿を見る喜びがあつたらしい。前よりも、笑顔は明るくて、純粹なモノになっていた。

「……兄さん？どうしたの。疲れたんなら寝たら？」

「ん？あ、ああ。」

一体どうしたって言うんだ。

あろうことか、男に見惚れるなんて。それも弟。

（おいおいおいおい！落ち着け俺！）

俺が好きなのは女。将来はハーレム確実。美女の知り合いなんてごまんという。

都会から来た女だろうが、田舎に居る女だろうが、誰であろうと虜にするのは簡単なこと。

それなのに、男だと？

たくさんの美人の笑顔を見てきた。でも、キサラが一番綺麗だと思つた。

容姿が完璧な女だって見たことがあつた。でも、キサラの方が良かった。

（俺……もしかして病気……？）

自他共に認める女好き。夢はハーレム。どこの男も羨ましがるようにモテ男。(混乱中)

なのに、男が綺麗？容姿とか平凡だぞ？てか男だぞ？弟なんだぞ？どこに見惚れる要素があるよ。

そうさ、俺はいい加減男だ。女なら誰でもいい。女が好きだ。

そう・・・思ってたはずなのに。

男なのに。平凡なのに。馬鹿でお人好しなのに。・・・弟なのに。女じゃないのに。どうしてこういうことになってしまったのか、不明だ。

もしかしたら仕事で疲れてるのかもしれない。いや、絶対そうだ。

(アホらし。寝よ。)

とりあえず、寝てしまえば何もかも消えると思った。

「なあ、これってどう思うよ。」

「ん？何々聞かせて聞かせて。」

同僚同士の何気ない会話。相談ごとに近い。てかお前ら他でやれ。

「まず、同じやつの顔が頭に浮かぶんだ。」

「ほうほう。」

(あ、俺もキサラの顔、浮かんでるな。)

「わけもなく、ドキドキするんだ。」

「ほうほう。」

(ドキドキ・・・？まあ、緊張的なのもある・・・って兄弟だっつ

1の)

「無性に顔が見たくなるし、笑顔が見たいというか……。」

「喜ばせたい的な。」

「そうそう。よくわかったな。」

(・・・確かに、あいつ笑うと結構……。)

「なあ、これ何の話だ？　そういう奴がいるとどうなんだ？」

思わず会話に参戦。おーちよつといきおいつけすぎ。軽く引いてるぞあいつら。

「はあ？　何、プレイボーイ。そんなこともわかんないわけ。」

「おい、その呼び方やメロ。(でも否定はしない)」

「それって、そいつのことが好きってこったろ。」

………like………だと？

俺の場合、兄弟としてってこと……だよな……？

L v. 24 早期発見にご注意を（後書き）

えへ、今回メインがテイザになりました。（なんかごめんなさい。

サブタイトルの意味はといいますと・・・

恋って早めに気づくと結構辛いというお話を聞かまして。

テイザにはそれを味わっていただくことに。（鬼。

でもそこまで重度なブラコン度ではなかったので良かったです。（
描写的な意味で）

うーん。テイザのキサラに対するセクハラの描写は避けるべきか。
それとも避けざるべきか。ここ重要ですけどあまり直視したくない
ですね。

てか今回コメディ目指したんですけど・・・。

こ、コメディってことで！では^^；

L v. 25 一線の妨害を（前書き）

勇者視点。ちよっぴりシリアス。

L v. 25 一線の妨害を

こういうのがきつと一目惚れって言うんだろうなっと思う。



漆黒の髪に、紫がかった瞳。

印象的なのは、強い意志を持った瞳。

綺麗だと思ったのは、色のせいだけじゃなくて。

「おい・・・なんたって男のこと考えてるんだよ。」

（ちよっと、女の人のことだって考えてるよ！）

「何ムキになってんだあ？誰が男だけのことって言ったよ。」

（！！・・・う、い、言っていないけど、で、でも！！！）

「でも、何？」

（ううー。意地悪。そういえば前会った時もそうだったよね。）

「いや？初めて会ったときから。」

（うわー。意地悪って認めるんだー。こういう人って大抵・・・）

「鬼畜って言いたいの？それともドS？」

（？S・・・？ち、違うと思う・・・よ？）

「何で自信なさげなんだよ。」

（というか、僕の夢にまで出てこないでよ。）

「いいじゃん。俺は俺。お前も俺だし。」

（よくないよ。プライバシーとかの問題もあるし。）

「誰もお前みたいなお子ちゃま興味ねえよ。バーカ。自信過剰っつーんだよそういうの。」

（ひ、ひどいよ。えっと・・・君、名前何て言うの？）

「ウラキ。お前の裏側だから、ウラキだ。」

（ウラキ？どうして君は此処に居るの？・・・偽善者の僕と。）

「・・・まだ気にしてたのか。悪い。あのときは勢いだ。気にすんなよ。」

（勢いかー。でも、勢いでも僕が偽善者だって思ってたってことだよね。）

「お前無駄に鋭いのな。他の面では鈍感ちゃんなのに。」

（ああ、はいはい。どーせ僕は鈍感ちゃんですよ。それで？ウラキ。どうして此処に居るの？）

「・・・そう上手くはかわせねーか。」

（そりゃあね。君は僕だから。何か隠そうとしてるなってわかるもん。）

「は・・・そうだな。」

（そうだよ。それにウラキが言ったんだよ。僕は君だって。）

最初に遭った時の嫌悪感が薄れていく。

ウラキは自分で。自分はキサラで。キサラはウラキで。

混乱しそうだけど、なんとかこういう状況下に自分が置かれている

のかは理解した。



自然を愛したのは、自然が自分を拒絶できないのを知っていたから。否定されないから。自分の存在を。

自分の中に在る全てを捨てなくても、押さえつけなくてもいいのだから。

それが、都合の良いその場しのぎにしかないことは、最初から知っていた。

兄が何故異様なまでに自分を大切にしようとしているのか、手に取るようにわかった。

（だって、僕は――――――・・・・・）

兄弟、家族である前に、似た者同士なのだから。

知っている者しか理解しえないことはたくさんある。

タスラも、シーラもシュヒも。

キサラやテイザの気持ちも、何一つとして理解できることはない。

誰とも、一線を引いて、それなりの距離感を保っていくことに必死だった。

タスラにもシーラにも。線を引いて、自分の中に踏み込めないようにしてきた。

「家族だよ。」と言いながらも、自分は彼らには何も告げていない。

過去の出来事。自分が多重人格であること。その正体すらも。

そうすることでしか、自分を保てることができないと信じて疑わなかった。

優しい？優しく在ろうとしているだけだよ。

正しい？間違った選択ばかりしているよ。

好かれてる？上辺だけなら、そんなもの要らないよ。

だって、いつまでも僕は一人だから。

だけど・・・・・・・・

頭から離れない。

声も、表情も、あの瞳も。

悲しい顔をしている彼に、彼女に。心から笑って欲しいと思った。冷たく冷えた手が、温かさで溢れるようになって欲しいと思った。

両親を失くしてから初めて、何かを心から望んだ。

失うことを恐れていたのに、恐れていないわけではないのに。それすらも薄れてしまうほどに。

キサラの望みは強い意志となっていた。

「ナトス……。」

もう一度、貴方に会いたい。

夢の中でだけでもいい。幻でもいい。虚像でもいい。写し身でもいい。

今だけは、我慢できる。たとえ本物でなくても。それでもいい。これ以上忘れられなくなる前に、姿を一目見て消し去ってしまいたい。

（僕が何かを望むことは許されない……。）

開けてはいけない。その箱は。

いつの間にか蓋を粉々に破壊してしまっていて。

戻することも、戻すこともできぬままに。

もう一度、貴方の瞳に映りたい。

自分が生きている気分になれるのは、彼の瞳に映った時だった。生きてもいいのだと、錯覚するほどに、その瞳は優しかったから。悩んでも、苦しんでもいいのだと、貴方が教えてくれたから。

◇

「ナトス……。」

「え・・・？」

キサラの口から紡がれた名前。

驚くべきことに、一番に反応したのは謎の男だった。

名前を聞いた瞬間、大きく目を見開いた。てか血走ってるっつの
いったん閉じろ。

「なんだ？ ナトスってのは。知り合いか？」

「知り合いではありませんよ。しかし、知ってはいるかもしれませ
ん。」

「はぁ？ お前全然意味わかんねーよ。」

でも、この際そんなことはどうでもいい。キサラが見つかったのだ
から。

「しっかしこれで丸一日キサラが俺らから離れて行動しちまったこ
とになるなー。」

「一日もキサラ君は何をしていたのでしょうねえ。それもこんなに
近くで。」

「おい、そーいやさっきから気になってたんだが。」

「何でしょう。手短に願います。」

「どうしてこんなに近くなのにあんなに探すのに時間がかかったんだ。
」

一瞬、謎の男は固まった。何か痛いところをついたらしい。ヘッざ
まあみやがれ。

「そうですね。やはり貴方は鋭い。」

「鋭い鈍いはどうでもいいんだよ。どーして時間がかかった。」

「いえね、このキサラ君には魔法による探索を妨害する術が施され

ておりまして。」

「？妨害？誰が何のためにそんなことすんだよ。」

「さあ、そこまではわかりませんよ。まあ、それなりの理由があつてでしょうけど。」

「理由・・・だと？キサラに危ないこたー起こんねーだろうな。」

謎の男の浮ついたような空気が、視線一つで重くなった。

「彼には、天空の波動が流れています。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

N e a r f u t u r e .

それは、確実に。

L v. 25 一線の妨害を（後書き）

n e a r f u t u r e 近い将来

ちょっとファンタジー路線目指そうと思います。

魔王とか勇者とかでてきてるわりに舞台があまりそれっぽくないので．．．

．．．が、頑張ります。^^；

最後に一言だけ。

受験に受かりました（ダメレ）。

L v. 26 崩壊の音

深く沈んでしまう前に、誰かに――――。・・・。

◇

「キサラ！大丈夫か！」

「そんなに頬を叩いたり首をガクガクしてしまつては治るものも治りません。というか大丈夫じゃないのはむしろ貴方の今の行いのせいでしょうに。ああ、哀れな。」

「ダメレ！てかお前人の名前知ってるくせになんで名乗らねえんだ。」

「私は弟さんが目覚めて、シュヒアルと合流してからお話しさせていただきますようかね。」

（・・・なんかうるさい。）

ていうか頭痛い。兄さんの声がするということは犯人は兄さん確定。お巡りさーん！！

この変態を今すぐとっ捕まえて牢屋にでもなんでもブチ込んでまともな人間に！！

「なんか俺、誰かに噂されてる気がするんだが。」

「自意識過剰なブラコンさんですねー。」

「！！誰がそんなことを言った。シュヒアルか！！」

「いやー弟さんを見つけた時の貴方の顔ちよつと犯罪者並みにヤバかったですから。」

（ちよ・・・マジでお巡りさーん！！！！！！）

（まあ、ヤバいというよりは・・・優しいお兄さんでしたけどね。）
ちらりとキサラに目を向けてみる。と・・・

「あゝ」

「?どうした。」

「い、いえ・・・何でも・・・。」

キサラの顔が嫌そうに歪んでいる。これは完璧に起きてた。

（あー。あの冗談聞こえてたら・・・ごめんなさいブラコン。）

「お、おい何だよ。俺まだ拝まれるような歳じゃないぞ。」

「いえ・・・私の自己満足な行動です。黙っててください。」

「なんで俺が怒られてんの。」

「まあ、それはいいとして。日が暮れてきました。早く馬車のところまで行かねば。」

「そうだな。キサラも無事見つかったことだ。この際お前の意味不明な行動はスルーしておこう。」

「キサラ君は貴方が運びますk「もちろんだ。」

「ちょっと・・・科白に被らないでくださいよ。どこまでも失礼な方ですね。」

「失礼とはなんだ。お前の方が何倍も・・・てか初対面にブラコン言う奴よかマシだろ！」

「事実を述べたまでですよ。貴方は本当に駄目な方なんですか？自覚なしだと性質悪いですよ？」

このままあーだこーだと言いながら馬車へ移動するのにとっても時間がかかってしまった。

（お巡りさんじゃなくてもいい！誰か僕の兄をマトモな人間に！！）
キサラが絡むこと以外は、結構マトモな人間であることを知らないのは、キサラだけである。



『天空の・・・波動、だと？あれは確か・・・』

『ええ。迷信、または架空上の話、とされていることが多いですね。』

『その架空上の波動とやらがなんでキサラに流れてるってわかるんだ。』

『私の場合、微力ではありますが、火炎の波動が流れています。』

『は・・・？火炎？聞いたことが無いぞ。』

『そうでしょうね。有名なのは天空、大地の波動ですから。』

『波動は全部で六つです。天空、大地、水海、雷光、火炎、緑然です。』

『うわー・・・聞きなれない単語があるんだけど。』

『なにぶん創作・・・ごによごによ。』

(今のはマズかったですかね。でもまあ・・・ねえ？)

『それは置いといてください。で、今のが階級順にもなっています。』

『階級？そんなもんが在るのか？』

『ええ。波動にも不思議なことに階級があるんですよ。まあ、基準は神話ですけど。』

『神話？あれは古代人の絵空事じゃねーのか？』

『いいえ。実話が元です。少々物語に捏造やらなんやらはありますが、神々は実在しています。』

『ちょっと待て。話がだんだん大きくなってきた。波動と神とどういう関係があるってんだ？』

『ですから、神話では、天空から大地が生まれ・・・といった具合に、天空から始まり、世界の全てを形作っているでしょう。波動の内容からしてですけど。』

『それはわかった。でも水海と緑然の意味を教えてください？他のは何となくわかるが・・・理解不能だ。』

『ですよ。私も最初はそうでしたから。』

『つまり、水海とは、海のことを指します。また、水に関わる全てのものも。』

『全て？極端すぎてわからんぞ。』

『まあ、それは追々。キサラ君が起きてしまう前に貴方には天空の波動について学んでもらわねば。』

『・・・それがキサラに関わることなんだな？』

『ええ。やはり貴方は鋭い。ただ、もう少し賢く生まれてくれた方がよかったんですけどね。』

『さりげなく俺を貶すな。（やっぱ嫌いだこいつ・・・。）』

『次に、緑然とは簡単にいえば自然ですね。大地に属します。』

『属することは他のも何かに属すのか。』

『ええ。話が早くて助かります。貴方は私の生徒の中で一番優秀ですよ。』

『そういうんなら褒められても嬉しかねえよ。てかキサラに褒められたい。』

『その顔やめてください。てか言いながらキサラ君に手を出すんじゃない！他でやってください！』

『とまあ、以上のことを踏まえていただいて・・・。ちなみに私の火災の波動は大地に属します。』

『いや、そんなこと聞いてねーし。』

『貴方は・・・水海の波動が流れていますね。うわあ、相性最悪

です。』

『へっ・・・ざまあみやがれ・・・でなくて俺はどっちに属すんだ？』

『天空に属します。まあ、階級的には天空の方が上なので、波動だけ見れば貴方の方が下ですね。』

『・・・それもいいな。』

『うわー貴方って本当に気持ち悪いですね。顔は良いのにもったいない。宝の持ち腐れってしてます？』

『うるせー、俺は顔しか見ねー奴は嫌いだ。』

ああ、今思い出してもムカつく。

シュヒめ。何であんな男を同行させるんだ・・・。まあ、キサラの件は助かったが・・・。

(何か、あいつにはあるのか?)

嫌な予感とまではないかないが、疑問符が頭の中にたくさん浮かぶ。どういったことか。



僕の中で、何かが変わる音がする。

崩壊の足音が。たぶん、もうすぐで・・・。

僕は、普通じゃなくなる。

S t i l l , c o u l d y o u l o v e ?

貴方に問おう。

L v. 26 崩壊の音（後書き）

Still, could you love? . . . それでも愛
してくれますか？

という意味です。

サブタイトルのみキサラ目線です。

今回は波動についての記述を . . . 。

も、物語 . . . コメディが書きたい . . . 。（ ）

謎の男の名前をとりあえずアミダで決めてきます。

Lv. 27 Please give to me.

何かが壊れていく音がする。

◇

「う・・・あれ？」

「キサラ！起きたか！？」

目が覚めると、そこは馬車の中だった。

異様な数の毛布に包まれている。メチャクチャ暑い。

「ねえ、これ何のいじめ？」

「えー？駄目だった？」

うるうるとしーラが見上げてくる。

うわあしーラでしたか。うん許す。兄さんだったらシメるけど。

「てか暑い！誰かー。」

「はい。ほらね、だから言ったでしょう。こんなにしてしまつてはキサラ君が大変なことになりますよって。」

「はーい。ごめんなさーい。」

「誰だー！！！」

何故かそこには、知らない男がいました。え？あれ僕誰に喋ってるの。

「申し遅れました。私はファリオンと申します。キサラ君。」

「うえ、はい。どうも。僕はキサラと申しま・・・あれ？」

「知ってます。ご丁寧にどうもありがとうございます。」

「いえ・・・えっとこちらこそ・・・？」

「なんちゅー会話しとんじゃお前ら。」

ええごもつともですな。これどういう会話ですか。

自己紹介する前から僕の名前知ってるって何ですか。名乗ってからにしてよ。空気読（自主規制）てか兄さん何ですかその格好。

ザ・ドピンク。例えるならそれしかない。うーむ。書き記したくないですな。

「俺この性悪男にこんな可愛いを着せられちゃった。」

「可愛いね。うん。服だけ。てかそれじゃ兄さん不審者だよ。」

「不審・・・（ガーン）じゃなかった。さっさと行くぞ。」

「いやもう移動中じゃないですか。何言ってるんですか貴方は。」

「ダメレ。お前には言っちゃいねえ。俺はキサラに言ってるんだ。」

なんかギャーギャーと喧嘩が始まった。これは放つところ。僕には関係ない（現実逃避）

「お前なんか段々俺に似てきたな。」

（違うよ。ほら、元々僕たち一つだし。）

「それもそうだな・・・じゃなくて段々荒れてきてない？」

（うん。だってさー・・・。）

僕にまで着せなくても！！

しかもこっちなんか超フリフリなんですけど！模様とか無駄に細かいんですけど！！

何のいじめ！？まだガキ大将共のいじめの方が軽かったんですけど！これ軽く罰ゲームとおりこして最早罰なんですけど！！（僕の中でだけ？）

「はい、キサラ君♪そのままじゃ嫌でしょ？」

「あ、ありがとシュヒ。」

やっとマトモな服が！シュヒが女神に見え・・・

「何これ？シュヒさん。ちょっと精神的ダメージ大きいよこれは。」

「えへ？そっちよりもこっちの方がキサラ君に似合うと思って☆」

あのそのわざとらしい☆やめていただけます？あ・・・殺意g（）自主規制

「僕がこんなを着ると思う！？僕は変態じゃないよ！？」

「ええ〜。いいじゃん可愛いんだから。」

「ねー。女の子だったらこういうの一度着てみたいものよ？」

「いや僕女じゃないし。というか何この服。」

「メイドふk「誰が着るものか。」

・・・なんとか騒ぎから脱出。でもないか。今僕の服選り中な可愛いらしい女子二名と変態一名。

何だこの画・・・顔が良いだけに変態がすごく可哀相なことになってるんですが。

「いつもこんな感じなんですか？」

「あ、ファリオンさん・・・いえ。違いますよ。」

「では今回だけですか？貴方への・・・その・・・。」

「・・・僕がいきなりいなくなりましたからね。文句も言えませんが。」

「そうですか・・・あの中に混ざってもいいですか？」

「全力で阻止させていただきます。」

うわーショック。常識人の生存が確認できませんよ大佐。戦線離脱してもいいですか。

「で？あそこの子は何という名なのでしょうか。」

「え？あそこの子って……？……あ。」

タスラ。何であんな隅の方に……？

「あ、ちょっと……ちょっと待っててくださいね。」

「はい。いつてらっしゃい。」

てか馬車の中ってこんなに広くていいんですか。

何処の世界に端に行くまで十歩以上歩く程の広さの馬車があるんですか。

あ、でもこれシュヒの魔法だっけ。……何でもありだなこの野郎。

「タスラ？大丈夫……？」

キサラの声にびくりと反応するタスラ。

（そんなにキツイ言い方したかな……。）

「何だその喋り方。いつもと違」

（いつもどおりだけど？）

「キサラ……。居なくなったのって……。俺のせい？」

「え？そんなことないよ？何でそんなこと聞くの？」

「だって、俺キサラに冷たくあたったから……。」

「大丈夫だよ。ほら、僕が兄さんに対する様な冷たさと比べてみてよ。全然でしょ？」

「キサラ……！」

「タスラ!!」

「あのさー、感動の場面るとき悪いんだけど何気二人とも俺に失礼じゃね?」

「うるさいわね愚兄。水を差さないでよね。」

「そうだよ。失礼なのは今に始まったことじゃないでしょ?」

「ねえねえ、心の傷って知ってる? てかお前ら前まで仲悪かったじゃねーか。」

カラカラと馬車の車輪が回る。

ゆっくりではあるけれど、僕らを乗せて確実に。

目的地まで。



「で? 何で僕に冷たくしたの? タスラ。」

「.....。／／」

「? タスラ.....? どうしたの?」

一瞬でタスラの顔が真っ赤に染まる。照れている様だった。

「だ、だって... シーラが...。」

「シーラ? シーラが何だって?」

「キサラと結婚するって言うから!!」

「ん? (今聞きなれない単語が)。」

拝啓・天国のお父さん、お母さん。

何だか誤解が生まれているようです。僕はロリコンじゃないです。
あ、今日は曇天。雨も降りそうです。
そちらからは雨が降るところとか間近に見えますか？

最後に一言。

マトモな服をください。

A n e a s y f u n n y n o i s e i s h e a r d .

L v. 27 Please give to me. (後書き)

壊れていったのはキサラのキャラでs (違う

えー・・・っとテイザは今ピンクの服を着ています。
それもなんかこう・・・とにかく色が濃いやつです。

常識人はきつとこの小説にはいませんね。^^

L V. 28 小さな恋と鏡の願い（前書き）

長めな感じですよ。

L v. 28 小さな恋と鏡の願い

それを信じ続けているのは、愚かなことでしょうか？



「結婚ねー……。」

「や、やっぱりするの？」

顔を真っ赤にしつつ、不安げな顔でタスラが見上げて来る。

（何でそんなことになってんのさ。）

「全くだな。もしかしてロリだと思われてんじゃないのか。」

「確かにシーラは可愛いよ。うん。すごい可愛い。でもそれと結婚は関係ないよ？」

「……何で？」

何でと言われましても！！だってそうじゃん、どこの世界に娘と結婚する父親がいるのさ！

あ、その人父親じゃねーだろ的なこと考えましたね！えー確かにそうですよ。

僕はシーラの父親じゃありませんよ！生物学的にはね！！

「おい……キサラ？」

（何ウラキ。今忙しいから後にして。）

ウラキの声は無視する。今はこっちの父親としての威厳の方が何倍も大事だ。（何の話だ）

「じゃあ、タスラはシーラが可愛いからってシーラと結婚するの？」
「する。」

「即答!？」

(ど、どうしよう。まさかの展開・・・。)

「本当にな!!」

でも子供のうちから結婚相手なんて簡単に決めちゃっていいの？後悔しちゃうかもよ？

小さい頃とってもカッコイイorカワイイでもいつの日かを境にとんでもないことになっちゃうかもよ？

かなりのモテ男になって他の女の子に妨害されちゃったりとか可愛くなりすぎて逆に「俺なんかでいいのか？てか俺このままでいいのか？」みたいな感じで自信なくなっちゃったりとか・・・。

「ベタすぎるだろ！何の茶番だよ!!」

「ていうか、その結婚と僕に冷たくあたると何の関係が？」

「だって、シーラがキサラの話ばかりするから・・・。」

「シーラが？僕の話ばかりするって？でもそれだけ?？」

「それだけ。それに、シーラが・・・キサラと結婚するって・・・。」

「おいおい、これって・・・。」

(え？何なに？これってどれ。)

「お前本当に鈍いのな。」

(植物に関してはばっちりですけど?)

そういう問題じゃねーと叫ぶウラキは軽くスルーの方向で。あ、そっちじゃないですよ。こっちの方向です。

あ、ありがとうタスラ。マトモな服くれた。やばい泣きそう。お父さん嬉しいよ。

「お父さんて誰だ。というか、これはアレだろ。」

（お父さんの座は渡さないよ。お母さんの座はいいけど。ていうかアレって何。物忘れ激しくなった年輩の方でももうちょっと詳しく言ってくださるよ？）

「あーはいはい。もうお母さんでもなんでもいいから。てかこれはあれだろ、タスラが」

（お父さんの座を狙って?!）

「んな訳あるか! いい加減親父設定離れろ!・・・シーラのこと好きってことだろ。」

（Why?ウラキが?）

「俺じゃねーよ俺今誰の話してたよ。」

（お父さん。）

あれ?違った?なんかウラキが凄い顔して僕を見てるんだけど。

うわ、そんな顔されると僕が悪いんだろうけど軽く引くよ。女の子の前でそんな顔しちゃう駄目だよ?

たぶん天使も裸足で逃げ出すよ。あれ?天使って靴履いてたっけ??

「タスラだ。タスラがシーラを好きなんだよ。」

（嘘おおおおおおおおおおお!?!）

お父さん認めませんよ!?!可愛い息子と娘が結婚なんて!?!

あれ？でも二人とも僕の可愛い子供たちで・・・その二人が結婚なら万歳？？

「まだ二人とも結婚できねーよ。てか本人に確認してみろよ。」

（あー・・・うん。そうだね。まだそうときまつたわけじゃないもんね。）

「それとお前純粋無垢な少年じゃなくてただの天然ボケかましてる少年になってるぞ」

スルー。本日二回目。というか天然だと、良い素材っていうことかな？

でもボケが天然てどういう状況？？僕そままでいいボケかましました？

あー、今それどころじゃなかった！

「タスラ、シーラが好きなの？」

「・・・え・・・？」

「んー？あれー？」

タスラの顔がますます赤く染まっていく。というかなんだか混乱しているようだ。

「なんだこいつ無自覚かよ。義父が義父なら養子も養子だな。」

（どういうこと？無自覚で僕が無視されたの？？）

「可愛い奴だなこいつ。お前にシーラがとられると思ってお前に冷たくあたったんだよ。」

（うわ何それ可愛い！でも・・・僕としては複雑なんだけど。）

「大丈夫だよ。タスラ。」

「？キサラ？」

「僕、シーラと同じくらいタスラが好きだよ。」

「・・・本当に？」
「本当。」

言った瞬間に物凄い勢いで抱きついてきた。え？突進？？強制認識
っていう形で抱きついた、の方向で。

「僕は家族だから。」

「タスラ〜キサラ〜！！」

「シーラ。」

すごい満面の笑みだよシーラ。可愛いな〜さすが我が娘。てかその
右手の服は何ですか。

「あれー、ピンクちゃんじゃない。」

あれピンクちゃんて名前だったのか。じゃなくてなんで服にそんな
愛着持つてるのこの子。

「ま、いいや。こっち着て〜。」

「全力で断るよ。」

そんな顔して「え〜」って言っても駄目！誰が着るものか・・・誰
・・・が。

「というか兄さん何してんの！？」

「やー？お前の服のサイズでもと。」

「僕に触るな—————！！」

「照れるな照れるな♪大丈夫だ。痛くしないし。」

何の話だ。そのひねくれた前向きすぎる思考回路を改めろ。てかさ
イズを知るために痛くなるってどこの世界にもねーよ。うわやめろ、
触るな気持ち悪いから！とくにその顔恐いから！！

「ホントお前俺に似てきたな。」

(ねー、今なら喜んでウラキに体貸してあげるけど……どう?)
「暴れてもいいならな。どうだ?」
(契約成立。どうぞどうぞ。)



「キサラすごい!!」

「へえ、体術も使えたとは。お見事です、キサラ君。」

「うわ、またキタの?つまんない。」

「その残念そうな顔は何だ。下僕その2。」

久しぶりの外。とりあえず体をベタベタ触ってくる変態を撃沈。どんなもんだ。

「ていうか下僕って何よ。私女よ。」

「ほう、気づかなかった。無理やり拉致・監禁されたときはその辺の男どもよりも強かったぞ?」

「あら、おほほほ。何の話かしら。」

「シユヒアル……そんなことをしていたんですか。」

ほらな、ファリオンだっけ?て奴も引いてるだろ?

やっぱり俺のまわり……もといキサラのまわりは変態ばっかだ。しかも、本気なところがまた質が悪い。

「あれ?でもいつものキサラと違う……。」

「当たり前だ。いつもの奴はキサラ、俺はウラキだ。」

「あ、俺の採用してくれたのか。」

「そうだ、嬉しいか変態兄貴。」

「変態言うな!!お前に言われたかねーんだよ、キサラになら良いけど!」

「お前ドSなのかドMなのかハッキリしろ!!」

でも、これだけはわかる。

ティザ（変態ブラコンドSMタラシプレイボーイ）は、本気でキサラに惚れてる。

（愛情表現の下手な奴だな。・・・俺も他の奴のと言える立場じゃねえが。）

「愛情表現？ウラキ愛情表現下手なの？」

（うあ、何覚醒してんだお前。入れ替わった時はいつも寝てただろうが）

「僕だけ君が外に居るときのこと知れないのって不公平だと思うんだよね。」

（でも、その不公平が、俺の存在意義なんだよ。）

「・・・え・・・？」

だって、そのために俺は生まれてきたんだから。



誰かが、キサラじゃなくて俺を見てくれることを願ってる。

誰かが、キサラじゃなくて俺を愛してくれることを信じてる。

You love me?

それがたとえ虚像でも。

L v. 28 小さな恋と鏡の願い（後書き）

無自覚タスラとお父さんキサラ。（気分だけ）
この二つが書けたので満足です。^^

L v. 29 驕れる者と愚かな弟（前書き）

魔王サイドです。

L v. 29 驕れる者と愚かな弟

何故、僕には何も言ってくれないのですか？

◇

「お姉様！」

駆け寄って来たのはまだ幼い弟。近くには弟の側近が居た。

「悪いが退席してもらおう。」

「はい。わかりました。」

元・両性の側近、性別は女。

高貴な者ではあったが、何故か弟の第二皇子の側近となった。

（何故地位を捨ててまで側近に・・・？）

疑問以前の問題で、精神的に大丈夫なのかとさえ思う。

子供である上に、第二皇子だというのに。

・・・不明だ。関わることをできるだけ避けたい。

「余を呼ぶ時はお姉様ではなく陛下と呼べと何度言わせるのだ。」

「でも・・・兄弟ならばそうするものだ、ヴェルカが・・・」

「側近の言うことをあまり鵜呑みにするな。そしてそれは下々のことだ。」

「ヴェルカだって、高貴の者です。何故我々だけそのような・・・」

少しだけ、過去の自分と弟の姿を重ねてしまった。

確かに昔は自分もその様なことを考えたものだ。

「デイルシュファ。その様なことを二度と考えるな。」

「何故ですか？お姉様。」

「・・・・・・。」

昔に比べてみれば、随分齒向かうようになったものだ。

・・・自分の意思があり、そしてそれを尊重しようという心構えだけは殊勝だ。しかし・・・。

「目指す者は何かと、聞いたことがあったな。」

「はい。聞かれました。」

「何と答えたか覚えてるか。」

「ええ。お姉様、・・・今生陛下の様に在りたいと申し上げました。」

まだ幼児とは思えないような、ハッキリとした口調で。

公私混同をなさない、真直ぐな意思と共に。

（こ奴ほど、魔王に相応しい者もそうは居ないだろうに。）

王族の証と、その資質はどうに見つけ、磨かせてきた。

そういう意味では、あの側近も見事な者だ。

もしも、第二皇子の秘めているモノに気が付いてるとすれば。

（良い補佐になるだろう。）

今はまだ、原石でしかないだろう。

しかし、自分が何か小さな力を加えるだけで、ここまでの成長を遂げた。

考えていた時間よりも、より速く、正確に。

原石は磨かれ、やがて美しく輝く。

「僕・・・私が、貴女を陛下と呼んでしまったら、貴女が貴女で無くなってしまいます。」

「――！！！」

「私は、貴女に、魔王陛下としてではなく、私だけの兄様、姉様で在って欲しいのです。」

時に、子供の目ほど恐ろしいものはない。
何も知らないように見えて、知っている。

何も見えていないように見えて、一番見なければならぬものを見ている。

それも、無意識に。

「それを考えてしまっただけは、駄目だ。デイルシュファ。」

「何故です！！貴女には貴女であって欲しいのに！！」

「デイルシュファ！！」

突然大きな声を出したからか、デイルシュファの体がビクリと跳ねる。

「もう、その話をするな・・・・・・。」

「姉様・・・・・・。」

フラフラと歩み、扉に手を掛ける。

「ごめんなさい。姉様。」

弱々しい声が、後ろから聞こえる。

キサラと同じくらい、純粋な弟。

デイルシュファの言った愚かさとは、その純粋さに向けてであろう。

「いいか、デイルシュファ。ときに、冷酷にならねば守れぬモノも

ある。」

傷つき果てた、心は特に。

残酷になることでしか守れないというのも、滑稽ではあるが。

「忘れるな。だが、冷酷さは強さではない。意味を違^{たが}うな。」

この意味に気がつくか気がつかないかは、こいつ次第だ。

先に在る大きな問題も。幾重にもなる我々への咎に関する選択も。そのときの答えで、この世界は廻^{まわ}って行く。

善し悪し関係なく、こいつ自身の選択によって。

「私は！」

今まで聞いたことのないくらい、必死に張りあげられた声。

思わず、部屋の外へと進めた足を止める。

「私は、貴女に進むべき道を示してほしいんです！今の様に！」
幼さ故の、嘆き。しかしそれは、ナトスには受け入れきれないものであった。

「ディルシュファ。」

低く、冷たい声音が響く。

「お前には失望した。」

たった一言で冷たく突き放す。

止めた足を進ませ、ナトスは部屋を出た。

◇

「あまりディルシュファ様に冷たくなさらないで頂けますか？」

「ほう、余に意見か？」

「ええ。私の忠誠を捧げている御方ディルシュファ様のみ……貴女様ではございません。」

（ディルシュファ……お前は……本当に……。）

「そのままに在れ。ヴェルカ。」

「言われずとも、その様にするつもりです。」

その時初めて、ヴェルカがナトスに微笑んだ。

「貴女様は誰よりもあの御方を理解しておいでです。私には、到底理解の及ばぬ領域でも、難なく理解していらっしゃる……。」

「だから、傍に在れと？」

「……お見通しでございましたか。ええ、そうでございます。」

「驕るな。余は愚弟^{あれ}の為に生きている訳ではない。」

「何よりも、気にかけていらっしゃるのにですか？」

ヴェルカの震える声が、後ろから追いかけて来る。

細々として、今にも途切れそうな声。

「それと生きている意味は相違がある。そして、愚弟の隣に居るべきは余ではない。」

それだけ言うと、ナトスは消えてしまった。



本当に、良き従者を持ったな。

それが自分よりも更に過酷な運命へ誘う結果になろうとも。
何より大切に、支えとなる者が傍にいるのだから。

役目は、果たそう。そして……

t y a t t h a t t i m e
T h r o u g h a l l e t e r n i

L v. 29 驕れる者と愚かな弟（後書き）

Through all eternity at that
time

・・・そのときは永遠に

お久しぶりです。翠寵です。

今回魔王サイドでしたね。勇者サイド楽しみにしていたらごめんな
さい。

・・・未だに勇者という肩書を持っていらっしゃる方が居ませんね。
うはあ、頑張ります（何をだ。

では^^

L v. 30 運命と呪われた宝玉（前書き）

少し短いかも・・・。

L v. 30 運命と呪われた宝玉

正直、此処にいるの嫌だ。



「なあ、いいだ r 「ヤダ。」

どうも、良い天気ですね。え？大雪？知るか。

天気はいつも気まぐれです。気をつける。

そして今こちらは秋です。

そちらは春ですか夏ですか秋ですか冬ですか。ははっ興味ねーけどな。

この辺で気づいていただけだと思います。てか気づけ。

俺は、現在進行形でウラキ。うん。キサラには寝てもらった。

「なんでだよ、ケチだなお前。」

「何だお前ならそのフツリフリのピンク着れるのか？」

「着れる。」

「はーい来ました変態。いつそ消えた方がいいと思うぜ？」

「なんでだ！これをキサラに着せるまで俺は・・・！」

第一お前の格好は何なんだよ。頭の中ピンク色過ぎて服にまで染みつきましたかこの野郎。

「てか俺ウラキだし。今すぐ消えてしまえ。」

「何故実の兄にそんなひどいことが言えるんだ！謝れ！」

「だが断る。今すぐ消えろ。その方が世の為人の為俺の為。」

「結局お前か!!」

えーそうだけど？俺の為にならないこと基本したくないし☆

「こんなん着て誰が喜ぶんだよ。」

「「「「はゝい。」」」」」

「お前ら全員変態だな!」

解かってたけどな! あーもう帰りてえ! あの豊かで穏やかな自然へ
帰りてえ!

周りは結構人とか建物が増えてきた。
しかしまだ此処も田舎のようだ。

「ったく・・・都まで着せかえされて行くのか? 俺はごめんだな。」

「えー? でも快適でしょ? 私のおかげで♪」

「ねー! シュヒちゃんすごいよ!!」

「わー、ありがとうシーラちゃん!」

いつの間に仲良くなってるんだこいつら。

馬車は確かに快適だが馬車だけだ! こんな服着てたまるか!

「つーかファリオンてめー常識人かと思ってたのに変態と趣味が合
うんだな。」

「嫌ですねー。人間て根本は変態なんですよ?」

「俺は騙されねーぞ。つかそれを信じる奴いたらどうすんだ。」

「さあ?」

楽しそうだなこの野郎!

(キサラよくこんなおかしな奴らの中で生きてこれたな。)

尊敬ものだ。これ聞いていると結構楽しいけど実際に体感すると地獄だ。

うーん。もう少し静観しているべきだったな。

（タイミングを見誤ったな・・・。）

なんという失態。こんな地獄だとは聞いてないぞチクショウ。

表に出れるっつーからウツカリ出ちゃった。

でも・・・まあ、キサラだったら今頃無理やり着せられているだろう。

（良いのか悪いのか・・・。）

ため息出るよ。タスラ、そんなに真剣な眼差しでその服持つな。

何か真顔な分だけ吹き出しそうなんだけど。

「この先に、私の知り合いのおじい様がいらっしやいましたね。寄ってもいいですか？」

フアリオンが唐突に言ってきた。

「別に急ぐ旅じゃないし・・・いいんじゃない？」

「」「賛成ー。」「」

丁度皆馬車に揺られての移動。馬車での寝泊まりに飽きてきたところだ。

「じゃ、久しぶりにベッドで寝れるのか？」

「ええ。きつとお泊めくださります。」

「・・・そのおじい様？っていうのはどんな人なの？」

シーラが目を輝かせて言った。

「予言者であり、我が師でもありますね。」

「「「予言者？」」」」

「そうよ。ほら、ファリオンは昨日キサラ君のこと見つけたでしょ？その技術は全てその方の教えなのよ。」

「へー。そのおかげで今俺は此処に居るってか？」

とりあえず、事情はわかった。

興味深いのは予言者っていう部分だ。未来予知だとかそういうものを持っているのだろうか。

町から町への殺風景な道を、ひたすら馬車は進む。



まるで黒い塗料を浴びせたかのように、そこは真っ暗だった。ぼやけながらも薄く光る光が、不気味さを漂わせた。

「これが……。」

魔族に伝わる秘宝。宝玉の黒真珠。

黒い光が黒さを増すでもなく、ぼやけて光る不思議な玉。

魔族の中でも最も高い地位である、王族門に受け継がれし呪われた秘宝。

その存在を知る者は、歴代魔王の中でも数少ないと言われている。

（古い文献によると……確かこれは……。）

初代魔王が、最愛の女王を失った際に流した涙だと言われている。

膨大な魔力が一気に外に流れだし、そしてそれが型を作り、現存しているとも。

真意は今となっては掴めないが、誰か強大な魔力を持った者の涙であることは間違いないかった。

「涙を流した悪魔は魔力を失う。」

古来より言われ続けた事実であり、恐れるべきことであり。

涙を流した悪魔の魔力は失われ、人間となる。

魔界でもしも、人間となってしまうえば満ち溢れた瘴気に侵され、死んでいく。

呪われた宝玉たる所以は、そこだろう。

流れ出た魔力が具現化する程の、強大な魔力。

一体それを体に所有していた魔族は誰だったのか。

文献の通り、初代魔王か。はたまた王族の者ではないのか。

何故、強力な魔力を持っていながらも、涙を流したのか。

恐れ？不安？苦痛？

どれも当てはまりそうなものがない。

また、其れを知る必要も、ナトスには無く。

呪われし秘宝に、ナトスは愛おしそうに触れた。

w i t h y o u . . .



運命は、加速を始めた。

迷いのない選択は、一つの迷いを生み出しゆく。
生み出された迷いは、いつしか自身をも食らう。

D o y o u a c c e p t ?

何があろうとも。

L v. 30 運命と呪われた宝玉（後書き）

D o y o u a c c e p t ? . . . 貴方は受け入れますか？

という意味です。

久しぶりの投稿ですね。休日なので。

ここはやはり落ち着きますね^^

L v. 31 勘違い入獄生活!?

何をどう間違えたのだろうか。



「魔王様？魔王様ー？」

臣下達が慌ただしく廊下を走る。
もちろん返事をする主は無い。

「全く何を考えているのですか……。」

ため息本日29回目。あまり綺麗な数字ではない。
そもそも魔王陛下ともあろう者が定期的に人間界へと出ていくこと
自体に問題があるのだと思う。

「はぁ……。」

重い瞼を伏せる。何より、ここ数日睡眠を怠ったことが疲労の原因
だ。

そしてそれもこれも……!!

「魔王様のせいですよ？」

「何だアリファス。筆を動かせ。」

口より筆を動かさないならその口に筆を突っ込むぞ。

そんな脅迫染みたことを言われても（というかほぼ脅迫）私はひる
みません。

「皆さん、貴方を探していらっしゃいますよ？」

「かまうものか。どうせ見合い話だ。」

「あー。貴方様も婚活中ですか。」

「略すとは珍しいな。相当疲れているな。」

停止。停止停止。ちょっと待ってくださいよ。

私が今やっている雑務は貴方の分ですよ？

本来ならば貴方の仕事なのですよ?? わかってるんですか？

「自由とは流れる生命の根源である。」

「もっともらしいこと言ってますけどそれ筋が通ってませんよ。」

「お前にはユーモアが無いな。」

何でそうなるのですか。というか貴方様に言われたくない・・・ってあれ？

「熱でもあるんですか？魔王様。」

「・・・どういう意味だ。」

「いえ・・・いつもより口数も多いですし、それに・・・。」

(いつもより・・・なんだか・・・。)

違和感。簡単に言えばそれだろう。

いつもは無口。無関心。面白いことなんて考えない。

その御方が・・・ユーモア？

「おい、窓の外を見ても槍など降ってはこんぞ。」

「ですよー。」

重症の様です。いつもなら「何しているんだ。」と言われるところを的確なツツコミが・・・。

いえ、的確ではないですすいません。私までおかしくなりそうです。

「どうしたんですか？」

「……………」

「貴方らしいことを今一つも仰ってませんよ？」

不安。違和感。そして少しの安心感。

自分の中で様々な感情が浮き沈みする様を、魔王様はどう見ているのだろうか。

「お前は……………」

「はい？」

「あちら側か。」

「……………え……………？」

訳が解らないまま、魔王様の背を見送る。
近いはずなのに、とても遠いその背を。

「待つ——……………！！！」

急に、膨張した不安が、言葉を紡ごうとした。

だがそれは、叶わずに。

彼の背は一瞬にして掻き消えてしまった。

拭えぬ違和感。何事も無かったかのように静まる部屋。
窓からは冷たく、風が吹きつける。

鎖で繋ぎ止めてしまえば、どんなに楽だろう。

時々、そんなことを考える。

足枷にしかならないのであれば、私を引きずって行けばいいと。
時に足を止め、少しでも見てくれればと。

(嗚呼……。)

其れほどの力は、彼には無く。

虚しく風を運ぶ窓を、ゆっくりと閉めた。

◇

「お、キサラ起きたか？」

「……兄さん？」

頭がクラクラする。小さい頃にした船酔いと同じ感覚。

……気持ち悪い。

「兄さん、やっとマトモな服に着替えたんだね。」

「ああ、あのピンクっぽいの上取り上げられたんだよ。てかこれをマトモというのかお前は。」

「うん。すごい似合ってるよ。むしろあれの方を気に入ってたら僕もう他人のふりしてたよ。」

「お前本当にウラキに似てきたな。」

そんなにしみじみと言われても。

でも、僕は体術とか使えないし……あ、剣術なら少々。って違うか。

「それよりも、何で僕たちここに居るの？」
馬車ではなく、ベットに寝ていた。

そして、ベツトはベツトでも。

「兄さん。とうとうなんかしたの？」

「とうとうとは何だ。お前お兄ちゃんを何だと思ってたんだ。」

「変態。（即答）」

はい、いいよいちいち凹まなくて。いつものことじゃない。

「で？もう一度聞くと。何でここに居るの？」

「何か勘違いでな。捕まった。」

ここは牢獄の様だ。

ベツトはベツトでも、囚人用。

兄さんはあの派手なピンクの服（シーラ曰くピンクちゃん）を脱いでいた。

そして今は二人とも囚人が着せられる獄中着用の服を着せられていた。

暗い石畳の牢。窓枠にはめ込まれた鉄棒。湿った土の匂い。

「うん、でも兄さんはピンクちゃんよりその服の方が似合ってるよ。」

「嬉しくない褒め言葉だな。褒め言葉で傷ついたの兄ちゃんは初めてだぞ。」

そりゃあ、そうでしょうね。やつあたりだもの。

兄さんだけならわかるけど何で僕まで捕まってるのさ。

「時に、キサラ。」

「何兄さん。逃げる方法でも考えたの？」

「いや。それはまだだ。」
何だ・・・一体何だろう。

「お前、なんかあったか？」
「え？」

勘違い獄中生活一日目。これからどうなるのだろうか。



後に勇者として名を馳せ、英雄と崇められることになる男。
そしてその男は、勘違いから牢獄に監禁されることとなった。

予言者を訪ねる寄り道の旅は、伝説の幕を引くきっかけとなる。

そのことを知っているのは、ファリオンの術の師であり、予言者である老いた男のみである。

L e t ' s r e p o r t s t a r t i n g .

ただ、静かに。

L v. 31 勘違い入獄生活!?(後書き)

L e t ' s r e p o r t s t a r t i n g . . . 始まりを
告げましょう。

予想外の展開ですねー。(遠い目)

何故こんなことになったのか、理由は次回あたりにでも。

次は魔王サイドか勇者サイド、どちらかオンリー(予定)です。
では^^

L V. 32 脱獄計画模索開始? (前書き)

ちよつと長めかも・・・。

L v. 3 2 脱獄計画模索開始？

あれ、目の前がぼやけてるんですけど。

◇

「今は幸い二人きりだ。」

「かなり不本意だけどね。」

あ、だからいちいち凹まないですよ。

「一人で居なくなった時、何があった？」

持ちなおした瞬間に本題に入った。

単刀直入で実に良い。時間を無駄に使わなくていい。

「何もないよ。気が付いたら、馬車の中だったし。」

「本当にそれだけか？ 周りに誰か居たんじゃないのか？」

「！！！」

綺麗な景色と、二つの顔が頭を過る。

水の中の様な、不思議な場所出会った人。

その人の感情に、少しだけ触れたような・・・。

「何で、そんなこと？」

「お前が心配だからだ。」

「心配・・・？」

いつもと違って真剣な顔つきをしている兄さん。

何だか、年齢相応の顔に見える。

・・・いつもがいつもだから仕方が無いのだが。

「お前に何かあったら、俺は・・・。」

掠れて弱々しい声。きつと本気で心配しているのだろう。僅かに、テイザの体が震えている。

「兄さん・・・。」

「キサラ、お前は」

不意に途切れる兄さんの声。

驚いたように目が見開かれる。

兄さんの目線を辿り、後ろを振り向く。

するとそこには、兄さんより、年上だと思われる容姿の青年が立っていた。

「ダヴェラ・・・――！！」

憎悪。それは兄さんを取り巻いている者に限りなく近い言葉だろう。ぞくりと悪寒が走る。どっと冷や汗が噴き出し、体が硬直した。

（嘘、何これ?!）

「お前の変態兄貴、すごい殺気だな。」

ウラキの声が頭に響く。

確かに、兄さんの殺気はすごかった。

いつもの雰囲気など微塵も無い。

「何故貴様がここに居る？」

「それはこっちの科白だ！この・・・」

「おっと、あまり派手に暴れるなよ。まあ、暴れたところで其処か

らは出られないだろうがな。」

え、何このシリアスモード。しかもまさかの兄さんが。
ワイワイ。何これデジャブ。何か二度目・・・？あるうれー？

こうして、入獄生活一日目は終わっていった。

◇

うん。よくある。よくあることだよ。既視感。^{じしやふ}

でね、そういいの。それはいいの。

ダヴェラって人居た時のシリアスモード、殺気バリバリな兄さんが・・・。。今度はカオス。

「キサラ、あの男と小娘共に色目を使われたら言うんだぞ！スグに殺「ダメレ。」

誰が色目を使ったか！しかも今まさに危機的状況だよ！お前と二人っきりのせいだな！！

何でこうも早く変態に戻れるのか。

切り替えが早いとかそういう問題で解決できるような次元ではない。

「昨日の今日だよ！？何でこんなにモード変わるの早いのか？！」

「それはお前への愛のちから」んなもんはいらん！！」

生ごみとともに捨ててやる。お前ごとな！！

「凹んでないで僕の質問に答えてよ！」

「あー・・・俺の愛は拒絶されてしまった。いつそ死のう。」

「死ぬなら答えてから死ね。てか兄さんは殺しても死なないから。早く！」

「ねえねえ。言葉の暴力って知ってる？」

知ってますとも。小さい頃は良く兄さんにやられてたからね。
立場逆転ざまあみやがれ変態兄貴が！！

「キサラ・・・お前、大変だな。」

（ありがとう。褒め言葉にしては嬉しくないけどね。）

「いやそもそも褒めてねーし。」

知ってる。

じゃなくて、昨日はなんか流されたからもう一度質問をする。

あーほら、「え？質問？何の事だっけ？アレ？」とか言ってるし。

「何で僕らが捕まったのかーとか。」

「ああ、それね。」

次いで出てきた言葉に僕は呆れ果てた。

「無銭飲食者と間違われたあ？！」

何てどうでもいい！むしろそんなことする度胸ないよ。

「そ。何か特徴が酷似してたらしい。」

「と、特徴？？」

なんて迷惑な。そんなにソックリな団体が居るのか。世間で意外と狭い。

うわ、やめろ。体を撫ぜまわすな気色悪い。

「うあー！誰かつー！か、看守――――ッ！！」

ほらそこ！何看守が来る来ないに賭けてんの。獄中で博打なんてしちゃいけません！！

「いやシャバでも駄目だろ。つーかあいつらは不正賭博で捕まった奴らしいぜ。」

(実際にどうでもいい情報ありがとう! っていうか何で知ってんの!?)

軽く引く以前に兄にどん引きだよ。(結局兄)

「早く逃げ切れ! 俺は野郎にゃー興味はねえ!!」

(final answer————!!)

最早何を叫んでるのかわからない。

え、英語? ナンノコトカナ。そんなものこの世界にはございません。

「ヒューヒュー!!」

「けしからもっとやれ!」

「観念しろチビ!」

外部がうるさい。

「てか今チビつつたの誰だ————!!」

(其処————!?)

もつとつつこむべきところはあっただろうに。

ヒューヒュー言って煽るな! 兄さん段々目がイってきてるから!!

あとこの状況が周りにすんなり受け入れられている時点でどうなんだ。

仮にも男と男だぞ? あ、俺のこと女だと思ってたやつ堕ちろ(ビッ)

↑効果音

(ウラキ! 独り言ブツブツ言わないで! 何か気が散る!!)

「おっと。でも性別の危機がだなあ・・・」

（それよりも今は（自主規制音）の危機だ！！）

「ど、どこで覚えたんだそんな言葉！！」

何だかウラキがショックを受けているようだがそんなことはどうだ
つていい。

この監獄をどうにか抜け出さなければ！！（いつの間にか監獄扱い）
寝ている馬鹿兄貴！！（必殺の鉄拳！）

と見せかけてのエルボー。決まった。（ウラキからの伝授）
なんか獄中でおおーっていう関心の声上がる。

少しでもその声に喜んでしまった僕は負け組だろうか。

「これからどうやって出るのか考えるぞ。」

（そうだね。でもその前に。）

この男が起きてからまた何かやらかさないように足を縛る。

「おい、そんなに甘くていいのか？」

（全然動けなくするのもいいけどそうするとすっごい甘えて来ると
思うんだ。）

「おお、ちょっと前までは考えられないような冷静な分析と判断だ
な。」

だって下手すりゃ命の危機だもの。

脳とか面白い具合にフル回転してるよ。いっそ清々しいね。
・・・僕、こんなんでやっていけるんだろうか。

「多分それ人の体の自由奪いながら考えることじゃないと思うぞ。」
全くその通りで。早くここから出たい。



後に名を馳せる勇者は、この一件から注目度が上がり、その後、獄中のアイドル的存在にまで上り詰めるのである。

勇者の伝説は実にどうでもいい方向へと突っ走って行くのであった。

・・・He must have the product.

L v. 32 脱獄計画模索開始? (後書き)

He must have the product. . . . 彼に
幸あれ

ちょっとした息抜きに書いてみました。

何だかだんだんキサラが可哀相になってまいりました。(誰のせ
いだ

これからもコツコツ書いていききたいと思います。^^

L V. 33 近づき始めた虚像を

・・・どうなってるんだ、全く。



「兄さん、ここ変じゃない？」

「何がだ？」

始まりはこの一言。牢獄が変だとキサラが言ったことから始まる。

「だって、女の人が居ないよ？」

確かに。それはそうだ。

巡回してるのが男というのはもちろん、他の囚人たちの中にも女が居ない。

牢中でたくさんの労働をさせられているが、一人も女を見かけていない。

「女の人の罪人は居ないのかな？」

「・・・だとしたらすごいな。」

男だとか女だとか関係ないが、罪人が少ないというのはまたすごい話だ。

「ああん？兄ちゃん達そんなことも知んねえのか？」

何だか馴れ馴れしく他の牢の男が話しかけてきた。

（聞いてやがったのかこの野郎。）

「ここに女が居ないのは当たり前さ。」

「え？何で？」

「さあな。でも女の罪人は別の所に連れて行かれる。ま、隔離つてやつだな。」

「ふーん。すごいね。」

キサラが何やら感心している。

（何でだ・・・？）

「何ですげえんだ？坊主。」

また違う男が話に入ってきた。ここでは話が筒抜けだから仕方ないのだが。

「だって、ここ結構小さい村だから。」

「そらあな。田舎だしよお。仕方ねえや。」

「でしょ？結構田舎なのに、何で牢獄があるの？」

「「あ。」」

確かにそうだ。まだ王都や主要の都市ならば解かるが、田舎に牢獄というのは不自然だ。

「それに、ここには男の人しか居ないんですよ？女の人たちが入ってる牢獄もあるってこと？」

「そしたら、管理費に莫大な金が掛る・・・そうか！」

「でしょ？田舎なのにそんなにお金が掛る施設があるなんてすごくない？」

周りから関心の声が上がる。

というかお前ら今までずっとここに居て考えたことも無かったのか。キサラの言って初めて気づいた奴らが少しざわめく。

「でもそりゃあ都から資金援助でもされてんじゃねえのか？」

「資金援助ねえ……。お前らホント馬鹿だな。」

今度はキサラに変わって俺が答える。今回の俺でもわかる。

「この村の情勢知ってるか？」

「情勢つつたって……。俺らは他の村から送られたからなあ。」

「見ればわかるだろ。貧困してんだよ。」

人々は日夜働き続けているが、なかなか村が肥えていない。

「土地の権利は村にあるはずだから、少しぐらい村には資金が入るはずだよね。」

「ああ。仮にと土地を国が売却していたとしても、こうはならない。」

段々政治情勢的な話になってきた。

牢獄の中でまで他人のことを考えるという点では、キサラはキサラらしいが。

「つまり、誰かがこうしたってことだよね。」

「そうなるな。」

「ここは田舎なのに何で……。」

「そこまでだ。キサラ。お前はもう労働で疲れてるだろう。少しでもいいから休め。」

「うん……。」

まだ納得できないといった表情をしていたが、無理やりベットに寝かせる。

（全く、この調子だと脱獄よりも先に村の貧困の解決の方が先になりそうだな。）

キサラならやりかねない。しかも貧困解決の為に脱獄とかしそうだ。

（どこで教育を間違えたかな。）

他人の為に尽くすのも大いに結構。むしろその方がいいとさえ思う。だが、キサラの場合は度が過ぎる。

（自分のことをもう少し考えて欲しいものだな。）

他人に甘く、自分に厳しい。

そしてなにより、自己犠牲を厭わない。

何の迷いも無く、その命すら手放しそうで恐くなる。

（こいつなら、死ぬと言えば喜んで自殺するだろうな。）

同源力も、判断力も、価値観も優先順位も。

何もかもが予想外で、何もかもがキサラ自身の首を絞めていく。優しさも、純粹さも、異様な鋭さと一点においての鈍さも。

（正義感か？それとも・・・）

罪悪感か。何が彼を動かしているのか、わからない。

（どちらもあまり変わらないか。）

たとえば彼の根源が正義感であっても、罪悪感であっても。

「お前は自分のことをもっとよく考えろ。」

拭えない不安を振り払って、今はただ、ただ一人の弟のために。

◇

ゆっくりと頭を撫でてくれた手が心地よくて、キサラはすぐに眠り

に落ちた。

ゆらゆらと揺られているような感覚。

深い深い水底で、キサラは揺られていた。

(ここは・・・。)

あの人が入った場所。
今も居るのだろうか。

「ナトス、どこ？」

小さく言葉をこぼして、揺られながら堕ちて行った。
目に映るのは水泡のみ。前に見た綺麗な景色ではなかったが、こちらでもまた美しく感じた。

「君は今、どこに居るの？」

無性に会いたくなった。

誰もいない世界で一人漂うのは嫌だった。

「ナトス—————」

『会いたくなったら来る。』

それは一体いつ？ 今日？ 明日？ 明後日？
一年後？ 十年後？ それとも・・・

———もう、会えない？

「っ・・・う、・・・。」

苦しい。どうしてかわからないけれど。

辛い。今までどんなに辛くても耐えきれたのに。

（怖い、ウラキ・・・！）

呼んでも、ウラキすら来ない。

何処にも居ない。

水泡が一気に弾けた。

まるで、キサラの気持ちを写し取ったかのように。
それは、儚く一瞬で。

「ナトス・・・————ッ！！」

息もできない程に。

（夢なんだろう！？）

だったらせめて。

「ナトス！ナトス。」

あの人に会わせて。

It realizes it.
それしか望めないのだから。

L v. 33 近づき始めた虚像を（後書き）

I t r e a l i z e s i t . . . 叶えて

少しずつではありますが、魔族の陰謀に関わり始めてきました。
魔王様とキサラの接触が多くなると思われます。

．．．キサラ君、頭は良くなっしてほしい．．．。

L v. 34 返事の無い会話

どうして、あいつにばかり……。



キサラが眠りについて、テイザは牢の中を視線で見まわした。
またあの男が来るかもしれない。

（あいつが此処に居るってことは少なくとも此処には何かがあるな。
）

そしてその中に二人だけで放りだされてしまった。

他の四人の行方は知れない。

故に不安が渦巻いていた。

（誰が何処にいるかすらわかれば……）

少しは脱獄をするのが楽になるかもしれないというのに。
仕方がないと言えば仕方がないが。

「テイザ。」

「……ウラキ、だよな？」

「ふーん。なんだ、普通にわかるんだな。」

「気付かれたくなかったら呼び方に気をつけるんだな。」

静かに後ろに近づかれていたようだ。
すぐ後ろから声が聞こえた。

「下僕その1。」

「いい加減その呼び方やめろよ。」

「大事な話だ。奥へ来い。」

「……了解。」

今目覚めたばかりでこの真剣さ。
相当大事なことだろう。しかし

（目覚めたばかりで大事な話とか……。）

嫌な予感しかない。



「今なんつった。」

「キサラが起きない。」

そりゃあそうだろう。お前が出てきてるんだからな。

「どういう意味だ。」

「言った通りだけど。」

話進めるつもりあんのかこいつ。

「呼んでも返事がないんだ。」

「……なんだと？」

「深いところまで潜ってみた。でも、キサラがどこにもいない。」

意味がわからずにいるテイザに、ウラキは説明を始めた。

「本来、人間は一つの問題につき一つの肉体っていうのが基本。
単刀直入に本題に入っていた。実にあっさりと。」

「それでも、俺たちは例外。テイザミたいな一つだけの精神じゃない。」

「確かにそうだな。でも、それがどうしたんだ。」

「俺たちは精神が二つある分、深層心理やらなんやらが複雑なんだ。」

まずはそこからだと言わんばかりに、説明を続けた。

（俺の質問に答える気は・・・あるのか？）

でも普通に受け答えはして欲しい。確かに説明は必要だけどな！

「俺たちは表面上の心を共有できる。」

「は？深層心理だっけ？が複雑なんじゃないのか？そしたら・・・」
「だからこそだ。単純すぎたら駄目なんだ。」

へー。意味わからん。その辺の説明はいいですマジで。

「つまりだ、俺たちは考えを少しは共有できる。」

「本当か！？すごいな！でも、どうやってすんだ？」

「会話だ。」

「会話か。」

結構普通だな。つまらん。

「お前は一体俺たちに何を求めてるんだ。」

「ユーモア？」

「んなもん要らんだろ。」

同感。あいつにあるのはあの性格だけで充分。

「話がそれた。戻すぞ。」

「どうぞ？」

早くしろ。今の状況が全然わからんだろうが。

「俺たちが会話をすると、俺は精神世界と呼んでいる。」

「まんまだな！」

言った途端に頭に拳を叩きつけられた。

「そしてその精神世界を見ても、無理をしてキサラが居そうところを探しても」

「何処にも居なかったんだな？」

ウラキの言葉を（憶測ではあるが）繋ぐ。

そしてウラキはテイザの言葉にうなずいた。

「で？ したら何がまずいんだ？」

「・・・少しは脳を働かせたらどうなんだ。使わないと腐るぞ。」

「腐るってオマエな。」

「生モノだろ？」

うまい。じゃなくて、結局何なんだ。

「今、俺の体に精神、つまり人格が一つしかない。」

残酷な一言。本来の形？ だからなんだ。

それは・・・つまり。

「キサラが・・・いない？」

体に。そこに。顔は、体は、そこに居るのに。

大切な弟。家族であり、また・・・

愛しい人でもあり。



ひらひらと蝶が舞う。

美しい翅を閃かせ、青空を背に弧を描いて。

その景色を優雅に楽しみながら、男は椅子にもたれかかった。

「そろそろだろうとは思っていたのだろう？」

女が何かを探るように、男に尋ねた。

「さて、何のことか。この年では物忘れが激しくてね。」

若い男が、その容姿にそぐわない物言いをした。

それに合わせて女の表情が強張る。

「とぼけるのが得意になったな。」

しかし、女も表情とは反対のことを述べた。

「ほう、わかるのか？」

「お前の言うことを真に受けていてはこの地位を手にもすることもできなйдらう？」

少しだけ得意そうに女が言った。

「確かにそうだな。でもそれだけではないだろうに。」

「まるで全てを知っているかのような口ぶりだな。」

「知っているとも。」

「・・・自信があるのか？」

「まあ、そういうところか。」

その言葉に反応したのか、女が眉根を寄せる。

「その自信はどの程度だ。」

「大したことは無い。ただ地上でこの知識に勝るものは居ないと自負している程度のこと。」

それがどのような意味を持つのか、目の前の男は理解しているのだと女は確信した。

しかし、圧倒されている場合ではない。

「無駄話は終わりだ。・・・早くしろ。」

「やれやれ。今生の者は随分とせっかちになったものだ。」
渋々と立ち上がり、男は女を別の場所へと案内した。

「では、魔王の居場所を特定しようか。」

男は小さく笑ってから、女に言った。



虚空に揺らめく光はとめどなく輝く。

たとえばその身が滅びようとも、長い時間をかけ確実に届くと信じて。一瞬の光がいつか届くことを願い、瞬き、消えていった。

「もうすぐか。」

I t m e e t s .

知らない方が、幸せだというのに。

L v. 34 返事の無い会話（後書き）

I t m e e t s . . . 出会ってしまおう。

サブタイトル矛盾しまくりですね。

あ、最近更新していなかったにも関わらず、アクセスがあって嬉しいです。

本当にありがとうございます。^^

L v. 35 無力な子供に生贄を

少しくらいなら、いいと思う。



望みをもつことは、その人間に良くも悪くも影響を与えるもので。欲望。それを形にしようと数多くの人間も魔物も魔族も、あらゆる試みをした。

しかし、手に入れば手に入れる程、それは遠退いていくもの。

それを知りながらも尚、手に入れようとしている愚かさは誰に似たのだろうか。

「キサラ。」

水底の世界で、彼はその名を呼んだ。

すると、とても嬉しそうな顔をして、キサラは笑った。
少しだけ胸が痛くなったのは、気のせいだ。

「ナトス!!」

名前を呼ばただけで嬉しくなったのは、気のせいだ。

「どうした? 大丈夫か?」

魂ではあるが、キサラの顔色が悪い気がした。

具合が悪いように見えるのは気のせいではないだろう。

「何でもないよ。」

「そうか・・・無理はするな。」

辛そうな顔を浮かべながらも、大丈夫だと言った。

心配、ではある。が、しかし。

それ以上に、嬉しかった。

「ナトス。前に初めて会った時、言ったよね？僕の話聞いてくれるって。」

頼られるということが、自分が彼の力になれるということが。

そして相変わらず、彼の瞳には肩書など微塵もない自分が映っていた。

「ああ、言ったな。どうした？」

「・・・僕、今捕まってるんだ。」

「・・・どうしてだ？」

物凄く心当たりがある。

むしろ捕まえるように指示を出したのは・・・自分だ。ナトス

（どこまで運が悪いんだ？）

呆れを通り越してむしろ感心する。

今もそうだが、どうしてこうも危機的状況に遭遇しやすいのだろう。それもこれも運命なのだろうか？

「逃げた方がいいのかな？」

「逃げたくないのか？」

話が見えてこない。キサラは何が言いたいのだろうか。

「僕が代わりに罰を受けたら、捕まるはずの人は助かるよね？」

「・・・そんなことを考えているのか？」
(イライラする。)

「どうしてお前が罰を受ける必要がある。」

「僕は誰かの役に・・・立ちたい。」

真直ぐに、ナトスを見据える。

(――――・・・イライラする。)

「キサラ、それは役に立つとは言わない。」

「わかってる。わかってるけど、ナトス。」

俯きながら、キサラは言葉を紡いだ。

「他に、僕にできることなんてないんだ。」

「自己犠牲がか？」

今言ったことを、すぐに後悔した。

キサラが、震えている。



(僕、約束守るからね。)

「キサラー。」

泣き声が森に響く。

光の差し込まない森は寒かった。

馬車が止められたのはつい先刻のこと。

シーラ、タスラ、シュヒの三人は他の三人のおかげで連れて行かれなかった。

「無銭飲食者御一行様と間違えられるなんてね。」

「でも僕たち何もしてないよね？何で間違えられたんだろ。」

「わからないわ。どんだけ似てたのかしら。」

タスラとシュヒの二人はあくまで冷静に話を進めていた。
後ろでは相変わらずシーラが泣いていた。

「さて、行くわよ。二人とも。」

シュヒは座っていた切り株から静かに飛び降りた。

「フアリオンが言っていた予言者を探すしかないわ。」
静かに、シュヒが言った。

これから何をすべきなのか、全てを知りたいわけではない。
少しでいい。予言者の力を少しだけ借りて、導いてもらおう。
きっと、それが今の最善の策。

「キサラは？置いて行っちゃうの？！」

「シーラ……。」

二人とも、シーラの気持ちはよくわかった。

ぶっちゃけ兄はどうでもいいが、まあ、助けてもらったのだ。

一応心配はしている。が、キサラは眠ったままであった。

意識が戻っても戻らなくても、最悪の状況に置かれていることは変わらない。

「シーラ、私たちが今キサラの所に行っても助けることはできないんだ。」

タスラが、拳を握りしめながら言った。きっとタスラも悔しいのだろう。

「だから、どうすればキサラを助けられるか、教えてもらいに行くんだよ?」

安心させるために、笑って見せた。

しかし、その笑顔はぎこちなく、すぐに不安そうな顔になってしまった。

「大丈夫かどうかなんてわかんないけど、僕はキサラをちゃんと助けだせる方法が知りたい。」

不安そうな顔で、まだ幼いけれど、はっきりと。

握りしめた拳は、爪が食いこんで、血が溢れだしていた。

「キサラが捕まったところは危険じゃないよ? でも。」

「悔しい、わよね。」

何もせずに、ただ守られて。

大切な「家族」は連れて行かれてしまった。

「僕、まだ何もできないけど。」

小さくて、子供で、我がまま。いつも困らせていた。

「僕をキサラは弟だって言ってくれた。・・・半獣なのに。」

父親にも、母親にも「家族」と言ってくれなかったのに。

「僕すごく嬉しかった。だから、キサラに何かしてあげたい。」

今回だけじゃなくて、これからも。

今度は、ちゃんと笑えた。泣いたら、キサラを心配させてしまう。

「タスラ……。」

「ね？行こう。シーラちゃん。」

「……うん。」

置いていくのは嫌だけど。

何もできないで泣いているのはもつと嫌だから。

「危険じゃなくても、キサラが閉じ込められちゃうのは、嫌だもん。」

「そうね。……行こうか。」



「ダヴェラって男について、教えてもらおうか。」

「それがキサラを助けることに繋がるのか？」

「さあ、どうだろうな。その男の情報次第だ。」

誰にも聞こえぬように、会話を続ける。

「ダヴェラ……奴は、魔族だ。」

It is already slow.

牢の近くで、静かに男は笑んだ。

L v. 35 無力な子供に生贄を（後書き）

I t i s a l r e a d y s l o w もう遅い。

一気に進みました。（気分だけ）

書きたいことが在り過ぎて色々と削りました。（意味なし

．．．次はコメディ―目指します。（予定）

L v. 36 悪魔な天使の戯言？

ちょっと待ってくれないか。

◇

「どうも、不束者ですがよろしくお願いし「ねーよ？」
綺麗な顔立ちの少年の言葉をテイザが無理やり遮った。

「お前一体何だ？」

「ここの囚人ですけど？」

「んなこたあ見りゃわかる。」

「じゃあ何で聞いたんですかー？」

M U ・ K A ・ T U ・ K U ・ Z O ☆

「うあああ、めくるめくキサラとの二人で狭い監獄生活がー！！」
「何言ってるんだお前は！！」

最早人外の言葉を口走っている（強制認識）変態な男にとりあえず
回し蹴り。命中。

「おー」と歓声を上げる他の牢の囚人たち。

（見せもんじゃねえぞ。）

でもちよつと嬉しかったり。（余に言うツンデレ）

「お兄様と呼んでいいですかー？」

「ダメレ。」

（マシな奴が来たかと思えばこいつも変態の類か?!）

「やだなー。純粹に尊敬しているだけだっぺー。」

「誰がタメにしていっつった。」

「いいじゃーん？」

お前緩い！っていうか心読むな！！

「心っていうか表情ですー。」

「うわキモッ！」

「えー？やだなー。こんなにプリティーな僕にキモイだなんて。」

（また変なのが来たなこれ。）

フラグ。どこからかそんな言葉聞こえてきたけど無視だ無視。

何フラグだ。死亡フラグか？

「キサラの体に寄るな！！！」

「うわー。あんた体目当てですかー？」

「・・・Yes！」

「死ね！！！」

蹴りをくりだしたが、避けられた。

さすがにこういうタイミングで攻撃してくるかぐらいはわかるよう
だ。

「だが甘い！！！」

「ぐはあ！」

誰が一発しか攻撃しないと云った？

「戦場ではそういう油断が命取りだ。」

「くそう……。だがキサラ（の体）なら大歓迎だ。もっとやれ。」
「何処が戦場ですかー。それと変態自重しろー。」

変態自重賛成。

（……さっきまでのシリアス空気はどこいった。）

多分この変な少年がこの部屋（正確には牢）に入ってからだろうか。

「おい、それよりちゃんと考えろよ？（キサラのこととか）」

「可愛いキサラの為なら喜んで!!」

「ダメレ無駄イケメン!」

「無駄とは何だ！この美貌でいつかキサラを酔わせし「自重しやがれー。」

ナイス少年。

（なかなかやるな……。すごい棍捌きだ。）

性格には棍ではなかったが、素人とは思えない動きだった。

しかしさることながら変態の動きも……。

「危ないな少年。それとお前遠慮というものを覚えろ。」

「てめえの言うことは聞きたくねーですー。」

不意打ちにも関わらず、あの変態は避けた。

「それと僕は少年じゃなくてジェリエですー。」

「「言いづらっ!!」」

ハモった。するとジェリエが不貞腐れたような顔をした。

「悪い。で？ジェリエ。お前何で捕まった？」

「人の罪状聞く前に自分の罪状言えって習いませんでしたかー？」

「そんな初対面の自己紹介みたいな・・・。」

「たとえ解かりづらいぞ。」

「・・・。」

しばらくテイザが何か言いたげに口をパクパクさせていたが、やがて虚しく口を閉じた。

次いで目を伏せた。かと思えば見開いて「とにかく！」と大きな声を出した。

「俺はテイザ。こっちはウラキ。俺らは無実。でも一応罪状は無銭飲食者ってことになってる。」

「へー。無実ですか。奇遇ですねー、僕も無実ですー。罪状は詐欺者ー。」

「詐欺師じゃなくて？」というテイザの言葉をジェリエはスルーした。

「詐欺って・・・どんな罪着せられたんだ？」

「それがですねー。恋人に裏切られたんですー。」

「・・・え？」

意外と深刻そうだ。無神経に聞いた自分を恥じた。

「僕が女じゃないってことに勘づきやがりましたー。」

「・・・は・・・？」

いきなりジェリエは思い出したように舌打ちをした。

「チッ・・・あと少して玉の輿に乗れたのに・・・!!」

「おい待てコラ。」

（深刻な話じゃなかったのか・・・!?!）

「そいであとの遺産でも吸いつくしてポイっと。」

「お前悪魔か？」

顔は天使のように可愛らしいのに。

男と言っても女と言っても通じるような両性的な顔だ。

「えー？天使でしょ、どう見ても。」

「見た目だけな！」

無理。無理無理無理。

変態と悪魔と同じ牢だと？

（無理だろ・・・）

誰かここから俺を出してくれ。

（キサラ・・・。）

カムバック。そいでバトンタッチ。

このままじゃ精神状態危ういよ。

三日目。早くも死にそう。

早く無実を証明してここからでなければ！！



その頃、森付近。

「ここは何処！？」

「「えゝ！？」」

シーラ、タスラ、シュヒの三人は道に迷っていた。

「でも、考えてみれば僕ら予言者って人の居場所知らないよね？」

「あゝ。」

「ちょ、シュヒちゃんどうする？」

あんなに意気込んでいたが、さすがに意気消沈といったところであった。

「しかも特徴とか知らないし。」

「シュヒちゃん、フアリオンさんから何か聞いてないの？」

「全然。あの人秘密主義者なのよ。」

「何それ。」

先行き不安だ。



執務をいつも以上に早く終わらせて、主人探しを初めて早二時間。未だ自分の主人は見当たらない。

「全く……。」

ため息はもう何十回繰り返したのだろうか。いつの間にかディジラウの姿も見えない。

・ ・ ・ ・ You are not seen.

姿も、その意図すらも。

L v. 36 悪魔な天使の戯言？（後書き）

You are not seen. . . . 貴女も見えない。

登場人物がまたしても増えてしまいました。しかも男。

女の人が少ない 今のところ四人 だど？

（男は九人。ナトスは除く。）

バ、バランスが悪い （男女の人数）

L V. 37 恐怖に駆られたまま（前書き）

シリアスです。

L v. 37 恐怖に駆られたまま

何故、簡単な一言に臆してしまうのだろうか。



『愛しているぞ。』

そんなに軽々しく言わないで。
心から言って。見せつけて。

誰のモノにもならないで。・・・傍に居て。

なのに。拒絶して、嫉妬して。

いつも勝手な感情で動いているのだと、本当は知っている。

(それでも・・・。)

貴方が、たまらなく愛しい。

言われる度に、不安になった。

――・・・失うのでは、と。

安心したような表情を見せられて。

そうして、私は自惚れていく。

そうして、私は貴方に溺れていく。

貴女と共に居ても良いのだと。

全てが否定されることではなかった。

私は側近。彼の隣に在るべき存在。

しかしまた、私が居なくとも代わりはいるのだという事実もあり。

「ディジラウ・・・ッ。」

小さく、もう一人の側近の名を呟く。

嫉妬。今渦巻いている感情の正体はこれしかないだろう。

「魔王、様——・・・。」

何故。何故、何故。

どうして、期待をさせるようなことをする。

どうして、何も言わずに現れては消える。

どうして、そんなに寂しそうな顔をしている。

（嗚呼、嗚呼・・・。）

ぐるぐると廻る思考回路は、疑問符を増やしていくばかりで。

拭えない不安と嫉妬の怒りが、彼の自由を奪う。

「どうして、何故。」

口を開けば、それしか言葉がでてこない。

使い物にならない頭と、壊れたカラクリ人形のように同じ言葉だけを発する口。

嫉妬と自分に対するいらつきは徐々に心だけでなく体までも蝕んでいった。

跪くべき御方。ただ一人の主君。

わかっている。わかっているのに……。

恋情を向け、愛憎に蝕められる毎日。

いつしか抑え込むのに必死になり、体を酷使していった。

貴方は、貴女は、一体今何処に居るといいうのだろう。

「もう……私は……。」



「僕、僕は……。」

『自己犠牲』突きつけられた言葉は、今まで自分が目を逸らし続けていたことだった。

何を言っているのかわからない。どう説明すればいいのか、わからない。

無意識のうちに、体がガタガタと震える。

「キサラ……。」

（こういうとき、私は何と言ってやれるだろう。）

言えは言うほど傷つけてしまう気がする。

言葉とは、何より鋭い諸刃の剣である。

何より、キサラの姿を見たナトスの方が傷ついた。

(・・・やはり、私は無力だ。)

弟にすら、何もしてやれない。

自分が利用価値を見出した目の前の少年すら、壊してしまいそうだ。

「すまない。そういう意味ではなかった。」

「・・・何、が・・・？」

戸惑ったように、言葉を詰まらせながら、キサラは聞いた。

「少し・・・苛立っていた。」

「そんなことない。僕が・・・悪いんだ。」

「キサラ・・・？」

明らかに、様子がいつもと違った。

いつもは笑顔で明るいののに、翳りの様なものが見えた。
まるで自分が持っている翳りと同じ様なものが。

(・・・！)

「僕は誰かのために、生きなくちゃいけないんだ。」

「どうしてだ。それは・・・」

「僕は、お父さんとお母さんを・・・。」

(――――イライラする。)

またあの謎の不快感が心を浸食していく。

怒りと共に悲しみが込み上げてくる、複雑な感覚。

一緒に居るのに、また会えたのに。

(どうして他のやつの話ばかりする?)

イライラする。何よりも、誰よりも。

目の前に居るのは自分なのに、他の誰かの心配ばかりしている。

離れた時間は決して長くはなかったけれど。

何故だか、早く会いたいと思っていたのに。

早く声を、姿を、求めてきたのに。

(それは・・・)

――想っていたのは、私だけか？

「だから、僕は誰かのために・・・」

「やめろ・・・!!」

短期間で、二人は互いに依存した。

人と人との関係は時間ではない。

だが、彼らには圧倒的に時間が足りなかった。

「他のやつのことなど、聞きたくはない！」

水泡が、一際大きく弾けた。

◇

この至福の時間が夢幻ではないかと。

触れようと手を伸ばしたら、泡沫の様に消えて無くなってしまうの

かと思った。

触れようとしたら消えてしまう幻なんだと。
届かないものなんだと思っていた。

自分が作り出した幻影なのだと。

でも、違っていた。

「ナトス・・・・・・？」

（君は・・・・・・。）

「本物？」

ナトスに会いたいという願望をくつきりと映し出した夢じゃなくて？
望むものを都合の良いように自分が作り出した幻影じゃなくて？
君の存在も、感情も、思考も。全部本当に君なの？

（あ・・・・・・。）

急に、ウラキのことを思い出して悪寒が背筋を駆け上った。
仮に本物だったとして、彼にはもう一つの可能性があったのだ。

（ナトスも、ウラキと同じ・・・・。）

自分が逃げ出す為に作り上げたもう一つの人格なのでは？

（どうしよう、どうしようどうしよう・・・・。）

初めて会ってから間もないのに、何度も会いたいと思っていたのに。
自分が頼ってもいいと感じた初めての他人だったのに。

彼なら、自分自身を変えてくれるのではと、共に居るべき人間では
思っただのに。

（ナトスも、僕だったら）

ぐりやりと水底の景色が歪んでいった。

まるでキサラの心を写し取ったかのように、不安定な世界を作り上
げていく。

（嫌、嫌だよ。）

——好き、なのに。

こういう感情での好きだとか、そういうのはまだまだ不透明でわか
らないけれど。

もしも、彼が、彼女が、自分自身であったのなら。

（ナトスが・・・僕だったら・・・！）

その気持ちさが、消えてしまう。

不安定なキサラの姿を見て、彼はどのように思っただろう。

水面が揺れて、彼らは空の下へと姿を現した。

L v. 37 恐怖に駆られたまま（後書き）

今回英語は無いです。

うん。次回こそは入れる！（何の話

L V. 38 意地悪な予言者

今何が起こっているのか、目の前の人物は的確に理解しているのだろうか。

◇

「さて……。君の知りたいことは全て予言してやったはず。さつさと帰れたまえ。」

面倒くさそうにわざと目を細め、男は精一杯邪魔だとアピールした。

「何を……。！そんなことが信じられるものか！！」

「信じなければいいだろう。」

「なんだと？！貴様！！！」

「信じろなどと誰が言った。」

キツイ口調で男が言い放つ。

明らかに彼が纏っている雰囲気が変わった。

変貌ぶりに女が思わず後ずさる。

男は終始笑顔でいたものの、その目は笑っていなかった。

「予言だなんだと騒ぐ者がおるが鵜呑みにしたのは貴殿だ。貴殿は思考を巡らせた末、吾を訪ねたのであろう。」

言い返す隙を与えず、男は続けた。

「吾として自分の申しが予言だと信じたことなどない。偶然当たっただけに過ぎん。」

「何をいい加減なことを！」

「いい加減なものか。」

そこで初めて、男は女の方を見た。

「吾の予言とは、殿から得た情報と吾の知識を掛け合わせ導き出したもの。」

「な、何だと……!？」

「吾の予言が当たったのは、偶然。以前の様な“視る”力が失せたのでな。」

「……!！」

(こいつは……!！)

さも当然のように言っているが、偶然というのは確率的にはとても低い。

そして彼の言った情報、今回「得た情報」は、とても少量であった。その少量の情報から予言を導き出すための知識。

知識は膨大にして正確であることは、予言者と言われていることから容易に理解できた。

「お前は誰だ？」

「誰、とはまた無粋なことを。」

くつくつと喉の奥を鳴らしながら、彼は答えた。

「世の中には知らない方が幸せなこともあるのさ。」

(そう……魔王^{かれ}のように。)

知らなければ、彼は地上に出てくることも無かった。

孤独であることに何の疑問も抱かずに死んでいくことができたのに。

（今生の者はどうも、甘いところがあるようだ。）

悪い癖だ。少しでも関与しては今まで水面下で動き続けていた努力が水の泡だというのに。

むしろ目の前の女に接触した時点で手遅れな気もするが。

「ディジラウ、と言ったな？ 貴殿の主はもう手遅れだ。」

「戯言を……！！」

必死の抵抗。今はそれをするしかない。

知識を有し、過去には“視る”ことができたもの。

高等な者どころでは済まず、強大な力をその手にしていたであろう、目の前の人物。

そしてそれが言っている「予言」は半端ではない信憑性があり。

「戯言、か。」

いっそう楽しげに、予言者は告げる。

「貴殿は自分には魔王しかないのだと思っているだろう。」

「何を……当たり前のこと。」

必死に、それだけをディジラウは答えた。

「予言だ。貴殿は彼ではなく、別のモノを――――・・・。」

その先の言葉は、まだ彼女には早過ぎた。



「予言者あ？」

「そうそうそうです。知りません？」

情報収集をしながら移動することとなった三人は、牢獄から離れたところに滞在していた。

それが精一杯の拘束防止策。つい先日連行された仲間を思いながら、情報収集を続ける。

「あー、知らないんらしいんです。ええ、今手持ちがあまりないので。」

店の店員に話を聞いたのがまずかった。

しばらく「絶対に買うまで離さない。」と言われて、言い訳を並べ続けた。

最後まで店員も店長も（店長は後から来た）しぶっていたが、笑顔でお断りしたらさすがに引いてくれた。いや、その引くじゃなくて手を引く、の方の引く、よ？

勘違いした方、怒らないんで手を上げて・・・上等だこのヤロー！！

・・・コホン、少々取り乱してしまいましたわ、私ったら☆

（ってこんなコント染みたことしてる場合じゃないわ。）

それも一人で。ああ、いつもならキサラが真っ先にツツコミを入れてくれるのに・・・。

どこまでボケても止めてくれる人がいないから結局自分で止めるしか無くなるのだ。

そこまでしないでボケやめろとかボケたって面白かねーよとか思っ

たやつはそこに土下座しなさい♪正座じゃないわよ？土下座よ、土・下・座☆

「とんだタイムロスだわ……。全く。」

でもここでウジウジしている場合ではない。

一瞬凹んだシュヒはキサラの笑顔を思い出し、勢いよく立ちあがった。

（そうよね。頑張らなくちゃ！！）

あの心のオアシス（キサラ）を手元に取り戻すためなら一人での情報収集にも耐えられる。

・・・やはりあの二人が目立つという理由で情報収集の役にあまり立たないのは痛かった。

数日間であまり遠くに逃げる事ができていない。

（もしも追手が来たら……。）

キサラを助け出すことすらできずにただ捕まってしまう。

それだけはなんとしてでも避けたい。

（あーもう！どこの馬鹿よ！！無銭飲食なんてしたの！）

顔も性別すら知らない相手に怒りをぶつけながら、シュヒは二人が待つ森の中へ戻って行った。

◇

予言者が導くは未来への希望を抱く者。

予言は多くの不幸を招き、他の者に至福をもたらした。

必ずしも当たらないからこそ人生は面白いという言葉信じず、予

言のみを信じた愚かな者を何度も見てきた。そしてそれと同時に彼の予言が当たらなかったことは今まで一度も無い。

「はて・・・何処で道を誤ったのやら。」

「さあ？ 貴方の力の使い方ではありませんか？」

「・・・戻ったか。御苦労であったな。」

「なに、大したことはございません。」

この男も、また――――・・・。

その人間の内の一人に過ぎず。

It is indescribably trivial.

抗って見せろ。

その明確な意思で。

L v. 38 意地悪な予言者（後書き）

It is indescribably trivial. . .
・何ともつまらない。

予言者予定よりなんか・・・いえ、なんでもございません。
今回はメインは居ません。最初はメインオンリーだったんですけど。
削りまくってこの結果です。予想外（オマエ

次回こそはメインを・・・！！

L v. 39 それでも私は・・・

青く美しい天の下で、小さく小さく、無駄だとわかっていながらそれでも抗い続けてきた。



「キサラ・・・!!」

ナトスが声を張り上げるが、キサラには聞こえていない。

(キサラ・・・。)

身体うつつわが無いからか、キサラの負の感情が直に伝わって来た。恐怖と、不安と、一番強いのは・・・悲しみ。何が彼を悲しませているのか、ナトスにはわからない。

キサラが辛そうな顔をして、ナトスを見ている。

初めて会った時の微笑とは真逆の表情。

悲しみの満ちた表情を見ているのはとても苦しかった。

「キサラ・・・？」

(これは、何だ？)

初めて見る。悲しみの象徴。何故だか胸の苦しみが強まった。

(あれは・・・。)

涙。キサラが、キサラの魂が、泣いている。

悲しみが一際大きくて、涙を流している。

「ナトス、ナトス。」

存在を確かめるように、彼が自分の名前を呼ぶ。
空に浮かぶ太陽と月が、彼の姿をくつきりと映し出して。

――・――・綺麗だ。

幻想的な景色もそうだが、その中に浮かぶその人が。
悲しみの涙ですらも、太陽と月に照らされて煌めいた。
太陽に照らされれば虹のように、月に照らされれば宝石の様に輝いて見えた。

（そうか、キサラは。）

天空の波動を持つ者。

自分とは、相容れぬ存在。

・・・相違の者。

（だから、どうしたというのだ。）

もう決めていたではないか。

この少年を利用すると。

今までの様に、利用するだけして、捨てればいい。

自分に跪いてきた者たちの様に。

それなのに。

キサラに向かって空を歩み続ける足を止めることができない。

自分だけ現実の世界に戻ることもできるのに。

暗示をかけて、このキササを人形にしてみればいいのに。

（どうして。）

自分が理解できない。

「ナトス。」

そうだ、お前が、私の名前を呼ぶから。

泣きながら、私が必要だと言うから。

「ナトス・・・。」

お前が、称号を呼ばないから。

お前が、私に居場所を与えるから。

普段アリアスにしているより優しく、壊れないように。

大事に、大事に。伸ばされた手を掴んで。

引きよせて、抱きしめた。

「大丈夫だ。私は、此処に居る。」

安心なんてできるはずもないけど。

血塗られた道を歩んで、生まれたその時から血で汚れてきた手。

その汚れた両手で美しいモノを手に入れたいなんて、我がままだけれど。

血で汚れた両手で掴めるものが、たとえたった一つしか無いとしても。

私は何の迷いも無く、彼を汚してでも手に入れる。
私は何の迷いも無く、玉座も名誉も称号も捨てる。
私は何の迷いも無く、お前が居るその場所に行く。

それが私に破滅しか与えないのだとしても。

（可笑しな話だ。）

利用しようとしていたのに。

用済みになれば捨ててしまおうと思っていたのに。
捨てるのは彼でなく、自分自身の全てなどと。

「戻ってこい。キサラ。」

その言葉に反応したように、キサラの瞳が揺れる。

ゆっくりと、ナトスはキサラの頭を撫ぜた。

一つだけ不満があるとすれば、彼に触れている感触が無いこと。

（・・・つまらんな。）

人間の体温は魔族よりも高いという噂が本当なのか確かめたいのに。
ふわふわしているキサラの髪は触ってもふわふわしてるのかとか知
りたいのに。

少しだけ、ナトスには心の余裕ができてきた。

◇

「ナトス、ナトス。」

（涙が止まらないよ、ウラキ。）

ナトスも、ウラキみたいに僕から生まれたの？

（お願い、答えて。）

ウラキの名を呼んで、彼が現れるのを望んだ。
きっと、彼なら何か知っている。

（ナトスは、僕なの・・・？）

勘違いで終わらせて。

（もしも、僕だったら・・・！）

違うって否定して。

ナトスは僕じゃないって。

（でも、ナトスに聞いたら。）

ウラキの存在をもしも知らないとしたら。

何故生まれたのか、絶対に聞かれる。

――・・・知られてしまう。

（駄目だ、そんなの。）

ウラキがまた思いだしてしまう。

キサラの口からは名前が零れる。

目の前にいる彼の名を。

（きっと、ナトス、呆れてる。）

いきなり泣き出して。

混乱している僕をみて、ナトスはどう思っているだろう・・・？

（知りたくない！）

考えたくないのに、最悪なことばかり考えてしまう。

変な奴だと思っているかもしれない。

面倒くさいと思われているかもしれない。

それとも、彼が自分だったら。

全てを見通して、楽しんでいるのでは？

自分に見切りをつけて消えてしまうのでは？

二度と会えなくなってしまうのでは？

「ナトス。」

そんなことないよね。

「ナトス・・・。」

君は君だよ、僕じゃないよね。

――・・・でも。

どんなに自分で否定しても、次から次へと不安がでてくる。

ナトスを疑ってしまう自分が、何よりも悲しかった。

それをナトスが知って、嫌われてしまうのが恐くて仕方が無い。

無意識のうちに、キサラはナトスに手を伸ばす。

無意識なのに、心のどこかで振り払われるのではないかという不安感が渦巻いた。

どうか振り払わないでという望みすら存在していた。
だが、キサラの感覚は麻痺しており、そんな自分に気がつかなかった。

(僕は……………)

その先の言葉が出て来るのを遮るように、ナトスはキサラの手を掴んで、引き寄せた。

「大丈夫だ。私は、此処に居る。」

(……………本当に?)

小さく、震える。どうしてか、わからないけど。

「戻ってこい。キサラ。」

その言葉に目を見開いて、キサラはナトスの腕に落ちて行った。

I s n o t i t a l i e ?

貴方に問おう。

L v. 39 それでも私は・・・（後書き）

I s n o t i t a l i e ? ……それは、嘘ではありませんか？

サブタイトルは魔王様目線です。

精神状態が不安定なキサラ君とそれを心配する魔王様・・・。
ベタとか思っちゃったら負けです^^

L v. 40 ペテン師の誤算

わからないことなんて、世の中には腐るほどある。



「・・・っ!!」

「ど、どうしたウラキ。」

異変に気がついたテイザがウラキに駆け寄る。

「どーしたんですかー？」

昨日入獄してきた魔性の女（正確には男）ジェリエが全然興味無さそうに聞いてきた。

というかぶっちゃけ興味無いんだろう。うわ、マジうぜえ。

「あ、そーそー、変態に昨日から聞きたいと在ったんですけどいいですかー？」

「五分で済ませろ。」

「いやそんなに時間かけるのかよ。」

おっと、思わずツツコミを入れてしまった。
結構キツいの。・・・ブラコンめ。

「そこの苦しそうにしてる女男はウラキっていうんでしょー？」

「誰が女男だ！どっちかというとお前の方が女男だろうが!!」

「やだなー。僕は天使ですー。それと今アンタじゃなくてこの変態に話しかけてるんですー。」

「ダメレこの悪魔。っーか本物の悪魔よりお前の方が悪魔らしいぞ

？
」

「うわームカつきますねー。その言い方ー。」

だるだると何だか話が脱線していった。

とうかそれが二人の策略。

あまり牢獄の怪しい奴には個人情報を含ませない。

今まではこんな感じで話を脱線させれば楽に相手は何の話をしていたかなど忘れる。

が、今回はそこまで楽ではないことは言うまでも無い。

「で、話それましたけどー、変態さんそのいつのこと何度かキサラっ
て言いましたよねー？」

ダルそうな顔をしながら結構周りのことはよく見てるし聴いてる。
詐欺をするだけあって、会話には気を配っている癖が無意識のうち
についたとみられる。

（厄介だなー。さすがに。）

テイザは心底ため息をついた。

「あのなー、誰にだって間違いはあるもん・・・」

「や、べ・・・テイザ・・・」

「そうさやべえ・・・て、え!？」

ウラキが苦しそうにしてしゃがみこんだ。

何だか呼吸が荒い。顔が真っ青だった。

（もしかして、病気か？）

衛生面では問題が無いように見えるが万が一、ということもあるか
もしれない。

「おい、誰か看守――――。・・・。」

裾を引っ張られ、言葉が途切れる。

驚いてティザはウラキを見た。

「大丈夫、だ・・・あいつ、が、帰って来た。」

「ほ、本当か?!」

それは喜ぶべきことだ。だが。

「何でお前にダメージがきてるんだよ!!」

「わか、んね。俺そういう勉強してねーし。」

「どけこの変態!」

ティザを押しつけてジェリエが前に出た。

「火。」

「はいどうぞ。」

「うええええええええええ!」

ティザが奇声を発した。

火が何で必要なのかとか本当に火が出てきたとかそんなこと大した問題じゃ無かった。

「フアリオン!」

何故此処に居るんだとばかりの視線を投げかけたが、なんか叩き落とされた。

あー、視線は物理的には叩き落とせねえとかつまんねえこと考えんなよ?

(・・・こいつ、やっぱし嫌いだわ。)



暫くして、ナトスは彼の帰るべき場所へ彼を送り出した。
壊れてしまわないように、優しく、優しく。

まだ彼を腕の中に留めておきたいという願いは無理やり押し込んだ。
そうでもしないと自分はきつと、彼の魂をどこかに閉じ込めてしま
いそうだから。

「もう自分から体を抜け出すな。」

キサラは世に言う幽体離脱をした。

自分も似たようなことをしているが、キサラ程危険ではない。

ナトスは自身の魔力により魂を包み、“外”に出ているが、キサラ
は違う。

自分の強い意志で半ば無理やり体から抜け出した。
体へのダメージは予測するまでもなく大きい。

そして何も纏わずに“外”へ出てきた魂は傷つき易い。

キサラが精神的なダメージを受け易かった理由はそれだ。

そこまでの意志が何なのか、詳細はわからないが、キサラの言った
ことから推測できるのは・・・

・・・誰かの為。そう考えるのが自然だろう。

・・・理解できない。

自己犠牲を強いられている自分。

自分から望んで自己犠牲をするキサラ。

どうして他人の為に異様なまでに自分を犠牲にするのか。
どうして自分から自分を追い込もうとばかりしているのか。
どうして一人で抱え込もうとしているのか。

（そこまでする理由は何だ？）

ここでまた、思い知らされる。

自分はキサラについて何も知らないのだと。

そしてそれは裏を返せばキサラも自分のことについては何も知らないということ。

（過去に何か、あったのか・・・。）

自分にわかるのはそこまで。

彼が今後自分に話をしてくれる気になれば、聞いてあげよう。
それしかできないのは、もどかしいが何もできないよりはマシだろう。

「キサラ・・・。」

先程何度もキサラに自分の名前を呼ばれてとても嬉しかった。

彼はその余韻に浸りながら、ゆっくりと振り返った。

そろそろ誰かが自分の居場所を特定する時間だ。

（玉座を開けても指揮官はいるだろうに。）

その指揮官が直々にナトスを探しているとは思わない。

ここで、ナトスはようやく一つの失態ミスに気がついた。

（これでディジラウが探していたとしたら・・・。）

厄介だ。あれは噂だの何だのを鵜呑みにし易い。

もしかしたら全軍を率いて地上の人間を排除しろとか命令していてもおかしくない。

さすがにそこまで予想して動かなかった自分の軽率さを呪った。

「・・・抜け出すのも楽ではないな。」

今度からは事前にアリファスに言っておいてから出かけよう。
そうすればアリファスのことだ、少しは時間を稼ぐだろう。
運が良ければ上手く話を丸め込みそうだ。

（いや、丸め込むな。あいつは口だけは達者だ。）

ナトスにこそ通用はしないものの、彼は嘘が上手い。

There is not the meaning if I
cannot deceive you.

だが、騙されるフリぐらいはするのが礼儀だろう？

L v. 40 ペテン師の誤算（後書き）

There is not the meaning if I
cannot deceive you.

・・・私があなたを騙すことができないならば、意味がありません。

わかりやすく言いますと、アリファスが魔王を騙そうとしている。
でも魔王は騙されたフリをして、逆に彼を騙している。

・・・といったところですね。

ペテン師Ⅱ知恵が回る、頭脳犯
がわかりやすいですね。

・・・頭脳派じゃないんで表現できる自信皆無です。^^;

L v. 4 1 暗がりでの再会

最初に陥れようとしたのは、俺だった。

◇

自分が何者か知って、三年も経ってからやっと心の整理ができた。

・・・はず、だった。

でも、表のあいつを少しだけ、いじめたくなってしまった。

・・・それだけなのに。

人生って上手くないかないものだ。

改めて、俺はそれを理解した。

◇

「おい、大丈夫か!？」

心配そうな声が響く。

気がつけば布団で寝ていた。

「お！おい！気がついたぞ！！てか大丈夫か?？」

「うるせーです変態。何度大丈夫連呼するんですかー。それと心配してるんならその手を退けろー。」

「うわどちら様!？」

見知らぬ人がなんかよくわからないが変態を殴・・・いやいや、僕を変態の魔の手から救ってくれた。

うん。決して暴力じゃない。正当防衛ってやつ・・・のハズ。

「だ、誰だか知らないけど、ありがとう。」

「えー？あまりにも変態がショック過ぎて僕のこと忘れちゃいましたー？」

「ショック？そ、そうなのかキサラ！俺は嬉しいぞ！！」

「テイザさん。何か取り違いしてませんか？」

「あれ？！ファリオンさん！？」

なんか手から火が！ファ、ファリオンさん大丈夫ですかその手！！その内服とかに引火して火事とかに！！うわぁ僕火だるまになりましたくない・・・！

あ・・・落ち着け、落ち着くんだ自分！冷静なファリオンさんを見習わないと。

「てかファリオンさん何でそんなに落ち着いてるんですか！手燃えてますよ！！」

「ああ、これですか？別に大丈夫ですよ。具現化させただけなので。」

「アンタ大道芸人かなんか？それなんかの手品なわけ？」

「貴方には説明したはずなんですけどね。もう忘れてしまわれたのですか。」

「・・・何か馬鹿にされてる気がしてならねえ。」

いや、馬鹿にしてるでだろうと考えても。

（それにしてもファリオンさん、兄さんの扱いに慣れてるなー。どうしてだろ？）

自分が寝ているうちに何かあったんだらうか？？

「それより暑い・・・！」

「ああ、すいません。」

ここでやっとファリオンの手から火が消えた。

何だか謝っているのに顔が笑顔だ。

・・・何か面白いことでもしたのだろうか。

（うーん。わからないなー。）

「微笑ましいですね。キサラ君は。」

「え？ な、なんか僕変なことしました？」

「はは、いいえ。見た目どおりの性格なので・・・つい。」

「??」というかファリオンさん、何だか楽しそうですね。」

「ええ。とても。」

よくわからないが機嫌がいい。

なにか良いことでもあったのだろうか？

「ん？ 私の顔に何かついてます？」

「う、何でもない、デス。」

「そうですか？ ならいいんですけど。」

なんだろう、ファリオンさんの笑みが兄さんのそれに似ている。

「どうしました？」

「さっきから空気なんですけどー？ 忘れてませーん？ 僕が存在ー。」

「あ、そうだ君の名前は？」

誰だか知りませんがありがとう！

話に入り込んできてくれて助かった。

・・・ファリオンさんと話していると答えなくてもいいことまで答えてしまいそうだ。

「・・・本当に僕の名前忘れちゃったんですかー？」

「え？でも、僕確か君と始めて会う・・・よね？」

（どうしよう、まずかったかな。）

「くっ・・・起きるのが少し遅かったか。」

（ウラキ！？大丈夫？何だか辛そうだぞ？？）

声からして辛そうだ。

何があったのか知りたいと思ったが、ウラキがそれどころではないと促した。

「そいつはジェリエという。」

（ジェリエ？難しい名前だなー。）

「噛むなよ。怪しまれるから。」

どうやら目の前の人はジェリエと言うらしい。

周りの人が言いやすい名前ばかりだっただけに呼ぶときは難しそうだ。

でも問題名前よりもそれ以前に・・・。

（こ、この人男の子？女の子？？）

「男だ。外見に惑わされるなそいつは悪魔だ。」

（魔族ってこと？）

「違う。魔族とか悪魔の類よりもそれっぽい。」

いや本当に一体何があった！？

ここまで喜怒哀楽がそれぞれ激しいと気になる。

ちなみに喜はテイザで怒はジェリエ、哀はウラキ、楽はファリオンさん。

「何だこの絵面。」

（その中にはウラキも入ってるんだけどね。）

「ごめんマジやめて。こいつらと並べないで。」

だが断る。それじゃ喜怒哀楽揃わないじゃん。

ちなみに僕は喜。深い意味は無いから深読みしないでねっと。

（でも四人が並ぶとタイプの釣り合うんじゃないかな良い意味で。）

ウラキがぎゃーぎゃーと叫んでるけどスルー。

元気じゃないかこの野郎。

さっきまでの演技か？演技なのか？

「何か失礼なこと考えてねーか？」

（自分自身に失礼もへったくれもないっていつだったかウラキが言っ
てなかったつけ？）

「う・・・あのときは俺も反抗期って違う。」

ノリツツコミ乙ー。

あ、変換ミスとかじゃないですよ？断じて。

小さくウラキに微笑んでから、ジェリエ君の話を聞くことにした。

◇

キサラが微笑んだのは、予想外だった。

とつくにいっぱいになっていた罪悪感がさらに重く増えていく気が

した。

息ができるのが不思議なくらい、胸が詰まるような、そんな感覚。

最初は、彼が向けて来る謝罪の言葉が自分の怒りを掻き立てていった。

いつだって自分を氣にかけてくる自分。

その言葉も謝罪も、同情しているようにしか聞こえなくて、ただ耳ざわりだった。

なのに・・・。

氣がついたのはいつだったろう。

自分以上に、誰よりも。

キサラが何より傷ついていたということを。

（勝手な奴だ・・・。）

自分が原因だと、知っている癖に。

自分が望んだことだと解かるのに。

自分が何よりも、弱いはずなのに。

（お人好しが・・・だから利用されるんだ。）

傷ついても尚、傷つけたものの幸せを願うから。

そしてそれすらも、癪に障るとも知っているのに。

俺は、奴を闇の中に引きずり落として、這い上がって来た。

ある意味、彼が一番残酷だ。

・・・Because I am him, too.

上手くいくはずがない。

L v. 41 暗がりでの再会（後書き）

B e c a u s e I a m h i m , t o o . . . 俺が彼なのだ
から。

→は小説内独自の訳です。

ので、色々とスルーしていただくありがたい^^；

L v. 42 二つの蕾の耳飾り（前書き）

ディジラウ中心。ちょっぴりシリアス。

L v. 42 二つの蕾の耳飾り

それを一番信じていた自分に見れば、それは最も許せないことだった。



予言者の予言は、ディジラウにとっても強い衝撃を与えた。魔王陛下が一体どこに消えてしまったのかは特定できた。
・・・予言ではあるが、それが外れるとも思えない。

問題なのは、主君の居場所ではなかった。

問題なのは、その後に予言されたこと。

自分自身の遠すぎない未来の予言。

『予言だ。貴殿は彼ではなく、別のモノを――――。』



――・・・選び、共に生きていくだろう。

(ありえない。)

私には魔王様しか、いないのに。

一目見たその瞬間ゆがみからずっと彼の隣に在りたいと。

側近となった今ですらも、それが叶うようにと。

彼の下で、彼の為に尽くしいつの日か、自分自身が認められるようにと。

どんなモノでも、彼の眼に映れば万物をも凌ぐほどの価値があると

思っていた。

その声で、自分の功績が称えられれば、至福の喜びとなった。もっと、もっともっと。

その瞳に、その声に。貴方に。

――・・・魔王陛下に、必要とされたかった。

（だが今は、何万と居る兵を統制するのに便利なモノ）

その役割ですら、以前から危うい。

代わりがきくように、もう一つ優秀な配下を側近に置かれた。

魔界の王として人間と同じく、政治まがいのことはやってきた。

数々の反乱分子、そしてその鎮静化。

世界の王として、均衡を保つために狂ったものですら従えた王。

父王の威光など、初めからなかったかのように。

悠然と玉座に君臨したまだ年端もいかぬ覇王。

その姿に、自分は惹かれていった。

元々は、両性を捨てて男となるつもりでいた。

しかし、気がつけば彼の為に全てを捨て、至福の時を求めている。

（だが現実など、残酷なものだ。）

自分が求める地位について初めて、虚しさを感じた。

側近ですらも、彼の瞳に真に映ることなど無いと。

彼一人でも、魔界の統制は容易く遂行が可能なこと。

・・・臣下無しでも、栄えるも滅ぶも意のままであること。

「どうして、我らを苦しめるのですか。」

運命も、魔王陛下も。

魔王様に生涯を共にと願っていたのに。

未来の自分の選択は、今まで全てを捧げた相手ではなく。

「魔王、様ッ————！！！」

（何も、私には残らないというのか？）

予言は^{それ}何よりの証として。

ディジラウの手には、鋭く磨がれた短剣が握られていた。

（そんなことはさせるものか。）

自分が貫き通せぬのならば、いっそ、この手で————！！！！



「どうか致しましたか？」

「！？誰だ！」

予言者が去った後も、ディジラウはそこに留まっていた。

そして不覚にも、予言者以外の人間に見つかってしまったようだ。

（しかし・・・気配を消すとは。）

生意気な。今すぐこの短剣で切り刻んでおいたほうが身のためか？

「すみません、驚かせてしまいましたか？」

微笑みながら男が歩み寄って来た。

（何だ、この男は……。）

短剣に気づいていないのか、それとも気づきながら近づこうというのか。

「そこまで身構えなくてもいいんですよ？」

「身構えてはいない。習慣だ。」

「御冗談を。貴女にそれは似合いませんよ？」

それ、とは短剣のことだろう。

（似合わないだと？ 仮にも私は側近である前に一人の武人であるというのに。）

「無礼な……。」

「これは失礼を。お嬢さん、お名前は？」

「お嬢さんではない。名を尋ねるときは自分から名乗るべきだろう。」

（明らかにこの男の倍は余裕で生きてるぞ。）

敬語のせいだろうか、もう一人の側近を思い出す。

余裕そうな笑顔がまた一段と嫌な感じだ。

最初からムカつくが、さらにムカついてきた。

「身だしなみくらい整えたらどうなんだ。」

「おや、気に入りませんか？ 別に整えてもいいですけど、整えると少々窮屈な気がしませんか？」

軽い。なんか軽い。

ここは几帳面で神経質なもう一人の側近とは違うようだ。

何だかホッとした。あれと同じ様な人間にあうなんて絶対に嫌だ。

「あ……。」

光る黄色の薔薇の蕾を象った耳飾りに、思わず目を惹かれた。

以外にも似合っている。というより様になっている。

そもそも何故蕾なのが気になる。

「気になりますか？」

少し嬉しそうに、男が小さく笑った。

（何がそんなに嬉しいんだ。）

結構知的な見た目ではあるが、あるいは馬鹿なのかもしれない。

「……見事な装飾だな。」

「ありがとうございます。きっと作り手も喜んでいます。」

「作り手？」

「ええ、数年前に死去しましたが、素晴らしい女性でした。」

そう言っている男の顔が、嬉しそうでもあり、また悲しそうでもあった。

（こ、こいつ何考えているのか全くわからない。）

予言者とはまた違った、だが捉えどころのない雰囲気を持っている。

（探ってみるか。）

他にもやらなければいけないことはあるが、後回しにしても罰は受けないだろう。

「作成者は、恋人か何かか？」

「恋人……だったら、どれだけ良かったでしょうね……。」

泣き笑いの様な表情を浮かべながら、男は言った。

「そうだ……これ、持っていたいただけますか？」

左側の耳飾りを取って、男は自らの掌に耳飾りを置いた。

少しだけ惜しむように薔薇の蕾をゆっくり形をなぞってから、ディ
ジラウに差し出した。

ゆったりとした仕草と表情は、哀愁を帯びていた。

「いいのか？お前の大切な女の形見なのだろう？」

「いいんです……貴女に持っていて欲しい。」

「それは……何故だ。」

驚いたように目を開いて、戸惑いながらも男は答えた。

「貴女は……あの人に似ている。」

（成程。その女のせいでこの妙にムカつく男に声をかけられたのか。
だが、まあ。）

「いいだろう。」

「私が付けてもかまいませんか？」

「ああ。」

本当はそんなこと自分でできると言いたかったが、できなかった。
あまりにも嬉しそうな顔で男が笑うから。

まるで、ずっと探していたものを見つけた子供の様に。

(私にもできるだろうか。)

I wonder if it is found . . .
それでも、見つけてみたい。

L v. 42 二つの蕾の耳飾り（後書き）

I wonder if it is found . . . が見
つかるかどうかわからない

それ〓大切な人の面影。

本人は無理でも面影だけでも、という。

・ ・ ・ 陰ながら見守る派なキャラが多いな；

L v. 43 It is uncovered. (前書き)

ぐだぐだです。

Lv. 43 It is uncovered.

真剣な空気って場合によってはめっちゃくちゃ重要なんだと思う。



ジェリエ君は不満そうに床に寝転がってしまった。

忘れて（正確には知らない）しまったのがいけなかったらしい。
完全に機嫌を損ねてしまったようだ。

「さて、その少年は置いておくのでしょうか。」

「お前それより早く此処から出せよ！」

「できません。」

即答。え、ちょ、この中に僕を置いて行っちゃうってこと??

「なんでだこの薄情者！この鉄格子さえなけりやお前をすぐに殴り飛ばしてやる！！」

「はぁ・・・落ち着いてください。ここには何故か鍵がないんですよ。」

「鍵が無い!?!」

その一言で他の囚人たちも動揺して辺りは一気にざわめいた。

「おい、そののにーちゃん。そりやどういうことだ?」

「そうだ、鍵が無いとはどういうこった。」

「何かの間違いじゃねえのかい?意外とその辺に転がってるとか・・・。」

あーだこーだと意見が飛び交う。
どの意見にも不安が覗く。

「残念ながら間違いいではないです。見張りを締め上げ・・・黙らせましたが、鍵は所持していませんでした。」

「何か言い直しましたけど何一つ良くなってませんよ!？」

ていうか締め上げたって言おうとしたよね今!!

黙らせるのも締め上げるのも同じくらい駄目な気がするんですが!!

「他の場所に保管されていると考えてまず間違いはないでしょう。」

「よし、今すぐを探しに行け。」

「既に搜索中です。」

(それにしても・・・すごいな。)

床に転がっているジェリエもきつとこの話は聞こえている。

なのに、動揺が一切感じられない。

(ウラキ・・・ジェリエ君ってどんな人?)

「いや、俺もよくわからねえんだ。」

困ったように返事をしてくるウラキは、どこか疲れているように感じた。

(辛いなら、寝てもいいよ?)

「駄目だ。お前は、俺が居ないと駄目な奴だからな。」

(そんなに駄目を連呼しなくても・・・。)

ちよっと凹む。そこまで信用がないのか。

というか自分にすらも信用を得ていない僕っていったい・・・。

「おい、大丈夫か？代わるか？」

（大丈夫だよ。でも君もやっぱ僕なんだね。実感した。今。）

「？今なんか言ったか？」

自分よりも他人を優先するところとか特に自分らしい。

他人のことを心配する余裕なんてなくても、それをする。

自分が辛くても、ただ誰かの為に何かをしようとする。

（ジェリエ君どうしたのかなって。）

「嘘つけ。」

（ばれた？）

「普通わかるだろ。・・・珍しいな、嘘つくなんて。」

（僕は嘘つきだよ。・・・知ってるくせに。）

ウラキと会話しながら、ジェリエ君に歩み寄る。

「ごめんね、ジェリエ君。」

「・・・でしょ。」

「へ？」

「キサラさんですよー？」

「！！」

ヤバい一瞬息が止まった。

（どうして知ってんの？え、これ何これエスパーか何か？）

「エスパーって読心術だろうが！誰がお前〓キサラだなんて考えてるんだよ。」

（あ・・・でもほらさっき兄さんが僕の名前呼んでたから！）

「なん・・・むぐ」

「大きな声出さないでくださいー。」

いきなり起き上ったかと思えば、口をふさがれてしまった。

「注意力が足りないぞキサラ！」

（ウラキだって気づかなかったくせにー！）

とりあえず両方気がつかなかったということとで解決。

低レベルの争いが二人の間に絶えないことが二人の精神年齢を物語っている。

また、思考回路が二人は似ているため、切り返しが似ている。

「わかったから、手もうやめて！」

「小声で話してくださいー。」

「どうして？」

「あの二人は何かとうるさそうですー。面倒なのは嫌いですー。」

「こいつ俺と気が合う気がする。」

（何言ってるの。僕もなんだけど。）

二人とも根は良いんだろうけど。

多くを知りたがるため、少しだけ返答に困る。

まあ、変態の方は一発殴っておけば万事解決なのだが。

「僕の質問に答えてくださいー。貴方はキサラさんであってますねー？」

「え、あ、はい。そうですけど？」

「敬語なんて堅っ苦しいんでやめてくださいー。」

「え、でもジェリエ君は敬語・・・」

「ああ、いいんですー。これがデフォルトなんでー。」

「おい、デフォルトってなんだ。」

（さあ。なんか不思議な人だね。）

今まで会ったことのないタイプの人。

第一印象は・・・失礼かもしれないけど性別不明の不思議な人。せめて常識人であることを願う。

「そりゃ無理だな。」

（何で？変な人には見えないよ??）

「そいつ詐欺する奴だぜ？女と偽って金を巻き上げようとして失敗。今に至る。」

最早どうコメントしていいのかわからない。

というより無難なコメントが選択肢に無いんですが。

うわどうしよう、変なモノでも見るような眼で見られてるんですけど。

「どうかしましたー？」

「いや、別に。それより何で僕がキサラだってわかったのかなーなんて。」

「その変態がキサラさんの名前呼んでたからですー。」

「で、でも呼び間違いかなとか考えなかったの？」

「素直な方ですねー。あ、こっちの話ですー。ほら、変態の態度が呼び名と同時に変わりましたからー。」

「成程。」

（ちよっと、納得しないでよ。僕意味がわからないんだけど。）

兄さんはいつもの僕に対しての態度とウラキに対しての態度が変わるってこと？

でもしたら兄さんもウラキの存在を知ってるってことだよね。

あれ？いつから知ってるんだろ。うわもしかしたら僕より先にウラキに接触してたりとか？

「というか俺の名前つけたの俺らの兄貴だぜ？」

（うっそ兄さんが！？）

「なーんか知んねえけど裏のお前だからウラキだと。」

何だその手抜き工事。

あ、工事っていうのは比喻ですよって違って。

（じゃあウラキは兄さんから貰った名前を採用したの？）

「他に良さそうのも無かったからな。」

（そうなんだ・・・。）

意外な事実。

とかいい加減兄さんもファリオンも喧嘩を止めて欲しい。

あ、その手の炎しまって！！燃える！！

ていうか囚人の皆さんまで観戦！？

うわ、そんな勝者がどっちかとか賭けなくていいから！！

・・・真剣な話し合いってどこでやってますか？

L v. 43 It is uncovered. (後書き)

今回はキサラとジェリエの接触が中心の話でした。

中身が薄っぺらくなりました。

・・・どこで間違えたんだ・・・。

英語の挿入ができなかったのでタイトルに入れてみました。

It is uncovered・・・それは発見される

それⅡウラキ。ウラキの存在が他人にばれてしまうことをタイトルにしました。

L v. 44 気づき始めた違和感

人助けなんて、柄じゃない。

◇

「すごいですねー。一つの体に二つの人格なんてー。」
「う、あ、ありがとう。」

（薄々気づいてた気もするけど、やっぱりジェリエ君ってすごいね。）

「だな。普通なら引くかももう少し疑ったりとかするぜ？」

（なんだかすんなり受け入れられたね。なんか・・・嬉しいや。）

声が弾んでいる。相当嬉しいらしい。

何で喜んでいるのかはさっぱりだ。

そして、ウラキは知ってしまう。

（待てよ・・・？）

今までにない違和感。

（俺が、キサラの考えていることがわからない？）

それはある意味、何かを決定づけるもので。

（それって、つまり・・・。）

・・・キサラと完全に別人格になりつつある？

確信はない。だが、それはとても驚くべきことだった。

（どういうことだ？俺たちは完全に隔離していて、これ以上は隔離できないはず。）

それなのに完全な、ということは自分とキサラが全くの別人になるということ。

最初からそうだったような気がするが、二人の根はいつも一緒だった。

（嘘だろ。）

やっと、キサラを理解できそうなのに。

やっと、和解ができそうなのに。

やっと、キサラを許せそうなのに。



「キサラさん？どうかしましたー？」

「ん？いや、別に。ただウラキの様子が・・・。」

「へえ、中で会話できるんですかー。特殊なタイプなんですかねー？」

「さ、さあ・・・普通はどんな感じなのかとかわからないし。」

（ウラキ、大丈夫？）

「大丈夫だ。それより、お前にはやることがあるだろ？」

（うん、でも寝てもいいんだよ？）

「馬鹿。キサラのくせに俺のこと心配するなんざ100年はええよ。」

（100年経たなくても僕は君の心配するよ。友達だもん。）

一瞬だけ、聞き間違いかと思った。

でも、聞き間違うはずがない。キサラはそういうことを平然と言う。他の奴なら考えない様なことを。

「バーカ。」

（馬鹿って言う方が馬鹿なんだぞ！！）

「はいはい。さ、話もどそうか。」

そうだ、今ジェリエ君と話をしてるんだった。

早く話を戻さなくちゃ。

「おかしいと思いませんか？」

「え？何が？」

ここでジェリエ君は普通の声の大きさを話し始めた。

「何がですか？」

ファリオンとテイザはやっと鉄格子ごしのバトルを中断して、ジェリエの言葉に耳を傾けた。

「だって、僕らずっと労働させられてたじゃないですかー。」

「ま、そうだな。あれは結構キツイよなー。」

「ダメレ変態話を遮るな。で、僕らどうやって労働してましたかー？」

「何事も無かったかのように話を進めたな・・・。」

とりあえずジェリエ君はその辺に転がってた棒を片手にへんた・・・兄さんを攻撃。

これはさすがに兄さんが話の邪魔をしていたから仕方ないと思う。ファリオンさんは僕に向かって何だか意味ありげな笑みを浮かべていたが、見なかったことにする。

「で、どうでしたかー？」

「どうって、外に出て・・・あ！」

「わかりましたかー？さすがキサラさんー。」

褒められるべきはジェリエ君だと思うけど、今はとりあえずポカンと口を開けている囚人の為に説明をする。

というかそのアホ面やめて兄さん。顔が良いぶんだけ他の人より痛い。

「どういうことだい坊ちゃん。」

「説明してくれなきゃー困るなあ最近頭を働かさないことになれちまってねー。」

「そうだい、外ではそれなりに考えもしていたんだがねー。」

おじさん層の方々が口々に言う。

結構品のある見た目何だけど、喋り方がその人のイメージを左右している。

たとえるならテイザ並みに無駄に整った外見。

「お前そりゃひどいだろ。」

（・・・でもウラキもそう思ってるでしょ。）

「否定はしないけどよ・・・。」

「じゃ、説明を始めますね。」

「僕とキサラさんで交互に説明しますー。」
ここで何故か拍手が入った。

「お遊戯会かなんかか！変だろ！何で拍手？！」
（うーん。なんなんだろうね。）

謎だ。ここで一番の謎がここに。

「問題なのは鍵がここに無いってことですー。」
さっそくジェリエ君が説明を始めた。

「それは誰にでもわかるだろうが。」

「兄さんの言うとおりだけど、僕ら労働のときどうしてた？」
「外に出て・・・あ。」

ここでやっと兄さんも気がついたようだ。

他の囚人たちも気づき始めたようで、少しざわついてきた。

「成程。労働のときは外に出されるのに、鍵が此処には無い。」

「つまりは、此処ではない別の場所に保管されているということ。」
「こんなに牢があるんだし、相当な数はあるよな。」

「うん。出される時も入れられる時も複数の看守が同時進行でやるもんね。」

ここでまた謎ができた。

「じゃ、そんだけの鍵を何で他の場所に保管しておく必要があるんだ？」

鍵を保管する場所も他にあるということは、囚人を幽閉するために今自分たちが入れられているところだけでなく、もう少し規模がでかくなるということだ。

「こういうのもなんなんだけど、なんでこんな変なことするんだろ？」

「変なこと？ ということだ、キサラ。」

「だってさ、規模がでかすぎない？」

「確かに規模はでかいな。」

どうやらそれだけじゃ伝わらないらしい。

それを聞いていた者は皆不思議そうな顔をしていた。ファリオンさんは除くが。

どうやら今のでファリオンさんだけは理解できたらしい。

「貴方達の罪状はなんですか？」

「冤罪だけど・・・一応、無銭飲食。」

「無銭飲食者にここまで徹底した警備を致しますか？」

「「あ」」

テイザとジェリエがはもった。

どうやら今自分たちが置かれている奇怪な状況に気がついたようだ。

「極悪非道な連続殺人犯ならここまでの警備をするのは頷けます。」

「だけど無銭飲食にここまでって・・・確かに変だ。」

他の奴にも罪状を聞いてみたが、そこまで大したことは無い。

しかもそのうえ・・・

「お前ら皆身に覚えのない罪で捕まった?!」

話ができる範囲に幽閉されている人間は全て、冤罪だったのだ。

・・・ジェリエは除くが。

Something is taking place.

厄介事に巻き込まれてしまったようだ。

L v. 44 気づき始めた違和感（後書き）

Something is taking place . . . 何か
が起こっている

何かと巻き込まれやすいらしいキサラ君。
きつといいことあるさ！↑

L v. 45 M a y t h e r e b e I n e a r y o u ?

きつと今頃酷い目にあっているに違いない。



「はあ、今のところこれといった情報が手に入らないわねー。」

「ごめんね。僕たちが手伝えなくて・・・。」

「本当だったらいっぱいいいお手伝いしてキサラを助けたいのに。」

シュヒの一言にシーラとタスラの二人が申し訳なさそうな顔で俯いた。

どうやら自分たちが情報収集ができないことを申し訳なく思っているらしい。

「いいのよ。あなたたちは食料収集してるでしょう。それで充分よ。」

「でも・・・」

「お腹が減ってたら私、今頃情報収集にだけ専念できなかったわ。そうでしょう？」

励ますつもりなど毛頭ない。

なぜなら二人は食料収集をして、それのおかげで情報収集に専念できているのは本当だからだ。

つまりは、本当のことを言っているだけ。

「ごめんね、私がちゃんとした情報入手できないから。」

「そんなことないよ。シュヒちゃん頑張ってるもん。」

「でも、結果が出なければ何の意味も無いわ。」

励ましてもらっているのに、つい自虐的になってしまう。

（そうよ。いつも私は結果を出せずにいるんだわ。）

（そのとおりだ。あんたは俺という使い魔を持っておきながらその力を使わないんだからな。）

（ちよつと。貴方に言っていないわよ。でも・・・そうよね。）

シュヒアルと契約を交わした悪魔の力を使えば、望みの者がどこにいるのか容易にわかる。

「なんでもっと早く気づかなかったのかしら。」

「何！？なんかいいの見つかった？」

興味を持ったタスラがすごい勢いで駆けてきた。

（ちよ、早過ぎ。）

馬の馬力をなめるなそんな速さでつつこんできたらよれないでしようが！！

その日、森の中で暴れ馬らしき蹄の音と、若い女の悲鳴（？）が聞こえたらしい。

（近くの小屋に住む老人と愉快的仲間達証言。）



「ヴェルカ。」

「は、此処に。」

城のデイルシュファの自室。

窓枠に乗り上げ、デイルシュファは乗り出すようにして外を眺めていた。

「今生陛下は、何をお考えなのだろう。」

「私の様な下賤の者にはその思考を考えることすらおこがましい事でございます。」

「僕は間違っているのかな。魔王陛下ではなく、あの方のままであって欲しいと願うのは。」

苦しそうに、デイルシュファは胸に手を当てた。

「僕の中には、半分だけあの方と同じ血が流れてる。」
「存じております。」

「・・・僕が、異母兄弟だから駄目なのかな。」

「デイルシュファ様・・・。」

兄であるナトスと弟であるデイルシュファは父は同じだが、母は違う。

そしてどちらも父の側近であった。

「僕を産んだのがあの方の母さまだったら、あの方が僕の母さまから生まれたら、何か変わってたのかな。」

掠れた声で、デイルシュファは呟いた。

「此処なら、泣いても死なないんだろう？」

「いけません。デイルシュファ様。」

「ヴェルカになら、僕いいよ？」

ゆっくりと振り返って、デイルシュファはヴェルカを見た。

「僕が人間になってしまったら君は何がなんでも僕を殺さなきゃいけない。そうでしょ？」

その言葉を聞き、ヴェルカはすぐにデイルシュファの前に跪いた。

「・・・貴方様が人間になったそのときは、私も人間になりました。う。そして、どこまでも貴方様の手を引いて逃げ遂せて見せます。」

「ヴェルカ・・・。」

俯いているのにヴェルカの声は凜と響いた。

そして、ヴェルカの声はいつもの冷静さが無く、力がこもっていた。強い意志を示すように、デイルシュファへ言葉を返した。

冗談とは受け止めずに、真剣にデイルシュファの言葉を受け取った証拠であった。

「どうして僕に執着するの。僕は第二皇子。その上、まだ大人じゃない。」

「年齢と地位などに何の意味がありません。」

俯いていた顔を上げ、ヴェルカは真直ぐにデイルシュファの眼を見た。

「側近という者は何故、主君を守ると思いますか？」

突然のヴェルカの問いにデイルシュファは固まった。

考え込むが、全くわからない。

「・・・どうして？」

「それが義務だからです。」

「・・・!!」

悲しそうにデイルシュファの顔が歪む。

それを見たヴェルカは優しく目を細め、デイルシュファに微笑んで見せた。

「ですが、私の場合は義務など気にしません。義務など知ったことではありませんし、私は少し周りの者たちより不器用なのです。・・・お仕えしたいと心から思える主君でなければ、例え演技でも仕えることなど、私はできません。」

ヴェルカは優雅な仕草で、まだ幼く小さなデイルシュファの手を取った。

「貴方様に、心からの忠誠を。」

ヴェルカは跪いたまま、デイルシュファの手に口づけを落とした。

「今、この瞬間より、私のこの命、貴方様だけのモノとなりました。」

自分の心境と同じく、表情も穏やかだった。

「全てを貴方様に捧げます。」

とても悪魔とは思えない様な、幸せそうな美しい顔でヴェルカは笑った。

「傍にいてくれるの？」

「貴方様が望むのならば。」

「一緒に笑ってくれるの？」

「貴方様が笑うのならば。」

貴方に、私は救われてきた。

（だから、これからは貴方の為に。）

全てを捧げるには充分すぎるものを、彼から与えられてきた。
一度死んだも同然の自分を、彼は生かしてくれた。

今生陛下でも、前王陛下でもなく。

幼い子供が。

悪魔なのが不思議なくらい純粋な子供が。

小さな手を大きく広げて、自分を抱きしめた。

今思えば、私の心は泣いていた。

涙など、流す術を知らない私は、心で泣いていた。

死に等しい苦しみの中から、彼は掬いあげてくれた。

「貴方様のお傍におります。」

デイルシュファは、とても明るく笑った。

悪魔ではなく、天使の様な温かい笑みを。

・・・I like your smile.

この言葉を、いつか貴方に届けられる日を願っています。

L v. 45 M a y t h e r e b e I n e a r y o u ? (後書き)

I l i k e y o u r s m i l e 私 は あ な た の 笑 顔
が 好 き で す 。

今回はサブタイトルと本編の両方に英語を入れてみました。

→は本編の英語の訳です。

←はサブタイトルの英語の訳です。

M a y t h e r e b e I n e a r y o u ? あ な
た の 近 く に い て も よ ろ し い で す か ?

ちなみにサブタイトルも本編の英語もヴェルカ視点です。

L v. 46 掲げられた情報料

それほどまでに異常な者を見たことが無い。



「現・魔界の王について教えてちょうだい。」

「おや、何を言い出すかと思えば。」

「可能でしょ？一応向こうでは重役のはずよね。」

「一応は余計だな。あんたはいつも俺たち悪魔を貶す様な言い方をする。」

眉根を寄せて、人型をした悪魔は笑う。

怒っているのか笑っているのかはつきりしない表情だ。

「それより一つわからないことがあるな。あんたは予言者のことが知りたいんじゃないのか。」

「あら、いいでしょ。これが相手に有力な情報になるかもしれないし。」

「情報？それは一体なんなんだ。」

そういう悪魔は全く興味がなさそうにしている。

一応聞いておく、といった具合だ。

むしろ主の話し相手をするというのが仕事だと思っているに違いない。

（もう少し素直な使い魔が良かったわ。）

「予言者は情報料を払わなければ予言はしないわ。」

「情報料・・・これまた変な奴だな。」

「またって何よ。・・・それより、予言を与えるに値する情報を提供・提示しなければならぬ。」

「そのために今生陛下の情報欲しいってところか。」

悪魔は少し考え込むように顎に手を置いた。

どうやら考えるフリだけをしているらしかった。

表情からして明らかに面白がっている。

「それは俺に対する命令か？それとも個人的な相談か？」

「個人的な相談なんて馬鹿なことはいわぬ。」

「それもそうだ。」

不気味に笑いながら、シュヒの目を見る。

「今生陛下の記述があるとも限らない。あつたとしても俺には相当のリスクがかかる。」

「私の寿命を五年分追加。これでいかがかしら？」

間髪入れずにシュヒが使い魔の物言いに答えた。

まるでそれを予測していたかのように、正確な答えを。

「・・・いいだろう。今生陛下には熱烈な下僕たちが無駄にいる。

一人くらい正確な記述を残してるだろう。」

間を開けて、悪魔はシュヒの条件を承諾した。

本当はもう少しもらってもいいかと思ったが、それでは面白みが減る。

「どうでもいいがそれまでには時間がかかる。しばらく地上を離れる。」

言いながら悪魔はその姿を消した。

消えていく最中、性別が不明なそれは、不気味な笑みを浮かべてい

た。

（契約とはいえ、私の魂があれに渡るのは嫌ね。）

ぼんやりとした思考のまま、シュヒはタスラとシーラにかけた術を解いた。

さすがに使い魔を見られるのはまずいと思い、咄嗟に二人を眠らせてしまった。

悪いかとは思ったが、緊急事態なので仕方がない。

◇

「おっと、案外早く見つかったな。」

一番正確に、彼のことを脚色しないであろう人物が記述した書物を見つけるのに思ったより時間がかからなかった。手ごたえが全くなくてつまらないが、それより中身を確認しなければ。

薄っぺらい内容ならば持ちだす理由がない。骨折り損はごめんだ。

ページを静かにめくりながら、シュヒアルの使い魔はその内容を読み取った。

◇

『ダーラック・ナトス・ラデル・ビ・ラドディエク』

現・魔界の王。歴代魔王で最も美しい証を持つ者。

誕生三年にして、先代魔王であり、初代魔王の再臨とまで謳われた父王の強大にして絶大なる魔力を上回った。

そしてその二年後、父王を粛清。

圧倒的な力に惹かれ、皆が彼に跪いた。
それこそが現王の証となり、誕生してからわずか五年で即位。
絶対的な魔界の支配者となった。

即位してから誰一人反論、反乱を起こさなかった。

それどころか彼を一目見、その下で一生仕えようとする者が後を絶たない。

誰もが彼に魅せられ、仕えようとする。

父王になり代わり、玉座を求めた者たちも例外なく……

彼の、全てを称えた。

その双眸に見とめられることこそが最高の誇りであると。

魔界に存在するものの全てが、彼を受け入れた。



「これは……また。」

断片的かつ、要点をまとめただけでこれだ。

今生陛下についての脚色は無かったものの、これは嘘だと思われるのも仕方がない。

一度姿を謁見しようと参列した際、その姿に圧倒されたのを覚えて
いる。

何気ない表情をしながらも、誰にも勝る存在感。

玉座に座っているだけでも威圧感があり、またその姿に威厳を感じた。

どこがどうといって魅力を感じるわけではない。

しかしその場にいた全ての者の心は確実に彼に惹きつけられていた。在り得ないと否定しながらも、自分はその姿を目に焼き付けていた。皆も自分たちが一体彼の何に惹かれたのか解らないと言う。得体の知れないものに対する恐怖と、彼に対する憧れ。男であろうが女であろうが一つの存在としては充分すぎる存在感。一体何がそれほどまでに存在を主張しているのだろう。

「……おかしなものだ。」
呆れる程に従順。

歴代王でも絶対的支配者になれたものは一握りだというのに。

（どうやら、俺にも利益がありそうだ。）

今生陛下の情報を得られる。

そして予言者との対面。

出来過ぎている。明らかに罠だ。

（その罠にかかる予定の者は何かを握っている。）

わざと罠にハマるのもいいかもしれない。

自分がこの数十年間の間に探していた暇つぶし。

最高の暇つぶしができる気がする。

「俺の餌は一体どこに吊るしてあるだろうなあ。」

まだ契約を結ぶずっと前。

思うがままに過ごしていた頃のあの快感。

あの感覚が戻るといふのなら、今回の契約は無駄な時間つぶしで

は無いということになる。

What will happen.

どう転んでも面白そうだ。

L v. 46 掲げられた情報料（後書き）

What will happen. . . 何が起こるだろう。

L v. 47 束の間の休息を

自分の存在がおかしいことを自覚したのはいつ頃だっただろう。



『私どもは、全てを貴方に御捧げ致します。』

そう言って跪いた臣下と民たち。

願ってもいないのに、勝手に執着する者たち。

使い捨てているというのに、誰もが恍惚の表情を浮かべた。

・・・・・・狂っている。

自分の存在自体が。

そしてその存在に縋る者たちが。

魔界に存在するすべての者たちが。

自分が粛清した父王も例外なく。

自分の存在はおかしい。この世界を狂わせる。

それに気づいてしまったからこそ、彼は地上に出てきた。

異常を正常にするために。

何より自分自身のために。

誰より自分を知るために。

だが、一つだけわからない。

（何故、余なのだ。）

今更投げ出すのは無駄に労力を使うだけだ。

気がついた時には王としての地位を確実に固められていた。

（巧妙な手口だが、それをしたものは滅んだ。）

今では何故自分を即位させたのか、その真意がつかめない。

いや、真意を知りたくはないのかもしれない。

ふと、脳裏にキサラの姿が現れた。

初めて見た涙があそこまで美しいものだとは知らなかった。

悲しみの象徴を美しいと感じるのは、やはり悪魔だからだろうか。

幻想的な景色の中で涙を流しているキサラは、相違の者だという証を持っていた。

それでも。

声が、姿が、仕草が。

脳裏に焼き付いていた。

『ナトス。』

名を呼ばれるのがあそこまで嬉しいものだとは知らなかった。

称号ではなく、王としても無く、自分自身の存在がそこにあったから。

一つだけ、心残りがある。

――・――・――
……今度は、笑顔で。

笑顔が見たい。悲しみではなく喜びに触れてみたい。

実体に触れてみたい。魂だけではなく。

特にあの髪だ。ふわふわしてるかどうか確かめたい。
魔族より人間の方が体温が高いのか確かめたい。

（いや、私たちが体温が低いのか？）

むしろ自分たちに体温なんてものはあるのだろうか。
同じ悪魔に直に触れたことなどないからわからない。
・・・一度あったがあれは数には入らない。

思い出したら少しだけいらついてきた。

今度あの側近にあったら嫌味をたっぷりと言ってやろう。
少しは反省するかもしれない。

◇

物思いに耽っていると、扉を叩く音がした。

「入れ。」

少し戸惑いがちな様子で、扉が開いた。

「お呼びでしょうか、魔王様。」

「アリファス、こちらへ来い。」

寝台に座ったまま、ナトスはアリファスを呼んだ。

「弟の様子はどうか。」

「？はい、お元気に勉学に御励みになっております。」

「・・・そうか、あれは放っておくな。他の奴らによく見せろ。」

「何故です？」

「次期魔王に、と思うてな。」

アリファスが息を呑む気配がしたが、気にはならない。いつこれを告げてもし彼には然程変わらないだろう。そう、今までの様に従順に従う。

「余は子は産まん。産ませる女もない。」

「ディジラウは・・・どうなのですか。」

「奴は駄目だ。余の波長と合わん。」

「だから・・・ですか・・・？」

「そうだ。あれは幸い側近は女だ。元両性のな。」

その言葉にアリファスが反応する。

しかしだからといって話を止めるわけにもいかない。

ナトスが語っていることは真実なのだから。

「・・・嫌味、ですか。」

「嫌味だ。」

即答。しばらくの間沈黙が落ちた。

どこことなくピリピリしている。

「私が男になる前にさっさと迎えに来れば良かったんです。」

「余が来る前に男になったのがいけないとは考えないのか？」

（都合の良い奴だ。男になったのは自分自身の意志だろうに。）
バチバチと火花が飛ぶ。

「・・・余は末は男だ。今までと変わるまい。」

わざとらしく眉根を寄せる。

「女さえいればあれを世継ぎにはしないというのにな。」
言いながら、ナトスの体が見る間に男から女に変化した。

顔つきも少しだけ柔らかい印象になった。

「どうだ。この姿も間も無く見納めだ。」

声も少し低めのトーンだが、女のものになっていた。

「だから、嫌味ですよね（ブチッ）」

「逆切れか。悪い癖だ。」

彼女はまだ幼い弟に、玉座を継がせれば何が起こるのかわかっている。

そしてその意味も。

「お前が女だったところで子供を産ませるとも限らぬ。」

「……そうですね。」

「余は何か間違っているか？」

少しだけ間を開けて、アリファスは答えた。

「いいえ。一度も誤ったことはないでしょう。」

その答えが正解ではないことを、アリファスは知っている。

そう、彼を側近に置いたこと自体が間違いだということ。

（それでも、私は此処に居る。）

次期魔王陛下として彼の弟が玉座という頂点に君臨するまでは。

それまでは彼の傍にいられるだろうと。

そしてそれがどれだけ愚かな考えなのか思い知らされることとなる。

◇

結局あの男は反省なしか。

嫌味も逆効果だ。落ち込むどころか逆切れ。

あれの辞書にはきつと反省という字が無いんだ書き込んでやる。それと主君を敬うどころか明らかに感情がわかる。

（・・・ディジラウがまた何かしたのか。）

だとしたら納得もできるのだが、どうやら違うようだ。

（これをここまで可笑しくできる奴といえば・・・。）

ディジラウともう一人しかないが、今は確か勅命任務の最中のはず。

「・・・ダヴェラが帰還しました。」

予想どおりの名前が出てきた。

しかし、任務の途中での帰還とはどういうことだろうか。

今まで任務を途中放棄した例はないのに。

「ダヴェラは魔王様に謁見したいそうです。」

「書状は来ていないが。」

「彼は昔からそんなものやりませんよ。第一マトモな字は彼には書けません。」

「ほお。お前が字を教えたのではなかったか？」

「あれは鳥頭です。都合の悪いことは三歩歩けば忘れます。」

随分と腹を立てている。

何かめごとでも起こしたということが容易にわかる。

What happened?

早く終わらせたい。

L v. 47 束の間の休息を（後書き）

What happened?・・・何が起こったのだろう。

魔王様サイドでした。

久しぶり過ぎた魔王様。どんな口調だったけとか思いながら書き
ました；

L v. 48 黒笑の男の残り火

黒は他の色を交えたらその色すらも黒にしよう。



「はいここで質問です。貴方達はここに捕まる前に何処に居ましたか？」

ファリオンが笑顔でその場に居た全員に質問したのは、厄介事に巻き込まれたことが発覚したすぐ後だった。

「何故に笑顔「何処に居ましたか？」

「ファリオンさん落ち着いてそれ恐喝！」

ファリオンさんは黒い笑みを浮かべていた。

しかもそのまま兄さんをねじ伏せ、鉄格子の向こうに居た囚人の顔の間に炎を近づけていた。

とってもわかりやすく解説すると「早く答えないと顔燃やすぞ」。

「なかなかだなあいつ。」

（ちよ、ウラキ感心しないで。）

「だって笑顔だぞ!？」

（笑顔だね! 何で君まで笑顔なの!?)

「それはお前を貶めるためさー。(赤ずき●ちゃん風)」

ツッコむのすら憂鬱になりました。

ようし、ウラキのことはスルーしよう。

わけのわからない趣味に付き合えなんて、無理☆

「お前さりげなく俺に喧嘩売ってるよな？」

（500万。）

「高！てかただじゃないのかよ。」

（喧嘩売るなんて物理的に無理だっことをつつこむかどうか悩んだんだけどここはノらないと駄目かなって。切り返しどうだった？）

「解説長ーよ。しかもお前明らかズレてる。多分ノリツツコミの才能皆無だろうな。」

（判定厳しくない！？）

おっと、そんなことしているうちに火事だ。

「おいお前今自分で言ってるのに状況理解できてないだろ。」

（何言ってるの。火事でしょ？）

「・・・いやに冷静だな。」

（やだなー、これが冷静に見える？）

「見えんな」

キサラは今鉄格子掴みながら前後に手を動かしてる。

鉄格子が抜けないかなーなノリだ。

しかも異様に手の動きが早い。冷や汗がひどい。

ちなみにキサラは笑顔。追い詰められた感がバリバリする。

・・・すげ、なんかのコントだこれ。（光景的な意味で）

くそうこれはウラキの陰謀だ

「お前俺を何だと」

とりあえずスルー。火事、火事ですよー。

ファリオンさんは笑顔で去って行った。きっとあの人は腹黒キャラなんだろう。

「おい待てコラ。なんだよキャラって。何語」

そして鉄格子をひたすら揺らす僕。まさに地獄絵図だ。

「どっちかというコントだと思うぞ俺は。」

コントって何語。はい、看守が火事を察して逃げましたー。

「何だあいつ笑顔だぞ!」

「看守のくせに!」

「いや看守関係ないでしょー。」

ここにきても未だ冷静なジェリエ君。

「いや焦れよ。俺ら馬鹿みたいじゃん。」

この人はきつといつでも冷静な人なんだな。何事にも動じない。見習おう。

「いやこういうときは動じた方が自然だと思うぞ? 人として。あと見習うな。」

ちよ、さっきから僕のナレーションに入ってこないでよ。

「言っちゃったよおま、火! 火!!」

それよりも煙の方が問題なんだよ習っただろうが。

煙吸うとなんか大変なんだぞ!!

なんかこう・・・よくわかんないけど大変なんだ!

早く此処から出なきゃ。

相変わらずキサラは笑顔で鉄格子を揺らしている。

「つか何で皆笑顔!?!」

(さー。ニコニコ祭でもやってるんじゃない?)

「何だそれ?!」

「わー、キサラさん頑張れー。」

「キサラー」

「寄るな!!」

「照れてるんだなよし俺の胸に飛び込んでこ「お言葉に甘えて!!」

「飛びこむの意味が違うと思うぞ。俺は。」

（え？違うの？）

「何処の世界に『俺の胸に』って言われて胸に蹴りいれる奴が居るんだよ。」

（え、はい。え？逆？）

「逆って何だよ。」

煙が脳にまわったのだろうか。

いつもはツツコミ側のキサラが完全にボケまくってる。

いや、ボケというほど面白いものではない。

テイザが蹴られた衝撃でむせている間に、いよいよ火が大きくなつて来た。

「水ないですかー？水ー。」

「ねえよ。」

「うああ、俺たちじゃこれで終わりなんだあ」

「想えば・・・長かったなあ。」

「最期に妻に会いてえなあ。」

「ちょ、皆何これ諦めモード!？」

他の囚人たちは潔く座っている。

というかこの状況で潔くも何もないのだが。

「キサラー!!」

「復活早！」

「水ー。」

最早誰もつつこまない。

各々自分の人生を脚色し、美しい思い出に浸っていた。

・・・煙にむせながら。

「誰か魔法使える人いませんかー？」

「居ないと思う。」

「じゃ、水海の波動持つてる人居ますかー？」

一瞬、誰もが目を睜った。

「お前、そりゃ迷信じゃろう。」

「そうじゃ。波動なんざ誰もが持つてるわきゃねーんだ。」

「さっきの兄ちゃんを持つてたんじゃねえか。でもすごい強い波動なんだなあ。」

「そうそう、持つてても強くなけりゃ具現化なんざできんよ。」

ざわざわと審議。ん、審議って何。

というかわー。火がこっちまで来てるー。

「おい、やけに詳しいなあんたら。」

あ、兄さんが食い付いた。

珍しいなー。こういう類の話苦手なはずなのに。
というか波動ってなんぞ？

「波動の具現化ってどうやったらできるんだ？」

「あんちゃん、そりゃ無理だぞ。」

「そうそう。強い波動持つとらんと。」

「いいから。やってみなきゃわかんねーだろ。」

なんかよくわからないけど兄さんが（無駄に）やる気だ。

「よー知らんけどポンって感じらしいぞ。」

「いや、俺はバーンって感じて聞いたぞ。」

「え？俺はズドドンって感じだって聞いたぞ？」

「なんで全部擬音なんですかね。」

何かが間違ってる。

これ多分勘違いじゃないと思う。

「久々に鋭くなったな。」

「意味わかんねーしまとものがねーな。」

「アンタに言われたらおしまいですよー。ひっこめ腐れ変態。」

「何で俺が腐敗しなきゃなんないんだ。」

「もう腐ってるだろうが馬鹿兄貴。」

ちよっとドサクサに紛れて兄さんに言ってみた。

一瞬固まったけどまた動き出した。

「仕留め損ねたか・・・（チッ）」

（僕も僕だけど君も君だよねー。）

とりあえずこの火事を止められるかもしれないので妨害はここまでにしておく。

兄さんが何をするつもりかわからないが、何もしないよりはましだ。

It is mere consolation.

時間が経てばきつと何の意味も無くなってしまう。

L v. 48 黒笑の男の残り火（後書き）

I t i s m e r e c o n s o l a t i o nそれは
単なる慰め。

キサラ君御乱心（笑）

L v. 49 大体そんなもの

俺には最優先事項がある。



「はい、おさらいですー。」

「せーの。」

「ポン」

「バーン」

「ズドドーン」

キサラの掛け声(?)と共に波動の具現化とやらのコツ的なものを三人の男たちが順番に言っていた。

「俺ツツコミが壊れると恐ろしいことになるってこと学んだ。」

(おめでとう。これでまた賢くなったね)

「お前は段々馬鹿になってきたな。」

煙だ。煙が脳にまわったんだこいつがボケなんて俺は信じないぞ。

「だから何で全部擬音!?!」

「うるせーです変態ー。早くやりやがれですー。」

「無理に敬語にするのやめてくれないか。」

「いいから早くしてよ兄さん。」

「ああ!お前の為ならたとえ火の中水の中水の「水を出せ」

火がすぐそこまで迫っているというのになんだか余裕だ。

いつそのまままこげてしまえ。

「どうしたんですかブラコンー。」

「うるさい。お前にはわからないだろう胸に素直に飛び込んできた
と思っただらとび蹴りだったときの悲しみを!!」

「まだ引きずってたんだ。」

「いいじゃないですかー。飛んで来たんでしょー?」

「いや、意味違うよ。」

それより早くしろ火がやばいぞ。

ふざけてたら丸焼きになってましたなんてオチは嫌だぞ。
ていうかこれなんなんだよネタ? ギャグ?

「あーもーはいはい、わかりましたよやりますよ。」

「ぐれるなブラコンの変態ー。」

「なあ知ってるか? 俺今すごく傷ついてる。」

「笑いながら言ってもピンとこないよ。」

とりあえず、兄さんが両手を火に向けて突き出した。

無駄にかっこいい。うわむかつく。

何だかすっかり忘れていたが、兄さんは顔だけはいい。顔だけ。
大事なことなので二度言いました。）

（ポン、バーン、ズドーンな。）

こういう無茶ぶりなら過去に何回かあった気がする。

そしてそのときはなんだかんだ言いながら上手くいった。

そう、大抵は上手くいくようにできている。

（ま、何もかも見据えて考えてるやつだけだろうけどな。）

今回は失敗したときの為の保険が何一つも無い。
それどころかキサラが命の危険に立たされている。・・・自分も。
前もって火事になるとわかっていればなんとかあったのだろうが。
というかこの火事の原因はあの優男だ脱兎の如く逃げやがったあの
男の！！

なんだか考えているとムカついてきた。
そういえば、ここに入る前に言われた。

『貴方は・・・水海の波動が流れていますね。』

（確か、水海の意味は海と水に関わる全てのものだよな。）

極端な上に規模がでか過ぎて自分にはいまちピンとこない。

だが、その波動を具現化することに成功したら火を消せることは間違いないだろう。

・・・あの擬音が参考にできるのかは別として。

「要は感覚ですよ。頑張ってくださいー。」

「おうよ！キサラとジェリエ坊、後ろに下がってろ。」

「誰がジェリエ坊ですかー。」

後ろで棍を構えるジェリエ君。

もしものときの援護にまわるようだ。

言葉を交わしていないものの、囚人たちは一心同体も同然だった。

（あれ？でも何で急にそんなに皆仲良く？）

「極限状態だからな。命大事だろ？」

（うん。そだね。でもだからってそんなにうまくいくもんかな。）

「助かるためには何をすればいいのか全員が考えてる。大丈夫だろ。」

ある意味で完全に全員の意識がテイザに集中した。波動の具現化がすぐにできるとは考えられないが、ここは頼るしかない。

「煙を吸わないようにかんで！でもできるだけ鉄格子に気を配って！！」

少なくとも、キサラもテイザもジェリエも逃げることを諦めていなかった。

だからこそ、頑張ろうと囚人たちは思ったようだ。

「その辺に落ちている棒を拾い上げろ！」

「火の熱で溶けだした鉄格子さぶっ叩け！！」

「飯の水持つてる奴あ鉄格子にぶっかけろ！」

「理屈で考えるな！手を動かせ！」

「労働で取り戻した若さをここで発揮するんだ！！」

キサラを中心として、全員が作業に取り掛かった。

煙を外に出す為に布で仰いぐ者、鉄格子を叩き壊そうとする者。

話しあったわけでもないが自然と分担し、生き残ろうとしていた。

「・・・・っ！！」

「冷たっ！」

「水ですー。」

すごい何これ大道芸か！？兄さんの手から水が！

（ファリオンさんみたいだ・・・。）

「本当にやったな。波動の具現化。」

（ね。すごいなー。なんか魔法みたいだね。）

「似てるな。でも確実に質が違う。」

難しいことはよくわからないが、根本的に違う気がする。

（ってそんなことはいいよ、ウラキ！）

「わかってる。まかせろ。」

ここで、キサラは自分の意識を手放した。

◇

「監獄？」

それはキサラ達とはぐれてから四日目。

予言者探しは難航し、有力な情報が何一つ手に入らない。

そんなとき、聞き込みをした相手から興味深いことを聞いた。

「そ。監獄。それも女しかいないんですって。」

「女だけの監獄？ 男の人は？」

「それがね、男と女は隔離するらしいの。」

「隔離？ なんでそんなことするの？」

「変でしょ？ 気になって調べてみたの。」

シュヒは監獄周辺で聞き込みを楽しんでいた。

「楽しそうだね・・・。」

「えー？ なんか秘密を知るってワクワクしない？」

「「する！！」」

どうやらシーラとタスラには伝わったらしい。

すぐさまシュヒと同じでその情報に飛びついた。

さすがに同じ話題ばかり追っていると何の面白みもないものだ。
そのためか切り替えがとても早かった。

「でも大丈夫かな。」

「大丈夫よシーラ。無銭飲食で捕まったんだから処刑されることはあり得ないわ。」

「少しの道草なら許してくれるよ。」

タスラとシュヒアルは俄然乗り気だ。

というかキサラ達を後回しにしようと考えている。

「監獄が女だけなら、男だけの監獄の情報も入るでしょ？」

「そしたら・・・キサラ達も助けられる？」

「もちろんよ。だって、前もって情報が入るのよ？」

もってもらいしことを言ってシュヒはシーラをはぐらかすことに成功した。



入獄生活五日目・・・男性収容監獄、全焼。

Something begins to move.

L v. 49 大体そんなもの（後書き）

Something begins to move. . . . 何か
が動き始める。

兄さん、やるときはやる・・・？

L v. 50 悪魔たちの談笑

固定概念を持たない彼が、私は羨ましかった。



『お前は誰よりも優れていなくては駄目なんだよ。』

小さい頃に言われ続けた言葉。

両親は期待とプレッシャーだけを私に与え続けた。

私は、愛を知らなかった。



「お前の名前は秘密なのよ。」

「秘密？」

「そう。だから本当の名前を誰にも言っては駄目。良いわね？」

有無を言わせぬ強い口調。

微笑んではいるが、表面上だけであることを、幼い私は知らなかった。

表情と感情を切り離している両親に気がついたのはいつだっただろう。

家族はもちろん親戚も、他人行儀で、感情を露わにすることはしなかった。

「そんなこともできないの!？」

それでもこの一族の者かと呆れる教育係。

「ごめん、なさい……。」

何もかも、私の望んだ世界ではなかった。

同じ年頃の子たちの様に外を駆け回ることも、友達を作ることすらできずに。

そして何をどう勘違いしたのか、私は他人から溺愛されていたように見られていたらしい。

……愛されていたのは私の姉なのに。

「姉様！」

「シュヒアル。」

双子の私の姉。そっくりな私たち。

同年だから名前で呼んでって姉様は言うけれど、私はそれはできない。

それが決められていたことだから。

何をしようと、私は姉様と比べられた。

でもそれがコンプレックスとなることは無く、私は純粋に姉様を尊敬していた。

何でもできる私の姉様。私が悲しい時も辛い時も一緒に居てくれた姉様。

母様のお腹の中からずっと一緒にいた私だけの姉様。

なのに。

「え？」

私の家は、その当時恐れられていた連続殺人事件の現場にされてしまったようだ。

そして、標的は……

「姉様？」

ずっと一緒に居たのに。

私が泣きそうになったら私の手をそつと握ってくれた姉様の手。
私の姉様が、居ない。

何処にも、居ない。

「姉様……？」

欲しい物は何でも買い与えられた。

鬱陶しそうに父と母がそれで気を晴らせとでも言うように。
お金が必要な物は何でも与えられた。

でも、本当に欲しい物は姉様だけがくれた。

「ねえ……さ、————ッ！！」

不意に手を強く握られ、引っ張られた。

「どうしてあの子が死んだの！？」

手を引く先に居たのは

……母様だった。

「母さ……」

「黙りなさい！ 貴女にそんなこと言う資格は無いわ！！」

「……ッ」

手にさらに力が込められた。
私はその手を振り払うことができなくて。
ただただ、痛みを耐えていた。

「どうして貴女じゃないの！」

悲鳴のように、母様は叫んだ。

目一杯に開かれていた目が充血していた。

泣き腫らした眼は、痛々しくて、胸が痛んだ。

「どうして貴女は生きてるのよ！」

どうして貴女が死ななかったの

そう言われた気がした。

頭の中で母様の言葉が反響を起こした。

何度も、何度も何度も。

私の頭に響いて私を追い詰めていく。

（私は何で生きてるの？）

姉様は死んでしまったのに。

ずっと一緒に居たはずなのに。

（何で姉様は死んだの？）

私の方が役立たずなのに。

姉様の方が……皆に愛されていたのに。

（何で、母様は泣いてるの？）

――・・・私が、要らない子だから。

「・・・う、あ」

嗚咽が零れた。

涙が、溢れた。

（痛いよ、母様。）

手に食い込んだ爪が、血を滲ませる。

それでも、母様は手を掴んだままだった。

（なあ、嬢ちゃん。）

その時、聞きなれない男の低い声がした。

ゾッとするほど、恐怖とは違う何かを思わせる声。

（俺はお前の心の叫びに呼ばれた。）

（心の・・・叫び？）

（お前、自分が憎いんだろう？）

（――――ッ！！）

何かが、悲鳴の様な音を出した。

（そうだ・・・。）

今泣いてるのは、母様が掴んだ手が痛いからじゃない。

姉様が死んでしまったからでもない。

・・・自分

が要らないと思ったから。

誰かの為でもなく、自分の為に泣いている。

あんなに可愛がってくれた姉様の死を悲しむわけでなく。

（私は、醜い。）

（そうだな、酷い女だ。でもな？）

声を、耳を傾けてはいけない。

これはきつと悪魔なんだ。

悪魔の声を聞いては駄目。

何度もそう自分に必死に言い聞かせた。

（お前よりも、悪いのがいるだろう？）

楽しそうな声で、悪魔は言った。

私は目を見開いて、固まった。

（私よりも、悪い人？）

（そうだ。）

知りたい。

自分よりも悪い人を知りたい。

どうしてか、私は悪魔に耳を傾けてしまった。



「ダヴェラ、只今帰還しました。」

扉が勢いよく開かれた。

グラグラになった扉からダルそうに男が入って来た。

「余と謁見をする際は必ず書状を届けろと言ったはずだが？」

「ええ、仰られてましたねー。」

「では何故書状が届く前にお前が来た。」

「ツレナイですね陛下。あと俺、文字書けないんで無理です。」

砕けまくった敬語で喋る男は、飄々としていて緊張感が全く無い。目の前に居るのが恐れ、敬われている現・魔王陛下だとしても。物怖じせず、その男は結構堂々とナトスの前に立っていた。

「無礼な・・・！！」

アリファスはナトスに対するダヴェラの態度が気に入らないらしい。

「さて、余は聡明で心優しいから言い訳をする時間を与えよう。存分に言い訳を並べるが良い。その後でその首を余の自室に飾ってくれよう。」

「弁明って言うてくださるとありがたいんですがねー。俺困っちゃいますよく？それと、まだ胴体とさよならしたくない上に陛下は心優しいかも疑問なんですけどね。まあ、でも陛下の部屋に飾られるなら本望」

「考え直してください魔王様。」

アリファスが無表情で早口に言う。

「ていうか陛下頭打ちしました？なんか面白い感じになってますよ。」

「うるさいですよ鳥頭。貴方は喋らないでください。」

「あれ、俺陛下に話しかけたのになあ。」

「少しは緊張感を持ってください。魔王様の御前です。」

「お前はもう少し軽くなった方がいいと思うぞ。それとその堅苦しい敬語やめろ型物男。」

「うるせーんですよ鳥頭。さっさと報告してくれます？」

ダヴェラは面白そうに笑いながらアリファスを見た。

「ああ、忘れてた。陛下、面白いモノ見つけましたけど聞きます?」
「……ほお?」

I t s e e m s t o b e i n t e r e s t i n g .

アリファスは憂鬱そうにため息をついた。

L v. 50 悪魔たちの談笑（後書き）

I t s e e m s t o b e i n t e r e s t i n g .
.
.
.
面白そうだ。

魔王様御乱心（笑）

L v. 51 脱獄計画模索前の遂行

最初は面倒だった。



「地上の制圧までどれくらいの時間がかかると予測しますか？」

「予測したところで何の意味がある。」

「ですが、推定時間を伝えて欲しいと公爵様が。」

「お前が仕えているのは公爵か？それとも私か？」

「！・・・貴女様でございます！！」

怯えを含んだ声で、少女は答えた。

悪魔といえど、圧倒的な格の差は恐怖ともなる。

「この話はもう良いだろ？私はあの敬語野郎に呼ばれているんだ。」

「アリファス様ですか？」

「ああ。今私に地上の全権があるだろ？だからあいつが私にその権限で動かしてほしい案件があると言ってきた。」

「そ、そんな重要なことを私などに話して良いのですか？」

「良いだろ。あいつはそこまで気にはしない。」

ディジラウは興味無さそうに目を閉じた。

「ですが、案件は審議に通さなければ・・・」

「審議にせずとも案件を一つ決定するくらいの権限が今の私にはある。」

「そんなことが可能なのですか・・・？」

「可能だ。まあ、歴代魔王陛下では成し得なかったことだが。」

歴代の魔王ですら、審議にかけずに案件を通すことはできなかった。根回しと長い審議の末に、やっとのことで案件は成立、または破棄されてきた。

たとえば、案件の提示者が魔王本人であったとしても。

「地上とさして代わりの無いことだがな。」

「そうなのですか？」

「ああ。ちなみに私と同じく上級貴族を無視し勝手に案件動かしたり統治を王の預かり知らぬところでやれば処刑される。表沙汰にならずとも周りは何となく気がついて忌み嫌われる存在になってしまうとか・・・。」

「だ、大丈夫なんですか？」

言ったところでディジラウは心底楽しんでいるような笑みを浮かべていた。

（ど、どうなされたのかしら。）

なんだかいつもより表情が豊かだ。

地上の人間の土地に遠出した際に何かあったのだろうか。

「あ・・・。」

ディジラウの髪から耳飾りが垂れる。

長い髪で隠されていたらしい。

とても美しい装飾で、薔薇の蕾を象った耳飾りだった。

「よくお似合いです。ディジラウ様・・・。」

「?・・・ああ、これか？」

何故か左耳にだけ耳飾りを付けていた。

耳飾りは片方だけなのに自然な感じがした。

「でもどうなさったのです？」

「全く知らない男から貰った。」

「男の方・・・ですか？」

何だか表情が微妙だ。

何か引っ掛かることでもあったのだろうか。

「どうした。」

「いいえ・・・ただ・・・。」

「？どうした。」

「いえ、いいんです。」

拗ねたような顔をしている。

何がそんなに気に喰わなかったのか。

（男から贈り物を貰ったことがない・・・とかか？）

でも露骨に表情を出すほど気に喰わないのか。

むしろ私はこれを無理やり与えた男が気に喰わない。

（それに・・・あの男がこれを与えたのは私ではない。）

きつと、ディジラウに似ているという、記憶の中の女に与えたのだろう。

死去してしまったという女性の品を与えるのだから、まず間違えない。

むこうも知らず知らずのうちにディジラウにその女の面影を重ねていたのだろう。

『恋人・・・だったら、どれだけ良かったでしょうね・・・。』

口にした言葉と、あの泣き笑いの様な表情が脳裏を掠めた。
哀愁を帯びた、仕草と表情。

けれどそれにすら彼は気がついてはいなかった。

(・・・愛していたのか。)

何か理由があってその手に留めて置けなかったのか。

恋人にすらなれないまま。

それとも想いを打ち明ける前に先立たれてしまったのか。
どちらにせよ、言えることは一つだった。

(私とあの男はどこか似ているな。)

遠くに想っている人がいるということが。

何も打ち明けられないまま終わってしまいうことが。
傍に居たいと心から思っているのに叶わないことが。

(面倒そうな男だったな。)

きつと、もう会うことすらないだろうけど。

それなのに、まだあの表情が消えない。



「火に油を注ぐって何もリアルじゃなくてもいいと思うんだよね。」

「すまん。ミスった。」

「ミスどころの騒ぎじゃないと思う。」

「まさかあんなところに油が置いてあるとは・・・。」
「話聞け馬鹿兄貴!!」

テイザが水を具現化したところまでは上手くいっていた。
囚人たちも力を合わせ、鉄格子をたたき割った。
何だか人間離れたことばかりだが。

「俺が出てきた途端なんかこいつが脱力した。」

（それで水の出力が弱ったと・・・。）

「そのうえ消えかかったた炎の上に油をぶちまけたと。」

結果、監獄が全焼。

どこまで馬鹿なんだ。

同源力がたとえ、仮に、不本意だけど僕だったとしよう。
でもその同源力が灰になるかとか考えなかったのか!!

「違う意味で灰だけだな。」

「本当弟好きだよな。」

（だったらウラキも弟でしょ?）

「やめろ嫌だ全力でその兄弟の縁を引きちぎる。」

（ちよ、意味わかんないよ大丈夫?）

さすがに（無理やり）前向きで（ウザすぎる程）ポジティブな兄さん
も自分の失態を反省しているようだった。

「キサラに怒られた・・・でも可愛い。」

「本当お前の兄貴進歩しないよな!!」

（だからウラキの兄さんでもあるって!!）

だが幸い、死者も出ず、怪我人は一人も・・・

「自重しろそれとてめーのせーで死ぬかと思ったですー。」

「うわやめろジェリエ坊それ結構痛いから・・・がふっ」

早口で喋る兄さんに容赦なく棍を叩きこむジェリエ君。

（怪我人一名・・・っと。）

「いや今絶対全員がやりたかったことをあいつがやったよな。」

（さすがだなー。やっぱり見習おう。）

「それだけはやめて。」

なんで。と聞こうとしたけどそんな時間も無く。

「おい！看守たちが戻って来たぞ！！」

「うへえ・・・またどっかに閉じ込められるのあごめんだ。」

「でもどうする。こんなんじゃすぐ捕まるぞ？」

「ほんでこの辺にはまだ俺らよりすんげえ凶悪犯が・・・」

逃げ出した囚人たちはかなり混乱していた。

「一難去ってまた一難・・・言葉どおりだな。」

なんとなくウラキが遠い目をしていた。

とりあえずスルーしておこう。

「ねえ、僕にちょっとした案があるんだけど。」

キサラは聞き入れてもらえるかはわからない危険な賭けにでることにした。

I
w
a
n
t

t
o

e
n
j
o
y

i
t

a

l
i
t
t
l
e
.
.
.
.

L v. 51 脱獄計画模索前の遂行（後書き）

I want to enjoy it a little . . .
少しくらい楽しみたい。

だんだんキサラが兄に冷たくなっていきますね（笑）
敬語野郎で通じちゃってるよアリファス（＾w＾）

L v. 52 側近たちの相談相手

何かが間違っているとしたら、それはきっと私自身だ。



「うっわ、本当に変ですよ？大丈夫ですか？」

「余はいつもこうであろう。」

「いっつも俺の土産話なんて聞いてくれないじゃないですか。へーいーかー。」

「黙りなさい鳥頭。その馴れ馴れしい態度を改めなさい。」

「その敬語野郎ダメレ。俺は陛下と話してんの。おーけー？」

にやにやと笑いながらダヴェラはアリファスも見ずに話す。

（なんなんですか本当に・・・！）

とってもムカつく。殴り飛ばしてやりたい。

（魔王様が・・・すっごくこっち見てる！！）

しかもなんか不思議そうだ。

「・・・面白いモノとは何だ？」

「おっといっけね。そうでしたそうでした。」

ダヴェラが少しだけ玉座に寄って来た。

（来るな来るな来るな）

アリファスが念を送っていることにすら（鈍感だから）気がつかないまま近づいてくる。

と、その時・・・

思い切り扉があげ放たれた。

（あー。あの扉もう取り換えなければいけませんね。）

ダヴェラが馬鹿力で開け放ったすぐ後にこれだ。

あまり長くはもたないだろう。

「魔王様！ダヴェラが帰還したとは誠にござりますですか！？」

「あれー？どうしたのー、変な言葉口走っちゃってー。」

「魔王様の御前だとさっきから言ってるでしょうが！！」

（あーもーマトモな家臣は居ないんですか！？）

結構マトモ・・・だが自分の好きなものことになるのとことん壊れるのはアリファスと同じことは言うまでも無く・・・。そういった面では案外似た者同士だったりする。

「ふえああ！こん、こんにちはきよ、今日は随分とお元気そうだしゆね」

「アナタは大事なところで噛むほど具合が悪いんですか？」

「そういう意味じゃないと思うぜ少なくとも俺は。」

冷静とは言い難いが、ダヴェラがアリファスにツツコミを入れる。

（ダヴェラの帰還は少なくともアリファスには有効・・・か。）

図らずともとても好ましい情報を手に入れた。

よし、もう少しダヴェラは生かしておこう。決めた。

「ま、また今日は天気も良く・・・。」

「外の様子ご覧になりました？雷とか落ちまくってますよ？」

「落ちまくってることにお前は違和感感じないのか。」

「わ、私はあの世までハイウェイできそうなテンションでしょう。」

「人の話聞いてくださいハイウェイってなんですか鳥頭。」

「俺かよ俺に聞くなよ。お前が解らないこと俺が解るわけないだろう？」

「それもそうですねさようなら死んでください。」

殺意を隠そうともしない。

（なんて奴だ。うわ、俺今傷ついた。）

「最近敬語野郎君かなり口悪くなりましたね。陛下疲れませんか？」

「お前たちと居ると肩がこる。」

「うっひょーはつきり言いますね。」

（それにしては楽しそうだな……。）

実際楽しいのだろう。

（うわ本当があったんだろ……俺すっげ、陛下と会話してる。前までは自分が一方的に話しかける形だったのに。

それが今！魔王陛下が直々に応答している！！

（そうだ今までがおかしかったんだ。）

大体何で魔王陛下に話しかけてるのに側近が応えるんだ。それもすっごく私情混ざりまくりの。

「まったく……公私混同っていう言葉について真剣に考えて欲しいですね。」

「お前がな！！」

（お前だって側近だって立場のくせに陛下に恋情向けてんだろーが！）

ちなみにアリファスの恋愛相談相手はダヴェラだったりする。

喧嘩に似たことはするものの、交友関係は比較的良好、親友と言っ

ても違和感はない。

（ま、他人から見りゃ信じらんねー関係だけだな。）
そのうえ、ダヴェラはディジラウの恋愛相談相手でもある。
（まったくこの側近どもは・・・主従関係を勘違いしてるのか？）

そして・・・先程部屋に入ってきたのは魔族ではなく悪魔。
だが珍しいことに人型で、両性。
今後はダヴェラの予想するところでは女になると思われる。

（こいつアリファス大好きだもんなー。）
そして可哀相なことにアリファスは魔王様LOVEなため他は一切
眼中に入らない。
というか好意すら抱かせることですら困難。

（おっしいなー。顔は良いのに。）
大抵魔族も悪魔も顔は良い。顔は。
でも中身は悪とか・・・なんというか、曲者ぞろいである。
そのためか、特定の誰かに好意を抱かせるのはかなり困難。

原因は一樣にその異常なプライドの高さにあった。
強い想いを抱けば抱くほど、自分からアプローチなどはしない。
むしろ早く気づけばバカヤローな感じで、気づかれたらふっきたか
のようにメチャクチャアタックしてくる。
（・・・今更だけど超面倒かつ嫌な種族だな。）

「おっと、また忘れるとこだった、土産話！」
「早くしろ。もう余は業務に戻らねば・・・。」
「天空の波動。」

「「・・・・・・・・!!?」」

その場に居た三人は各々の動きを止めた。

玉座から立ち上がり、自室に戻ろうとしたナトスも例外ではない。

「天空の波動を持つ少年を捕獲。」

ニヤリとダヴェラ独特(?)のいやらしい笑みを浮かべ、楽しそうに言う。

「どうです? 魅力的な話でしょ?」

「・・・・・・・・。」

(まさか・・・・・・・・。)

ナトスの脳裏に、あの笑顔と涙が閃く。

思い出した優しい時間が、心地よかった。

(キサラ、か?)

心当たりはある。

『・・・・・・・・僕、今捕まってるんだ。』

・・・・・・・・イラッ。

誰かを心配してるキサラが嫌だ。

(余が居る時に・・・・・・・・他人の話など・・・・・・・・。)

ムカつく。今すぐキサラをさらってきたい。

さらって、隠して。自分以外の者にキサラの姿を見せたくない。

自分以外の存在をキサラの瞳に映させたくない。

今なら、キサラを取り巻く環境を嫉妬だけでぶっ潰せる気がする。

我ながらすごい執着心と嫉妬・・・・・・・・ちよっとひいた。

（なんだ・・・いつの間にか惚れ薬でも盛られたか？）
どうしてこんな短時間で。

（ああ、でも。）

名前を呼ばれたのは嬉しかった。

本来の名前を本当に失うところだった。

たとえば、キサラが呼んだのが本来の名でなくとも。

それは、ナトスに大きな意味を与える。

何もかも、彼に支配されそうになる。

でもそれでも良いと思っている自分は・・・愚か、だろうか。

・・・I do not still mind.

そういうときが一番自分らしい。

L v. 52 側近たちの相談相手（後書き）

・・・I do not still mind・・・それで
もかまわない。

これもう一つサブタイトルをつけるとすれば相談相手を間違えた側
近たち。ですね。だって恋敵（？）と同じ人に相談してるんですよ？
なんですかそのミラクルは。（あんたが仕組んだんだろ

・・・なんかまた増えましたね。でも反省してまs（ry

L v. 53 打開への一手を

いつだって、あいつは自分から危険を被っていく。



「ねえ、僕にちょっとした案があるんだけど。」

真剣な空気を纏っているのに、どこか楽しそうに笑うキサラ。
その笑顔は純粹さはあるものの、今までの笑顔とは少し違っていた。
まるで、キサラの父親のような不敵な笑み。

（うっわー、絶対親父と似てるとこないと思ってたのになー。）

意外と似てる。

そういえばキサラの行動にどこか彼を彷彿とさせるものが・・・。
今までは完璧母親似だと思っていただけに、なんだかショックだ。

「ちょっとした案でもなんでもいいですー。」

ジェリエはその笑みを見てから少し考え、その案を聞くことにした
ようだ。

「案っていうよりは・・・賭けなんだけど。」

「博打は駄目なんじゃなかったか？」

（何言ってるの。賭けごとでしょ。）

「自由の賭けか？それとも命の賭けか？」

（多分両方。）

ぶっちゃけ博打と賭けごとの違いはよくわからない。
でも、こっちは真剣なんだ。この際仕方がない。

「賭けごと、ね……。ま、言ってみろ。」

テイザが（偉そうに）促す。

態度がムカついたが、今は一刻を争う事態だ。
ほっとこう。全力でほっとこう。

「ここは目立つから、とりあえず森に入ろう。其処から話し合おう。」

キサラの意見に反対する者は無く、皆頷いて森に向かって歩いて行った。



「まず、この場所が解らない。地図が欲しいところだけど……」

「俺はこの出身だ。ここの地理なら任せろ。」

一人の男が前に出てきた。

それに続いて別な男も出てくる。

「俺もここで仕事やとった。道案内ならできるで。」

「ありがとう。じゃ、道案内は二人に任せようか。」

「で？キサラ。何処に行くんだ。」

「監獄を管理していたところがあるはずでしょ？其処に行く。」

キサラのその言葉で、周りがざわめいた。

だが、見つかったらまずいので、あくまで静かなざわめきだった。

「なんでわざわざ捕まりに行くような真似をするんだ！」

「そうだ！せっかく自由になったってのに。」

「俺はあんたらに感謝してる。あそこから出られたんだからな。」

一人、年若い男が前に出てきた。

「でも、今回は抜けさせてもらう。そんな馬鹿なことに付き合っちゃられねえ。」

「別に馬鹿なことじゃないよ。」

キサラはゆつくりと瞑目した。

（ウラキ、ごめん。ちょっと今から僕ウラキの真似するね。）

「は……？何言って」

「俺が言ってるのは、これからのことだ。」

「これ……から？」

口調と喋り方が一変したキサラに驚きつつも、男は聞き返した。

「そうだ。お前らの名簿ぐらい管理してあって当然だとは思わねえか？」

「あ……そ、それは。でもだからどうした。」

「あの牢に閉じ込められて考えることすら忘れたか。」

「あ、解りましたー。」

ジェリエが緊張感皆無の声を上げる。

一斉に注目がジェリエに向かう。

「キサラさんの言うとおりですー。管理所に行かないとまずいですー。」

「そうだな。キサラの言うとおり。でも行かねえ奴はどうでもいいわ。」

ジェリエとテイザがキサラの隣に行く。

キサラの意見に賛成派、反対派が見事にわかるような立ち位置になった。

今のところ、テイザとジェリエだけ。

「どういうことか説明が必要か？　と思う。テイザ。」

「……さあ。ま、混乱してるのもいるみたいだし、言ってあげれば。」

「そうですねー。冷静な皆さんならお察しもいいことー今の状況わかってるはずですよー。」

「誰に話しかけてんだよ。」

「で、どういうことか説明してくれんだろ？」

「つまりこういうことだ。テイザ。」

「え、俺も説明すんの？　ま、いいけど。」

渋々(?)といった感じでテイザが話し始める。

「つまりだ、牢に入ってた奴の名簿があれば追手が来る。」

「全焼したって死体が見つからなけりゃ馬鹿でも逃げ出したってわかるだろ。」

「ここで逃げお失せても後からまた捕まるかもですよー。」

そこまで聞いて、男たちの顔が蒼白になる。

あれだけの設備だ。追手にも相当な者が用意されているはず。

「で、でも塵も残らない程燃え立ってことにすりゃ……」

「それは無理だろ。」

「な、なんで。」

「骨までは燃えることがないからだ。」

「火葬でも骨までは燃えないだろうが。」

「たとえば骨が燃えるとしたら、相当な高温、または低温で長時間熱するしかない。」

「そんな高温を用意するには巨大な窯が必要。」

「低温の場合は長時間。もう鎮火したから骨まで燃えるのは無理だろ。」

キサラとテイザが代わる代わる説明していく。
さすが兄弟といったところか、息が合う。

「どこからそんな知識持って来たんですかー。」

「さあ、忘れた。あ、ほら俺博学だから。」

「なんだそうか？初耳だ。」

答えははぐらかす。でも博学なのだけはあってる気がする。

「無駄な知識腐るほど持ってるもんな。」

（無駄って・・・まあいいけど。）

「つまりすぐに追手は来るわけ。今の状況わかった？」
テイザが半ば無理やり話を締めくくった。

「だからただ逃げるだけじゃ意味無いつてわけ。」

「それと名簿から名前を消せるのはそれが害の無い者だけ。」

「冤罪で捕まった人が多いみたいですけど本物の囚人さんもいるみたいですねー。」

（（それはあんただろ））

「行くしか・・・なさそうだな。」

先程道案内を買って出た男が言った。
覚悟を決めたように、賛成派の方に歩む。

「俺はまた捕まるのは嫌だ。妻子が待ってる。」
もともと冤罪だったとも言った。

「牢に居る間、妻子を片時も忘れたときは無かった。だから帰る。」

帰るために行動を起こすのだと。

その男は言った。

「何もしないでただそこにあることをお前たちは選ぶのか？」

まるで自分にも問いかけるように。

キサラは小さく、呟きを落とした。

Even if it is useless...

行動しないよりは良いと思う。

L v. 53 打開への一手を（後書き）

Even if it is useless . . . たとえそれが
無駄だとしても

キサラ君はウラキの真似をして（いるつもりで）います。^^
普段のウラキとの違いがわかる人とか多分いません。
わかりづらいなー（苦笑）

L v. 54 取り返せぬ過ち

私の望むモノは与えられた。でも一番欲しいモノはまだ誰からも与えられていない。



（私よりも、悪い人・・・。）
何度も私の中の私に問いかける。
それは誰かと。私は結局その答えを出せずにいた。

（知りたくはないか？）

悪魔は、囁く。

甘い甘い声で。甘い甘い誘惑を。

そうすれば、私は楽になるのだと。

（それは・・・誰？）

私は悪魔の声を聞いてはいけないと思っていた。
でも、それ以上に、強く願っていた。

たいと。

・・・楽になり

そしてそれを感じ取ったのだろう。
悪魔の笑い声が、響いた。
低く低く。甘く甘く。私を誘惑するように。

（目の前に居るだろう？）

私のせいではないという逃げ道を。
それを求めていたのかもしれない。
それなのに、どうしてこんなにも苦しいのだろう。

（母様・・・が？）

（そうだ。）

悪魔は断言した。母様が悪いのだと。

（どうして？）

今思えば、否定したかったのかもしれない。
弁解してくれることを願っていたのかもしれない。
「誰のせいでもない」と。
そして、悪魔がそんな慰めを与えるはずもなく。

（愛さなかっただろう？お前を。）

その一言で、何かを抉られるような、鋭い痛みがした。
痛みは少しずつ大きくなっていく。
私は悪魔の言葉を否定せずに受け入れてしまった。
それを愚かなことだと知らずに。

（愛さなかったのは誰だ？苦しみを与えたのは誰だ？）

悪魔は数段面白そうに、声を出した。
嘲笑うかの様な声は私の感覚を麻痺させた。

（そうよ・・・愛さなかった。）

（誰が？どうして。お前はそんなに頑張っているのに。）

（そう・・・頑張っていたわ。）

（決して愚かではないのに、お前はいつも姉と比べられた。）

悪魔は、私を愛して、私の愛した姉をも侮辱していた。

本来は知るハズの無いことを知り過ぎている。

しかしそれに気づくこともなく。

（姉様は私を愛してくれたわ。）

（愛？本当に愛なのか？）

悪魔は私に問いかけた。

（どういう・・・）

（そのままの意味さ。）

私は考えた。そして、考えている間にも、悪魔は私に囁き続ける。

私が少しだけ持っていた不満そのものを。

そして、私は思うように転がされる。

（同情しただけじゃないのか？）

（私に・・・同情？）

（そうさ。あるいはお前に合わせて演技していたのかもな。）

そんなこと、考えもしなかった私は混乱した。

そんなことはないと否定することもできずに、最後に言葉を投げかけられた。

（なあ・・・悪いのは、誰だ？）



「兄さん!!」

「キサラ! ちょ、待てって今のは・・・」

「自重しろっこの変態ー!!」

(ああ、怒ってる顔も可愛いな。)

いっそのことここでこいつと地の果てまで・・・おっといかん。

「ちっ・・・」

「舌打ちするな! 不意打ちは卑怯じゃねーかジェリエ坊。」

「その呼び方やめてくださいー。」

「おっと。」

ひらりとジェリエの棍をかわす。

結構早いんだが。本気なんだが。

(目が血走ってるな〜ジェリエ坊。)

本気の棍は今までの比ではなく。

(今まで手加減してくれたってわけか。)

ありがたいな。とか思わなくもない。

「キサラ!」

「ふはははは! 跪け! 下僕その1!!」

「げ。」

何故かウラキに変わっていた。

それはない。ちょ、二人いっぺんに相手にするのはキツイ。

・・・というかキサラの相手ならいつでも大歓迎。

（でもこいつ今ウラキだしなー。）

うーん。（悩みどころが違う）

「ごめんて！キサラ。ウラキ、キサラだして。」

「誰がお前の言うことなんか聞くものか。」

「なんで。てか俺らここでこんなことしてる場合じゃないだろ？」

「何を馬鹿な。話が逸れた原因は自分だということを忘れたのか？」

「いや、確かに俺のせいだけださ。」

そんなに全力で怒らなくても良いと思うんだ。

そもそもどうしてこんなことになっているかというところ・・・

それは少し前まで遡る。

『で、こちらから回り込めば見張りは少ないはずですよ。』

『へー。なんでそんなこと知ってるんですかー？』

『この裏の畑で農業をしていました。』

『そんなに若いのに都に行こうともしないのですかー？』

『はは・・・農業っていうのも楽しいものだよ。』

そんな会話を道案内（名前忘れた）とジェリエ坊がしていた。

なんというか、ほのぼのとした空気。

で、そこで事件（？）は起きた。

『おい、キサラ。もう少し早く歩け。二人から逸れ・・・る。』

『何？兄さん。ごめん聞こえなかつー！』

『『『あゝ。』』』

木の根に引っ掛かって倒れそうになるキサラを反射的に抱きとめる。

そういえば昔っから危なっかしくって冷や冷やしてた。

特に足元に気を配らないからしょっちゅうこけまくって……。

可愛いキサラの美しい（美化されてる）思い出に浸っていた。

あの頃は反抗もしなかったし俺を変態呼ばわりしなかった。

そうだ、そもそも何で俺今変態扱いされてるんだ。（A：本性を現したから。）

そんな感じでぐぬぬ……と考え込んでいた、ら。

不覚にも、キサラと目が合って。

この、なんというか……な。

つい、手を出してしまった。

『ちょ、何して……』

『んー？ いいじゃん？ 兄弟だし。』

『いや余計ダメでしょ。』

『ダメレ部外者。』

びしっと案内役の農業者君を指さす。

そこで、何かがぶちりとキレる音がした。

それも盛大な。

『変態がー！！！！』

ジェリエ坊だった。

ちよっと待てなんでお前が怒る。

考え直せ。俺が手を出すのは後にも先にもキサラだけだ。

お前には間違っても手をださん。

で、今に至ってますよっと。

つか何でお前らの目も血走ってんの。

兄弟ってことに「義兄様^{おにいさま}！」とか叫んでる奴もいるし。
え、誰だ今の前に出ろ！

いつの間にか俺にはライバルが増えていたようだ。
今のうちに潰すかうわジェリエ坊邪魔スナ。

I t i s s t r a n g e !

よし、片っぱしからとりあえずT U ・ B U ・ S U ☆

L v. 54 取り返せぬ過ち（後書き）

I t i s s t r a n g e ! . . . おかしいだろ！

一番おかしいのはテイザだと思わ r (r y

取り返せぬ過ちっていうサブタイトル見方変えれば

取り返せぬ過ち||変態の頭ですね w w w w

L v. 55 狂おしい存在

貴方のために私は全てを捨てることができるでしょう。でも、貴方は私の為に全てを捨てることはしない。

何故なら、貴方は私ではない誰かを愛しているのだから。

◇

「魔王様！」

ディジラウがダヴェエラにも負けない勢いで扉を開け放った。そしてグラついて不安定だった扉はついに壊れてしまった。

（あー・・・やっぱり。）

扉の修繕費はディジラウの魔力から差し引いておこう。とりあえずディジラウの魔力を少し奪えば修繕は楽だろう。（私は自分の魔力乱用するなって言われてますしね。）

理由はいくつもあったが、一番の理由は

城を落城させかねないからだ。

ナトスを殺すことはなかったとしても、城の破壊はあり得る。彼は過去に殺戮の暗殺人形と称されるほど、殺戮を繰り返した。それも高等な者も魔力の膨大な精鋭たちをも一蹴。どんな戦士にも勝利を収めてきた。そして、その戦闘の姿はまるで・・・

人形。

何も感じていない目。

何も恐れないその動き。

何も無いかのような静かさ。

それと同時に

何者にも思考を許さない疾^{はや}さ。

何者にも引けを取らないその残虐さ。

異常な程の素質。

王には劣るとも、彼は武人としては最強であった。

しかし、武人に必要な“心”だけ、彼には足りなかった。

そしてそれを己が知っているからこそ、軍には配属されなかった。

また、魔力の乱用は彼の箍を外すことを意味していた。

使えば使うほど、経験を経て彼がこれ以上の力を手にするのは他の臣下が許さなかった。

それらの理由から、彼は魔法が使えないよう“封”をされている。

緊急のとき以外には使用できないように施された強力な。

そしてそれは魔王が直々に行った術であり、彼が自ら外すことはない。

それが彼との最後の繋がりになるということを知っていたのだから。

（……でもたまには放出させないと。）

体内で膨張し、それこそ取り返しのことになりかねない。

「魔王様、ドアの修繕に私の魔力を。」

「……よからう。来い。」

「ありがとうございます。」

正式な礼をし、玉座へと歩み寄る。

そして、ナトスの前で跪く。

その間、ナトスに用があつて来た筈のディジラウは口を開かずに壊れた扉の前にただ立ち尽くしていた。

「力み過ぎだ。少し力を抜け。」

「は、い。すみません。」

知らず知らずのうちに全身に力が入っていたらしい。

慌てて力を抜こうとゆっくり息を吐く。

ナトスはその様子を見ようともしせずに、扉に目を向けた。
扉の修繕及び強化をした方がよさそうだ。

「お願い致します。」

「……。」

アリファスがゆっくりと瞑目する。

それに合わせ、ナトスがゆったりとした動きで片手をアリファスの頭上に翳した。

次いで空気の抵抗を受けながら、アリファスの頭部に触れる。

ただ無言で、彼の魔力を全て奪わない程度に取り除いた。

淡い光がナトスの左手に集中する。
魔力の片鱗が彼の左手に移ったのだ。

「退^のけ。」

ディジラウや悪魔、ダヴェラに言う。

が、退き切るまで待つつもりも無いので半ば強制的に魔力でそこから退かした。

ゆっくりとアリファスの頭から手を離す。

そして、扉へ同時に二つの魔法をかけた。

「おーおー。相変わらず手際のいいことで。」

「それで、ディジラウ。用件はなんだ。」

「むーしーでーすーかー？褒めたのにー。」

「態度を改めなさいダヴェラ！」

すぐさまアリファスが振り向き睨みつける。

（あららー、無理しちゃって。）

このカッコつけ。魔力抜いたんだから安静にしてろ。

「おー恐え顔。ほら、ベラ。俺らは行くぞ。」

「ふへあ！で、では陛下、あ、ああアリファス様、ワタクシはこれで！！」

するとアリファスは不思議そうな顔をした。

が、一応挨拶されたので「はあ・・・」とだけ答えていた。

どこまで可哀相なんだベラは。全然気づかれてない。

「ま、さっきの件でまた聞きたいこと興味あったらいつでも俺まで

どうぞ?」

そう言ってダヴェラは上機嫌で直されたばかりの扉から出て行った。

「気持ち悪いよダヴェラ。」

「何言ってるんだお前。何がハイウェイだウジ虫。」

「はっ、お前わかってないな。」

玉座の間とはかなり態度や口調が違う友人を横目で見る。

たまに二重人格じゃないかと思うが、たった一つの人格なのだ。

(これホントおかしいよな。)

「あの麗しいアリファス様を見る!絶対俺が・・・」

「へいへい。敬語男が好きなら勝手にどうぞ。で?俺に用って何。」

「それがだ。さっきの天空の波動の坊ちゃん逃げたぜ?」

「何?！」

天空の波動の持ち主をそこに留めておくために彼の牢の鉄格子だけ特殊な魔法をかけておいた。

自然に解けるわけでもなければ持ち主本人は覚醒していないはずなので、簡単には破れないはずだ。

その上で、彼が脱獄に成功したとなると・・・。

「テイザか・・・!!」

「ん?ああ、お前が数年前に殺り損なった奴か。」

「あいつが覚醒した可能性がある。」

「ぶっ・・・馬鹿だなお前!てか不運!」

言われるまでもない。自分でその不運をビシビシ体感中だ。

何故あのとき殺さなかったのか・・・不思議だ。

（あのときは俺も青かったからなー。しゃーない。）
勝手に開き直る。というかいつまでもウジウジ言っても事実が変わるわけでもない。

「天空の波動の少年とテイザは“討伐者”の末裔だ。」

「!?!?・・・お前、其れは本当か？」

「ああ。どこまでも縁がありそうだ。あのバカ息子とは。」

「ん？バカ息子ってテイザとかいう奴か？」

「いや？天空の波動の持ち主の方。」

返答が意外だったらしく、ベラは不思議そうに見上げる。

「お前も悪魔なら考えてみるんだな。」

下等な悪魔なはずなのに俺とタメはってんだからな。

B u t I s e e m t o b e i n t e r e s t i n g .

楽しみにしてるぜ？テイザ。

L v. 55 狂おしい存在（後書き）

B u t I s e e m t o b e i n t e r e s t i n g . . .
だが面白そうだ

アリファス大好き悪魔さんにも名前ができましたね。^^
ベラちゃん（君）です。両性なので。
口調はなんとなく男っぽくしてみました。

L v. 56 同一になれない表裏を

いつの日かそんな日が来ることは知っていた。



「で、何で俺はジェリエ坊に殴られたわけ。」
しかも棍で。痛いぞあれ結構。

（殴られたのに殴った方なんかまだ不機嫌だし。）

不機嫌になりたいのはこっちなんだが。

というか何でこう皆キサラの周りに群がってるんだ。散れ。
でも何気にベストポジに居る俺。さすがだ。

「きもいんですよ変態ー。」

「キモいだと?」

お前程じゃねーよ。何でそんな中性的な顔してるんだ。

（さすがに俺は女とかキサラとかに甘いからなー。）

よし、今自覚はあるんだと思った奴前に出ろ。

後ろに下がるなよ? 前だぞ?

あとジェリエ坊がキモい理由と言えば・・・。

「その生々しい敬語とか。」

「アンタは存在自体が生々しいですけどねー。」

「んだとクソガキ。」

（つか敬語が生々しいって自覚あんのか。）

自覚があるだけマシだ。自覚してない方がむしろ質が悪い。

「さてと、移動するよ。」

そういえばさつきウラキが出てきたはずなのにいつの間にか戻った。

キサラも自分に戻るのが早く感じたらしく、不思議そうな顔をしていた。

「おい、ウラキはどうした。」

（とりあえず）様子を小声で聞いてみる。

キサラに何かあったとき確実に守れるのはあいつだ。

・・・かなり不本意ではあるが。

（いや、俺がそれを阻止する。）

「わかんない。全然僕の呼びかけに応えてくれないんだ。」

「ん？それっていつものことじゃないのか？」

「んーん。僕の呼びかけに必ず応えてくれてたよ。・・・毒も吐いてたけど。」

（でも何でだろ・・・少し体が軽い？）

というか楽。疲れが一気にひいている。

「すぐにか？」

「うん。ウラキってなんだかんだ言って結構優しいから。」

主にシーラとかタスラに。

数年ぶりに会話したときとかずっと二人のことを気にかけていた。やっぱりウラキは僕だから根本的なことは一緒なのだろう。

・・・何か兄さんの顔が怖い。

「兄さん？」

「あれも消しとくか・・・。」

「兄さん？」

「いや、むしろ・・・。」

「戻ってこいバカ！」

ブツブツ言われるとなんか恐いんだよ！！

なにこれ僕がこういうの恐いつて知っててやってるの嫌がらせ？！

（そうだった、兄さんって僕が嫌がること大好きだったつけ。）

嫌がらせとかなんか日常茶飯事だもんな。

というか最近さらに度が過ぎる。

「あ、見えてきたぞ。」

ようやく管理所にいたらしい。

ここまでの所要時間4時間。長っ。

休み休み来たから其処まで疲れて無いが、やはりこの距離は異常だ
と思う。

鍵とかが管理されているはずなのに何でこんなに離れてんだ。

「やっぱり看守が居るな。」

「うわ、しかもあの牢に居た奴だ！」

道案内君とキサラの会話。相変わらずキサラ君が可愛いとおm（
ry

てかそこをどけ。お前顔が中の上ぐらいの顔でキサラと並んでいい
と思うのか！

「うーん。あれ、看守以外のものもあるよね。」

「キサラ君、右側と左側どっちから行った方が良いと考える？」
「見張りの位置がわからない限りはどうとも・・・」
「そうですね。」

迂闊に動けないのが辛いところだ。



「お前か、キサラの内にも食っている者は。」
「酷い言い様だな。無理やり連れてきといて。」
「無理やりだと？」

男が訝しげに目を細める。

「貴様は他人のことが言える立場なのか？」
「それ・・・どういう意味。」
「貴様、もうすでに消えていてもおかしくはないはずだが？」
「・・・・・・・・・・」

無言のまま目を見開く。
言葉すら出ない。

「何故貴様はそこまで弱っているながら留まろうとする。」
「それは・・・俺が居ないとあいつが・・・・。」
「何を言う。ならば貴様がキサラと同一になればいいだろう。」
「そんなことをしたら・・・俺もあいつも・・・・」

「だがそうしなければ貴様らは息絶える。」
低く、軽蔑に似た色を含んだ声がウラキに浴びせられる。
そしてその言葉は冷たくウラキを突き刺した。

「貴様だとしてわかっているのだろう。」
それにも関わらず同一になろうとしない。
留まっているが故に無理が生じている。
体に負担が掛り、命が削られていく。

知っているはずなのにキサラを危険にさらす目の前の男が憎い。

それも何も知らないふりをしながら。
自らの保身だけを考えて。

「貴様はキサラに縋っているだけだ。」

キサラという存在に。

独立した一つの人格として。

「それを今、変えてやろう。」
そのために来た。

キサラがキサラであるために。

キサラが目の前に居る男が消えて悲しまないように。
不本意だが、彼が笑っていられるのならそれでいい。
彼が傍に居なくても我慢できる今ぐらいは。

きつとこの男が支えになれる。

「貴様をキサラと違った存在として人間にしてやろう。」
「・・・!?!? どういうことだ。」

驚愕に見開かれていた目がさらに開かれる。

（思考回路が麻痺しているな。）

無理も無い。今まで指摘されず目を逸らし続けていた現実をいきなり突きつけられたのだから。

「貴様という人格に実体を与える。」

そして、キサラとウラキという個々の存在になる。

そうして一つは二つになる。

そしたら、彼の肉体への負担が格段に減る。

・・・苦しみが無くなる。

笑っていて欲しい。

彼は短期間で今まで誰も与えてくれなかったものをくれた。

誰よりも関わりが短くて誰よりも自分を知らない彼が。

だからこそ、与えられたのかもしれない。

e. . . . Therefore I want to give m

想いの形として。

L v. 56 同一になれない表裏を（後書き）

Therefore I want to give me . . .
だから私も与えたい

→は訳しようによって物凄いいことになります^^；
いつもそうですが・・・。

あとサブタイトルは表裏ひょうりと読みます。

表裏だとなんだかゴロ悪い気がしてならない・・・。

L v. 57 余裕な宣戦布告（前書き）

B L ぽいので注意。

L v. 57 余裕な宣戦布告

どうしてこの男はそこまで彼に執着するのだろう。



「迂闊に動けばその場で処刑されても不思議じゃありませんね。」
ちよつとその物騒な考察やめてください。
というか……

「フアリオンさん!？」

そんな屈託のない満面の笑み向けられても困るんですが。
火事を起こした張本人に、一同騒然。動揺の色が窺える。

「我が師からのおつかいでしてね。いや、参りました。」

「参ったのはこっちですよ。火の後始末もしないでいなくなっちゃ
うし。」

「ホントだぜ。お前俺に水海の波動が流れて無かったらどうするつ
もりだったんだよ。」

「おや? いらっしゃったんですか。変態さ……テイザさん。」

一触即発。それも一方的に。

テイザは後ろからキサラの肩に顎を乗せながらフアリオンを睨む。
(いや何でそうなるのさ。)

手はガツチリとキサラの腹部を拘束。動けない。

「ほら、キサラ君が嫌がってますよ?」

「うるさい。他人が俺たちにどうこういうな。」

「たち？ちよつとたちって何！？」

バタバタと暴れるが、意味なし。

ウラキだったらこんなときどうするだろう。

（あれ・・・？ウラキ？）

語りかけても全然答えがない。

少し寂しくて、俯いてしまった。

「キサラ？どうした？」

「ウラキが・・・。」

何処にも居ない。探しても探しても。

（僕がナトスに会いに行ってる時もこんな感じなのかな。）

「ウラキ・・・。」

「俺がどうかしたか？」

「「！！？」」

下の方から声が聞こえる。

びっくりして三人で一斉に下を見る。

するとそこには・・・

「わかった、ウサギだ。」

「いやネコだろ。」

「・・・ウサギでしょう。」

「ウラキだ。」

何これどうしてそんなことになったの。



それは美しい容姿をした男だった。
いつもキサラが心の底で気にかけている存在。

「俺に・・・実体だと？」

考えたことすらなかった。

キサラの体から抜け出して自分という個々の存在になるなど。

「俺たちは、二つで一つだ。」

自分に言い聞かせるようにそう言った。

しかし、目の前の男はそんなことを許すはずも無く。

「貴様はキサラから生まれた。」

眉根を寄せながら、彼は語った。

「貴様がどうして生まれたかなど、聞かぬ。」

それをするのをキサラが望んでいないことを彼は知っている。

「だが、生まれたからには理由がある。」

その理由が知れないことへの虚しさが、彼から伝わってくる。

「そして、貴様の存在する意味はもう無い。完遂されたのだ。
キサラが自分の心の中の闇を消し去ったことによって。」

それはどうやったのか知らないが、いつの間にか消えていた。

そうして最後に残ったキサラの闇が、俺。

「ならばもう貴様はキサラの中に還らなければならない。」
だがそれを拒んだのは俺。

キサラは何も知らないはずなのに、それを黙認していた。

「なあ……。」

そこで、俺は目の前の男に問いかけをした。

「あんた、キサラには優しくしてんだろ？」

（何言ってるんだろ、俺……。）

「何で、俺にはそんなに冷たいわけ？」

（馬鹿みたいだ。）

わかりきっていることなのに。

俺が邪魔なんだ。

キサラの命を削っていく俺が。

キサラにある唯一の闇が俺だから。

「……すまない。」

「いや、忘れてくれ。は？」

何でだ。何で謝られたの俺。

ちょ、悪いのって俺じゃないの？

え、何でこいつ謝ってるの！？

「少し、取り乱した。」

いや非常に落ち着いていらっしやいますよ？

てかそんな顔しないでよ俺がいじめてるみたいだろーが！！

「すまぬ。いきなり消えろだの失せろだの還れだの「ちょっと待て！！」」

アンタそんなひどいこと俺に言ってたのかよ!?

(キサラって本当酷い奴が周りに多いよな!)

人のこと言えねーけどこれは本当どうしようもねーよな!

「でもそれはキサラの為だろ？」

「いや、余・・・私の為だ。」

「What!？」

ちょ、言い切ったよこの人。

「私は、彼の笑顔が好きだ。」

「あれこれいきなり告白タイム？」

そういうことは本人に言えよ。

「だから、その笑顔を見る為に、だ。」

アレ意外と良いこと言ってるっぽいけどそれ結局自分の為的なあれだよな。

「それと・・・ムカついたのだ。」

「ぶはっ・・・げっほおえ、はい?!」

思わずむせた。何。ムカつくって。

俺なにかこの人にしちゃいましたっけ。

「キサラの中に別の存在がいるなど、私よりも近くに誰かがいるな

どと・・・」

苦しそうな顔で、そんなことを言った。
本当に見てる方が切なくなるような顔だ。

（あ、そうか。）

・・・嫉妬してたのか。
だから冷たかったんだ。納得。

そうすると、テイザの今までの俺への接し方とかがわかった。

嫉妬してたんだ。俺という存在に。

「羨ましかったのか。」

「悪いか？」

いやいや全然。

な、なんだろうこの優越感。
この美形さんに勝った感じ。
あと無駄イケメンにも。

「・・・楽しそうだな。」

そりゃそうですよ。

こんなに楽しいことがあるのか・・・ぶっはあ！
考えただけでこれ楽しすぎる・・・！！

「貴様、数分前と幾分か印象が・・・」

「いいえ！そんなことはありませんよう！」

「・・・（イラッ）」

これ以上やったら可哀相だな。
うん、俺弱い者いじめしない人だから。
偉い俺。さすがだ俺。

「とにかく、わかった。」

「何がだ？」

「キサラの為なんだろう？」

俺だって、あいつが笑ってた方がいい。
あいつが落ち込んでいいのは俺のことだけだ。
他は許さん。……だから。

「俺に実体をくれ。」

キサラの顔、真正面から見据えられるように。
キサラのことを、許せるように。

「そうか……。感謝するぞ。」

何やら手元が光ってる。

何かしらの術が俺に施されるようだ。

てか早っなんかわからんがもうすぐ終わりそうだぞ？！

「すまなかった。」

「いや、良いつて。」

とりあえず笑って見せる。

「俺、キサラのこと好きだから。」

「――！！？」

「だから、アンタにも簡単にはやんねーぜ？」

俺ってさ、人格はあいつから生まれたけど・・・
今は別の存在なんだろ？ だったら・・・

「俺があいつのこと好きになってもいいんだろ？」

今までは憎くて憎くてしょうがなかったけど。
そんな感情をあいつに抱くだけ、無駄だ。

「俺はあいつ。だけど俺はあいつじゃない。」

誰よりもあいつのことを良く知ってる。

元々俺はあいつだったんだから。
でも今は、俺は完全な別の存在。

「ま、せいぜい頑張れよ？」

俺も好かれるように頑張るからさ。

「俺に実体与えたこと、後悔させてやんぜ？」

slightly ill-natured?

奪って見せろよ。

L v. 57 余裕な宣戦布告（後書き）

s l i g h t l y i l l — n a t u r e d ? . . . 少し意地悪かな？

ウラキ君暴走。。。。

テイザはこの二人の相手になるんだろうか。

ナトスもウラキも手強いぞ、（犯罪にならない程度に）頑張れ。

L v. 58 動き始めた事態

本当に、この世の中の構造はねじ曲がっている。



『お前に、使いを頼もうか。』

そう頼んだのは小一時間程前のこと。

今頃例の天空の波動の流れた少年と合流していることだろう。
ついでに、水海の波動の者とも。

（全く、面倒をかける弟子だ。）

先程も微力ながら抵抗をされた。
最後には結局折れたのだが。

『はあ！？キサラ君たちのところへ？』

『何だ。何か不満かな？』

『不満も何も！彼らは今！！』

弟子の言いたいことはわかっていた。

でもそんなことに気を使っている程自分にも余裕がない。

『お前が放った火によって四苦八苦していただろうな。』

『そうですよ！しかもそれで今頃は・・・』

『お前の恨み事を連ねながら管理棟を目指しているな。そろそろ着くころではないのか？』

『師匠！そこまでわかつているのならどうして・・・！！』

本当に面倒だ。

こいつらは人に背中を押されなければ前に進めないのかとさえ思う。自分の意志が誰かの助けとなるならためらうことなどないというのに。

『お前が居れば管理棟には楽に入れるだろう。』

だからさっさと行け。

『第一今一番あの場に行きたいのは誰よりお前であろう？』

『っ————！！何故それを・・・！！』

『吾を見くびるな。さっさと行けうつけ者。』

『・・・はい。』

そうして、火炎の波動を持つ吾の弟子は再び合流しに行った。

吾の予言のとおりに。

吾が“視た”未来を阻止するために。



「管理棟？」

「ええ、そこにここの監獄の鍵があるわ。」

シュヒアルとタスラ、シーラは女だけの監獄の潜入に成功していた。本当に女の人しか居らず、ここにキサラがいないのは明白だった。

（どうしてそんなところに鍵を管理するのかしら。）

とにかく、今は情報が足りない。

「シーラちゃん！タスラ君！」

「はーい！」

「ここに居るよ。」

ガサガサと音を立てて茂みから二人が現れる。

さすがに二人は目立ち過ぎるので木陰で隠れてもらっていた。そして隠れている間に監獄の周りの情報収集も頼んでおいた。

「私たちは看守の配置が大体わかったよ。」

「でも説明するにしてもまだここの地形が分かり辛いから直接行かないと。」

「そうね。じゃあまずはこっちの報告からね。」

シュヒアルは二人に管理棟の存在を報告した。

「そこに行けばキサラたちの牢屋の鍵が手に入るんだね？」

「そうね。でもここからちょっと遠いわ・・・。」

「なんでそんな遠くに鍵の保管所なんて作ったんだろうね？」

「そうよね。そこがわからないわ。」

そんな高速で移動できる手段は今のところ無い。

あることはあるが、シュヒの知っている限りでは魔法しか考えられなかった。

「出てきて。」

「やれやれ、また呼ばれるとは。」

「うるさいわね。」

ぶつぶつと文句を言う使い魔に睨みを利かせる。

（本当に文句しか言えんのかこいつは。）

「で、何の用？」

（あれ、この子達起きてるのに呼ばれるってことは相当・・・）
使い魔は静かに分析を始めていた。

「魔法を使うには悪魔との契約が必要。そうよね？」

「うん。そうだよ。」

「だったら魔法を使うより他に高速で移動する方法はある？」

「波動・・・かな。でもそんなに色濃い波動はなかなか・・・。お。

」

使い魔がシーラとタスラに近寄る。

「この子達。この子達にはすごい濃く波動が流れてる。」
言いながら二人に向かって指を向ける。

「本当！？それで、何の波動なの？」
聞きながらシュヒアルはその指を叩く。

「いてて、こっちの女の子は雷光、こっちの男の子は緑然だね。」

「そう・・・それで。」

「何。それでって。」

「説明しなさい。波動って何。」

「え、そこからかよ。」

とりあえず、一通りの説明を試みた。

「で、雷光は天空に属す。そして緑然は大地に属す。」

「あ、ねえ悪魔さん、今まで会った人の中で波動が流れてる人いた？」

「そりゃあ、全部の人間に波動は宿ってるから。」

「そうなの？」

不思議そうにシーラが首を傾げる。

「ああ、でもそこまで強いのはなかなか居ないよ。」
褒められたかのように、シーラとタスラが照れる。
「というか褒めているのだろうか。」

「君たちよりすごかったのが二人居たなあ。そういえば。」
「「「え？」」」

思い出したかのような言葉に、三人が反応する。

「確か、キサラって子とテイザって奴。」

「え！？本当に？すごい。」

「二人の波動は何だったの？」

「テイザって方は水海でキサラは・・・」

そこで、使い魔の言葉が不自然に途切れる。
そして弾かれるように森の方を見た。

「・・・！！」

森の茂みの奥に、少しだけ日の光が漏れている。
そしてその奥、陰のかかった場所に女が立っていた。

（嘘だろ、なんでこんなところに・・・！！）

そこに立っていたのは、魔王陛下だった。



「・・・おや。」

予言者はゆっくりと扉の方を見る。

（外に何か居るな。）

やれやれと大げさに肩を竦めて見せる。

気配で扉の向こうに居るモノが容易に想像できた。

（・・・またか。）

「ようこそ、とでも言っておこうか。」

「要らないよ。そんなの。」

「いつになく上機嫌だな。何かあったか？」

「別に・・・てかこれだけで機嫌わかるお前ってキモい。」

ドタドタと音をたてて部屋の中に入り込む。

「遠慮ぐらいしたらどうなんだ。」

「別に。アンタと俺の仲だろーが。今更なんだよ。」

「それもそうか。」

「お前の為に用意しておいた。そろそろかと思ってな。」

「・・・俺、お前のそういうところ大好きだよ。」

「お前に好かれても嬉しくなどない。」

「そっかー。お前あの人にゾッコンだったもんな。」

その言葉で、予言者の顔が僅かに歪む。

「お前のそういうところが大嫌いだ。」

思い出してしまう。だから

・ ・ ・ ・ I d i s l i k e i t .

「改めてようこそ、ベラ。」

そうして何も見ようとしなから、吾は何も止められなくなる。

L v. 58 動き始めた事態（後書き）

I d i s l i k e i t . . . 嫌いだ。

まさかのアリファス様I o v eの悪魔登場。

L v. 59 現れし男の影

ただ、その姿が一目で良いから見たかった。

◇

「魔王、陛下……!!」

使い魔は驚愕に声を上げる。

いつもの余裕が使い魔からはまるで感じられない。

(まずい、今は……!)

魔王の城へ忍び込むために、大方の魔力を使った。

回復まではまだまだ時間がかかる。

(どうする? シュヒア……)

真っ先にくる筈の返事が来ない。

ハッとして後ろを見ると、三人が倒れていた。

「お前ら!!」

「眠らせただけだ。殺してはいない。」

「!!」

(ご丁寧に……優しいことで……!!)

魔王は女の姿をしていたが、やがてみるみるうちに男になっていった。

玉座に在るハズの魔王陛下が此処にいることに、使い魔は疑問を抱いた。

だが今は、契約により主となった娘の命が大事だ。

魔族に殺されたとなれば、魂の回収が難しい。

なにより、先程の魔王陛下の言葉が本気である確証などないのだ。
素早く三人の脈を調べにかかった。

「ほう、人間と契約を交わしていたか。」

魔王陛下が感情の汲めぬ声で言った。

「・・・悪いですか。」

「うん？何故そう思った。」

魔王はわざとらしく首を傾げてみた。

まるで何の事かわからないとでもいうかのように。

「・・・人間は下等なのでしょう？」

「何故そのとうな考えを余が持っている？」

「悪魔なら当然の考えです。それと、貴方の先祖さんだってそうだったんでしょ？」

一人ひとりの脈を確認し、魔王へと向き直る。

「だから貴方様は今、そうして魔王陛下をやっているんじゃないんでしょ？」

なるだけ丁寧な言葉で。彼を刺激しないように。

自分は少し高等な方の魔族だが、王魔族に太刀打ちできるはずがない。

・・・勝機が無い。

「お前は少し賢いようだな。だが、愚かだ。」

「魔王陛下に言われるまでもありませんよ。知っていました。」

「そうむくれるでない。……そういう潔さは嫌いではないな。」
「……………!!」

嫌いではない？

（ま、マジでか。）

少し動揺した。うわ、俺の馬鹿。

「ときにお前先程キサラ、と言ったか？」

「ああ、言いましたね。人間の少年ですよ。」
「……………」

（やはりか。）

この近くに、彼がいる。

それを考えただけで、何だか温かい気持ちになった。

「それがどうしましたか？」

キサラが何かを握っているようだと思い当たったらしく、使い魔は
険しい表情になっていた。

（全く……本当に面倒な奴らに気に居られるんだね。）

確かに、実際自分も彼のことを気に入っている。

表裏の無い性格をしてるくせに裏の自分を持っている。

真直ぐなのか歪んでいるのか……どこか捉えどころのない少年
だった。

（それに、呆れるほどに純粹。）

……
そういうものを持っていない者たちが惹かれるのは当然のこと。

そしてまた、偉大な力をその手にしている魔王陛下も然り。

どんなに力を手に入れようと、失ったモノを取り戻すのは至難の

業だ。

「いや、良い。」

「失礼でなければ、今貴方様が此処に居る理由をお聞かせ願えますか？」

「人間と契約した者に対する魔族の情報流出は避けるのが原則だ。」

「上に立つ者がそんな失態を犯してはならない、ですか？」

「……やはり賢いな。」

上手く情報を引き出そうとしていた。

自然の会話に馴染ませて、反射的に答えそうな質問を。

それも、思考に入り過ぎている頃合いを見計らっていた。

頭はキレる。だがしかし、決定的に足りないものがある。

「人間と契約したことは良い経験になるな。賢い選択だ。」

「それはどうも。」

先程から魔王陛下は褒める様な言葉しか発しない。

魔族にしてみれば最高の榮譽であり、誰もがその生涯をかけてきたもの。しかし。

「でも、それは惑わす言葉、ですよね？」

悪魔特有の甘い甘い誘惑。

溺れそうになるも、必死で堪える。

「自我も強いのか。ふむ……。」

動揺をしてはいたが、その度の切り返し。

早いうえに上手く言葉を操っている。

悪魔や魔族の理想的な頭脳を彼は持っているようだ。

（ダヴェラにも此奴を見習ってほしいものだ。）

魔族で階級も実力も高い癖に、彼が誇るのは力のみ。

知的策略は望ましくなく、全面的に突進型。

細々としたことには向いておらず、付き人ともいえるベラという悪魔がその頭のなさを補助。

他の臣下たちはあまり上の地位に立たせたくはなかったほど。

「魔王、陛下？」

見ると、紫がかった双眸が何かを感じて揺らいだ。

美しく気高い、王族の紫。

そして遺伝子によって受け継がれた、王たる証。

初代魔王陛下によって作られし、呪われた宝玉。

その、歴代魔王でも稀な、王たる者のために作られた全てを、彼は持っている。

そして、完璧な魔王でありながら、生きとし生ける全てに必要なものが欠けていた。

王としてでなく、命を持ち存在するものであれば誰が必要なもの。

そしてそれを彼に与えるだろう少年。

いつでも会えるように、彼を感じれるようにと密かにかけておいた術。

簡単には解けないよう、魂をも使った。

それが、不気味な音を響かせながら、粉々に砕かれた。

(おのれ・・・!!)

め!!

・・・亡霊



かつて、その名を全世界に轟かせた男。

魔族でありながら、人間の娘を愛した男。

何にも目を向けようとしなかった男。

愛した分だけ愛されることを疑わなかった男。

最後には愛する娘を失った、愚かな男。

死んだはずの、亡霊。

・・・彼は、現れた。

F
o
r
w
h
a
t
?

わ
か
る
は
ず
も
な
い
。

L v. 59 現れし男の影（後書き）

F o r w h a t ? . . . 何のために？

陛下ちよつと怒ってますね。↑

使い魔ちよつと目立ってきたのでそろそろ名前を公開しますね。　　ハ　ハ

L v. 60 消えた悪魔の陰影を

全部、あいつ絡みだってことはもうとっくに分かっていた。



眼前に在るのは白い物体。

ふわふわもこもこの体。

長く、ピンとたった耳。

愛くるしい顔。

(か、可愛い……!!)

特に大きい瞳がこっちを見上げるのがツボ。

しっぽがもこもこなうえ、大きめなのが愛らしさを更に増す。

ひよこひよこことキサラに歩み寄る。

(うわああああ……!)

動く度に耳が揺れる。

しっぽがふわふわと上下する。

「なんだ、見世物じゃないぞ。」

「ご、ごめんウラキ。」

そう、この可愛い生物はなんとウラキなのだ。

「にしても歩きづらいな、この姿。」

「こつちとしては動きまわらない方が嬉しいんだがな。」

「んだと？下僕その1、その生意気な口一生きけないようにしてや・
・うわ！」

「ほら、こうしたら移動しやすいでしょ？」

軽々と、小動物にするように優しく抱きあげられた。

（あ、俺今小動物なのか。）

ならこの状況を有意義に過ごしますか。

もそもそと腕に収まりきる。

少し体勢がキツかったので、丁度良くなるまで動きまくる。

動く度、ウラキのふわふわな白い毛が、キサラの腕をくすぐる。

「ちょ、くすぐりたい・・・うわあ。」

近くで見るとさらに可愛い。

更に、発見が一つ。

真っ白だと思っていたが、ウラキの毛は淡い桃色だった。

「すごい・・・。」

「ん？」

「僕、ウサギをこんな近くで見たの初めてだよ。」

「俺はここまでウサギに間違えられたのは初めてだよ。」

「だからー、ネコだろ。」

「いや、ウサギでもネコでもないですね・・・。」

ファリオンさんがウラキを覗き込む。

何故か、ウラキは嫌そうに体をねじらせた。

「ほら、ウサギって横に目があるでしょ？」

「あ、ウラキの目、真正面にある。」

「でしょう。だからウサギとは考えにくい……って何やってるんですか貴方は。」

「愛情表現。邪魔スナ。」

ウラキに負けじとキサラに擦り寄る。

当然ながら、キサラはとっても嫌そうな顔をした。

「いい加減にしてくださいー。」

とても鮮やかに、ジェリエ君が棍を滑らせる。

綺麗に弧を描いた棍は、見事に兄さんの足を捉える。

しかし、（ムカつくことに）兄さんもそれをひらりと避ける。

「お前なー。何でそう棒を振り回すかなー。」

「アンタは何でそうキサラ君にベタベタするんですかー。」

「おま、何の権利があって俺の癒しを」

「気色悪いんですよ変態ー。」

二人の論争（だいたいなという理想）が始まった。

フアリオンさんは呆れたように肩をすくめ、僕に先を促した。それも、優雅な仕草で。

その仕草が似合っていて、思わず見惚れた。

（いいなー、かっこいい人って。）

僕もフアリオンさんぐらいカッコよかったら。そんなことを考えてみる。

（あの人の隣に、立ってても恥ずかしくないのに……。）

紫がかった美しい目を持つ人。

漆黒の髪を持った人。

どこか、憂いを持っていた人。

でも、僕が傍にすることは、きっといけない。

生きている世界が、違う。

僕と、あの人では。



「さて、吾に何か用かね？」

わかっている癖に、そんなことを言う。

昔から、こいつはそうだった。

「予言者を語るわりに、自分の身にこれから降りかかることは予測できなかったの？」

「まさか。」

「……………」

口の端を釣り上げて、予言者は笑う。

本当に何もかも見通しているかのような、自信に満ち溢れた顔で。しかし、ベラにはそれがひどく過剰なモノに思えた。その反応も、今を予測できるその頭脳も。

「わかっているさ。お前が何をしに来たのか。」

その言葉で、ベラは苦笑した。

「…………お前のそういうところ、好きだよ。」

全部わかっていて、そういう態度をとるところも。

自分が何をしたのか、知っていて友人で居続けてくれているところも。

これから何をして、ずっとそのままいてくれるところも。

どこまでも誰かに一途なところも。

「だからさ、死んでよ。」

他の奴に殺されるなんて、俺には耐えきれそうにないから。

君は、俺の友。今までも、これから。

でも、君はもう他の奴に目をつけられてしまった。

…………くだらない感傷のせいで。

（弱い君なんて、あの人も望んでないよ。）

そう、あの人は望まない。

弱い貴方なんて、絶対に望まない。

だったら、あの人が見続けた貴方のままで。

強く、気高く、美しかった貴方のままで。

夢に手を伸ばし続けていた貴方のままで。

……俺が大好きだった、貴方のままで。

少し幼い容姿をした悪魔は、鎌を片手に歩み寄る。

これまでに無い、殺気を向けて。

予言者は、その目に映る感情を、しっかりと見つめていた。

「残念だ。これ以上、留まれないのか。」

そんなことを言いながら、低く笑う。

そして、ゆっくりと瞑目した。

（……嘘つきめ。）

残念がってなど、いない癖に。

そうやって、俺に嘘をつき続けるんだ。

「馬鹿だね、君は。」

ゆっくりと、鎌が降り降ろされた。

何かを断ち切るかのように。

そこに、血飛沫を飛ばしながら。

（嗚呼、嗚呼。）

命が終わっていく。

散っていく。

もう、この人のことを目に映すことも叶わない。
この人を留めておくことも叶わない。

（強い、貴方のままで・・・・・・・・。）

きっと、それが俺の望み。

「君ほど、憎い奴なんて他に居ないよ。」

友であり、最高の主君。

ダヴェラには悪いけど、きっと彼が一番の俺の友。

だから。

「ナジェス……。」

………Do not forget it.

……愛してるよ。

L v. 60 消えた悪魔の陰影を（後書き）

D
o
n
o
t
f
o
r
g
e
t
.
i
t
.
.
.
.
.
.
忘れないで。

L v. 61 待ち続けた返事

死の加速すら、俺は気にならない。

目の前にいる貴方しか、俺の目には映っていないのだから。

◇

「すごいよね、俺たちにもちゃんと紅い血が流れてるなんてさ。」
傷口に手を当て、滲み出る紅をその手で拭い取る。

しかしそれで止血ができるはずもなく、とめどなく流れ出て来る。
少しだけ苛立ちを感じて眉根を寄せた。

（相変わらずだな。）

いつまでも子供の様だ。

少しでも気に喰わないことがあればすぐ不機嫌になった。

「あーあ、アリファス様にあいさつしてくればよかったなあ・・・」
「」

その体に深紅を彩りながら、ベラは独り言のように吐息をこぼした。

「嘘うそ、最期に貴方に会えてよかったよ。」

「撤回しなくても良い。」

「本当だよ・・・ナジェス。」

「後にも先にもお前だけだ。吾をそんな風に呼ぶのは。」

「ね、信じてよ。本当に俺・・・」

話がかみ合わない。

それは最初からわかりきっていたこと。

彼の耳はもう既に、聞こえていない。

「はは・・・ダヴェラに怒られちゃうな。」

目の焦点が合わず、虚ろになっていく。

予言者は、かつての友の衰弱をただ見つめていた。
感情一つ、存在しない目で。

「殺しにきたのに、殺されちゃうなんて・・・。」

（まあ、わかってたけどさ。）

最初から実力の違いなんてわかっている。

魔族だったころの自分ですらも、人間である彼には勝てない。

人間の彼もまた、最高潮を過ぎてはいるが。

いつだって自分は、人間に負けてきた。

「ねえ、ナジエス。俺は、友である君が好きだった。」

懐かしい記憶。

断片的な記憶しかないけれど。

「でも、俺たちには身分があった。」

君は主君で、俺は従者。

君とかお前とか貴方とか、いつも違った呼び方をしていた。
君が俺と友であることを忘れないように。

「俺には、関係なかった。」

でも、次第に君は俺に素の自分を見せなくなった。

君は、立派な主君になった。

（立派な・・・主君に。）

だからこそ、友という立場の消失を感じた。

感じたのは、焦燥感。

俺の中にあつた焦燥感は友である君を一生失う選択をさせた。

俺が見つけてきた、人間の女。

君はその女に惚れた。

・・・自分の身分も立場も何もかも、君は無視した。
彼女を、愛すためだけに。

完璧な主君。

立派な主君。

俺だけの主君。

友でなくなった主君。

君が主君であってくれることに、俺は満足していればよかったんだ。
なのに、多くを望んだから、主君であつた君まで失った。

俺が見つけてきたあの人に、貴方は完全に心を奪われた。

友である“君”も、主君である“貴方”も、宿敵である“お前”も。
全てが、あの人に心を奪われ、焦がれた。

主君であつた貴方は、ただの男になった。
そして、貴方は宿敵に戻った。

「好き……。」

報われないって俺は知ってた。

でも、俺は君が好きだった。

友である君も、主君である貴方も、宿敵であるお前も。

あの人を一途に思い続けるその全ても。

「好き。」

アリファス様に憧れていたのは、俺との決定的な違いがあつたから。
愛していることを迷っているのに、決して後悔していないから。

報われないと知ってても、思い続けるから。

きっと、主君から何も奪うことはしないと思つたから。

「ごめん……好き。」

（ごめんなさい。）

嗚咽が漏れる。

涙が、止まらない。

「好き。……ごめん、なさい。」

（ナジエス、ナジエスナジエス……！）

「俺……が、あの人を……！！」

貴方が愛したただ一人の人を、殺しました。

「知っていた。」

初めから。

お前が彼女を殺した、その日から。

「ごめ……なさ……」

ベラは、悪魔で無くなった自分の体を必死で起き上がらせる。
転んでも何度も、起き上がろうとした。
自分の気持ちを、ちゃんと伝えるために。

「好き……」

貴方の愛した人を殺してごめんなさい。

ごめんなさい。

「好きなんだよ……」

「知っている。」

「好きに、なって。」

「ベラ……。」

「俺を、好きになって。」

ごめんなさい。

好き。ナジエス。君が好きだ。

「吾も、お前が好きだ。ベラ。」

自分を敬ってくれた。

慕ってくれた。

歪んでいても、自分を愛してくれた。

「お願い、ナジエ……ス」

好きになって。

俺を愛して。愛して。

俺なら、貴方があの人を愛した分、愛せるから。

俺なら、貴方を苦しめないから。

俺なら、誰よりも貴方を愛せるから。

「ナジエス……！」

俺を見て。あの人じゃなくて、俺だけを。

静かに、ナジェスが歩み寄る。

一歩進むごとに、ベラの表情が優しくなる。

彼の気配は、まだ感じられるようだった。

「許して、なんて・・・いわ、ないから。」

愛して。

「お前は何も悪いことをしていない。」

「ナ、ジェス・・・ごめ・・・ん」

奪ってしまって、ごめんなさい。

「で、も・・・しん、じて・・・」

「信じてる、だから、生きろ。」

好きなんだ。

「お、れ・・・君が・・・あ、なた、が・・・好きだ。」

「吾もだ。ベラ、吾の話を聞け。」

ナジェスがベラの頬に手を当てる。

「吾は、ベラに救ってもらった。」

「す、き・・・なんだ」

ベラの顔が苦しそうに歪む。

（信じて。ナジェス。）

「彼女は……」

「……お、れ、……あなた、の……と……も……で、よ
かつ、た」

雫が、流れていく。

それを止める術が、無い。

「吾の話を聞け……！」

「き、み……が、ころ……して」

俺を、殺して。

君の愛した人を奪った俺を殺して。

その一言に、ナジェスの目が見開かれる。

「吾は、何のために……っ」

「な、じえ……す？」

ベラの、冷たくなっていく体を抱きしめる。

「愛していた。お前を、ずっと。」

そのために、人間になったのに。

吾が愛したのは、人間でも、女でもない。

「お前を、愛していた。」

お前を守るために、あの女を監視し続けた。

お前があの女を殺した時、後悔した。

お前の手が汚れてしまったと。

同時に、どういう形で在ろうと自分を見ていることに、喜びを感じた。

流れていく。

命が流れていく。

「とまれ……。」

消えていく。

「とまれ！……。とまれ……。っ！」

死んだと思っていた。

ベラが死んでしまったと思っていた。

だから、生きていると知った時、嬉しかった。

手元に居なくても、生きているのならそれでいいと。

いつか、奪い返しにいけないと。

だが、遅すぎた。

「ご、め．．．ん．．」

「愛してる。ベラ、愛してるんだ。」

声が、ベラに届かない。

言っておけばよかった。

届くうちに、伝えておけばよかった。

「な．．．じえ、す．．．ごめ、ん」

「謝るな．．．ベラ。」

やっと、逢えたんだ。

「逝くな．．．！！」

愛してる。愛しているから。

「ね．．．あ、い．．．してる．．．な、じえ．．．す」



彼の願いも、声も届くことは無く。

悪魔が彼の声にこたえることはなかった。

L v. 61 待ち続けた返事（後書き）

悪魔であるベラが自分の魔力で傷を治せると思っていたナジェス。
涙を流すことで魔力を失ったベラ。

すれ違いのまま。

L v. 62 正体を知る者

貴方が望むのなら、私はどこまでも。



「ねえ、ヴェルカ。」

「はい、何でしょうか。」

「今日は地上に出てはいけないの？」

「・・・・・・はい。」

現在、ヴェルカとデイルシュファは地上の城を離れ、魔界に居た。瘴気が満ちており、黒々とした闇が広がるばかりである。

「どうして、姉様は僕を魔界へ帰したのかな・・・・。」

「それは、まだお話できません。」

「ヴェルカ・・・・？」

「・・・・・・申し訳ございません。」

デイルシュファは肩を落とした。

どうして自分には教えてくれないのだろう。

しかし、ヴェルカが困った顔をしているのでそれ以上何かを聞くことはできなかった。

自分だけ除け者にされているようで少し悲しくなったが、仕方ない。

「いいよ、まだってことはいつかちゃんと理由聞けるんでしょ？」

少しいたずらっぽく笑って見せる。

と、ヴェルカが慌てた。・・・面白い。

「も、もちろんです！ちゃんと許しができましたら・・・」

「ほんとー？ヴェルカ。」

「！か、からかうのはおやめください！」

「えー？」

からかうとすぐに取り乱す。

いつもは優秀なのにこんな簡単に取り乱し・・・て。

駄目だこれ以上やったら本気で嫌われそうで怖い。

（いや、でもヴェルカに限ってそんな。）

僕を嫌うなんてことはあり得ない・・・ハズ。

今度は先程と逆で、ディルシュファが焦る。

しかしヴェルカはまだそれに気が付いていない。

（ほ、ほら、この前忠誠を誓ってもらったんだし・・・。）

必死で自分に言い聞かせる。

そうだ、ヴェルカが自分を嫌うはずがない。

忠誠を・・・ちゅう・・・。

そういえば、手に忠誠の証として・・・。

（――――ツ・・・）

駄目だ思い出したら駄目だ。

というか冷静に考えたらなんかすごく動揺した。
え、冷静に考えてるのに動揺ってどういうこと。

最終的には混乱しだした。
それも、赤面しながら。

（・・・ディルシュファ様、百面相）

以前から感情豊かだったが、表情まで豊かになってきた。
・・・これは魔王陛下による影響だろうか。
だとすると、自分ができなかったことを意図せずしてしまう彼が恨めしい。
ディルシュファから見ての自分の価値というのはどんなものなのだろう。

（悔しいな。）

陛下に嫉妬をするのは世界で多分私ぐらいのものだろう。
全ての魔族が跪いた覇王に敵対心を持つのも。
魔族であればありえない。

自分以外の者が、彼に変化を与えるのが嫌だ。

（・・・独占欲が強すぎるな。）

我ながら笑える。
しかし、彼には自分がそこまでする理由も価値もある。
だからこそ、ここにいる。

「では、行きましょうか。」

「あ、ああ。」

たくさんのモノを与えてくれる恩人。

その人に、ゆっくりと手を差し伸べる。

いつか、私が差し伸べた手を取ってくれなくなる日が来ても。

（私は、貴方様のお傍に。）

◇

魔王陛下の纏う雰囲気が一変した。

無表情ではあるが、明らかに鋭い雰囲気を纏っている。

「ふむ、忘れていた。」

思い出したかのように使い魔に向き直る。

先程の空気は嘘のように消えていた。

（さすが・・・）

感情の制御を容易くした。

切り替えも早い。

間違っても自分には真似できない芸当だ。

そこは魔王陛下との大きな違いだろうか。

（いや・・・根本的に違うな。）

その体に流れる血の秘密を、知ってしまった。

王魔族の、極秘事項。

側近ですら知らずにいる事実。

そして、恐らくそれに魔王陛下は気が付いている。

「陛下、どうして私を裁かれないのですか。」

「・・・裁く必要が今はない。」

「そう、ですか。」

・・・今は。

それが何を示しているのか、わからないわけではない。

それまで、良くも悪くも、魔王陛下には利用されるわけだ。

気付かれないうちに。

もしかしたら、もう既に利用されているのかもしれない。

（今回の暇つぶしは、随分と・・・。）

リスクが高い。

命が削れそうだ。

「邪魔をした。」

それだけ言うと、彼は跡かたも無く消えた。

木の葉が舞い上がる。

天を目指すかのように。

「ここに来たってことは、何か意味があるってことか。」

恐らく、何かが大きく動き出した。

そしてその中心の近くに、自分は居る。

（楽しくなるといいんだけどな。）

少しだけ、今回のことに期待を抱いてみる。

下手をしたら命を落としかねない、この博打に。

「う・・・？あれ？」

シュヒアルが起き上がる。

どうやら、かけられていた術が解けたようだ。

「・・・！ちょ、二人とも！」

「大丈夫、そいつらは寝てるだけ。」

「・・・何かあったの？」

「何で？」

「そんなに楽しそうな顔されたら誰だって気づくわよ。」

・・・どうやら、魔王陛下の甘い誘惑に酔っていたようだ。

（危な、あとちょっとで溺れるとこだよ本当。）

溺れていたらきつと、今寝ている半獣の二人も、主のこの女も死んでいた。

自分が三人の命の境目に立たされていたと考えると背筋が冷える。

そして、今回の一件でわかったこと。

何か強い意志か目的が無ければ、彼に吞まれるのは容易い。

惑わされていることにすら恍惚を感じさせる。

あの瞳にも、容姿にも、禍々しいというより神々しさを感じる。

今までの違和感の正体が明確にわかった。

（本当、俺の主は面白いね。）

自分に必要な情報を意図してなくとも、与える。

偶然かもしれないが、それは自分にとってとても大きい。

そして、神々しさの正体は……。

『王家・魔族の初代魔王陛下は、墮天の者である。』

書に記されていた、その文字のままに。

彼の血に、天上の血が流れている。

それが神々しさの正体。

そして、彼の生きる意味。

彼が背負っている全てを、知ってしまった。

I should not have known it.

もう手遅れだ。

L v. 62 正体を知る者（後書き）

I should not have known it.
.....
それを知ってはいけなかった。

L v. 63 潜伏中の隊員

とりあえず、誰かこの状況を説明してくれ。

◇

「さて、管理所潜入部隊隊員共！今更怖気づく奴は居るか！？」

「兄さん、その部隊いつできたの？」

「いや、今だろ。」

「ダメレ、そのウサギもどき！その腕から降りろ！！」

周りの元・囚人たちはオロオロしながら僕らを見守っている。

というか今の状況に対して誰も文句を言わないことがすごいと心底思う。

457

「オルデルさん、すいません・・・。」

「いや、キサラ君が気にすることじゃないよ。」

「そうそう。で、農業妻子持ち君」

「オルデルだ。」

オルデルがとても嫌そうに眉根を寄せる。

ここまでの移動からわかったのだが、どうやら兄さんが苦手なタイプらしい。

ジェリエ君程では・・・無いけど。

事あるごとにジェリエは棍をテイザに向かって振り回していた。

そしてその棍さばきには無駄が無く、相当の腕。

と、そんな話は後にしよう。

「じゃ、オルデル君。何でキサラには敬語なの。」

「あ、そういえば。」

「気になりますねー。」

「特に理由なし。ただ、目上の人間を敬わない奴には敬語なんぞ使わん。」

わー、青筋！青筋すごいですよオルデルさん！！

（仲良く・・・は無理でもせめて連携は取ってほしいな。）

これでは管理所にある（ハズ）の名簿から自分たちの名前を消すのは難しい。

それどころかそこに辿りつけるのかすらも正直怪しい。

「そういえばアンタ、結構年上に見えるけど？」

「・・・こう見えても俺は23だ。」

「げ、まさかの3つしか違わないとか。つかアンタ老けてんな。」

「うるさいこのチャラチャラしやがって！」

「あんだと？！おっさん！」

「俺でさえ3年前はちゃんと働いてたぞ！」

犬猿の仲。まさにそれになっている。

「タイプが真逆ですもんね。」

「ファリオンさん。」

「キサラ君、とりあえず、見張りの位置特定しましたけど？」

「あ、ありがとうございます。」

ちなみに今までファリオンさんは囚人の何人かを連れて様子を見て行っていた。

（本人曰く）ファリオンさんは人の気配に敏感らしい。

信憑性うんぬんを気にしている暇は無いので、とりあえず信用してみることにした。

「で、彼らは何なんです？」

「えっと・・・。」

「彼、男から嫌われるタイプなんですネ。」

「昔はそうでもなかったんですけど・・・。」

「おや？そうなんですか？」

意外だとも言いたげに見下ろしてくる。

やめてフアリオンさん。背低いの気にしてるんだから。

しゃがまないでイラツとしちゃうから。うっかり殴っちゃうから。

「それにしても野郎ばかりの一行は華が無くて困りますね。」

「全くですー。今の癒しはそのもこともキサラさんぐらいじゃないですかー。」

「お、わかってんなジェリエ坊。でもウラキは違うだろ。」

「誰がもこもこだ。言つとくが俺が人間になればお前は一瞬でノすぞ。」

「やれるもんならやってみろですー。」

色んなところで火花が散る。

そしてやはり囚人さん達はオロオロしていた。

あと一部は「若い者はいいのー。」とか微笑ましそうに一部始終を見届けている。

ちよつと待つて皆さん落ち着こう。

「キサラ君、後で相談があるのですが・・・。」

「はい？何ですか？」

「・・・非常に個人的なことです。」

「あ、ごめんなさい。」

個人的ということは、ここでは言いづらいということ。
そして長く話しこめば周りに何かがあると勘繰られてしまう。
個人的なことを流出するのは、きつと極力避けたいだろう。

（危ない・・・悪いことしちゃうところだった。）

「では、タイミングを見計らって聞いていただと思います。」

そう言うと、ファリオンさんは散った火花の終息に行った。

・・・かなり乱暴に。（特に兄さんに対して）

言ってもなかなか聞かない人には火で脅している。

あと、バラバラだった人達を統制している様にも見える。

（なんていうか、上手いなー。）

人をまとめることが得意そうだ。

司令塔みたいなことをこなしそうだ。

現在、キサラを含む管理所潜入部隊、管理棟入口付近。潜伏中。



「はぁ？ベラが戻ってこない？」

部屋全体に声が響く。

それほど大きな声を出していないのに、とても通る。

「はい。おかしいと思って調べさせたのですが。」

「で、結果は？」

「それが……。」

いつもは飄々としているダヴェラの顔が、強張っている。本人は隠しているつもりだろうが、相当動揺している。いつもなら隠し通す自分の感情が、わかりやすい。

「それが、どうした。」

「どうやら城を出て、どこかへ行ったようです。」

「……!!どこへ。」

「それはわかりません。ダヴェラ。」

今度はアリファスの顔に緊張を感じる。

これから話すことが、重要だということが手に取るようにわかる。そして、だからこそ聞きたくないという感情に囚われる。

「ベラ、彼女は……。」

「今は悪魔だが元・魔族だ。何も悪いことはない。」

「そうではありません。魔族、という経歴の前にまだ彼女には秘密があります。」

「……何だと!?!」

ダヴェラは驚きに目を見開いた。

(どういうことだ……!!)

ベラから、そんなことを聞いたことがなかった。

そしてその様子を、アリファスは表情で読み取る。

「彼女から聞いて無かったんですね?」

「……何も、聞いていない。」

「では、彼女はやはり……。」

「教えろ。知ってんだろ?」

「……本当に聞くんですか？」

「教えろ……!!」

今までに無いほどの、剣幕で。

ダヴェラはアリファスに継るように、その情報を取り出す。
悪魔に備わった知能を使おうともせずに。

「彼女は、元・人間です……。」

・・・何故。

「嘘だ。」

「残念ですが、事実です。」

ダヴェラから表情が無くなる。

「嘘だ。」

「・・・。」

(アリファスが、何か言っている。)
聞こえている。でも聞きたくなどない。
何も聞こえない。・・・聞くものか。

「・・・。」

「聞こえない。」

「・・・。」

「うるさい!!」

近くにあった椅子を殴り飛ばす。
もう、何も聞かない。感じない。

.....I do not want to believe
it.

ベラの口から、真実を聞くまでは。

L v. 63 潜伏中の隊員（後書き）

I d o n o t w a n t t o b e l i e v e i t . . .
信じたくない

意味不なサブタイしませんorZ

L v. 64 黒真珠の涙

少し、昔話をしようか。



昔、天に背き、地の底へと落された天使がいた。

彼は強大な力を手に入れてしまった。

神すら恐れぬ振舞いをするようになった彼を、天界が放っておくことは無く。

闇の中へと閉じ込められた。

闇は、彼の全てを受け入れた。

白く輝く美しい翼は黒く淀んだ色へと変化していった。

金色の髪も、澄んだ瑠璃色も。

髪は黒く、眼は王たる紫へと。

彼は闇の中で魔王として君臨した。

破壊と殺戮を繰り返し、その名は全世界に轟いた。

後に彼は、初代魔王陛下として称えられることとなる。

しかしそれもまた別の話。

今回は、彼の愛した女性と、それを奪った魔に関する話をしよう。



とある小さな小屋。

そこに彼女は生まれた。

絶世の美女でなければ、貴族でもない。

どこにでもいるような平凡な女性。

彼女が唯一他の人間と違ったのは、神に愛されていたこと。

彼女が唯一他の人間と違ったのは、闇に生きる魔の王を愛したこと。

彼女が唯一他の人間と違ったのは、何度でも彼を愛し続けたこと。

「女。お前、神に愛されたようだな。」

「？アンタ、誰だよ。」

「・・・男みたいな口調だな。」

「アンタは女みたいだ。」

当然、闇の王は不機嫌になった。

しかし同時に面白いものを見つけたとも思った。

（神よ。貴様が愛したものを余が奪おう。）

そのために、地上へと来た。

ただ、自分を闇へと閉じ込めた天界のモノへの仕返しに。

「なんだよ。アンタまた来たのか。」

「なんだよとは何だ。」

「アンタ綺麗なんだからさ、もっと他の女の所へ行けよ。」

「女などすぐに見飽きる。お前が一番飽きぬ。」

「ふーん。・・・というかそれ、ひどいね。」

(・・・笑った。)

彼女が初めて、笑った。

嬉しそうに。

一体何に対して笑ったのかはわからないけれど。

・・・何となく、気分が浮ついた。

「どうして、お前は男の様に振舞うのだ。」

「・・・」

「おい？」

「それは、俺が生きる為だ。」

深刻な顔。だけど、どこか満足していた。

彼女が何を考え、感じてそうだったのか。

もっと知りたいと無意識に思っていた。

「何故。女であっても生きることはできる。」

「男でなきゃできないことは山ほどある。」

「・・・どんなことだ。」

「俺は女であってはいけない。」

何故だか、自己暗示にしか聞こえなかった。

「どうして。」

「弱みにつけこまれる。」

「そんなことはない。」

「女だからと、舐められる。」

「何故。」

「俺は、強くありたい。」

――・・・強く。

欲しているのは力では無く、強さ。

内側の強さが欲しいのだと。

そう願う彼女の眼は、とても美しかった。

そして、そのために性別は関係ないのだと。

しかしそれでは認めてもらえない。

ならば、自分が示そうと。

だから、神に愛されたのだ。

彼もまた。

強い眼を持つ彼女を愛した。

「余と共に生きぬか？」

（余は、此奴にとってどんな存在なのだろう。）

殺戮者。恐怖の対象だろうか。

それとも、自分を慕うべき対象として見ているだろうか。

少なくとも、後者はないだろう。
それでも、彼は彼女を欲した。

「余の夢は、お前が女でも強くあれる世界の創造だ。」

だから、共にその世界を作ろう。

くだらない戦争を終わらせて。

殺戮も終わらせよう。

隣に、いつまでもお前が居てくれるように。

(・・・愛しい。)

目の前に居る人の全てが。

人間であろうとかまわない。

種族の違いなど、何の問題にもならない。

愛しているのだから。

彼女が愛してくれなくても。

彼女が自分を見てくれていなくても。

他の誰かを愛している。

自分を闇へと追い込んだ神を愛している。

それでも、自分はこの女を愛せるのだと。
ひと

「ベラ、一緒に来てくれないか？」

拒絶すれば、置いていくつもりだった。

なのに、毎日彼女の所へと足を運んでいた。
振り向いてくれるように何度も何度も。
何度も口説き続けた。

しかし彼女は鈍感で、言葉の真意を受け止めることができなかった。
それでもよかった。

ただ、自分が愛していることが彼女に知れるのが恐ろしかった。
心からの拒絶が、彼は何より恐ろしかった。

「ナジエス。君は俺がそんなに必要？」

「そうだな。今一番お前が欲しい。」

「神様に・・・愛されているから？」

「は？なんでそうなるのだ。」

首をかしげると、彼女は苦笑いを浮かべた。
誤魔化すような、そんな笑い。

（そんな顔をさせたいわけではない。）

そんな世界を望まない。
だから、世界を変えようとしている。

軽く、彼女の頬に触れる。

彼女の肩が驚きにはねる。

しかし今はそんなことにかまってられない。

「べら、余は面倒なことはやらぬ。」

「何さそのびっくり告白。」

「いや、余は今の返し方の方が驚いたのだが。」

真剣な空気を取り払われた。

完全に彼女のペースである。

（格好がつかないではないか。）

「と、とにかくだ。余は神がどうだということは知らぬ。」

真直ぐに、彼女の眼を見る。

いつもと変わらず、強い意志を宿した眼。

初めて、美しいと思えた。

「余は余の為にお前のところに居る。」

伝わらないのならば、言い続けられたい。

それだけ、余に時間はあるのだから。

そう、思っていた。

「べら。」

いつもの小屋に、彼女は居なかった。
部屋にかすかに匂う、血の香り。

そして、彼女の匂い。

「ベラ・・・！！」

探して探して、探し続けた。
ずっと探した。

彼女を。

探し続けた。

（見つからない。）

何処を探しても、見つからない。

「うあああああああああああああああああつ！
」

嗚咽が漏れる。

彼は、彼女を失ってしまった。

「ベラ・・・っ！」

涙が溢れた。

そして、その涙は黒く鈍い輝きを放った。

涙は黒真珠へと、その形をとどめた。

誰よりも強大な魔力を持った彼は、人間になった。

L v. 64 黒真珠の涙（後書き）

予言者若い・・・。

L v. 65 囚人たちの行方

順調にことは進んでいる。



ふと、上を見上げる。

そこに居るのは自分であって自分では無い存在。
つい最近まで自分であったその顔に触れる。

真正面から、向き合うのはこれが初めてののような気がした。

「ウラキ？」

キサラが不思議そうに見下ろしてくる。

（くっそー。俺より弱いくせに。）

何となく見下ろされるとムカつく。

というかなんで俺が見上げなくちゃいけないんだ。

（むしろお前が見下ろされる側になれ！）

「わっちよっと！」

「うるさい！」

「危ないってウラキ。」

ウラキが肩に飛び乗ってきた。

おまけに頭をポフポフしてきた。

眉根を寄せてご機嫌斜めなのを精一杯アピールしている。
が、その姿のせいでとても愛らしい。

（か、かわいい。）

可愛いものと可愛いものがジャレ合っている様にしか見えない。

（キサラがー！キサラがああああ！！）

ちなみにその光景にテイザは悩殺されていた。

（キサラが小動物と戯れてる・・・！）

そしてその変態兄だけではなく、他の囚人たちもその光景に和まされていた。

現在、入口付近の見張り把握。突入準備完了。

◇

管理棟の存在の情報を入手したものの、その情報は彼女たちの役に立ちそうにはなかった。

「なんですって！？男性収容監獄が全焼？！」

シュヒアルは思わず大きな声を出してしまった。

しかし今はそれどころではない。

「え、ええ。見張りがそう言ってたから間違いないわ。」

「そう・・・。ありがとう、情報助かったわ。」

「あの、貴女大丈夫？すごく顔色が悪いわ。」

心配そうに囚人が見下ろしてくる。

しかしそれに元気に振舞う余裕も今のシュヒアルにはなかった。

そして力無く、情報をくれた女性に頭をさげた。

シュヒアルがその場を立ち去ったあとも、女性は彼女の心配をしてくれていた。

「え！？キサラたちのいるところが？！」

「そんな・・・じゃあ、キサラは？」

「わからないわ。監獄の管理者たちからは詳しい説明もないそうよ。」

「へえ。じゃあ生きてるね。」
「「「え？」」」

沈みそうな雰囲気の中、場違いな声がつぶやきを落とした。

「どういうこと？」

「あれあれ？俺の主はわかってない？」

「ええ。わからないわ。ふざけるのはやめて根拠を説明できるかしら？」

「はい。かしこまりました。お嬢様。」

仕草がいちいち癪に障る。

わざわざ跪く意味もわからない。

「さて、根拠は一つです。」

「一つ？それでは曖昧すぎるんじゃないくて？」

「それでも決定的。その一つは、管理者たちからの説明が無いこと。」

「……は？なんでそれが根拠になるのよ。」

他のチビッ子二人も首をかしげている。

「管理者なら、収容していた人間たちが死んでしまった場合、それを公開する義務がある。」

「そんな義務あるの？」

「あそこが建てられるときの一番の優先事項として提示されたようだ。」

ひらひらと、使い魔は片手に監獄の調書を弄んでいた。

「・・・誰か死んでしまったのなら、公開するわね。」

「あれスルー？ちゃんとこのことと、ここに関連すること調べてきたのに。」

「御苦労さま。その調書、渡してもらえるかしら？」

「もちろん。はい、どうぞ？」

ここで今まで二人の会話に参加していなかった二人が入ってきた。

「それなら公開し辛いだけで誰かが・・・その・・・。」

「そうだね。まだ確認が取れて無いってことも。」

「ないない。仮にも最優先事項。彼らにもプライドぐらいあるさ。」
「でも監獄は焼けてしまったんでしょう？」

「全焼って言っても死体は残るよ。牢の中に居たんなら誰が誰かくらい把握できるし。」

そこまできてやっと三人は理解した。

「で、公開しない理由はただ一つ。」

「死体ではなく脱走者がたくさんでてしまい、公開するにもできなかったから。」

「御明察。さすがだね俺の主。」

さっきまで馬鹿にしていたのに掌を返したような切り返しだった。

「しっかしそれくらいすぐにわかりそうなものだけだね。」

「安否を確認できなくて取り乱すのは当り前よ。」

「そうか、じゃあこれからは三人とも彼らを信じて行動すべきだね。」

「どういう意味よ。」

「無事でいるって気休めでもいいから信じなよ。」

少しだけ、空気が緊張に震える。

「そのときに応じた適切な行動をしなきゃ彼らの足手まといだ。」

「そうね。じゃ、信じて臨機応変な態度をとるわ。平然とね。」

「ちょ、シュヒちゃん。」

「シーラ、いいよ。やる気があった方が・・・たぶん。」

「最後に口ごもられると更に不安になっちゃうよ・・・。」

監獄の全焼は、つまり管理棟へ向かう必要がないということの意味していた。

鍵を入手して彼らを牢屋から出すつもりだったが、これでは目的がもうない。

そのうえ、助けるべき彼らの所在も不明。

「シュヒちゃん、フアリオンさんの言ってた人のところに行こうよ。」

「そうね。もともとそこに向かう途中だったし。」

「でもその人どこに居るのかわかる？」

「・・・わからないわ。」

ふりだしに戻った。

（こんなことなら彼からちゃんと聞いておけばよかった。どちらにせよ、目的地はそこだ。

運がよければその予言者から予言を聞けるかもしれない。

そうなれば自分たちがどうしたらいいのかわかる。

「じゃ、それで行くわよ。ただし、目立たないように。」

「あ、一ついい？」

「何？タスラ。」

「その・・・人？誰。」

今までは何となく聞けなかったらしい。

シーラも興味を示していた。

隠す必要もないので、それは伝えておくことにした。

「俺はこいつの使い魔だ。」

「名前は？」

「ラギス。」

「俺たちの説明はいいよね？」

「ああ、名前もちゃんと把握してる。」

女性収容監獄を一行は後にした。

人外（？）組、現在予言者の家を目指し東へ。



「男性収容監獄が全焼しました。いかがなさいますか？」

「そうか。・・・追手を放て。農民は殺してもかまわん。」

「では収容されていた囚人の情報をいただけますか？」

「しくじった者、農民以外を殺してしまった者が出た場合それも始末しろ。」

「承知しました。」

使いの者が資料を持ち、静かに退室する。

（まずいな・・・まだ替え玉が。）

男は部屋にひらひらと迷い込んだ蝶を見つめた。

「もう少し手はずを整えてからがよかったが、まあいいだろう。」
今こそ、彼を見下すことができそうだ。

（貴様に地獄を見せてやろう。）

聞けば俺の幸せを奪い、幸せそうに生きているというではないか。

「テイザ……！！」

この憎しみを、晴らせるとしたらそれは彼の死のみであろう。

楽しい余興として、彼のたった一人の肉親にも地獄を。

地上を制さんとする者、魔王陛下降臨後大幅な減少が見られた。
が、汚れた栄光ではなく、復讐のために地上の王とならんとする男
が一名。

悪魔や魔族よりも厄介な敵が過去の行いにより生まれてしまう。
のだが、それを生み出した当の本人は……弟を（変態的な意味
で）愛でていた……一方的に。

弟思いな兄は、今まさに弟を苦しめる存在の誕生を手伝っていた。

L v. 65 四人たちの行方（後書き）

英語空気・・・（・ω・？）

あと相変わらず兄貴が変なテンションでしません。

今更ながら彼は変態では無くてただテンションが高くて浮いてるだけだ
けだと思うんです↑

L v. 66 授けられた予言

今までは何もしようともしなかったくせに。



「どうやら、人間の王が動き始めたようですね。」

「ふん、今までは何の動きも見せなかったのに滑稽だな。」

「地上の占拠はもう完了したも同然ですが・・・しかし。」

アリファスが口ごもる。

何かを気にしているようだった。

「何だ、らしくもない。さっさと報告を済ませろ。もう少しで最上層会議だぞ。」

ディジラウは珍しくアリファスの報告に耳を傾けていた。

地上の占拠は魔王であるナトスの悲願。

慎重にならないわけがなかった。

そして、最上層会議というのはその名のとおり、魔界の権力者達が集う会議。

定期的なものであり、形だけの集まりであることもしばしば。

歴代の魔王たちの最上層会議には、最高権力者である魔王が出席を促しても出席をなんらかの形で拒絶する権力者たちが多かった。王魔族といえど、爵位を持った権力者を無視することは許されなかったのだ。

しかし、現在の魔王は歴代のどの魔王たちも成し得なかった、最上

層會議有権力者全員出席を実現させた。

のだが……………。

「もうすぐに始まるというのに魔王様本人が居なくては……………」

数刻前から、その偉業を成し遂げた魔王陛下本人の所在が不明なのである。

そして、重大な情報をアリファスは掴んでいる。

それを把握できていない魔王の信用が落ちることは明白であった。

「彼らは魔王様に心酔しているが、気まぐれだからいつ酔いが覚めるかわからない、か。」

「細心の注意が必要ですね。」

「最悪の場合は私とお前で会議を進める。ま、幸い最近は何形だけのものだ。」

「それが……………今回はそれだけでは済まなそうですよ。」

いついかなるときも冷静、物事に動揺することのないアリファスが明らかな動揺を見せている。

（その顔を一番にさせるのは私が良かったのだがな。）

しかし今はそれどころではない。

動揺を見せたことの無い相手が、大きな動揺を示している。

「どんな情報を得た？ものによっては伏せる。」

「でもそれでは私たちが」

「私は地上における全権の取得を魔王様から命じられた。どうとでもなる。」

「しかし貴女が軽率な行動をとってしまえば魔王様の顔に泥を塗る

ことになりますよ?」

「わかってる。お前に言われなくてもな。」

「まあ、心配はしていませんけど。」

アリファスとディジラウは特に魔王に心酔している。

公私混同をすることは絶対にしないが、両方とも恋情を彼に向けている。

裏切ることも無ければ彼の妨げとなる失態を犯すこともない。

互いの恋情を知ってか知らずが、二人はそれを互いに理解していた。

「……魔王様が居ない以上この城の最高権力者は私だ。」

「はい。では、最初に確認しておきますがこれは最上の機密事項です。他言無きよう。」

「心得ている。だが、軍事でも政治でも無いのに機密だと? 大げさだ。」

「ええ。でも一つは軍事に関わりそうなので。それ程重要視していただければ結構です。」

「……報告しろ。」

「“予言者”と“討伐者”が動き出しました。」

地上の王も、どうやら愚かではないらしい。



王城、玉座にて。

「どうです、怪しの王と戦う意志は固まりましたか？」

「いやだ！余はそんなものと戦いたくはない！！」

「ですが・・・陛下。」

「嫌だったら嫌だ！！」

魔王と名乗る者が地上への支配を進めて早二月。

当時王位に就いていた王は、魔王にあっさりと首を落とされてしまった。

「余は、父上の敵わなかったモノに勝てる気などせん・・・！！」

「では民はどうなさるんですか！・・・父君の敵は！！」

「知らぬ！余はもとより王となる定めでは無かった！」

「そのようなことを申されては我が兵の士気に関わります！！」

最早日常の光景となった、王と將軍のやり取り。

すぐに諦めるかと思われたその臣下は、何度も王へと戦いを促した。そして、王位継承を望む数多の者は、魔王の登場により、王権の放棄。

事実上、前王のたった一人の子息である皇子が王位に就いたのだ。現在、王としての執務はこなしているものの、魔王のこととなると全てを放棄しようとする。

「陛下はお若いのにすぐに執務に就かれ、とても効率的にそれをこなしました。今更一体何を恐れることがありましょう。私は貴方が戦うというのであれば全力でそれに従いましょう！」

「何を言うかと思えば、血迷うたか將軍！征夷大將軍と呼ばれても所詮は貴様も若い！！士氣がどうの言う前に現状況を考えよ！剣では魔には勝てん！！！」

年若い王が言っていることは的を射ていた。

「だからなんだよ！！」

「敬語を使え！幼馴染でも許さないぞバーカ！」

「うるさい俺の方が年上だ！」

「將軍が偉そうに！公私混同してんじゃねえ！！」

「剣で勝てたこともねえくせに偉そうなこと言うなクソガキ！てめえの親父の方がよっぽど話が解る人だった！」

「剣で余が勝てたらお前の需要はなんだ！勉強で勝てたから余の方が偉いはフハハハハハ！」

「こんのクソガキ——————！！」

今生陛下に対して、そんな無礼を働けば当然首が飛ぶ。

しかし、今やこの二人のやり取りは無礼でもなんでもなかった。

「臣下が来たらまたお前が怒られるんだざまあ！」

「うるせえてめえの臣下が来たら利口な征夷大將軍気取ってやらあ！テメーが怒られる！！」

低レベルな喧嘩をしているところに、王座の扉が開かれる。

「あ、王佐のお前から言ってくれよ！！」

「何!?! 王佐であれば余の意見を肯定するにきまっている!」

「・・・二人とも落ち着いて。今日は客人を招いている。」

「「キャクジン?」」

「どうぞ。」

そこに、一人、男が入って来た。

「久しいですね、今生陛下。ほう、随分と成長なさった。」

「だ、誰だ?」

「おや、忘れてしまわれたか。」

「“予言者” さんですよ。」

「「はあ?!」」

「・・・完全に忘れてしまわれたようだね。」

ローブを脱ぎ、顔を露わにする。

「あ!?!」

「思い出していただけたかな?」

「はい!」

顔を見た途端、王の目が輝く。

「今日は予言を授けに来た。信じる信じないも貴殿次第。どうする?」

「もちろん。聞きましょう。」

「よろしい。では、一つだけ。」

「とある若者を探しにお行きなさい。その若者は、魔を討つ勇者と成り得ましょう。」

その予言が、全てを狂わせる。
予言者は、怪しく微笑んだ。

L v. 66 授けられた予言（後書き）

魔王VS地上の王。

人間の王様は頼り無いですね（笑）

L v. 67 揺るがぬ決意（前書き）

ベラとナジェスの話。

L v. 67 揺るがぬ決意

それはいつのことだったか。



「俺、魔族になる。」

「おや、何を言い出すかと思えば。」

一族の長であり、長く生きた老婆に、女は言った。

「俺・・・私は、あの人と生きます。」

「そのために魔族になるのかえ？」

「はい。ババ様、お願いします。」

「しかしいいのかい？失敗すればお前さんは・・・」

「かまいません。」

覚悟はもうできているのだと。

その強い目は訴えてきた。

かつて自分が人間になることを選択したときの様に。

「よかる。お前さんは魔族と人間、天秤にかけ魔族として生きることを望んだ。」

その一族では誰もが通る道。

魔族と人間の種族の間で生まれたモノの運命を自ら選ぶというもの。

「魔族となれば、二度と人間に戻ることは叶わん。良いな？」

「はい。そのために、彼と生きる為に来ました。」

「……その彼とやらがお前を受け入れなくても良いのか？」

「拒まれたら何度でも彼のところへ行きます。」

「その心意気や良し。しかし中途半端な心では、お前さんは分裂をする。」

ババ様と呼ばれた人物は、話をするとともに、女が魔族になる儀式の準備を進めていく。

大量の道具をスラスラと歳を感じさせない早さで置いていく。

手慣れた手つきで術式をいくつも書きあげ、準備を整えていく。

そしてそれを片手間に、女に説明を続けていく。

姿に似合わない、テキパキとした動きが女を啞然とさせた。

「たとえ中途半端な心でなかったにせよ運が悪ければ分裂は確実にやな。」

「ババ様……その、分裂とは一体何でしょうか。」

「魔族としてのお前さんと人間としてのお前さんじゃ。」

「それは……どういことですか……？」

準備を終えたらしく、老婆は女を真正面から見据えた。

慎重に、一言一言を選んでいゝらしい。

少しの間、沈黙がその空間を包んだ。

「人間としてのお前さんは、まず悪魔に乗っ取られるんじゃ。」

「乗っ取られ……？では、魔族としてのお……私は？」

「魔族としてのお前さんは大丈夫じゃ。ただ、人間であった記憶を失うである。」

「人間であった記憶……。」

「それを失って彼とやらを見つけれられるかの。ん？どうじゃ。」
「……………」

待ったをかけることもできない。

一度きりの選択。

彼女が今選んだことが彼女の一生を決める。

彼女が今選べば、後の変更はできない。

「私は・・・魔族になります。」

彼女は、何かを失うことを恐れず、“彼”と生きることを選んだ。

「私が魔族になれば、彼と生きていくことができます。」

「・・・それで良いんじゃない？」

「はい。私は私を失うなんて考えられません。」

（私は、彼を愛している。）

それなのに、何を迷うことがあるのだろう。

最初から迷うことなど何も無かったのだ。

たとえば、自分自身を失ったとしても。

「・・・愛しておるのか。」

「はい。心の底から。」

「・・・もう、止めぬよ。ベラ。」

最後に、“人間”の彼女は、何の迷いもなく微笑んだ。



長い長い時間を人間として生きた。

人間なのに、人間としては有り得ない程の長さを。
それはきつと、この世にあの黒真珠があるから。
黒真珠が消えれば、本物の人間になれる。

不老不死という異様な輪から逃れられる。

「ベラ……。」

涙を流したのは、彼女のためで。

生きるも死ぬも彼女と共にと決めた。

彼女以外のものなら失っても怖くは無い。

だから、人間になろうと。

地上に出て、禁を破った。

涙として魔力を放出すること。

どれだけ危険なことかはわかっていた。

現に、その危険を自分は全て被った。

それでも良かった。

彼女と共に生きられるのならば。

しかし、今、何処にも彼女が居ない。

死んだかもしれない。

ならば、その後を追わなければ。

鋭い刃を自分に突き立てる。

幾度目かになる、その行為。

それでも、彼は死ぬことはなかった。

「人間にも成りきれぬのか……!!」

彼女の後を追うことすらもできない。

魔王であつた頃と唯一違ふのは、魔力がないことだけ。

（一体何が変わつたというのか……。）

何も変わりはない。

結局、彼女を手に入れることも叶わなかった。

人になりきれることもできずに。

悪魔に戻ることもできずに。

黒真珠に捕らわれて。

（もっと早く、彼女と出会っていれば）

地の底で見つけた魔族の女との子を産ませることも無かった。

いや、その女を抱くこともなかった。

そしたら完全に人間として生きられることができていただろう。

黒真珠が消えないのは、その女の呪い。

今でも執拗に、魔の王を求めている。

一夜だけ交わった男をただ待ち続けている。

呪いをかけて。

自分のモノにしようと。

◇

人間になったら。
悪魔になったら。

きつと、彼女と生きられる。
きつと、彼と生きられる。

もう彼女は俺を置いては行かない。
もう彼を待つことをしなくていい。

だから、全てを捨てよう――
・・・。

魔王という地位を。
人間という血の交わりを。

ただ、あの人のために。

そうして、二人は互いの為にたくさんのものを失った。
二人は、それで二人が共に生きられるのであればと、後悔はしなかった。

何を手放しても、一番のものが手に入るのならと。

二人で寄り添って生きられるのだと。

結果、人間であることを捨てた女は、人間であつたことを忘れた。
結果、悪魔であることを捨てた男は、彼女を手に入れられなかった。

やがて魔力が必要になったかつての魔の王は、使い魔を召喚した。

それが、愛しい人とも知らずに。

それでも、彼は何度でも彼女を愛した。

魔族となった彼女を、知らず愛した。

また、彼女も。

記憶を失っても尚、彼を愛した。

異形の彼を、誰よりも愛した。

しかし、彼に呪いをかけた女も、また彼を愛していた。

二人が共に生きることを許さず。

二人の仲を引き裂いた。

自分が、彼らの間に入ることです。

それでも二人の想いは変わることはなかった。

しかし、彼が誰よりも愛した女は、彼の手によって、息を引き取ることとなる。

呪いをかけた女を、彼が愛していると思った故に。

呪いをかけた女が、彼に愛されようと人間になった末に。

彼は、一度彼女を手放してしまったばかりに、奪い返すこともできないまま。

愛した彼女を、永遠に失った。

（何を馬鹿な。）

ゆらりと、影が揺れる。

（吾が、彼女を永遠に失うだど？）

そんなことがあるものか。

かつては何もかも思いのままにしてきた。

不可能？そんなものがなんだ。

（吾は、彼女を手に入れる。）

何を犠牲にしようとも。

「とある若者を探しにお行きなさい。その若者は、魔を討つ勇者と成り得ましょう。」

世界？そんなものに何の価値がある。

支配？もうそんなものどうだっていい。

彼女を、この手に取り戻す。

（次こそは・・・）

彼女に、本当の気持ち。

(ベラ。)

――――吾は、お前だけを愛している。

L v. 67 揺るがぬ決意（後書き）

愛し愛されていた二人。

互いに、気持ちを伝えることはなく。

どちらも愛されていることを知らないまま。

L V. 68 無抵抗の雨の中（前書き）

BLっぽいです。注意。

L v. 68 無抵抗の雨の中

何も考えたくない。何も。



雨が降り始めたのは、少し前のこと。
雨は、嫌いじゃない。

「雨降りそうな感じだったか？」

「いきなり降り出したね。」

「止みそうにないですねー。」

「不思議だな。」

「でも好都合ですね。雨なら視界が悪くなりますから。」

フアリオンさんが全員に指示を終えたらしく、ゆっくりと腰を下ろした。

「撒くのは簡単そうだな。確かに。」

「オルデルさん、ごめんなさい。こっちに來てもらっちゃって。」

「いいんだよ。オトリ役も重要。」

そう、キサラ、テイザ、フアリオン、ジェリエ、オルデルの五人はオトリをすることになった。

オトリは最も危険で下手をしたら名簿からの名前削除の前にまた捕まってしまうかもしれない役だ。

オトリの人数が足りないということで予定に無かったオルデルがオトリ側に回るようになった。

しかし、それはファリオンにとっては想定外のこと。

（まさか一般の方が混ざってしまうとは……。）

少し彼に危険が伴うかもしれない。

いつもならともかく、今は自分以外のモノに気を配れる余裕がない。

師から授かった“予言”の影響で。

（全く……何でもお見通しですか。）

『予言を授ける。』

師から使いを頼まれる少し前の会話。
それは唐突に訪れた。

『吾の指し示す場にて、望む者、現れん。』

『――！――！――！』

『吾はわかるぞ。望みは何なのか。』

何もかもを見透かしているかのような目。

時々、あの眼がとても怖くなる。

まるで自分の全てを見透かされているようで。

『どうして、など今更言う必要もないでしょう。しかし……』

『彼女が関与していると考えたと恐ろしいか？』

『当たり前です。もしも彼女が最奥層に居たとしたなら。』

『何度か、吾は彼女と会話したが、あれはもうどうしようもないだろうに。』

『どうしようもないことはありません。』
『わかっていないのか？耳飾りを渡した時点でわかったと思っていたが。』

どこまで、彼は自分のことを知っているのだろう。
どうしてそこまで知り得ることができたのだろう。
わからないからこそ、恐怖した。

『彼女にはできるだけものを託しました。それだけです。』
すると、師は使いと称して、彼らのところに私を戻した。

「ファリオンさん？大丈夫ですか？」

「え、ええ。キサラ君こそ、雨に打たれて……」

「それは全員一緒だろうが。優男。」

「おや変態さん。風邪をこじらせてしまいなさい。」

「あ、いいなそれ。こじらせろ。」

「その優男と道案内役兼オトリ役農業妻子持ち君ダメレ。」

「長いな……！それと俺はオルデルだ！！」

ファリオンさんとオルデルさんと兄さんの三人が騒ぎ出した。

（見つかったちゃうからやめてほしいなー。）

とか思っていたらジェリエ君が止めに入った。

兄さんとオルデルさんはもろに食らってたけどファリオンさんはそれはみごとに避けた。

「アンタ、ただの敬語使う優男かと思ってましたけど意外とやりますねー。」

「お褒めに預かり光栄です。貴方こそとてもいい棍さばきをなさい

ますね。」

「名前教えてもらってもいいですかー？放火魔さんー。」

「おや、優男から降格ですか？まあいいですけど。ファリオンです。ジェリエ君。」

ああ、また仲が悪く・・・。

正直にいうと、このオトリ組はとても仲が悪い。

誰とでもまともに話せるのはキサラぐらいのものだ。

（う、うわあああああああああああああ）

そんなことでオトリができるのだろうか。

仮にも助けあって互いが捕まらないようにしなければならぬのだ。なんとか短時間で連携が生まれればいいのだが。

◇

「キサラ。」

「何？兄さん。」

不機嫌そうな顔をしながら近づいてきた。

しかしその顔をされても原因が原因なので直しようがない。

「これが終わるまで、だ。その後はこいつらと別れる。」

「え・・・？どうしたの。」

「あんまり他の奴と楽しそうにしないでくれ・・・。」

この顔は見たことがある。

悲しくて苦しくて、辛い顔。

どうして兄さんがそんな顔をしているのかわからないけれど。

「兄・・・さん？」

「キサラ・・・。」

雨の中、濡れているからだろうか。

いっそう兄さんの哀愁が増す。

耳元で、兄さんは言った。

「俺が、耐えられそうにない。」

それだけ。淡々と。

（兄さん・・・？）

そうだ、牢屋の中で見た顔だ。

僕を心配だと言って、身を案じてくれた時の。

不安。その感情を何に対して抱いているのかはわからないけれど。

いつの間にか皆は配置に移動した後で。

木陰で、僕らは二人だけ雨に降られていた。

監獄で男にしては華奢になってしまったキサラの腰をテイザが引き寄せる。

いつもと違う雰囲気吞まれて、僕は抵抗することができなかった。
いつもの・・・ふざけた空気じゃ、なかったから。

いつか見せた、とても優しい目を、テイザはしていた。

「キサラ……。名前で、呼んで。」

誰かが言った。名前を欲した。

面影も何もかもが懐かしくって。

兄の向こうに、誰かが見える。

(ナトス……。)

ゆっくりと、影が重なる。

笑っているのに、悲しそうな兄の顔。

髪の色も、顔立ちも、背丈も似ていない兄。
なのに、ときどき誰よりも僕に似ている。

手に入るハズの無い場所を求めることが。

自分を抑え続けて、結局自分が傷つくことが。

誰よりも傷ついているのに、相手のことしか考えないことが。
一人の人を待ち続けることが。

（きっと、兄さんは僕に言ってるんじゃない。）

旅の前に言っていた片想いの人。

テイザの本気の相手。

名前を呼んでしまったら、きっとテイザはもっと辛くなる。

それは・・・駄目だ。

これ以上辛い顔をしてほしくない。

「兄さ・・・」

その先を拒むようにテイザはキサラの口を塞いだ。

抵抗もできぬまま、キサラはテイザに口づけられた。

その光景を、ナトスが見ているとも知らずに。

雨は、嫌いじゃない。
きつと今起こった記憶を洗い流してくれる。
またもとの兄さんに戻るから。



(キサラ・・・?)

他の誰かに。

誰とも知れない男に。

口づけられていた。

抵抗もしていなかった。

(・・・あの男が?)

自分ではなく。

何も、考えたくはない。

何も。

L V. 68 無抵抗の雨の中（後書き）

兄貴・・・；
ω；

L V. 69 止まない雨（前書き）

キサヲを想う二人の視点。BLっぽいので注意。

L v. 69 止まない雨

いつそ、世界に二人。自分と彼しか存在していなかったら楽なのに。



雨は嫌いだ。何もかも流して有耶無耶にするから。

楽しそうに、キサラが笑う。

キサラが誰かと話してる。

それだけなのに。

（嫉妬？嘘だろ。）

誰かと一緒に居る。

それだけで一緒に居る奴が嫌だ。

それ以上に俺の方が笑わせてやるとか。

それ以上に俺の傍に居て欲しいとか。

おかしくなりそうだ。

弟なのに。

男なのに。

俺は女が好きなのに。

俺は兄なのに。

それでも。

「キサラ。」

「何？ 兄さん。」

今俺はどんな顔をしているんだろう。
独占欲の滲み出た顔だろうか。

「これが終わるまで、だ。その後はこいつらと別れる。」
「え．．．？ どうしたの。」

「あんまり他の奴と楽しそうにしないでくれ．．．。」

胸が痛む。

悲しくて苦しくて、辛い。

こんなにも不安な気持ちになったのは初めてだ。

「兄．．．さん？」

「キサラ．．．。」

まとわりつく水滴がうっとおしい。

キサラが、キサラの顔が良く見えない。

そっと、耳元で囁く。

「俺が、耐えられそうにない。」

感情を押し殺しながら。

きつと、こいつを連れてどこまでも逃げてしまう。
牢の中で感じた不安よりも大きな不安。

怖い。こいつが消えてしまいそうで。

何かで繋いでおかないとどこかに行ってしまう。

そんな危うさが俺を不安にさせる。

こいつはもう一人でも生きていける。

俺を置いていってしまう。

キサラを引き寄せる。

（こんなに痩せて。）

いつもの様に文句の一つでもいいのに。

いつものように、抵抗してくれていたのなら、楽だったのに。

すっぽりと俺の腕にキサラが収まる。

たったそれだけが、何よりも嬉しくて。

「キサラ……。名前で、呼んで。」

兄としての俺じゃなくて、一人の人間として俺を見て。
兄弟としてじゃなくて。

男とか女とか性別も関係なく。

自嘲ぎみの笑みが、浮かぶ。

何となくわかる。

キサラは自分の中に誰かを見ている。

俺ではない誰か。

きっと性別も血の繋がりも気にしないでいい相手。

（それでお前は傷つかないのか？）

幸せならそれでいい。

今はまだ耐えられる。

お前の幸せだけで俺は生きていける。

だから……

（名前を、呼んでくれ。）

そしたらもう少し我慢できる。

歯止めがつく。

それだけでまだ満足できるから。

お前をきつと、縛らなくて済むから。

「兄さ・・・」

ほら、耐えられない。

そのまま突き放してくればよかったのに。

お前が抵抗をしないから。

また、俺はお前に希望を持ってしまうんだ。

雨は嫌いだ。

何もかもを洗い流すから。
また、兄に戻らなくちゃいけない。



キサラにかけた術が解けた。
だからすぐに彼を見つけにいった。
簡単に見つかったのに。

どうやら、彼に自分を見てもらうのは簡単ではないらしい。

（話声・・・？）

聞こえるのは二人程。
片方には聞きおぼえがある。

こんなに早く肉声が聞こえるとは思わなかった。

（何度聞いても落ち着くな。）

彼の声は不思議と気持ちを和らげてくれた。
それと同時に、少しだけ楽しみになる。
彼の姿が見られることが。

髪に触れられるかもしれない。
体温を確かめることができるかもしれない。

澄んだ眼をまた真正面から見ることができるかもしれない。

それには雨のせいで少しだけ視界が悪いのが難点だが。

（目の前に行って、会ったら何と言おう。）

まずは人間に化けよう。

本当の姿であってしまったら驚いてしまう。

自分が魔王であるということはいつか話そう。

彼は受け入れてくれるだろうか。

いや、受け入れられなくてもかまわない。

彼の望みや夢を聞こう。

そしたら、彼の望む世界を創ろう。

血を望まないのなら、争いの無い世の中を。

誰もが争えない世の中を創ろう。

しかし、そんな考えは与えられた衝撃に掻き消された。

（キサラ・・・？）

見た光景はキサラと見知らぬ男。

男の眼は、哀愁を帯びていて。

キサラの顔は見えなかった。

次の瞬間、彼は男に口づけられていた。
抵抗するでもなく。

彼を受け入れているように見えた。

（何を今更動揺することがある）

自分だって側近としたではないか。

・・・いや、された。強引に。

愛も囁いた。

心にも無いことを囁き続けて。

『心にも無いことをよく言えますね、魔王様？』
見透かされていたけれど。

恋情を向けられていたから故に。

恋情を誰に向けられようとも満たされなかった心。

それが、人間の少年に逢ったというだけで、満たされた。

満たされたのだ。

唯一の心の拠り所。

自分という存在をしっかりと見てくれる。

称号ではなく、名を呼んでくれた。

確かに見えた喜怒哀楽。

豊かな表情と自分には持っていない温かさを持っている少年。

『僕、キサラ。よろしく。』

初めての対等な存在。

純粹。真直ぐな感情。

気がつけばその体を抱きしめていた。

自分が自分である場所をくれた少年を。

誰かの為に自己犠牲をするキサラにイラついた。

自分だけを見ていればいいと思った。

それはキサラと居る誰かへの嫉妬。

初めて感じた独占欲。

『私を、愛していますか？』

（そうか。）

あの言葉はきつと、自分を繋ぎ止めておく為のモノ。

しかし自分はその意図に全く気が付けなかった。

アリファスが自分に向けていた歪んだ恋情。

それが、キサラに当てはめればアリファスの気持ちがよくわかる。
だからと言って、あの気持ちを受け入れられるわけではないが。

（私は、キサラを・・・・・・）

苦しい。気が付いてしまった。

一番辛いことに気が付いてしまって。

もがけばもがくほど胸が苦しくなる。

（私は・・・・どうすればいい。）

この得体の知れない初めての感覚を受け入れて。
そしたら、どうなる。

この苦しみは消えてなくなるのだから。

（キサラ）

触れたい。

気になることも聞きたいこともたくさんあるのに。
一歩も動くことができない。

(キサラ)

目の前の光景を目に焼き付けてしまうのが怖い。
眼を背けたい。

何も見たくない。

(キサラ)

すぐ近くに居るのに。

手を伸ばせば届くかもしれないのに。

伸ばしかけた手は、ためらいをもって下ろされた。

世界が自分と彼の二人だけだったら、こんな苦しみはないのに。

L v. 69 止まない雨（後書き）

本気の兄貴。

L v. 70 好奇心と気遣い

確かに、簡単なことだとは思ってなかった。



「さて、そろそろ皆さん準備はできた頃でしょう。」

ファリオンさんは雨に眼を凝らしながら遠くを眺めた。

確証も何も無いけれど、彼は何かを探しているように見えた。

「それにしても・・・」

ファリオンさんが眼を細めながらこちらを見た。

同時に、オルデルさんとジェリエ君、ウラキまでこっちを見た。

「な、なんですか？」

「何かあったんですか？」

「何か・・・？」

先程の光景が頭の中で再生される。

鮮明すぎる、その記憶が。

「な、何もありませんよっ！！」

「本当・・・ですか？」

「怪しいですー。」

「何か変だな。」

「何か隠してるのかな？ キサラ君。」

嘘をついているようで確かに申し訳ない。

でもそんなに全員で疑いの目を向けられるとさすがに僕も怖い。
あと一つ言いたいことがあるんだ。

「・・・狭すぎませんか？」

「「「「・・・」」」」

オトリになる前に少し相手の様子見をする段階。

しかし皆同じところに隠れて居る為に非常に狭い。そしてムサイ。

ほらね、やっぱり全員思ってたんだ。

なら僕に何かあったとか詮索する前にそれ突っ込もうよ。
それとウラキが異様に近い。

「ちょ、ウラキもう少し向こうに・・・」

「なんだ。俺は元々お前だ。別にいいだろ。」

「いや意味わかんないって。」

「そんなにひつつくのが嫌なら・・・もう一度お前の中に入るぞ
？」

「イヤ・・・結構です。」

それは遠慮しておくよ。

ほら、ね？あれ兄さんに変なことされたときとかには安心だけどさ。
でもこう全部ウラキ側に僕のことダダ漏れなのはちょっとね。

いや別に知られてマズイことがあるわけじゃないけど・・・。

「なんだ？嫌か？」

「嫌じゃないけど・・・。」

「お前ら何の話をしてるんだ。」

「いいだろ？俺たちの問題だ。」

これ見よがしに僕にひつつくウラキ。
それが兄さんに対する挑発だって僕にもわかる。

「俺・・・たち?!」

あーほら面倒なことウラキが言うから!!
なんか顔真っ赤にして怒ってるよ。

そしてジェリエ君に後ろから棍で殴られるっていうもう今ではお決まりのパターン。

え?そこまでお決まりじゃない?

・・・実は焦点が当たって無いだけでもう結構兄さんはジェリエ君にノされてる。

もう少しこう、皆仲良くして欲しい。

「痛えなジェリエ坊!!」

「その呼び方やめろって言ってるんです!」

「その微妙な敬語もどきやめろ!」

「あーこら棍をそんなに振り回すな!」

「そうですよ見つかるでしょう?」

フアリオンさん、注意するならもっと困った顔・・・。
フアリオンさんはめっちゃくちゃ良い顔をして言ってる。
むしろ見つかれのなものを感じる。

(黒い・・・黒いな。)

「てかそれより本当の所何があったんだよ。」
(うわ!?)

なんと精神での会話は御健在らしい。
もしかしてこれ今まで考えたことまでダダ漏れ？
なんだろう。すごく怖い。

「言っとくけど、お前に触れて無いとできないからな。」

（あ、そうなんだ。）

「だから他の奴に聞かれたくないことはこうやって会話する。良いな？」

（うん。なんか便利だねー。）

ウラキは今の姿からとっても和む。

・・・もふもふしてもあんまり嫌がらなくなった。
というか今は毛が濡れてしまつてグシヨグシヨだ。

（後でウラキ体乾かそう？濡れててあんまり気持ち良くない。）

「俺だつてここまで濡れてたら気持ちいいわけ無いだろ。」

（ねー。僕も服がびしょびしょで気持ち悪い。）

「・・・だろうな。」

ウラキはもぞもぞと動き出した。

僕の腕にすっぽり入ったまま、腕の間から顔を出す。

ウラキの後頭部が僕に向く。

耳が僕の頬をくすぐる。

（どうしたの？）

「早いところこれが終わらせてあいつらと合流しようぜ。」

（うん。ていうかさ。）

「・・・何だ？」

ウラキの頭にこつん、とおでこをつける。

濡れてて少し気持ち悪いだろうけど、それくらいは我慢してもらおう。

というか温かいな。

(温ぬくい・・・。)

(ウラキさ、何で人間じゃなくてウサギみたいな姿なの?)

好奇心。僕はわりとドキドキしていた。

ていうか動物と会話してる自分がメルヘンチックというかなんというか。

・・・すごく、嬉しいし楽しい。

なんでも良いからこの小動物と会話がしたい。

・・・我ながら何という乙女。泣ける。

でも、それを知っているのは元・僕だけ。

これ結構いいな。

兄さんに馬鹿にされないし。

タスラやシーラには早く会いたいけど、二人に横取りもされない。

「この方がお前が喜ぶと思ってさ。」

(え・・・?)

「お前はここ数年、自然を愛していた。」

自然に生きる動物なら、小動物なら、受け入れてくれるだろう。

そんなことを、ウラキは言った。

何故だか、とっても腹が立った。

(馬鹿。)

「は？」

（バカバカバカバカバカ、ウラキのバーカ！）
「はあ？」

ついに、ウラキが声を上げた。
皆はキョトンとしてる。

あ、本当に今までの会話聞こえなかったのか。すごいな。
……じゃなくて。

「別に僕ウラキが小動物じゃ無くても喜ぶって。」
「……本当か？」

「見くびるなよ。ウラキのバーカ。」

「お前いくつだよ。バカバカ言い過ぎだ。」

確かに。言語揃って無さ過ぎ。

だってほら、本とか読む暇なかったし。

そんなに頭も良くない……し？

「じゃ、俺人間でもいいわけ？」

振り向きざまに、ウラキが不敵な笑みを浮かべる。

うわすごい僕ついにウサギ(?)の表情読めるようになった。

というかこれ人類初の快挙じゃないか？

だって動物の表情読めるんだよ??

し　か　も　小　動　物　！　！

ここ重要。うわ嬉しい。

「お前って本当に……」
（ん？何？）

「手……離せ。じきに夜になる。」

夜になるのと手を離すのと何の関係があるんだか。
というかもう夜か。

雨雲が掛ってて今まで暗かったから全然わからなかった。
それにしてももぞつきすぎ……くすぐったい。

「早く手を離せ。」

「何だよ。」

僕そう言われると逆に離したくなくなっちゃったんだけど。

それとさっきから視線が気になる。

多分僕らがじゃれてるようにしか見えないんだろう。

「ほらキサラ。ウラキの言うとおりだ離してやれ。」

「何で。兄さんには関係ないだろうー。」

「そうですよ変態ー。目の保養をやメロなんて気は確かですかー？」

さらりとそういうことを言わないで心臓に悪い。

それにジェリエ君は顔立ちが女性よりなので、僕より目の保養になる
と思われる。

「あッ……!!」

「」「」「え?」「」「」

何今の声。

僕の腕のあたりから……。
てか、ウラキだよな?今の声……。

L v. 70 好奇心と気遣い（後書き）

ウラキ「もっふもふにしてやんよ」
テイザ「いらん。（即答）」

L v. 71 管理所、潜入。

本当、人生何があるかわからない。



「ウラキ！離れろ今すぐキサラから離れろっ！！」

「ほう・・・こんな仕掛けがあったんですね。」

「感心してる場合じゃないですー。」

「いいんじゃないか？オトリ役が一人増えた。」

オルデルさん、言うことはそれだけですか？

確かにオトリ役が増えた。うん。

ウサギみたいな格好だったら戦力外。

戦力外・・・だけどさ・・・！！

「・・・！！」

「離れろっつったって・・・俺の上に乗っかってんのはキサラだけど？」

「それはいいんだ？」とか言いながらウラキがニヤリと笑う。

僕は驚き過ぎて動けない。というか何これ。

「も、もふもふがー！！」

「・・・お前な。人間でもいいつつただろ。」

「言っただけどさ！」

「俺が人間じゃ・・・嫌か？」

そんな寂しそうな顔しないでよ。
っていうかまだ嫌なんて一言も・・・。

「嫌じゃ・・・ない。」

「ホントだな？今言ったの聞いたからな。」

「え？ちょ・・・ウラキ？」

騙された。

パツと表情が変わった。

しかもめっちゃ良い顔してる。

（この・・・！！）

僕よりも長い腕。

長い足。

華奢じゃ無くてがっちりした体。

・・・なんでだろ、筋肉もついてる。

僕よりも兄さんに似ていて、整った顔立ち。

で、短髪なのが良く似合う。

平凡な容姿の僕とは、大違い。

（さわやかイケメンってやつですか・・・。）

兄さんも（無駄に）顔はいいけど、違った意味でいい顔。

全く別のタイプでオルデルさんの次あたりにさわやかだと思う。

「このおー。」

「な、何だよ。」

「全然僕じゃないじゃんかー。」

「当たり前だろ。」

胸板をべちべち叩いてやった。

(これ本当にウラキ?)

さっきまでの愛らしい姿からは想像できない。
というかこれが……もう一人の僕?

「なんで筋肉あんの」

「さーな。」

「でもマツチヨってわけじゃないね。」

「うるせー。これぐらいがちょうどいいんだ。」

「うん。ウラキがムキムキになったら僕もう近寄りたくないもん。」

「……気をつける。」

ああ、雨が僕の背中集中攻撃してくるよ。

僕がウラキの傘みたいでヤダな。

ずるくない? 人間になった瞬間僕より全然男らしいんだよ?
僕なんかより全然顔立ちいいし……

「……あんまふくれんなよ。」

「うるさい。全部ウラキが悪いんだ。」

「はいはい。」

頭撫でるな雨がしみちゃうだろ!!

もう結構濡れてるけどね!

この間、他のオトリ組はポカーンと僕らのやりとりを見ていた。
見るな見世物じゃないよ! っていうか止めて!!

「キサラ君、いい加減ウラキ君の上から降りたらいかがですか?」

「あ……ごめんウラキ。」

「別に。ほら、俺体力あるし。」

一言多いな。

というか何この体勢。

（何で今まで誰もつつこまなかったんだよ。）

ウラキの肩のあたりにキサラの手があって。

ウラキの腹部に馬乗りしている感じになっている。

はたから見れば、まるでこう・・・僕が押し倒（強制終了）

「いやーいい度胸ですねー。」

「へ？何・・・」

「恋人に裏切られたばかりの僕の前でそんなにイチャつくなんてー。」

「イチャついてなんてないですよ。」

「そうですかー？」

ジェリエ君が棍を右手で弄んでいる。

なんというか、怒った顔も可愛らしい。

本当に中性的な顔立ちで男と言っても女と言っても通用する。

（まあ・・・中身は結構怖いけど。）

「さて、そろそろオトリ役が出ていかなければ彼らは困難ですよ。」

「そうですね。こんなことやってる場合じゃないですよね。」

「あーちよつとーまだ僕の話終わってませんよー？」

「そんなの後にしろよ。俺は早く妻と子供に会いたいんだ。」

「つうかお前ら何で俺の変身驚かないわけ？」

「「「わあ、人間になった。（棒読み）」」」

確かに驚きはしたけどもう動物が喋ってるだけで驚きだもんね。

もうこの程度じゃあんまり驚かなくなってきたよ。

ヤバイ普通感覚を取り戻したいんだけど。

「でも俺もそれ気になった。キサラとそこの優男はまだしも」

「優男と言うのは私のことでしょうか。」

「黙ってる。話戻すけどジェリエ坊と妻子持ち君は何で驚かないんだ？」

「僕はアンタの手から水が噴き出すのとか見てますしー。」

「俺は別に。動物が人間になってもな。世の中魔女とか半獣とか悪魔とか居るし。」

今更だけどこのパーティの順応性半端無いよね。

むしろウラキが人間の姿になったことを純粹に驚いたのって僕だけじゃない？

そうこうしている間に見張りを倒していく。

あれ？オトリってそういう役割だったっけ？

オトリってこう、全体の目を引く的な感じじゃないの？

「面倒なので、強行突破しましょう。」

「だな。」

「いっそこの管理所陥落させませんかー？」

「いや、そしたらこの辺の秩序が乱れるだろ。」

「そしたら俺たち地元の奴らが困る。」

何この会話。

オトリ役なんで買って出たんだあんたら。

「じゃ、地元が困らない程度。」

「何事もほどほどに、ですねー。」

「あいつらもこれで潜入しやすいだろ。」

「これで捕まってしまったのならそれまでということでしょういいで

しょうか？」

「自己責任だな。」

バツタバツタと人をなぎ倒しながら涼しい顔でそんな会話しないですよ。

なんか・・・ホント僕って平凡なんだな。

ジェリエ君は流れる様な棍さばきで見張りや兵をなぎ倒している。フアリオンさんも大きな動きをしないで相手を気絶させていつている。

兄さんとウラキは言うまでも無く大暴れ。

なのに無駄も無くて静かだから見つかりづらい。

オルデルさんは僕を誘導してくれた。

ちょ、見つからないように行くならオトリじゃなくない？

話は変わるけど、ここの管理所は大切な情報もとりあつかっているらしい。

結構上の爵位を持っていると思われる人物を何度か目にした。

こういう知識はシュヒからなんだけど・・・意外と役に立った。

「あの人・・・確か、男爵・・・。」

「ええ、お見事です。お名前は御存じで？」

「いえ・・・そこまでは。」

「でも何故御存じなんですか？あ、シュヒアルですね？」

「はい。シュヒからいくつか肖像画の写しを見せてもらいました。」

「肖像画の写し・・・ですか。」

「何でも肖像画は貴族の嗜みだそうです。」

「何故彼女がそんなものを？」

「有名な画家の方に顔がきくそうです。それで肖像画の写しを。」

「社交の場で役立てる為・・・ですね。まさか彼女が貴族としてどうあるべきか理解しているとは。」

感心したようにフアリオンが言う。

確かに、シュヒはたまにそういうのは嫌いだと言っていた。だから肖像画の写しを見せられたときはびっくりした。

『もしかしたら役に立つかもしれないわ。』

『何言ってるの？貴族に会ったらチャンスよ？』

『キサラ君は、こんなつまらないところで終わるはずないわ。』

『きっと、キサラ君の素晴らしさは認められるわよ。』

『玉の輿っていいと思わない？・・・冗談よ。』

『私の義父様は伯爵なんだから、キサラ君は公爵くらいになれるわ。』

『だって、キサラ君は義父様より素晴らしいもの。』

『笑いごとじゃないわ！私はいっだって真面目よ！！』

そんなことを言いながら、僕に色んなことを教えてくれた。

爵位のこと、先王陛下の評判。

次期王様はどんな人柄か。

・・・今は先王陛下がお倒れになって、次期王ではなく現王陛下だけだ。

教育の受けられなかった僕に色々なことを教えてくれた。

まさか、それがあんなに役に立つとは。

そのときの僕は気がつかなかった。

L V. 71 管理所、潜入。（後書き）

フラグを立ててみました。

L v. 72 生まれた可能性

嫉妬。ときにそれは人の感覚すらをも麻痺させる。



・・・復讐。そのために、俺は這い上がって来た。

「俺が、地上の王となる。」

そうすれば奴に復讐を遂げるのは容易い。

国民を生かすも殺すも自分次第。

自分の生きる目的は最早、あの男への復讐である。

(テイザ・・・テイザ、テイザ！)

ああ、見える。

彼が地に屈する姿が。

苦しみもがく姿が。

「っはは・・・。」

激しい憎悪。

彼から生み出された負の念は、悪魔を呼び寄せた。

そして、彼は悪魔との契約を交わした。

手に入れた魔力により、権力を手に入れた。

どんな人間よりも上手く。

どんな人間よりも魔力の有効活用ができていた。

自らも魔と化す程の強さを手に入れた。

使い魔事態は下級のモノだったにも関わらず。
それ程、彼の憎悪は大きかった。

悪魔へ魂を売る者は多数いるものの、彼の様なケースは異常。

彼は、悪魔の人格を潰し、自分に取り込み自らが悪魔として、地上に存在しているのである。

「っはあ————・・・俺が・・・！！」

———その、息の根を。

・・・彼は知らない。自分が誓った復讐に何の意味も無いことを。
彼は知らない。それが単なる逆恨みであることを。
彼は知らない。全て嫉妬が生み出した幻であることを。



「・・・あれ？」

「どうしました？キサラ君。」

「何か、違和感ありませんか？」

「・・・なんでしょう。」

ファリオンさんはそれとなく小声で問いかけて来る。

「まだ何がどうってわけじゃないんですけど。」

「……………お話をお伺いしてもよろしいでしょうか？」
「はい。」

とりあえず、頭の中を整理しなければ。

倒された兵士をよけながら、皆と離れないようにしていく。

（ごめんなさい。）

別に僕が倒したわけじゃないけど、何となく申し訳ない。

（まったく……兄さんもウラキももう少しくらい手加減しろよな。）

床に倒れている兵士たちは完全に気絶している。

てかうわ、踏んじやったごめんなさい。

……呻き声怖ええええええ！！

「一旦前の方に行った変た……ゴホン、お兄様も呼び戻しますか？」

「あ、いえ。いいです。多分この話通じるのファリオンさんくらいですし。」

「……嬉しいですね。君と二人で共有できる話なんて。」

ファリオンさんが甘い笑みを（何故か）浮かべた。

（わあ、キザだな。）

喋り方と言い、笑顔と言い。

きっと僕が女の人だったら今の笑顔でころっと……じゃなかった。

「庶民の一般常識の中には組み込まれていない情報について話すんですから。」

まあ僕も庶民だけどさ。でもほら、シュヒがね？

むしろシュヒがいなかったらこんなことに違和感持たなかったんだ

ろうけど。

「さっきの人、男爵にしてはたち振る舞いがぎこちなかったですか？」

「・・・ええ。言われてみれば、確かにそうですね。」

「シュヒの義父さんて、伯爵でしょ？だから大体たち振る舞いとか見てるんですけど。」

「よく違和感にお気づきになりましたね。」

「あ、シュヒから厳しく教わったので。」

「シュヒアル・・・あれは一体何を考えているのかわかりません・・・。」

（ごく平凡な一般庶民に貴族のたち振る舞いなど・・・まあ、彼女らしいですけど。）

むしろそれを教えたことで今大いに助かった。

大事な何かを見逃すところだった。

「で、もう一つ。」

「・・・まだ何かお気づきになったんですか？」

「あ、はい。でもあくまで勘なんですけど・・・。」

「かまいません。どうぞ。」

（大したものですね・・・。）

ある一点において洞察力が優れている気がする。

これはあの兄とシュヒアルによってもたらされたものか。

それとも・・・。

どちらにせよ、ただの天然少年、というわけではないようだ。

「さっきの牢で、肖像画の写しで見たのと似ている人を複数名確認したんです。」

「……………！！！」

「まさかと思ったんですが、なんとなくたち振る舞いが貴族のそれに似ていました。」

「……………爵位はどの程度の方だと思いますか？」

「これもあくまで勘なんですけど、大体……………男爵、子爵、伯爵……………くらいまでです。」

「そうですか。」

先程までは気にもとめなかった。

ぼんやり似ていると思っていたぐらいで。

でも、さっきの男爵のたち振る舞いを見て違和感を感じた。

牢から一緒に来た囚人たちの方が、よっぽど自然にそのたち振る舞いをしている。

（まさか……………）

キサラが言っていることは嘘とは思えない。

洞察力がなかなかのものなのは先程理解したばかりだ。

そして何より、自分なりに考えをまとめている。

だからこそ、脱獄してから該当する複数名の行動に目をつけていたのだろう。

（賢い……………いや、鋭いのか？ 捉えどころが的をついている。）

さすがあの生き好かない変態の弟。

兄に負けないモノを持っている。

さしずめ、この二人を合わせて一人前といったところか。

・・・それにしても。

(爵位をもつ貴族が牢獄に収容されていた・・・?)

一体、何のために。

そしてそれが事実だとしたら、何故公にされない。

「・・・そういえば、ほとんどが冤罪で捕まったって・・・。」

キサラの顔がみるみる青くなっていく。
それと同時に歩みも遅くなっていった。

(もしかして・・・。)

「キサラ君？」

「誰かが・・・はめた？」

「・・・はい？」

「おかしいですね。仮に彼らが本物だったとして、同時期にこんなに貴族が。」

「・・・それも少なくとも影響力のある。」

キサラの異変に気づき、先を歩いていた四人が戻って来た。

「どうした？」

「・・・これも勘ですけど。さっきの男爵、たぶん・・・」

「ええ、先程のことから考えると恐らく偽物ですね。」

「やっぱり・・・。」

よく考えればわかることだった。

博打なんてできるのは金があるものたちだけだ。

最近是不況続きで金があっても博打ができる余裕なんて一般庶民にはできない。

――・・・貴族だけだ。

だから、何の疑いもなく収容された。

一般庶民が博打をしたと言って信じるものがあるだろうか？
信じられるのは身分が相応の者だったからだ。

公にしないのは情報が金と共に横領しているから。

そして、先程の男爵の偽物の様に代わりをたてたから何も問題にされない。

また、この国では公爵や侯爵ぐらいしか直接国政に参加しない。
故に、バレる危険性が低い。

これも、シュヒアルから得た知識。

「――――ッ!!」

この国で、何か大きなことが起ころうとしている。
何か・・・大変なことが。

そして、この国がこのまま何も気がつかずに時を経たなら・・・

「この国は、乗っ取られる・・・!!」

何者かに。

一体、誰が。
何のために。

・
・
・
・
・
わからない。

L v. 72 生まれた可能性（後書き）

国の一大事。

L v. 73 歪んだ愛情

何故、彼は自分を選んだのだろう。

◇

「魔王様……。」

今頃彼は一体どこにいるというのだろう。

どこにいたって同じことだ。このままでは偉業を無にすることになる。

一刻も早く、魔王陛下本人の帰還が必要だった。

（あの人は本当に……。）

どこまでも自由。

たとえ偉業を成し遂げたとしても、それに何も感じてはいなかった。並々ならぬ権力者にすら彼は塵ほどの興味を抱いてはおらず。だからこそ、彼らは玉座に君臨した魔王陛下に膝を折った。

跪かせたのは、他ならぬ今生陛下。

魔界の者たちを震撼させるほどの衝撃。

それですら彼に興味を持たせることはなかった。

彼は自らの弟を「愚弟」と呼び、しかし手の届くところに置いた。先王陛下もしなかったこと。

血の繋がりがああるモノは歴代王たちは決まって粛清していた。

自らが玉座に在るために。

彼が弟を生かしておく理由は一つ。

彼が玉座に在ることにすら、何の興味もないことを示していた。

（本当に、私の主は末恐ろしい・・・。）

きっと彼一人でこの世界はいとも簡単に崩壊を迎える。

“殺戮の暗殺人形”も忠実な犬として飼いならしてみせた。

ただの獣を、人にするか忠実な犬にするかが決まるのは彼次第だった。

殺戮をごく当たり前のようにする獣。

そしてそれを当たり前のように従える、その異様さ。

「魔王様。」

その異様さに、どうしようもなく惹かれた。

その異様さが、自分と同じだと錯覚させた。

その異様さは、自分という存在を肯定した。

だからこそ、傍に居ようとおもった。

『愛しているぞ。』

もう二度と言われないであろう、その言葉。

忘れないように自分の記憶に刻みつける。

その言葉は彼の傍に居たという、証でもあり。

それほど時は経ってはいないというのに、記憶はおぼろげで。

靄がかかっているように、はっきりとしない。
だから何度も繰り返し思い出す努力を試みた。
何度も何度も繰り返される、同じ記憶。

何度あのかのころを考へても、自分でもわからないことにぶつか
る。

それは、偽りの言葉に満足していたはずの自分が何故あんなことを
したか、ということ。

誰にもとられたくない。それは当たり前だった。

少しでも、自分を氣にとめてくれたら、見ていてくれたらと。

だからといって、あんなことをするつもりは全くなかったというの
に。

「魔、王様・・・!!」

いっそ、何もかも忘れてしまえば幸せなのに。

本氣になる前に、彼に殺されていたら楽だったのに。

何も感じぬままに、望んでいた終焉を迎えていたなら良かったのに。

『私を、愛していますか?』

『・・・・。』

(嗚呼)

愛されていないことなどわかりきっていたことなのに。

何故それでも尚求め続けてしまったのだろう。

孤独を癒してくれたから?

終わらない殺戮を止めてくれたから?

誰よりも美しく氣高いから?

（私には、わかりません。魔王様。）

漆黒の長い髪に触れたあるとき。

動揺したのは彼の目を見ただけではない。

彼の髪に指を絡ませた時、その指はすんなりと通った。
髪は、自分の手をすり抜けていった。

自分の心も彼をすり抜けていく気がした。

実際、私の想いは何一つ彼に伝わっていなかった。

恐らく、彼が私の想いに気がついたのは口づけをした後。
今まで「偽りの」愛の言葉を向けていたというのに。

何故何も気が付いていなかったのだろう。

簡単なことだ。眼中に、自分などいなかったというだけのこと。

「っは———.」

乾いた笑いが漏れる。

どうしても、自分は受け入れきれないらしい。

彼が拾ったのは従順な犬ではなく獣だったということ。
彼は主君で、自分は跪くべきただの人形だということを。
彼を、王という孤独の中に置いていたのだということ。
彼の傍に居続けるだけでは満たされない、心の渇きを。
彼に認められることだけが自分の生きる証であることを。

『愛しているぞ。』

(申し訳、ありません……。)

愛していたのは、魔王様でした。

愛していたのは、私の方でした。

愛していたのは、私だけでした。

そう、愛しているの言葉を投げかけたのは、“魔王”ではない。

魔王からの言葉しか受け入れられなかったのは、自分。

従順な犬のままでいたかったから。“魔王”という肩書を愛した。

彼自身を見ていなかったのは、自分。

“魔王”という肩書を背負い、玉座に在る彼に恋焦がれていた。

肩書を持たないただの魔族の姿は見ていなかった。

玉座に座る前の貴方も。

玉座を血で濡らしていった貴方の顔も。

……“貴方”という人格自身を。

愛されないのは、自分が彼自身を愛していなかったから。

(“貴方”を愛しています……。)

しかし、もう遅い。

与えられた冷たい瞳は、もう彼に少しの望みも興味も残っておらず。
“彼”にとっての“私”は、もう用済みだった。
必要なのは、“魔王”にとっての“側近”だけ。

個々としての人格を軽んじていた罰だろうか。
命という尊いモノを軽んじていた罰だろうか。
殺戮を好み、それを重んじていた罰だろうか。
王という肩書のみを重んじていた罰だろうか。

この胸の痛みはきっと、貴方が今まで苦しんでいた痛み。

「申し訳、ございません……。」

涙を流せないのは、まだ貴方の隣に居たいという我儘。

（魔王様……。）

とうとう彼の視線が冷たいモノになってしまったのは、自分のエゴが故。

（許して、いただけるでしょうか。）

許してもらえるなんて、思っただけなのに。

彼の御霊ではなく、称号を見ていた。

許されることではない。

……彼の人格そのものを無視していたのだから。

彼なら、きっと私に聞こえぬようにこう言っていたのだろう。

『愛？笑わせるな。愛していなかったのは、お前だろう。』

悪魔と言えど、魂はある。

人格もある。

悪魔と人格、イコールで結ばれた個々という存在。

それは誰にでも適用される方程式。

しかし、ただ一人だけ例外が居た。

それが、“魔王陛下”だ。

私だけに限らず、彼を個々の存在として認識している者など、全世界に一人しかいないだろう。

「デイルシュファ様・・・愚かなのは、どうやら私たちの方だったようです。」

そう、きっと彼だけ“魔王”という称号を無視し続けている。これまでも、そしてきつと、これからも。



彼は知らない。

“魔王”という箍を外すことができるのは、デイルシュファではないことを。

そしてそれが真逆の存在であることを。

その存在が“彼”に何をもたらすのかを。

L V. 74 浮上する情報(前書き)

L v. 74 浮上する情報

誰かが言う。「そこには何もない」と。



「ディジラウ、どうでしたか。」

「予言者が居なかった。探しようが無い。」

「そうですか・・・。」

時間は迫る。

しかし側近たちは魔王陛下を探すことに手を焼いていた。

「以前魔王陛下が居なくなられたときも“予言者”に探させましたよね？」

「まあ、奴が動き始めた時点でもう彼はこちら側に来ないことはわかりきったことだ。」

「ですが・・・今彼の力が使えないのは痛いですね。」

「だな。こちらとしても決別はもう少し後にして欲しかった。」

普段は話が全く合わない二人。

だが、目的が一つとなるとこれほど息の合うコンビはいない。

それこそ、魔王がこの正反対の二人を傍に置いておく理由。

くだらない恋情を向ける二人の利用価値。

「では、弟子の方は。」

「弟子？」

「ええ。確か彼には弟子が居たはずです。一番優秀なのは若い男性

だそうですね。」

「・・・・・・。」

「見かけたことは？」

「・・・・・・ない。」

脳裏に、あの男の顔が過る。

（あの男が、予言者の・・・・・・？）

彼がこちら側ではなくあちら側につくことは明白。
そうなければ恐らく、弟子である彼も。

「その弟子を上手く洗脳できれば・・・・・・」

「用事を思い出した。私は少々出るぞ。」

「あ、ディジラウ！」

呼びとめる声を振り払い、ディジラウは駆けた。

「こんな大事な時に・・・・・・」

“予言者”だけではなく、“討伐者”も動いているのだ。

これは最上層会議に提示すべき最優先事項。

しかし、その中に最高権利者である魔王陛下がいなければ何の意味も無い。

（あの方は何をしていたらっしゃるのか・・・・・・）

早く、顔が見たい。

「・・・・・・。」

最優先事項の提示よりも、主の顔が見たいなど。
側近としては褒められたものではない。

「・・・はあ・・・。」

アリファスは小さくため息をついた。

◇

「勇者・・・勇者ねえ。」

「然様にごぜいます。」

「非常に興味深い・・・。」

王は聞き入り、王佐は考え、將軍は顔を歪めた。

「剣は魔に勝てない、だったよな？どうやって魔王を討つ。」

「何も戦う方法は剣だけではないでしょう。征夷大將軍。」

「ではどのようにして？」

「そうだな、余も気になる。」

（この二人は・・・。）

予言者は目を僅かに細めた。

ごく当たり前のように王佐と將軍が発言をしている。

ここにいる三人は幼馴染と記憶していた。

（ここまで親しげにしまつては・・・。）

さぞ、周りから妬まれ、嫌われていただろう。

「王子の寵愛」と。

彼が王になろうとなるまいと、これほど親しげにしていれば誰もがそれを口にする。

それでも傍にいるあたり、この二人は相当な馬鹿なのか。
それとも……。

（吾には関係のないことか）

気にすることは無い。

必要なのは、彼らがこの予言をどう受け止め、どう行動するか、だ。

「……波動、というのはご存知ですか？」

「「波動？」」

將軍と王は、なんだそれはと言わんばかりの顔で王佐を見る。
見れば、王佐はきよんとしていた。
きつと内容が内容だったからだろう。

「波動……ですか？」

「それが、此度の事態を収束へと導くカギとなります。」

「事態、とは魔王のことですか。」

「いえ、魔王だけではございませんよ。」

「「「え……？」」」

三人が驚く。

魔王だけではない、とはどういうことか。

「魔王と言う存在によって何が起きるか、おわかりですか？陛下。」

「い、いや……何もわからぬ。」

「では、王佐殿はいかがか。」

「いえ……わかりません。」

「では、將軍殿。」

「いや全然。」

（もう少しこちらのことへの知識をつける方がいいな）

この城の落城など容易いだろう。

魔に対抗する術を何一つ理解していないのだから。

「では説明が必要なようだ。」

予言者はどこに持っていたのか、大きめの瓶を取り出した。

透明な瓶の中に、キラキラと輝く液体が入っていた。

思わず見惚れる美しさ。

「吾がこれからすることは他言無用。お三方の胸にしまっていただ
きたい。」

「承知。」

「有無、わかった。」

「わかりました。」

瓶の蓋をあける。

予言者は指に、瓶の中の液体を絡ませた。

ゆるゆると液体は動いているように見えた。

予言者は妖艶な笑みを浮かべながら言う。

「少しお三方には刺激が強いだろうか。」

予言者は、もとより信じられないような美しさだった。

そして、妖艶な笑み。

ここに精神力が弱い者が居たならば卒倒していたことだろう。

そこはさすがといふべきか、三人は辛うじて平静を保っている。

「おや、さすがは国を背負うお三方。」

くつくつと喉を揺らす。

（お、落ち着け、この方は男・・・女性ではない。）

それにしても色香がはんぱではない。

予言者と言えば陰湿で地味な老人を想像していたのだが・・・。

ここまで美しい姿をしていれば、人生薔薇色だろうに。
そんなくだらないことを考えていると知ってか知らずか、予言者は話を続ける。

「魔術と相対すものが波動にございます。」

液体を滲ませた指を虚空へ舞わせる。

不思議なことに、液体は空に残る。

液体は、円を描いた。

「これは・・・魔法？」

「いえいえ。これには邪悪なものなど感じませんでしょう。」

「邪悪？」

「おやおや、そこからですか。」

円の中が揺ら揺らと揺れる。

そして、鮮やかに何かが映る。

「あ、悪魔?!」

円に映っているのは、悪魔だった。

「然様。魔法とは悪魔との契約により使用することが可能になります。」

「それは私も存じ上げております。」

「さすが王佐殿。しかしその知識は王子や將軍にも必要ではございませんか？」

「いえ・・・私の独学ですので。間違った認識を二人に与えてしまうのは。」

「・・・御二方を大変大事にしておられる。」

ぽそりと王佐の耳元で囁く。

王佐は顔を赤くした。

「そ、それは・・・」

「隠さなくても御二方には伝わっているのでは？」

「ッ――――」。――――」

可愛らしい反応をみせる王佐をからかうのは実に楽しいが、それでは大切な時間が欠けてしまう。

「さて、波動について、詳しくお話ししましょう。」

「あ、ああ。頼む。」

王の言葉に、予言者は微笑んだ。

「今夜は寝かせませんよ。お三方。」

不敵な笑みのまま、予言者は言葉を落とした。

L v. 74 浮上する情報（後書き）

フアリオン「師匠、それはちよつと・・・」

予言者が言うとは危ないことにしか聞こえない。

Lv. 75 暗がりの会議にて

今していることが、一体何の役に立つというのか。

◇

「……………」

なんだ、この光景は。

ここは、最上層会議会場。

魔王様が遅れるという旨を報告しに、会場入りした。

……………はずだった。

会場には、指定された場所に魔界の権力者たちが座っている。

魔界にも、爵位があり、今回は子爵、男爵は出席を許されていないかった。

この会議に出席権があるのは、大公、公爵、侯爵、伯爵程度の権力者だった。

そして、真正面の席に大公が。

向かって右側に侯爵、向かって左側に公爵が。

そしてその後ろに伯爵が立っていた。

席を薦められたらしかったが、断ったらしい。

そして、それらの権力者たちよりも高い席。

最高権力者が座る、その席には彼らの王が座っていた。

（ま、魔王様……………！）

そう、行方不明であるはずの魔王陛下が。

「はぁ・・・」

しかも悩ましげなため息をついている。
色香が半端ではない。

「揃ったか。」

「は、はい・・・！」

「これにて、会議の定員が揃った。」

シンと静まった会場に、静かに魔王の声が響く。

「これより、会議を始める。」

何の、とは言わなかった。

きっと彼には目の前に座るのが誰であれ、塵程の興味も持たない。
その姿を見、少しだけ背筋に震えが走った。

感動なのか、畏怖なのか。

それとも、両方なのか。今の私にはわからない。

ぼんやりしている私の方を、魔王様は見もしないで言う。

「アリファス、報告があるそうだな。」

「はい。」

「発言を許可する。報告せよ。」

「仰せのままに。」

大公の目の前に出、一同に一礼をする。

最高権力者に許可されたのだから、要らない作法ではあるが。

礼儀を重んじなければ彼らの機嫌を損ねるだろう。

（威圧を解いていただければありがたいのですが……。）

上級の悪魔、魔族でも臆するであろうその魔力の巢窟。

目の前にいる大公、公爵、侯爵、伯爵の魔力は高かった。

しかし、臆することは無い。

権力こそ彼らより下であれ、魔力では彼らと対等、いや、それ以上のものを持っている。

「これより報告する事項は、最優先事項であり極秘事項であります。他言無きようお願います。」

確認するように、面々を眺める。

威圧が解かれることはない。

「もしも他言された場合、私が首を切り飛ばしに参上致します。」

敬う様な言葉で発せられるのは、完全なる決別の言葉。

裏切ろうものなら、命は無いという警告と示し。

「よろしいですか……？」

確認の為、魔王を仰ぎ見る。

「貴様の好きにしろ。」

「仰せのままに致します。」

かみ合わない会話すら、今のアリファスには心地が良い。
ただ魔王を見つめる。

「……許可する。」

ため息混じりの声すら、愛おしい。

そして事実上、私は大公すら手にかける権利を得たわけだ。

「さて、本題に入らせていただきます。」

不敵な笑みを一瞬間かせたのち、真剣な顔に戻る。

今はまだこの面々に妙なことを考えられてはかなわない。

自分から意識を逸らすには充分な事項を提示する。



「討伐者」と“予言者”が動き出しました。」

つらつらと連なる言葉。

まずはそれがどれだけ現実味を帯びているのかを考える必要があった。

「国が……乗っ取られる？」

この国がどうなっているのか、深くは知らない。

幼き頃からそういったことを知るための教育を受けていたわけでもあるまいし。

「確かに、無いとは言い切れませんが、そこまでできるものでしょうか。」

爵位があると云えど、所詮は国政に関係の無い位。

大公や公爵、侯爵がすり替えられていたわけでもあるまいし。

少ない権力が集ったところでできることはたかが知れているというもの。

小国ならまだしも、ここは腐っても大国。

そんなことが成し得るとは考えにくい。

「まあ、仕掛けて来る者にもよるでしょうね。」

キサラからの反応はない。

何かを考え込んでいるようだ。

何にせよ、顔色が悪い。

「キサラ君。少し休みましょう、さすがに無茶をしすぎです。」

「いや、そんなことは・・・」

「君に元気が無ければ彼らが心配します。まあ、男に心配されてもあまり嬉しく無いでしょうが。」

「そんなことは・・・でも、一刻を争うのに」

「たとえこれが成功しても肝心の当人が倒れていては話にならないでしょう。」

強い口調でファリオンに諭され、キサラは床に腰を下ろした。
まだじつとりと雨が肌に張り付く。

「できればここの服が欲しいところですね・・・。」

さすがにこのままの格好でいたのなら、風邪をひく。

この後、逃亡する生活も考えられるのでそれは避けたいところだ。

完全に蚊帳の外な四人でもそれは理解しているようで、コクリと頷いている。

「僕としては国が乗っ取られるっていう話について聞きたいですー。」

「同感。」

「異議なし。」

「替えの服を探しながらその話をしてもらえるか？」

とりあえず、当面の目的が変わった。

自分たちの情報抹消より前に着替えと国についての話をする事になった。

「まあ、これは推測なんですが……」

疲れきっている僕の代わりにファリオンさんが四人に丁寧に説明していく。

ウラキは国については無関心で（わからなくてもないが）あくびをしていた。

動くと見つかるので、少しそこでじっと動かないという案だった……の、だが。

「おい、キサラ。」

「ウラキ。」

「不自然な音が聞こえるんだが、もしかしたらそこに服の替えがあるかもしれないぞ。」

「「「「え?」「」「」」」

今まで話をしていた三人すらこっちを見た。
とんでもない発言に一同哑然。

（え、どうということ。）

「俺、耳が良いんだ。」

「そういう問題じゃないと思うんだけど。」

「まあ、とにかくだ、こっちの方から聞こえるんだが、行くか？」

「え、嘘本当に？」

有無を言わせず、ウラキがキサラの手を引く。

ウラキを見ていると、好奇心に満ち溢れており（俺様だし）止めるのは困難とわかった。

しかも、ジェリエ君が今までに無く乗り気。

（い、嫌な予感しかない。）

一行は、オトリ役の役目を履き換え、一時休息。

とある男の陰謀に巻き込まれているということを知らず、管理所、奥部を目指す。

現在、牢獄全焼二日後、夜。

一行、全焼後何日経っているかすらわからないまま、長い夜にかろうとしていた。

L V. 75 暗がりの会議にて（後書き）

とりあえず、アリファス君は魔王様以外の者をモブ扱いするのをやめましょう。

L v. 76 偽りの令嬢

一途に思い続けることの始まりは、単純のようで、私にはとても大切なことだった。

◇

「シュヒアル。」

姉様の名前を、親は呼ぶ。

私は、姉様になりたかった。

姉様に比べられても、私は幸せだった。

だって姉様が励ましてくれた。

同じ歳で同じ顔をした姉がいることに私は何の疑問も不満もなかった。

それがいけなかったのだろうか。

今となってはもうわからない。

ただ、わかっていたのは、私が求められていないということ。

私が、家族を狂わせてしまった原因だということ。

そして長い間誰にも私自身が愛されたことがなかった。

故に私は愛に飢えていた。

だからこそ、私を養子にしてくれると申し出てきた夫婦の子となった。

『名前はシュヒアルと言うんだね。』

『可愛い名前ね。』

『君は今から私たちの娘だ。』

『よろしくね・・・シュヒアル』

（違うの、私はシュヒアルじゃないの。）

だって、シュヒアルは死んでしまった。

もういないの。

私の姉様だったのよ。

とても素敵な私の姉様。

私は望まれなかったの。

母様にも父様にも望まれなかったの。

だから、私がシュヒアルになったのよ。

（ああ、それなら私はシュヒアルでいいのかしら？）

・・・わからないわ。

だって、もう誰も私の“本当”を知る人はいないんですもの。

聞こうにも皆、燃えてしまったもの。

“あの人”が火を放って私を自由にしてくれたのよ。

だから、私は今度こそ愛してくれる父様と母様のところに行けるの。

実際、彼女は愛された。

子を成すことができない夫婦の養子となって。
彼女は大事に大事に育てられることになったのだ。

（少し、つまらないわ。）

話相手が欲しい。

“あの人”ではない誰か話相手が欲しい。

少女、シュヒアルは外に出た。

周りは建物があり見えず、緑が横たわっているかのようにであった。
木々が生い茂り、遠くに森が見える。

白い雲がゆっくりと流れていき、雲と雲の間から覗く太陽が眩しかった。

あまりに眩しくて、思わず手で光を遮る。

「本当に田舎ね・・・。」

「そりゃ悪かったね。」

「！」

見るとそこには二人の少年が立っていた。

一人は顔立ちが整っていて、背も高い。

もう一人はその少年に手を引かれ、少し落ち着きのない印象だった。
どう見ても彼の弟だろう。幼い顔立ちの上、無邪気だ。

「あーあ、金持ちが引越してきたっていうから見に来たけど。なんだ嫌な感じだな。」

「それも充分嫌な感じよ。嫌な人ね。」

「うわ、その歳ですげえ喋るな。さすが貴族は違うな。」
「それはどうも。でも好きでこうなったわけじゃないわ。」

（私からしてみれば貴方達の方が異常よ。）

見たところあまり歳が離れていない。
そのハズなのに、とても違いがある。

兄の方は幾分か大人びているが、弟の方は幾分か幼すぎる。
どちらも年齢不相応に見えてしまう。

「でも見たところお前、こいつよりも年下……だよな？」
「……そうね。」

質問の応えとしては今はこれが精一杯だ。

本当のことが知れば何が起こるかわからない。

そして、幼すぎる少年に目を向ける。

ひらひらと舞う蝶を不思議そうに見ている。

「貴方達は兄弟、よね？」

「まあ、血はちゃんと繋がってると思うけど。」

「妄想じゃなくて？ 私には貴方達がとても兄弟には見えないわ。」
「似ていないとはよく言われる。」

（変な兄弟。）

初めに抱いた印象はそれだった。

自分自身が知っている姉妹は瓜二つだった。

しかし、目の前にいる兄弟は何もかも違う。

それがひどく彼女の興味を引いた。

単純だが、これが一番重要だった。

「俺はテイザ。どこぞから田舎まで来た酔狂なお嬢さん。」

「私はシュヒアル。ど田舎者のテイザさん。」

二人は笑顔で敵意を示した。

（一般庶民にしては知識があるのね。）

本来、貴族はここまでの田舎には来ない。

領地にしたり治安を収めたりはする。それは普通だろう。だが住めるほど快適になってから移住してくる。

大抵は不便なところに住みたくはないという理由からだ。

しかし、彼女たちはやってきた。

確かに、男爵や子爵ならまだ田舎で住むということもするだろう。

彼女の義父の爵位は、伯爵。

少し不自然だ。

そして彼はきっと伯爵という爵位を聞いて酔狂と言ったのだろう。

爵位の称号は知っていても、それがどの地位となるのか知らない庶民は多い。

教育を受けていない限り、そんなことを言うだろうか？

それとも単純に貴族が来たという時点でそれ自体が彼にとっては酔狂なことなのだろうか。

どっちにしろ、不愉快だ。

「そちらの方のお名前は？」

話を逸らす。単なる嫌味に付き合っていられるか。

「こいつはキサラだ。」

「そう・・・よろしくね、キサラ君。」

「よろしくシュヒアル。」

蝶を見ていたハズのキサラがシュヒアルを見る。

「でも、シュヒって呼ぶね。」

「それはどうして？」

「君の名前、少し違和感がする。」

「・・・違和感？」

「元々、君のモノじゃなかったの？」

（この子・・・！！）

先程までの無邪気な顔から一転、無表情になっていた。彼はきつと何かを感じ取ったのだろう。

「おい、キサラ。なんでそんなことわかるんだ。」

「なんか変なの。もやもやする。」

「名前が？」

「僕ならもっと君に合う名前にする。」

「おいおい・・・。」

テイザが苦笑する。

不思議なことを言う少年だ。

それも真面目に言っている。

「そうだな、僕なら・・・」

「『 』って。」

「――――！！！」

（何故。）

彼は、シュヒアルの本当の名前を言い当てた。
自分ですら忘れていた名前。
今となつては誰も知らない、彼女の“本当”。

（嗚呼・・・）

私を理解できるのはこの人しかない。

私は、この人に愛されたい。

そんなことを不意に思った。

なんと世界は狭い。

そして彼によつて広く広く開け放たれた。

彼を自分のモノにすれば、きっと自分自身になれる。

姉様の代わりにならなくてもよくなる。

・・・愛される。

「ありがとう、キサラ君。」

「どうしてお礼を言うの？」

「気に入ったの。でも、その名前は要らないわ。」
「どうして？」

「私のモノにするのはもったいないわ。」

そう、もったいない。

だが、いつかきつと。

貴方が私を見てくれるその日を願って。

私は彼を想い続ける。

L v. 77 脱獄者、発見。

よし、時間だ。時間をくれ。

◇

「眠い・・・すっげー眠い。」

「・・・さり気に現実逃避だよ。ね。のん気め。」

「キサラ君？最近口悪くないかなー？」

「ダメレ腐れ兄貴。脳みそまで腐ったの？」

「！・・・！、ーッ！！」

テイザが仰け反って口をパクパクと開閉させる。

いつも言っていることなのに何故かショックを受けたようだ。
器用め。（最早意味がわからなくなってきている。）

（今までのアレ、ウラキじゃなかったのか・・・！！）

毒づいているのはウラキだと思ってただけにショックだ。

ウラキとキサラは今はつきりと分離しているのによくわかる。

ああ、あの頃の可愛いキサラはどこへ・・・。

「うーん・・・。」

兄さんが眠いと言ったから眠気が移ったらしい。眠くなってきた。
そういえば確かに何日も寝て無い気分だ。

実際脱獄から何日経ったのかわからないだけに眠い。超絶眠い。

眠気と葛藤するように目を擦る。

そういえば先程から全体の空気がおかしい。
疲労でヘトヘトになっていてもいいはずなのに元気だ。

（要は深夜のテンション）

兄さんに至っては

「はっ・・・今の状況、まさに『水も滴る良い男』じゃないか・・・！？」

とか言い出す始末。

ジェリエ君が棍で殴り飛ばしたけど。後頭部から良い音が響いた。
うん、ナイスだグッジョブ。でも一つ大切なこと忘れて無い？

「今隠れて見つからないように行動・・・だったよね？」

「「あ」「あ」」

二人がドツタンバツタン音をたててたから物騒な足音がこっちに向
かってるじゃないか！

ウラキがさっきから妙にウキウキしてたのはこれか！

「さっきから聞こえてたの？」

「ああ！もう楽しみで仕方無いぜ！」

「ぜ！じゃないよ！！言ってよ！！！」

（服はどうしたんだ服はーっ！！！）

どんどん本題から逸れていく。

睡眠が足りないせいだきつとそうだ。

徹夜とかダメだホント。

睡眠は素晴らしい。

睡眠は一日をリセットしてくれる。

睡眠は心を安らかにする。

睡眠は頭を休ませてくれる。

むしろ睡眠は僕d「キサラ君、大丈夫ですか？」

「え?! あ、はい!!」

思わず大声を出してしまった。

迷いなく足音がドカドカとこっちに来ている。

(僕の馬鹿ー!!)

ああ何て失態!

睡眠は素晴らしい!

混乱することもなしなんやかんやで生活のリズムを・・・じゃなかった

「皆一旦逃げるよ!!」

「無理です。」

「え?」

「無理です。」

「だって捕まっちゃ「無理です。」

そんなに念を押さないでください。

フアリオンさんまさか貴方も睡眠不足ですか?

寝て無いですか? 考える頭停止中ですか?

動いてーおーい、フアリオンさん。

起きてますかー?

「無理です。」

「何も言ってませんけど?!」

起きてることが無理ってことか?!

僕に今の面倒な状況を押しつけようってそういうことなのか?
そうなのか・・・!?

「落ち着いてくださいキサラ君・・・。」

フアリオンさんが言いながらため息をつく。
一体どうしたというのか。

「その様子で行くとキサラ君もおねむですか?」

「おねむって! 子供じゃないんですよ! もう成人しています!!」
「おや? キサラ君は今何歳ですか?」

「18です! この国では正式に成人と認められるるる」

「ちょ・・・!!」

言いながらキサラは落ちた。吸い魔の手に。

反射的にキサラ君を抱きとめたところまではいいのです・・・が!

「やめなさい貴方達はっ・・・!!!!」

「「なんでだ!」」

テイザとウラキの二人が誰がキサラ君を抱きかかえるかでもめている。

あとその視線だけでも居殺せそうな目を向けないでいただきたい。
居心地が悪い。

「アンタも大変だな。」

「いえ・・・。」

「いや、なんかげっそりしてるぞ?」

「……、大丈夫です。」

オルデルという好青年が話しかけてくれたおかげで自分がどんな顔をしてるのか容易に想像できた。

こんなに自分のことを振り回せるのはこの世で師匠だけになってしまったと思っていたが……どうやら違っていたようだ。

（この方たちは……不思議だ。）

人より強い波動を持っているだけではない。きっと何かが彼らにはあるのだろう。

「とにかく、こんなムサイ男所帯からさっさと抜け出すことを考えましょうか。」

「アンタも寝て無いのか？すごい最初見たときとキャラが違うぞ。」

「いやあ何をおっしゃいますか。」

「わかった。もう何も言わん。」

あとジェリエ君と言いましたか？彼は放っておいていいのでしょうか。

彼はもう寝て無い故にすごいことになってます。

高笑いしながら棍をあらぬ方向に振り回し……うわ、ちょ、こっちに向けないでください。

「どうやら彼も錯乱しているようですね。」

此処へ来て。とても痛手だ。

足音も……

「足音が……止んだ？」

「・・・ですねー。」

「おや、思考が復活しましたか？」

「まともに飲み食いして無いうえ寝て無いので意識を保つのでやっ
とですけどねー。」

「・・・丁度良いです。キサラ君を頼みます。」

「「「「え?」」」」

流れる様な手つきと動きでキサラの体をジェリエへと渡す。

ジェリエはわけがわからない様子ながらも受け止める。

「どういことですかー?」

「すみません、師匠に言われた言伝をどうやら早急に済ませる必要
がありそうですので。」

「戦線離脱っていう形として取っていいですかー?」

「かまいません。今までは目的が一致していただけのこと。ここか
らはまた別行動と行きましょう。」

「そうですねー。」

ひらひらとジェリエが手を振る。

ファリオンはそれを見て小さく笑むと、返事することなく走り去
って行った。

「さてその二人はキサラさんのこと考えるつもりありますかー?」

「「ある。」」

「じゃ、さっさとキサラさんの着替え探してくださいー。」

「言われなくても。」

「そのつもりだ。」

ジェリエには抱えきれないので、結局キサラはオルデルが抱えるこ
とになった。

「じゃあさっさと・・・」

「そこまでだ。」

「」「！」「」

声のする方には、二つ、影が立ち尽くしていた。

L v. 77 脱獄者、発見。（後書き）

フアリオン「もう少し危機管理したらいかがですか？（クスツ）」
テイザ「・・・お前は真っ先に逃げただけだろうが。（イラツ）」

フアリオン「おや、心外ですね。」

L v. 78 それは逃げ続ける

どれほど願ったのか、貴女は知らないと言うのでしょうか。



「おや、お久しぶりですね。」

「ほざけ。まだ数日しか経ってないだろう。」

「そうですね。でも私にはとても長く感じられた。」

そう、長く感じた。

長く長く、感じてしまっていた。

そして確信した。

「こんなところに用があるようには見えませんか？」

「そうだろうな。お前に用があったのだから。」

「・・・!!」

フアリオンの目が大きく開かれる。

ディジラウはその顔を見て、少し驚いた。

「・・・嬉しいことを言ってくれますね。」

「意外な返答をくれるな。人間。」

「・・・やはり、貴女は魔族でしたか。」

「わかっていたのか。まあ、無駄な説明が不要で助かる。」

（ああ。）

彼女の耳に、あの耳飾りが揺らめいている。

甘い感情に惑わされそうになるが、それではいけない。

（彼女の真の目的は、私ではない。）

悪魔の誘惑に溺れるつもりは毛頭ない。

しかし、彼女に溺れる決心ならもうとっくについている。

いや、もう溺れているのかもしれない。

「それで？ 貴女の目的は何ですか。」

「お前を城へと連れ帰る。」

「それで“予言者”が止まるとでも？」

「……ふん、モノ解りが良い男だな。」

何が目的かと聞いておきながら、しっかりと状況は把握している。知っているのならそれを前提に話しをさせればいいものを。

（変な男だ。）

思えば初対面からそうだった。

いきなり耳飾りを渡してきたうえ想い人と似ているだ？

無礼にも程がある。

他の女に同じ真似をしていたならこの涼しげな頬が赤く染め上げられていただろう。

『恋人……だったら、どれだけ良かったでしょうね……。』

あの複雑な表情が脳裏によみがえる。

……もしかしたら赤く染まることすらないかもしれない。

その言葉を聞いた者それぞれの反応を示すだろう。

彼に密かに恋心を寄せていた者なら間違いなく泣き崩れるだろう。そのくらい、何かを思わせる顔をしていた。

「あの、大丈夫ですか？」

「・・・何がだ。」

「急に黙り込んでしまいましたので。」

「・・・少し、考え事をしていた。気にするな。」

「・・・そうですか。」

不安げに眉を寄せる男。

何を考えているのか全くわからない。

「一つ、聞いて良いか。」

「なんででしょう。」

「この耳飾りは、私が持っていていいモノではない気がするのだ。」

「・・・！」

左耳についた耳飾りを指で弾いてみせると、男の目が悲しげに見開かれた。

眉が歪み、開きかけた口が何かを言おうとしている。

「・・・ほらな、私が持っていてはいつか捨ててしまうぞ。」

「駄目です！」

力強く、男は言う。

涼しそうな顔はどことなく余裕が無くなっていた。

自信に満ち溢れていた表情も、跡形も無い。

そして、何より自分に驚いた。

（何、を動揺している。）

こんな、人間に。

◇

もう一度、貴女に会えるようにと、願ったことを。
きつと貴女は知らない。
何も知らない。
忘れてしまったのだろうか。
それとも。

最初から知らなかったのか。

見ようとしていなかったのか。
今の私には、何も知ることはできない。
何故なら、その理由を探ることすら億劫なのだから。

◇

「『そこまでだ。』って制止かけられましたけどどうしますー？」
「そりゃ当然」

「「「逃げる!!」」」

声を合わせ、走り出す。

「で、どうする!？」

「何がだ!」

「このまま走って名簿抹消大いに結構。」

「なら良いだろ走れ!」

「その後はどうするんだ！」

おっと、その後？ノープランに決まってるじゃないか。

「おい、妻子持ち！」

「オルデルだ！何回言ったら覚えるんだそれと今俺に話しかけるな！」

「キサラを俺に渡せ！オルデル！！」

テイザとウラキに挟まれるようにしてオルデルが走っていた。
オルデルとまともに呼んだ方・・・ウラキにキサラを渡す。

「あ、おい！」

「ごちゃごちゃ言う前に走れ！」

「黙って走れないんですかー？舌嚙みますよー皆さんー。」

「お前もな！」

後ろからはまだあの二つの影（恐らく人）が追いかけて来る。

なんというか、しつこい。

「こっちだ！」

ウラキの叫び声を合図にしたかのように、三人が動く。

打合せも事前に何も話していないというのに、無駄に動きがあった。
いた。

何気なくお互いをサポートしている風にも見える。

ウラキ、テイザ、オルデル、ジェリエの順番に小部屋に滑り込むと、
テイザが音も無く扉を閉める。

鍵が取り付けてあったので、其れを音をたてないようにゆっくりと閉める。

「なんなんだ。今の奴ら。」

「さあ。」

小声で話してから、辺りを見渡す。

一応ランプの明かりで周りは見えるが、範囲が狭い。少し歩を進めたなら何も見えなくなるだろう。

「この部屋の中に何かないか一旦探してからでるか。」

管理所に侵入してから部屋に入るのはこれが初めてではなかったが、ここのような雰囲気ではなかった。

もう少し明かりもしつかりとしていたし、薄暗くも無かった。

ここはそこまで重要な部屋ではないと判断したが、それでも着替えぐらいならあるかもしれない。

「お、ここ服入ってるぞ。」

オルデルの一言に他の場所を探していた三人が集まる。

「サイズも色々あるな・・・でもこれなんだ？」

「なんでもいいだろ。着れるものは着とこうぜ。」

「さすがに囚人服のままじゃ目立ちますもんねー。」

「まあ・・・オトリ役だけど、ね。」

オルデルの最終の一言に、一瞬誰もが黙ったが、考えを改めた。

「風邪引いたら元も子もない。」

テイザの半ば強引な発言に、その場に居た者は何も言わずに賛同した。

L v. 78 それは逃げ続ける（後書き）

テイザ「つうか、時間無いんだからさっさとしろよな。」

オルデル「・・・つくしゅ」

ウラキ「なんか・・・手遅れじゃね？」

ジェリエ「ですねー。」

L v. 79 管理所脱出計画模索開始。

なんというか、とりあえず・・・

全員そこに土下座しろ。



「うわ、このサイズきつつ！」

「こっちはどうですかー？」

「え、でかくね？」

「おっ、これ俺に丁度いい。」

変な二人組に追われ何故かあっさり逃げ遂せた後、駆け込んだ部屋

にて運良く服を入手。

濡れたままではさすがに寒過ぎたので、着替え中。

しかし中々、全員のサイズに合う服が見つからない。

「で、これからどうするんだ？」

丁度いいサイズの服に着替え終わったウラキが言う。

多少着崩れたのはきつと服を着なれ慣れていないからだろう。

「馬鹿野郎、全員服着替え終わってから話し合いだ。」

「でもそんな時間もないだろ。話しながら着替えりゃいいじゃねえか。」

「俺もそう思う。ウラキ君の言うとおり。」

「同意ですー。」

結局着替えながらという意見多数の為、テイザが折れた。

「見回りの兵とかが此処通りかかっちゃったりしたらどうしますー？」

「殴る。」

「・・・俺は逃げるわ。お前らみたいに強くねえし。」

キサラの着替えに合いそうな服を全員で漁りながら話し合いは続行する。

そして「殴る」という意見が一致（それもハモリながら）したのは当然テイザとウラキである。

「気絶させるに一票ですー。」

「逃げるに一票。」

「蹴散らすに一票。」

「進むに一票。」

各々言いたいように言ってから、顔を見合わせる。

「タラシ・・・お前が一番まともなこと言ってるな。」

「誰がタラシだ誰が。」

「「お前だろ。」」

「女の人大好きじゃないですかー。」

「え、ちょ、今それ関係あるのかよ。」

テイザが顔をわざとらしくしかめる。

しかし事実なので然程嫌ではなかった。

「てかなんで俺が女好きって知ってるわけ。」

「なんか、顔が女好きっぽくね？」

「だな。顔がタラシ。」

「変態ー。」

「・・・言いたい放題だな。」

テイザは眉間に皺を寄せながら積み重なった服に向き直る。

こんなことをしている間に自分たちの存在が気づかれてもおかしくはない。

そして何より、キサラが風邪をひいてしまう可能性がある。

「お、このくらいか？」

実際には着せなければわからないのが難点だが。



「うん。そう。そんなことがあったんだ。」

「そう……です。」

「それはいいよ？別に良いよ僕の為だしね。でもさ、一つ重要なこと忘れて無い？」

「……言いたくない。」

「わあ、僕が言いたいことわかってるのに内容は伏せるんだね？」

キサラがいつもより若干テイザを攻め立てているように見えた。

というか、キサラがこんな風にお怒りなのは、何もテイザだけのせいではない。

だからこそ、テイザとキサラを見ている三人は複雑な気分で見つめていた。

「睡魔に負けた僕が悪いんだね？そうなんだね？」

「いや、そういうわけじゃ。」

「じゃあ僕が寝ている間にどうしてこんなことになったのか教えてくれない？」

キサラは少し不機嫌そうな顔をしながら聞いてきた。

ちなみにテイザは床で正座をしているので、キサラを見上げる様な形になる。

そう、それはつまりキサラに見降ろされているということ。

（不機嫌な顔もまあ……良いけど、見降ろされるのは、なあ。）

複雑だ。

こんな状況じゃなければスグにでも立ち上がってしまいたい。

見上げられるのは嫌じゃない。むしろ大いに良い。

が、見上げるといふ行為はとっても嫌だ。

むしろ俺を無邪気に見上げてくれた頃のキサラと言ったら。

「こら、現実逃避するな馬鹿兄貴。」

「最近どんどん口が悪くなるなキサラ君。」

「ノリノリじゃねーか。妻子持ち君。」

「あれ、オルデルさん。ジェリエ君、ウラキ、何してるんですか？」

「「「え・・・？」」」

少しだけ、本当に少しだけキサラが怖い。

というかなんか怖い顔してる。

「全員そこに座って？」

「「「はい・・・。」」」

（あー。キサラが怒った。）

「だからね、何で此処にいるの何で捕まってるの。」

「それには色々と事情がありましたー。」

「なんというかな、見つかった。」

「いや、俺たちが悪いんだけど・・・。」

「悪かった。許せ。」

現在、管理所の地下に捕まっている。

どうしてそうなったとしか言いようがない。

「いや、俺がキサラの着替えさせてたんだよ。」

「また着替えさせるのは誰だとか喧嘩になるかと思ったら全然あつさり決まって。」

「僕とオルデルさんが見張り役になったんですー。」

「追手が来ないかとかさすがに気になりだしてな。」

「で、俺が・・・その・・・」

ティザが口ごもる。

（大体予想できるなあ・・・。）

「部屋から出たんでしょ？」

「あったりー。何でわかったんだ？」

「あっさり認めるねウラキ。何で止めなかったの。」

「う・・・それは。」

「・・・で、俺が部屋から出たら、見つかって。」

「キサラ君がなんか変な奴らに捕まって。」

「手も足も出ないとはあのことですよねー。」

「だな。あれには俺も肝が冷えた。」

ナイフがキサラの首に突き付けられていたなど、決して誰も言えなかった。

むしろ今ここで言ったら逆に首が持つて行かれる勢いだ。（それもキサラに。）

明らかに不機嫌なのでこれ以上火に油を注ぐようなことは避けようと全員が初めて結託した瞬間である。

そんな詳細をキサラが知るハズも無く。

何やら（くだらないことに）一致団結しているらしい四人を見降ろす。

「よし、とりあえず僕に土下座ね。」

「」「はい・・・。」「」「」

管理所の兵たちを次々となぎ払った男たちを、たった一人の少年が
まどめあげていく。

それも、何の変哲もない平凡な少年が。（見た目だけ）

後に、彼らにとっては笑い話となるこの出来事が、（大げさに）伝
説の始まりとして語り継がれる。

当然、それを知らない一行であつた。

「じゃあま、謝罪してもらつたし、ここからさつさとバイバイし
ようか。」

「「「ん?」「」」」

このキサラの一言こそ、まさに（大げさな）伝説の冒頭であつた。

（やべ、嫌な予感しかしねえ。）

L v. 79 管理所脱出計画模索開始。 (後書き)

フアリオン「余談ですけど、数々ある勇者の伝説の中に『牢獄のアイドル』っていうのがあるらしいですよ。モテますね、キサラ君。」

キサラ「え・・・何それ。そんな勇者聞いたこと無いんですけど。」

フアリオン「まあ、主体は管理所から始まるんですけどね。」

テイザ「主体って言うかメジャーなやつなの？」

ジェリエ「ですねー。」

キサラ「(・ω・) アイドルってどういうことなの。」

L v. 80 封をされた記憶（前書き）

キサラが79で目覚める前のお話。

本文は「表の僕と裏の僕」の「11. 伸ばされた腕を」とリンクしています。

「？」と思われた方はそちらも読んでいただければ少し意味がわかると思います。

L v. 80 封をされた記憶

僕は何もしてないよ。

でもね、僕が知らないところで
ドロドロって、何かが溶けちゃうんだ。

そうやって、誰かが笑っている気がした。
それだけの話。



僕は、浮かんでいた。

空の上を。

いつだったか、ウラキと初めて会った、^{そら}天。
そこに、僕は浮かんでいた。

浮遊感は前よりも心地が良かった。

何かが壊れる音は、いつの間にか止んでいた。

僕とウラキが二つになった時から、音がしなかったような気もする。
(ウラキが守ってくれたのかな・・・。)

しっかり握った手を離すことで。

僕を自由に解放してくれたのかもしれない。

僕は自由になどなりたくはなかったのに。

まだ、君に許されていないのに。

「ウラキ・・・。」

雲ひとつない天は何を暗示しているのだろう。
綺麗なのに、ゾツとした。

太陽の方を見る。

眩しくて思わず目の前に手をかざす。

ああ、此处で僕は鎖に引きずり降ろされたのだ。

闇の中へ。

誰が闇へと突き落としたか、僕は知っている。

そうして、彼が生まれたのだから。

（変な夢。）

五年前にも自分は同じ景色の中に居た。

黒い闇から細い腕が自分の首を絞める夢だった。

あの腕の正体が、今はもうはっきりとわかる。

でも不思議と、恐怖は無い。

だからもう一度言おう。

「変な、夢。」

キサラが口を開いた途端、世界が一変する。

「あ・・・？」

浮遊感が急に消えた。

落下する。

堕ちる、落ちる、墜ちる、オチル、おちる。

長い時間、そうして堕ちていった。

それでも、太陽は在った気がする。

その存在を確認すると、キサラの視界から、太陽が消える。
何かに遮られたのだ。

「鏡?!」

目の前には、鏡。

上を見る。

また鏡。

横を見る。

鏡。

下を見る。

・・・鏡。

「あ、わかった。鏡の間だ。」

得意気にキサラが言う。

いつもだったら誰かしらツツコミを入れたりしてくれるのだが。それすらなく、彼の声が虚しく消えた。

「・・・何これ、ホント変な夢。」

（寂しい。）

そんな感情が渦巻く。

（夢の癖に。）

でも大丈夫、目が覚めれば皆ちゃんと居るはずだ。
目を、覚ませば・・・。

「あれ？」

・・・どうやって？

目を覚ますなんて、どうやってできる？
起きろって自分に言えば目が覚める？
これは夢だ。って自覚すれば目が覚める？
自分をつねれば目が覚める？

目を開ける。

鏡しか見えない。
鏡に映る自分。

精神世界で会っていたウラキそのものだった。

「ずるいよね。」

鏡の自分と手を合わせる。
鏡の自分と目が合う。

「君は僕より、全然良い奴なんだ。」

（なんでもできるっぽいし。）

どうして、彼が自分の裏なのだろう。
どうして、自分が彼の表なのだろう。

「心も広いんだよ。」

こんな僕に、たくさんの言葉をくれたんだ。

「ねえ、ウラキ……。」

鏡の中に居る自分に話しかける。

これがウラキな訳が無いけれど。

鏡に映っている自分で今は充分だ。

まだ……本人には面と向かって言えない。

「君を苦しめてごめんね。」

（思い出したよ、君のこと。）

五年前、夢の中で、あの場所そこで
君は僕の首を絞めたんだ。

『おまえがっ……!!』

悲鳴を上げて、僕の首を絞めた。

でもね、僕は今でもわからないんだ。

「どうして、君は泣いていたの？」

首を絞めていたのは君なのに。

五年前と何も変わらない。変わりはしない。

僕は未だに、彼がどうして泣きながら僕の首を絞めてきたのか、わからない。

首を絞めてきた理由は何となくわかった。

（僕が、憎かったんだろうと思った。）

憎悪は、確かにあった。

でも、ウラキは何故か、その憎悪がまるで最初から無かったかのようには振舞っている。

彼が自分からそのことについて語らない限り、僕がその真相を知ることはない。

（自分から聞くことなんて、できない。）

「僕は憶病なんだよ。」

（君が決別と軽蔑の言葉を口にしただけで、僕は。）

この世界に存在してはいけない気がしてしまう。
その言葉を聞くことを何より恐ろしくて、何も聞くことができない。

僕らは二つになった。

彼は僕に笑顔を向けてくれた。

それだけじゃ、駄目だってことはわかっている。

ぬるま湯の中でのうのうと生きていることはわかっている。

皆が必死に僕を守っていることもわかっている。

誰より弱いのが自分であることは、知っている。

強い執着心と独占欲が自分の中に巣食っていることも知っている。

「ずるい・・・よね・・・。」

分かっている癖に、偽りで塗り固められた平穏の中から抜けよう
としない。

できないわけでは、無いはずなのに。

（僕は、ずるい。）

知っている。

そう、知っているし理解している。

もう子供のままではいられない。

子供のフリも、もう通用しない。

「嘘ばかりついて、ずるいね。」

兄さん。

嘘を吐いてたんだ。ずっとずっと。

本当は全部わかってた。

兄さんが僕の為に働きだして、何があったのか。

恋人が居たのに、僕の為に別れたことも。

・・・兄さんが僕を憎んでいたことも。

(タスラ、シーラ。)

家族の様に思っていると言いながら彼らには何もしていない。
それどころか、自分の為に利用しているようなものだ。

「でも、もう少し。」

あと、少しだけ。

あと少しだけ、何も知らないフリをさせて。
僕の決心がつくまで、知らなかったフリをさせて。
まだ、純粋な子供のままでいさせて。

純粋なままでいたかった。

今までは本当に気がつかなかった。

いや、気付けなかった。

思考が繋がらないよう、ウラキが生まれたのだ。
考えることから逃げる為に。

なのに、逃走経路は幸か不幸か、人並みの感情を持っていた。

それに僕は無意識に甘えていたのだ。

今日、深く考え、自分がわかっていることも知っていることにも気がついた。

無意識に彼に甘えることでその思考を避けていたのだ。

・・・全ては、自分勝手な自己防衛。

それを気付いてしまったのに、尚もそれを続けようとしてしまう。
なんと傲慢なのか。

(ごめんね、ウラキ。)

――僕は、弱いね。



こうして、キサラは自分の記憶に強引に蓋をした。
彼が自ら、それも無理やり思い出そうとしなければ簡単に思い出されることが無いように。

嚴重に、幾重にも鍵をかけて。

数々の記憶と共に封印する。

その中に、古びた箱があることに気付かないまま。

そして、このときのキサラは、知らない。

本当のウラキの存在理由を。

L V. 80 封をされた記憶（後書き）

随分前から、現実と向き合うことを拒絶していたキサラ。

L v. 81 管理所脱出に向けて

こんなジメジメしたところに居るのはさすがにもう飽きた。

さっさとおさらばしよう。

◇

「バイバイ・・・って？」

「できんの？」

「詳しく教えてくださいー。」

三人の言葉を聞きつつ、キサラは鉄格子に手をかける。

（結構強度ありそうな鉄格子だな。）

ぼんやりしながらそんなことを思う。

「まあ、要は管理所を潰さずに名簿から僕らの名前だけを消せばいいんでしょ？」

「簡単そうにいうけどなあ・・・。」

「何か良い策でもあるのか？キサラ。」

テイザが問う。

実際他の三人も案があるかどうか聞きたかった。

口ぶりからすれば何か思いついたようにも聞こえる。

四人は少し期待しながらキサラの次の言葉を待つ。

「ん・・・？無いけど？」

「「「は・・・？」」「」」

予想外の言葉に全員素っ頓狂な声を出す。

「計画は立てるけど。とっても難しいし。タイミングがね。」

「タイミング・・・？」

「そ。まあ、いいや。・・・ウラキ。」

「何だ？」

「あの、ウサギみたいな姿にはなれる？」

「朝になればな。」

「じゃあ朝はウサギ、夜は人間の姿になれるってこと？」

「大体は正解。でも違う。」

「違う・・・？」

残された三人は何もすることが無いので、黙って二人の会話を聞いていた。

しかし姿を変えられるというウラキに驚いた様子だった。

それでも、二人の会話を遮るようなことは誰もしない。

「詳しく説明すると長くなる。それにこの体は所詮貰い物、確かなことはわからない。」

「え・・・？」

「貰いモノ・・・ですかー？」

「ていうかウラキ君・・・君は一体・・・。」

「あ、そういえばお前らは知らなかったな。」

テイザが少し間の抜けた声で話しだした。

「ウラキ、こいつキサラから生まれたんだ。」

「「はあ?!」」

「びっくりだろー。こんな可愛げの無い奴がキサラから生まれたんだぜー。」

「キサラ君は女だったんですかー」

「違うよ?!」

びっくりしてキサラが否定する。

「ですよねー、この変態の妹だったらもうそれは大惨事でしたもんねー。」

「おい、どういう意味だ。」

「そういう意味じゃないですー。」

「うるさいぞ、お前ら、キサラ君の話を聞こう。」

オルデルがうるさくなった二人を抑える。

「待って、その体が貰いものなんて僕聞いたこと無いんだけど。」

「聞かれなかったからな。」

「そういう問題じゃないだろ。」

「嘘。ごめん、キサラ。あのとき色々あって、俺も何があったのか理解しきれてなかった。」

そう言ってウラキは少しキサラの顔色をうかがった。

少し動揺しているようだ。

睡眠をとったおかげで今までよりまともな判断も、思考もできるようになった。

ウラキがウサギの様な姿で現れたことに、今更になって疑問を感じているのかもしれない。

（まあ、ぶっちゃけ俺も今でも信じられないし。）

精神世界で会ったのとはまるで状況が違う。感情も、思考も全く彼から伝わってこない。精神世界では身長も同じだったから目線も同じだったが、今では自分の身長の方が上だ。現実世界と精神世界の違いを改めて感じる。

（キサラは、こんなにも）

こんなにも、弱弱しかっただろうか。自分の知っているキサラとどこか違う気がしてしまう。目が覚める前と寝る前での違い。違和感を感じる。しかしそれがなんなのか、ウラキに知るすべはない。

「で、俺がウサギ・・・でもないけど、あの姿になれたら何かあるわけ？」

「あ、うん。鉄格子から抜けられるでしょ？」

「あー。成程。それで俺がここの鍵持ってきて開けて皆で逃げると。」

「そ。でもウラキにはもっともっと役に立ってもらおうかな。」

「え、嘘。何で。」

「今までウラキ、兄さんのこと下僕その1とか言っていてこき使ったでしょ？」

「あ、ああ。まあ。いいだろ？別に。」

「うん。全然良いよ。でもね、僕も下僕が欲しくなったの。」

「」「え・・・。」「」

そこに居たキサラ以外の全員が、背筋が冷えたかと思ったとか。

驚くほど純粋な笑みを浮かべるキサラ。

（あ、たぶんこいつ下僕の意味わかってないわ。）
それは、長年兄をやってきた、テイザの勘だった。



「あんなこと言いだしたときには何事かと思ったけど。」
何事も無かったような気もしないでもない。
というか何事も無かった。そう思いたい。

（・・・下僕っていうのもあながち間違って無い。）

そう、間違いではなかった。
大体その通りの意味だったのだから。

「でももつと言葉は選ぶうぜ。」

「う・・・、じゃあなんて」

「召使・・・使用人とか？」

「あんまり変わらないですねー。」

「言い方が問題なんだよ。」

「その変態君は放つといいと思うよ。ジェリエ君。」

「うわぁーオルデルさん名案ですねー。」

「お前らなんて大嫌いだ。」

拗ねたようにテイザが言う。

それをいつもなら生温かい目で見守るキサラだが。

「遊んでるんなら置いていくよ・・・?」

やはり先程の失態は付いて回るようだ。

ここで一気に名誉挽回といきたい。

「おかしいですねー。」

「え？何が？」

「もうとつくに朝になって良いハズですー。」

「え、そうなの？」

「ああ。キサラは寝てたからな。その分結構経ってるハズ。」

「ん？じゃあなんで俺、人間の姿のままなんだ？」

少しの間、沈黙する。

「え・・・？」

（ま、まさか・・・？！）

「ウサギになれない？！」

「かも・・・？」

「おいおい・・・！」

「どうするんですかー。」

「計画変更？一から考え直す？」

また沈黙。

「や、待て。俺なら」

「俺なら？」

「波動の具現化で、いけるかもしれな」

「無理ですよー。」

「何でだ？」

「だって、何日も寝て無いし飲まず食わずですー。そんな体で具現

化できますかー？」

「いや、いけるかもしれないだろ」

「死にたいんですかー？」

「……！！」

ジェリエが無表情で冷ややかな目線を向ける。

全員、彼が何を言っているのか理解しきれていない。

「そんな体で波動の具現化、結構ですー。でも、確実に死にますー。」

少し前までふざけ合っていたのが嘘のように、真剣な空気が流れる。
誰かが口を開いたときだった。

「ちやおーキサラ君♪」

牢の中のとある三人が固まった。

「まさ……か……？」

会いたかったような、会いたくなかったような……。

キサラとウラキ、テイザがゆっくりと振り返る。

それもぎこちなく。

「……やっぱり……。」

そこに立っていたのは、見覚えのある黒い派手な魔女だった。

L v. 8 1 管理所脱出に向けて（後書き）

魔女「だ〜れだっ♪」

テイザ「悪魔。」

ウラキ「帰れ。」

キサラ「・・・、ひ、久しぶり・・・？」

魔女「ちよっと！何なの！？」

L v. 82 魔女の破壊的な実力

じゃあ、色々揃ったところで

行きますか。

◇

「あつれ〜？なんか増えてるわ。面倒ね。」

「誰ですかー？」

「知り合い、この中に居る？」

牢の中に居る男たちの中で口を開いたのは、オルデルとジェリエ。
他の三人は固まっている。

黒い派手な魔女はキサラにだけ暑・・・熱い視線を送っていた。

「・・・どうやらキサラ君の知り合いみたいだね？」

「そ、そうです。」

「大丈夫ですかー？その変態顔色悪いですけどー？」

「あ、本当だ。お前女好きだろ？」

「・・・ウラキ、お前はわかってるだろ。何だその言い方。」

「・・・ダメレ下僕その1。忘れるようにしてんだろ。」

各々好きなように話をしていく。

（シュヒ相変わらず元気そうだな。）

何日ぶりだろうとボンヤリ考える。

そしてそこでハッとする。

「シュヒ！タスラとシーラは！？」

いきなり大きな声を上げたので、周りの動きが止まる。
そこでウラキとテイザも思い出したらしい。

・・・この薄情者。

「そうだ、お前あのガキ・・・あいつらどうした。」

「言い直しても駄目よ義兄さま。」

「だから、兄になった覚えはねえよ。」

（相変わらず失礼な男ね。全く。父親にそっくりだわ。）

憎たらしい。弟の方はこんなにも愛らしいのに。

そんな風に毒づく。

聞こえていないはずなのに、テイザは睨んできている。

（空気で感じるのかしら。・・・どこまでも父親そっくり。）

しかしその憎い男が生きていたのは昔の話だ。

そう、過去の話。

この兄弟の母親と共に死んだ。

・・・あれは、事故だった。

そう、事故。

（それなのに。）

キサラは未だ、それを自分の責任だと感じている。

事故ではないと。自分が殺してしまったのだと。

だからこそ、彼らが死んだ際のことを、キサラは覚えていない。

「・・・そのうち、認めてもらいますわ、義兄様。」

彼の過去を知っている者が、傍にいたべきだと思う。
それに、私には彼しかない。

「そうだ、あの二人の話だったわね。」

「うん・・・。二人は、どこに？」

「二人なら、ここの管理所の裏の森に居るわ。ここは危険だしね。」

「森も危険だろ。下僕その2。どうして置いて来た。」

「その呼び方がいい加減やめてくださる？不愉快よ。」

「ど・う・し・て・お・い・て・き・た。」

ウラキは不機嫌そうに眉根を寄せる。

質問を完全にスルーされたから当然と言えば当然。

それに彼女の口ぶりは遠まわしで、なかなか必要な事項を言わない。
そこで結構焦れる。

「ああ、大丈夫よ。私の使い魔が二人のことを守ってるわ。」

「やっぱり魔女さんなんですか！。」

使い魔という言葉に反応したらしい。ジェリエが話に加わる。

（好奇心旺盛な人だなー。）

前から思っていたけど。

それに知識もしっかりある。

頭も、馬鹿ではない。

「さすが詐欺者。知識はしっかりしてやがるな。」

（だねー。ジェリエ君は悪魔と契約とかしてるかな？）

「どうだろうな。でもこいつ、そういう危険そうなのは自分から
被りに行くタイプじゃねえから。」

（だよね、僕もそう思った。・・・じゃあ独学で結構知ってるのか・・・。）

「だが本来悪魔と契約ってそこまでメジャーなものじゃないぞ？」
（確かに。知る人ぞ知ってるっていうか。）

「第一俺たちが悪魔と魔女に関することは魔女自身に聞いたからだ。」

（知り合いが魔女、もしくは本人自体が・・・って思ったけど本人でことはなさそうだね。）

「ん。賢くなったな。」

ウラキがキサラの頭を撫でる。

先程までの会話は、もちろん周りの人間には聞こえていない。

ウラキがキサラの頭にもたれかかっていたため、会話ができた。

そして二人が会話している間、シュヒアルとジェリエの間ではこんな会話が合った。

「・・・どちら様？私、貴方の顔に見覚えがないわ。」

「あ、僕ジェリエと言いますー。派手な魔女さんー。」

「派手？そうかしら、貴族令嬢なんてこんなものよ。」

「わー、おまけに貴族様でしたかー。殺したいなー。」

「あら、なんの権限があってそんなことを仰っているのかしら？」

「元恋人が貴族だったんですー。貴族って聞いただけでこの棍が首刎ね飛ばしちやいそうですー。」

結構物騒である。

「ま、魔女？貴族？」

「なんだ妻子持ち、魔女も貴族も見るのは初めてか？」

「いや、貴族は地元の見たことあるけど、この人は随分イメージと

違うな・・・。」

「だよな。ちょっと品が無いよな。」

「というか、魔女・・・って？それに使い魔？どうなってるんだ？」

オルデルの反応こそが、一般人としては当り前の反応だった。

「一体、ジェリエあいつは何者なんだろうな。」

ウラキが目を細める。

そこには感情はなく、何かを探るような目になっていた。

（不思議な人だよね。）

「ああ。でも、ま、あいつともここで名簿から名前消せばバイバイだからな。別にいいか。」

（うん・・・ちょっと寂しいけどね。）

「・・・お前、そういうこと軽々しく言うな。」

（え？だって寂し）

「言うな。」

（う、はい。）

なんだか、ウラキから冷たい感情は伝わらなくなったが代わりに怒りに近いものが伝わってきた。

キサラは自分が何かしたのではと一人冷や汗をかくのだった。

（ていうか、早くこっから出せよ。）

鉄格子の外に居るシュヒアルに対し、同じ様なことを全員が思ったことは言うまでも無い。

「あ、忘れてた、脱出させなきゃいけないのよね？早くこんなところからは出ましょう。」

「うん、そうだね。っていうか何でその一番大切なことを今まで忘れてたの。」

「ごめんなさいね、キサラ君……！」

僕の知ってる謝る態度と違う……！

（笑顔って！）

笑顔で謝るなんて！

しかも声が心なしか弾んでるよ本当に何がしたいんだろうこの人。

「シュヒ、どっかにここの牢の看守がいるはずだからその人から鍵を」

「はい、どうぞ出てー。」

「……？！」

牢は開いた。

鍵がシュヒアルの手元にあったわけではない。
鍵を魔法で作ったわけでもない。

シュヒアルが、鉄格子を捻じ曲げたのだ。

それも原形がわからないほどに。

「さ、どうぞ☆キサラ君」



後に語られる伝説では、勇者一行の一人がその腕力により

とても頑丈で、国最高の強度を誇る鉄で作り上げられた鉄格子を捻じ曲げた・・・

・・・伝説の魔女がいたとかいなかったとか。

ちなみにその伝説を知った者たちは口々に、その場に居た一般人代表と同じことを言うとか。

「使い魔必要？」

L v. 82 魔女の破壊的な実力（後書き）

テイザ「こいつ本当にヤダ・・・。」

シュヒアル「まあ、私ったら☆」

キサラ「魔法使っていないのにすごいねー。」

ウラキ「そこなのか。まあ、すごいけども。」

シュヒアル「ふふっ、もっとほめたたえなさい！」

ウラキ「下僕その2、身の程をわきまえろ。」

シュヒアル「何よー!!」

L v. 83 不運な男

締め上げるだなんて人聞きが悪いわ。
ただちよつと話を聞くだけよ。



「作戦はさつき確認した通りだが、なんか質問ある奴いるか？」

「いや、俺はない。・・・することもあんまないな。」

「そうですねー。まるで脇役の様な扱いですー。」

「あら、下僕の役をやるよりはましでしてよ？」

「わー、何その言葉。言語ちゃんとあつてるの？」

「おい・・・お前ら少しは緊張感を持て。」

ウラキがイライラした様子で振り返る。

「だってキサラ君寝ましたけど僕ら寝て無いんですよー？無理ですー。」

「じゃあ帰れ。牢に。」

「嫌ですよー。変態こそ牢に入るべきですー。」

「うるさー下僕その1、ダメレ。」

珍しくウラキがマトモである。

眠い時こそ実力を発揮するタイプ・・・な訳も無く。

寝たいから急ぐ。

その理由を知っているのは彼と心をつなげることができるキサラだけである。

（うわー、イライラしてるよ。）

短気は損気！

そうやって声をかけたらため息を吐かれた。

・・・何でだろう。

「それにしてもキサラ君、似合うね。」

「う、あ、ありがとうございます・・・ます。」

「ホントよねー。何着ても似合うなんて素敵よ。」

「シュビ、そういうのなんか、恥ずかしいからやめて。」

「いや、俺は恥ずかしがるお前も「ダメレ変態。」

（ていうかこの服はどこから・・・。）

聞かないことにしよう。きつと気にしたら駄目なんだ。

気にしたらお前が負けー！とかいうゲームなんだ。

あれ、何言ってるのかわからなくなってきた・・・。

「じゃあ、アタシは予定通りに動くわね。」

「よろしく。」

「いくわよ、下僕ども。」

「へいへい。」

「その呼び方嫌だな。」

「本当のことだけどもカつきますー。」

「本当じゃねえよ、フリだ。フリ。」

「わかってますよー。」

キサラ率いる一行は、貴族及び従者の格好をしている。

・・・どこからその衣服を借りてきたのか

オルデル始め一般常識を持つキサラたちには聞けない。

ただ・・・ウラキがなんか目を離れた隙に持っていた。

（なんていうか、泥棒みたいだな。）
気が引ける。でもこのままですいたらシーラとタスラに会えない。

「あら、ごきげんよう。」

ニコリと優雅な笑みをシュヒアルが浮かべる。

目の前には、下級貴族の服を身にまとい、なりすましている男。
明らかに貴族のする振る舞いではないことに、貴族を知る者たちは
それが偽物だと一目でわかった。

（優雅さの欠片もないわ。貴族も舐められたものね。）

シュヒアルが小声で言う。

冷ややかな侮蔑をこめた笑いと視線に、目の前の男は気付きすらしない。

それどころか、目の前に立っている者の階級すらわからないようだ。

「こ、これは・・・ごきげんよう。」

「あら、おじ様元気が無いご様子ですね。」

「あ、ああ。君は・・・どこかで会ったことが・・・？」

「あら嫌ですわ。忘れてしまわれたなんて。」

「す、すまないねえ・・・もう歳なもので。」

「少し前に会ったばかりですよ？」

「あ・・・ああ・・・えっと」

話を合わせることもできない。

これ以上は時間の無駄だと思われた。
しかし。

「私から名乗らせていただきますわ、おじ様。」

優雅に、貴族らしく振舞うシュヒアル。

どこか遠い存在に感じたのはきつと気のせいではないだろう。

そしてその遠い存在を演じなければいけないのは自分も同じだった。

「いや、いい。シュヒアル。」

「あら、お兄様。」

お兄様というのは、設定。

キサラはシュヒアルの兄という設定（らしい）。

完全にシュヒアルの趣味だと思われる。

「これでも伯爵家令嬢の端くれ・・・お忘れになられるのは無礼では？」

そこでやっと、目の前のタヌキの様な男の顔が蒼くなっていく。

「も、申し訳ございま」

「どうも申し訳ない、男爵。」

「ひっ」

「『私はどうも、慈悲の心を母親の腹の中に忘れてきてしまった様で。』」

これも設定。

僕はドS（意味を聞いたなら教えてくれなかった）な伯爵子息。

ボンボン故の世間知らずで、人を人とも思わない貴族、という設定。貴族とは本当は誇り高いのだが・・・。こんなことに使ってしまうのは気が引ける。

だが目の前の男も貴族を馬鹿にしているだろうから、叩きのめすぐらい目をつぶってくれるだろう。

「『妹を侮辱されてしまったからには、男爵と言えど、容赦出来そうにありません。』」

そこで、無邪気な笑顔。

「『ぜひ、一家根絶やしにして差し上げたいのですが……？』」

（わ、ちよ、ウラキやりすぎ。）

実はこれ、ウラキの声である。

キサラの背に手を当てることで、キサラの声を一時的に発することが出来るらしい。

しかし・・・脅しが効き過ぎな気がする。

目の前の男はそういったことに免疫がなさそうだ。

申し訳……なくもない。いいぞウラキもつとやれ。

[illegible]

男が情けない悲鳴を上げる。

しかしこんな意味不明な言葉で恐怖心を煽るとは。

さすがと言つてはさすがなだろう。

（でも一家根絶やしって・・・。）

あと敬語が何となくおかしい気がする。

どこで覚えたのだろう。

でも迫力はあった。確かにあった。

ドスの効いた声が特に・・・。

ほら、目の前の男だって震えあがってる。

(すごいなあ・・・。)

やっぱり迫力があつたんだな、と一人で納得する。

しかし彼の恐怖心を一番煽ったのがキサラ自身の無邪気な笑顔だとはキサラのみが知らない。

「俺、あいつのこと同情するわ。」

「そうだな。キサラ君みたいな子のあんな純粹な顔であんなこと言われたら立ち直れる気がしない。」

「あ？そんなに科白キマツてたか？」

「もうすごい効果ですー。」

走り去ろうとした男爵をジェリエとテイザが抑え込みながら話を進める。

多分この恐怖心で色々煽っていけば簡単に此処のことを話してくれるだろう。

「やっぱりキサラ君の入れ替わり説は有効だったみたいだね。」

「そうですね・・・この人は本物の貴族じゃない。」

「そうね。私のこと覚えて無かったわ。あんなに可愛がってくれた人が忘れるとも思えないし。」

「じゃあ早速ゲロツてもらいましょうかー。」

声の無い悲鳴を男が上げたのは言うまでもない。

◇

王による勇者及びその周りの動向の報告の中に、

不運な男は根掘り葉掘り管理所の秘密を言わされ
その後数年は少年と少女を見ることができなくなったという報告が
ある。

L v. 83 不運な男（後書き）

シュヒアル「……お兄様ってこのまま呼んでもいいかしら？」
テイザ「お前そういう趣味か。……キサラが危ない。」
ウラキ「いや、お前の方が危ないだろ。実の兄だけに。」

オルデル「キサラ君モテるなあ。」
ジェリエ「本当ですねー。」
キサラ「……逃げたい。」

L v. 84 父親と親バカ（前書き）

今回は（も）息拔きなので大きな進展はありませんが
．．．たぶんキサラが親バカ復活．．．です。

L v. 84 父親と親バカ

よし、早速この中の偽貴族たちを縛りあげようじゃない。

◇

「それにしてもおじ様の顔にそっくり。信じられないわ。」

「え？ そんなに似てるの？」

「ええ……。これならフアリオンも不思議に思うハズなんだけれど。」

「フアリオンさんが？」

「なんだ、あいつ知り合いに貴族でもいるのか？」

「……。いるわよ。私とかね。」

「「あ……。」」

「ちよつと！ キサラ君まで何よ！」

本気で忘れてた。

シュヒは仮にも伯爵令嬢。

そう、貴族でありお嬢様なのだ。

あ、駄目だ笑いそう。

「貴族」。

その言葉にテイザが眉根を寄せていたのを知るのはシュヒアルのみである。

「とりあえずは、ここに居る男爵と子爵たちは偽物と考えて良さそうだね。」

「そうね。」

「はい質問ですー。」

ジェリエがひらひらと手を振る。

何というか、やる気が無さそうな感じで。

それにしてもこの人の順応性どうなってるんだろうか。

「なんで偽物たちはこんなにすんなりここに集まることができたんでしょうかー。」

「本当だ。確かに変・・・っていうかそれを考えるの忘れてた。」

「え・・・一体どういうことなんだい、キサラ君。」

「いや、本当に変なんです。」

決して適当に答えているわけではないよ！

ちゃんと応答した結果がこれなだけなんだよ！

「貴族って、普段からこんなに大勢が集まると思います？それも囚人を監修している牢の鍵を管理している場所に。普通は囚人と何らかの関係があるのではないかと疑われます。」

「そうよね。別に囚人に知り合いが居てもおかしいわけではないけれど・・・。居るにしてももう少し秘密裏に、しかも身分も偽って来ると思うわ。少なくとも私ならそうする。」

「ん？でもこいつら偽物なんだろう？」

「兄さん、もう少し頭を使って。」

「・・・キサラが言うなら。」

「いやそこは怒れよ。で？俺頭使ってもわかんないから教えて？」

ウラキが降参とばかりに両手を上げて聞いてくる。

しかしその仕草・・・おかしくないか。

「偽物だからこそ、ですよー?」

「そう。ジェリエ君鋭い。」

「偽物だからこそ?」

「ここまで言ってもわからないなんて変態は本当に頭が使えないんですねー。」

「頭が使えないってくだりは仮に認める。でも俺変態って名前じゃないんだけど。」

「え? 違うんですかー。知らなかったですー。」

口調こそ軽いが、二人の間に火花が散っている。

ぜひ他でやってほしいところだ。

（もう、何で仲良くしないんだろ。ん? でもこれある意味仲が良いんじゃない?）

キサラは一人で暴走していた。

「あ。わかった。偽物だから偽物だと怪しまれたら終わりなのか。」

「さすがオルデルさん!」

「いや、一番に気付いたのはむしろ・・・」

「そうですね、むしろジェリエ君・・・。違和感? みたいなものを明確にしてくれました。」

「そんなに褒めないでくださいー。キサラ君なら僕が居なくても思いつきましたー。」

「いや、そんなこと無いよ。本当にすごい。」

そう言いながらへらっとキサラが笑うと、物凄い剣幕でウラキとテイザがジェリエを睨んだ。

しかしキサラからは二人の顔は死角なので、気付かない。

（・・・天然さんはすごいですねー。）

これで自覚なしのタラシだからすごいと思う。

でも、褒められたのは素直に・・・嬉しい。

「ありがとうございますー。」

小さく、彼が気づかないくらいの感謝を。

「さて！」

口を開いたのはシュヒアルだ。

とても明るく、ことの進展を喜んでいた。

「名簿からキサラ君たちと知り合いの貴族を消して、ついでにファリオンを回収してさっさとシーラちゃんとタスラ君のところに戻るわよ！」

「・・・・・・？」

オルデルとジェリエは、ファリオンは辛うじてわかるものの、シーラとタスラは知らなかった。
ので、疑問に思っていた。

「キサラ君ーシーラちゃんとタスラ君って誰ですかー？」

「あ、それ俺も気になってた。」

「さっきその貴族・・・チツ、視界から消えろ。あ、何でもないですー・・・・・・が言っていましたよねー？」

（なんだろう、幻聴・・・？）

幻聴であって欲しい。

むしろこれ以上周りに兄さんやウラキのような人間が増えて欲しく

ない。

結構切実であつた。

「え．．．と、シーラとタスラは僕の娘と息子だよ。」

[illegible]

声を上げたのはテイザとオルデルだった。

ウラキは呆れたように片手で顔を覆う。

シュヒアルはムツとしたように頬を膨らませている。

ジェリエは笑顔のまま固まっていた。

「お前……アレまだ本気だったのか。」

「何？ ウラキにはおとーさんの地位は渡さないよ！」

「いらねーよ。あ……でも、お母さんの位置はいいんだったっけか？」

「うん！でもおとーさんだけは駄目！僕がお父さんなの！」

$$\begin{array}{c} \top \\ \wedge \\ | \\ \wedge \\ | \\ \circ \\ \bot \end{array}$$

久しぶりに斜めにぶっ飛んだ思考が垣間見えた。

これがいつものキサヲなのだが、真剣に思考をめぐらせているキサヲしか知らない

二人の人物は結構驚いている。

「キサラ！お母さんは俺になるぞ！」

「えー。でも二人が嫌がるから……。」

「ちよ、ちよつと待ってキサラ君！君も子供がいるのか？！」

「いや……僕が本当の父親ってわけじゃないんですけど。そんな感じです。」

「そうなのか。．．．いやぜひ一度僕の妻子に会わせたいものだ。」

「あ、そういえばオルデルさんはお子さんがいたんですね。」
「うん。何分その子が一人っ子なものでね。一緒に遊ぶ子が居なくて。」

「そうなんですかー。僕も自慢の子供たちを見たいです！」

「ああ、キサラ君は本当に父親代わりなんだね。父親の顔になっている。」

「ほ、本当ですか・・・！？」

嬉しそうにキサラの顔がほころぶ。

雰囲気が一気に明るくなった。

シーラとタスラへの溺愛っぷりがうかがえる。

「・・・どうしよう。あんなガキどもに嫉妬してる。」

「大丈夫だ、俺もだ。」

「右に同じ。」

テイザ、ウラキ、シュヒアルはそんな会話をしている。

ジェリエはいつの間にか普通に動き出していた。

たぶんキサラ自身の子供ではないというくだりあたりからだろう。

長い長い夜は、とっくに明けていた。

L v. 84 父親と親バカ（後書き）

キサラ「ああ、シーラとタスラのところに早く行かなきゃ。
オルデル「俺も早く息子のところへ……。」

ジェリエ「……幸せふりまいますねー。」

テイザ「イラつく気持ち……わかるぜ。」

ジェリエ「気持ち悪いですー。」

バコンッ！

テイザ「いってえ！！何すんだ！！！！！！」

L v. 85 魔王陛下の決意

「何のために」「どうして」
何故そんなことを一度も考えたことはなかったのだろう。
だからこんなにも戸惑いを覚えている。



コツ、コツ。

彼の靴が高い天井に音を響かせる。

響き渡るのは彼の、足音のみ。

人払いはどうに済んでいる。

（ここにくるまで、どれだけ時間がかかったことか。）

自室の扉に手をかける。

自分だけの空間ですら無くなりつつその部屋。

広い部屋を突き抜け、奥へ奥へ。

寝室の扉を開けて、更に進む。

そしてようやく、目的のモノの前に立つ。

「黒真珠」

これに膨大な魔力が入っていることに間違いはなかった。
それを確かめ、またそれを使用できるように何日か様々な方法を実験した。

今日がその何日目にあたるか、全く覚えてはいない。
が、これさえ成功すれば、一時だけ自分は自由を手に入れることができる。

よくぞここまで続けられたものだ。

自分の性格上、ここまで長く続けられたのは初めてだった。
普段は一日も掛らずに興味が失せる。

それなのに、ここまで自分が変わった。
それもこれも全て。

「キサラ。」

あの少年のせいだ。

一方的で、勝手なことかもしれないが。

彼を突き動かすのは興味と好奇心に似た何か。

あの髪に触れてみたい。感触を確かめてみたい。
体温はどうだろう。本当に魔族よりも温かなのか。
心音は穏やかだろうか。

彼は自分の姿を見て、何を思うだろうか。

会って、確かめたい。

たくさんのかんことを。

自分の想いを。

独占欲の正体を。

（キサラ。）

会いたい。

しかし、強く願うのと同時に、あの雨の日の光景が脳裏に過る。
雨音がうっとおしく感じていたのに、一瞬で遠い音のように感じた。
キサラすら遠い存在に感じてしまった。
冷たい雨は、生ぬるく感じた。

手を、伸ばしきれなかった。

彼を連れ去ってどこまでも行く覚悟がなかったわけではない。
彼を、閉じ込めておこうという独占欲がなかったわけでもない。
彼を、彼の姿を目に焼き付けるためにあそこまでいったのに。

焼き付けられた光景は、自分の望むものではなかった。

（あの男は、何だ。）

何故彼をその腕に閉じ込めておくことができる。

どうしてそこに立っていたのが私ではない。

あの男ではなく、何故私で無い。

傲慢なのかもしれない。
それでも。

（嗚呼。）

信じ、られなかった。

目の前の光景が。

自分が抱いている感情も。

焦燥感も。

『・・・・・・・・ありがとう。』

鮮やかな表情。

誰かに感謝されたのは、思えばあれが初めてだった。

恨まれるようなことならたくさんしてきた。

たくさんさんの命を取り上げて、それを弄んだ。

どんなものも、視界に入れようとすらしなかった。

肉親も自分も、なんでも壊せるものは壊して来た。

だからこそ、狂いきった愛情や歪みきった愛情を向けられたことこそあれど

感謝を向けられることは、なかった。

だから戸惑った。少しだけ。

・・・・・・気のせいだ。

彼を見つけた時の高揚感も。

急に感じた焦燥感も。

強く感じた嫉妬も。

彼のことを考えると胸が痛くなるのも。

苦しくなることも。

彼の姿をつい探してしまうことも。

彼に触れられないと知った時の不満も。

全て、気のせいだ。

何も感じてなどいないのだ。
想って、など・・・・。

「違う・・・・。」

想ってなどいない。

何も感じていないのだから。

近くに居られるのが幸せ。
笑顔を向けられるのが幸せ。

名前を呼ばれるのが幸せ。

そんなのは、嘘だ。

そんなもので満足できるはずがない。
そんなもので、何が満たされる？
何を求めている？

声も。

髪も。

姿も。

全てを欲しているなんて
可笑しい。

一つのモノに執着するなど。
自分らしくない。

自分、らしく・・・。

『ナトス。』

声が反響する。

彼の声が、心地よく落ちる。
感じたのは淡い高揚感と虚しさ。

自分らしくとは、何だ。

彼が一番自分を見ていたというのに。

自分を偽るために自分にまで嘘を吐いて。

キサラがナトスに与えたモノは微々たるものだった。
しかし、それが彼に大きな変化を与えていた。

初めて感じるものが多かったが故に。

いつの間にか自分の中に感情があることを知った。

そうだ、彼が本当の自分らしさを与えてくれていたではないか。

それなのに、何を偽ろうとしている。

誰を欺くために何を偽ろうとしている。

ナトス？
じぶん

それともキサラ？

・・・恐らくは、両方だ。

「やはり、お前のところに行こう。」

キサラ。

お前に伝えたいことがある。

お前が傍にいたことが喜びなのだ。

お前に、会いたい。

「キサラ。」

ただの人間の少年。

平凡な、少し考えることが幼い少年。

不思議なことを考える少年。

誰よりも自己犠牲をして

誰よりも背負って

誰よりも傷つく少年。

「キサラ、キサラキサラ。」

脳裏にあの光景が鮮明に浮かび上がる。

頭を軽く振って、振り払う。

この程度で怖気づくのなら、それまでだ。

それに、自分が見たことは一部に過ぎないのだろうから。

だから、確かめに行くのだ。

何を確かめるのか、自分でも理解はしていない。

現地についてから何を確かめるのか

ゆっくりと考えれば良い。

ゆっくり、ゆっくりと。

そして

たとえば自分が望む結果にならずとも。
この言葉をキサラに言おう。

「 。 」と。

誰より、お前が必要だと。

L v. 86 醜い笑顔

わかっていた。・・・気はしていたのに。



「まず偽男爵と子爵を一掃しようぜー。」

「賛成ですー。」

「本物も今脱獄してここにいるわけだしね。うん、丁度いいや。」

男爵は道案内にはうってつけなので、起こしておいた。

「逃げようなんて下手なこと考えたら・・・わかってるよな？」

「ひっ・・・は、はいいい。」

「兄さん、それ完全悪役だよ・・・。」

「ぴったりじゃねーか。」

「なんだと？」

はいはい、わかったから。

「とりあえず、僕らと脱出した本物さんたちを探す人と、偽物縛り上げる人でチームでも作ろうか。」

「そうですねー。」

時間が無いので、適当にチーム分けをした。

結果、以下の通りになった。

・監獄を脱出した本物の男爵、子爵を探すチーム

キサラ、ウラキ、シュヒアル
・偽物を縛り上げるチーム
テイザ、ジェリエ、オルデル

「おい、なんで俺がキサラと一緒にゃねーんだ。」

「黙ってくださいー。時間ありませんー。」

「そうだよ。ちよつとは考えてこうなったんだから。ちゃんとやってね、兄さん。」

「・・・仕方ねーな。」

これは補足だけど、オルデルさんはかなり怯えている。

一般人なわけだから当たり前か。

(あれ？　そういえば・・・)

「あの、オルデルさん。一つ質問いいですか？」

「なんだい？　キサラ君。」

「男爵と子爵が捕えられた理由は何となく察しがつくんですが、オルデルさんはどうして・・・。」

「あ、そういえば不思議ですー。普通の農家の方なんでしょうー？」

そうすると、オルデルさんは少し複雑な顔をした。

「・・・見ての通り、ここら一体が随分と貧乏になってきてね。それなのに、ここら辺を管理している男爵は俺たちからただでさえ無い金を極限まで絞り上げようとしてきた。それも急にね。だからそれはおかしいと抗議を始めたんだ。」

「きつとそれ、例の偽男爵ね。」

「恐らくは。でも俺たち農民は本当にギリギリの生活をしてきたんだ。前まで男爵はそれに理解を示してたし。それなのにこの仕打ちはあるにも酷いと・・・偽物とも気がつかずに。」

「それで嘘の罪をでっちあげられて監獄に……？」
「ああ。全く身に覚えのない罪だった。」

なんてひどい話だろう。

オルデルさんたちは、きっと家族を守る為に抗議をしたのに。

「でもそれって、偽物たちはお金を集めてるってことですよねー？」
「何のために……。」

捕まえた偽男爵を見たところ、気が弱そうな男だ。
おいしい話に乗っただけとしか思えない。

大量の金額を報酬として提示された可能性が高い。

「それより、早く作戦決行しようよ。話しはそれからよ。」

シュヒアルの一言で、一旦そっちに集中することになった。

しかし、思った以上に偽物はあっさりと捕まることになる。



（何を馬鹿な。）

人間の行動に動揺するなど。
変な話だ。

「……少し、取り乱しました。」

「そうか安心しろ、城では貴様の体から魂を抜いてやる。」

「安心できるわけありませんよ。魂を抜くなんてまた物騒なことを。」

「大丈夫だ。お前は“予言者”の餌……魂を壊すことはしない。」

「……何も大丈夫じゃありませんよ。わかってます？」

聞くと、ディジラウは小首を傾げた。

やはり、そこは悪魔といったところか。

人間と悪魔では、魂の価値観が違う。

「でもその前に一つだけ仕事が残っているので、それを終わらせてからではいけませんか？」

「かまわん。」

フアリオンの願いはあっさりと受理された。

（私に興味がないのか……？普通なら内容を聞いても……）

口に出すわけにはいかないので、心の中で不満を漏らす。

暗に自分に興味を持って欲しいと思っているようなものなのだが
当の本人はそれに気が付いていない。

（なんだ仕事とは。そんなことを言って逃げ出す気では……。なんだ、想い人と私が似ていると言っておきながら……。本当は似ていないのではないか？適当なことばかり言っているだけでは。）
ディジラウもディジラウで、結構ズレた思考をしていた。

「一応聞かせてもらおうか、仕事とはなんだ。」

「……ここにある、囚人の名簿からとある人物数名の名前を消すことです。」

「それはお前に何のメリットがある。」

「まあ、明確なものはありません。」

「ならば何故それをしようとする。」

その言葉で、僅かにフアリオンの瞳が戸惑いに揺れる。
言うべきかどうか・・・わからない様子だった。

「・・・貴女が・・・。」

「・・・？」

「貴女が探している、“予言者”の望みだからです。」

（忘れるところだった。）

彼女の目的は自分ではない、師匠である“予言者”だ。
それなのに、一瞬。

本当に一瞬、思ってしまった。

———嬉しいと。

自分に興味を持ってくれた、と。

全ては、“予言者”に通ずる情報の為でしかないというのに。
勘違いもいいところだ。

そして、笑って見せる。

（貴女の眼中に、私はいない。）

師匠が、これほど恨めしいことはない。

どんなに彼に才能があっても

どんなに彼が美しくても。

羨ましく思ったことなんて一度もないのに。

・・・私は、上手く笑えていますか？

嫉妬を感じながら。
笑えているでしょうか。

（ああそうだ。）

自分は何のためにこの男を城に連れ帰ろうとしているのか。
彼が“予言者”の「餌」だからだ。
しかし、「餌」に喰いつく確証が得られない。

だから“予言者”が喰いつくまで。

彼が「餌」だということを周りが忘れるまで。
傍に置いておこうなど。

魂が拒むなら、器だけでもいい。

彼がどんな人間なのかに興味を持った。
決して、惹かれていたわけでは……ない。

（思い出せ。）

自分が想っているのは……魔王様だ。
この男ではない。
この男では……

目を、閉じる。

いつだって、真っ先に浮かぶのは魔王様の顔。

今だって、魔王様の顔が浮かぶはずだった。

――なのに。

目を開いても、閉じてても、目の前にある顔は。

（思い、出せ）

いつだって魔王様のために。

いつだって魔王様と共に。

いつだって魔王様を最優先に。

なのにどうしてだろう。

魔王様の存在がこんなにも小さい。

私の中で大きい存在が、目の前の人物なのだ。

（そんな、はずは。）

『予言だ。貴殿は彼でなく、別のモノを選び、共に生きていくだろう。』

（魔王、様。）

私は、わからないのです。

L v. 87 曲がり逸れる

やるならやるって事前に言っておいてほしいものだ。



「うわー。」

キサラの兄、テイザは天を仰ぎ唸る様にして声を上げた。

オルデルは目の前の光景が信じられないらしく、目を白黒させている。

ジェリエは眉根を寄せ、棍にもたれかかる様にして経っている。

「ああ、てっきり戦場さながらの光景になるかと。」

オルデルはやっと状況が把握できたようだ。のん気なことに安心している。

「あーあ、良いところ全部持って行かれちゃいましたねー。」

「ホントだよ。俺はもうひと暴れできるもんだと思って心弾ませていたってのに。」

「いや・・・俺としてはこれで良い気がする。」

しみじみと二人の言葉に応えるようにオルデルは呟いた。といったも独り言だが。

と、いうのも。

彼らが縛り上げるはずだった偽物の貴族様御一行が、見事に捕まっているのだ。

そして気がついたことが一つ。

「ジェリエ坊・・・気付いてるか？」

「・・・その様子だと変態さんですかー。」

「え？なんだ？」

「妻子持ち君、違和感無いか？」

「その呼び方（以下略）。違和感って？」

「おいおい、なんでジェリエ坊に聞くんだお前。」

「君に聞くのは屈辱的だ。」

「随分な言い方だな。」

悲しげに眉を寄せるが口元が笑っている。
内心楽しんでるのがよく見てとれる。

「君は随分と性格が曲がってるな。」

「褒め言葉として受け取る。」

「話しが逸れてますー。」

「あ、そうだった。違和感。」

テイザと話すとうっかり話題が二転三転して別の方向に行く。

「警備の兵が彼らを助けに来ませんー。」

「あ。」

「そ。こんだけ大々的に居るんだ。誰かが不思議に思っ探しに来るだろ。」

「一人消えたただけならまだわかりますけど、いっぺんに皆居なくなったら一人ぐらい違和感持ちますー。」

そしてこんな人数がここに集まって自分たちから捕まっただけも無く。

「あいつにしてやられたな。本当に嫌な奴だ。」

「あいつ？」

「フアリオンさんですねー。僕正直あの人苦手ですー。」
「・・・だろうな。」

根っこが似てる。

大概そういうのは同族嫌悪？そんな感じになるだろう。

そしたらあっちもきつとジェリエが苦手なはず。

腹黒と腹黒は時に意見が合い、意気投合する。

しかし、あまりにも似ていると。

お互いの考えることが手に取る様にわかる。

それは信頼のおける相手であれば、まだいいだろう。だが、それが信用のならない相手であれば。

とてつもなく恐ろしいことだろう。

（ま、俺には関係ないな。）
心正しい好青年だから。

誰もが聞いたなら即否定するであろうことを彼は胸中で呟いた。

「とりあえずこいつら、連れて行こうぜ。」

「え？何処に？」

「「牢屋。」」

ジェリエとテイザが同時に返事をする。

意外とジェリエとテイザも腹黒という面では似ている。
ただ、その黒さの質が違うだけで。

◇

「？」

ほぼ同時刻、キサラ、ウラキ、シュヒアル三人からなる本物を探すチーム。

彼らはシュヒアルがどこからか拝借してきたこの見取り図を見ながら進んでいた。

そしてウラキが何かを感じたのか、足を止めた。

キサラも何かを察し、前を歩くシュヒアルを制した。

「え？何キサラ君。」

「ウラキに聞いて。何か見つけたみたい。」

踵を返して二人はウラキに駆け寄る。

しかし駆け寄って来た二人にウラキは顔を向けようとしな

何かに集中しているようだ。

と言ってもここは廊下。

扉も見えない。

となれば、彼特有の優れた聴覚で何かを捉えたのだろう。

「どうしたの？ウラキ。」

返事はない。

そして仕方なくウラキの腕に手を添える。

（何？頭痛い？）

「・・・どうしてそうなる。」

（えへへー。じゃない、えっと、本当にどうしたの？）

「この壁、なんか変なんだ。」

（変？）

「風が・・・。」

そう言われて初めて、キサラは気がついた。

「隙間風……?」

誰にともなくぼつりとつぶやいた。

「あ、本当。」

シュヒアルも近くに寄って来て、隙間風を確認する。

次いで首をかしげた。

（おかしいわね、こんなところから。）

使い魔に助言を求めようと思ったが、生憎その使い魔はシーラとタスラを守っている。

無駄なことに頭を使って、二人に何かありでもしたらキサラに顔向けができない。

こんなときに自分が多種多様な魔法が使えるば、と少し思う。

自分ができるのは見た目をそのままに、容積を変化させること。

物体の大きさを変化させること。

空が飛べること。それだけだ。

透視ができるわけでもないし、念力が使えるわけでもない。

今必要であろう能力が、自分には無い。

しかし使い魔なら……思ったように魔力を使える。

今必要である能力が、彼になら使える。

二人に気がつかれないように下唇を強く噛んだ。

無力な自分を変えたくて魔の力に手を出した。

そしてそれが今、自分の手元にあるにも関わらず無力なままだ。

「これ、もしかして仕掛け扉……」

キサラの眩きでシュヒアルは一気に現実に戻された。
そして少し青ざめる。

……遅かった。

キサラの目が好奇心が窺え、キラキラと輝いているように見える。

（完全にこいつウキウキしてやがる。）

きっと今のキサラの頭の中には名簿のことなんて全く無い。

それどころか自分が今どこにいるのかさえちゃんと覚えているか危
うい。

てか覚えて無い。断言できる。

「……探究心って大事だよな。ああ、思うとも。」

「それ以上言わないで。てか何よ。こっち見ないで。こんなになっ
たら止めれるわけないでしょ！」

「だよな。俺でも無理だ。……あーよかった。ここにあの兄貴が
居なくて。」

「え。なんであいつが出て来るのよ。」

「や。深い意味はないけど。」

「そ……。じゃない、キサラ君止めるわよ！」

そう言いながらキサラが居るはずのところを見る。が。

「「あ。。。」」

時すでに遅し。

彼は彼の予想通りの隠し扉を回転させ、消えた。
というかひっくりかえった壁が眼前に見える。

「今回の特殊な状態で忘れてたわ・・・」

「何？親バカかつ天然、好奇心旺盛なところ？」

「・・・思考回路がぶっ飛んでる一家の一人で、あの兄の弟だったこと。」

「あー・・・盲点だった。」

あの家族は全員、なにからなにまで本題から逸らす。
会話も、目的も。

そのくせ、大事なところはしっかり理解しているし、自分のやりた
いことはやる。

そして全員は濃い性格なので忘れがちだが。

全員、頭がキレる。

あと怒ると怖い。

「でもアナタも、あの兄の弟でしょ？」

ウラキはその問いかけには答えなかった。
というより、応えられなかった。

（・・・ああ、そうか。）

そして、思い出す。

あの二人の子供と言わない理由を。

L v. 87 曲がり逸れる（後書き）

ウラキ「つて違う！キサラ追うぞ。」

シュヒアル「そうね・・・。（ハア）」

キサラ「わぁ、暗っ。あ、カンテラ発見。」

ウラキ・シュヒアル「「待て！！」（泣）」」

L v. 88 「裏」の真実（前書き）

前世と過去の話。

L v. 88 「裏」の真実

それは、突然だった。



暗い暗い階段を下っていく。

隠し扉の裏に通路があった。

通路を進むとそこには下に降りる階段が。

どうしてこんなところにそんなものが。

そんなことはキサラにはどうでもよかった。

近場に在ったカンテラに明かりを灯す。

しかし無意識の行動で、自分がどうやって明かりをともしたのか、後から思い出してもわからない。

ただ吸い寄せられるように、下へ下へ。

「ちよ、キサラ君どうしちゃったのよ。」

「知らねえよ。それよりお前何か光とか火の魔法使えないのか？」

「使えないわ。使い魔ならできると思うけど。」

「……ったく、足元が見えねえ。」

唯一の光、カンテラはキサラが持っているのだ。

とても歩きづらい。

そして異変に気がつく。

「好奇心で周りが見えなくなったにしても……変だな。」

「何がよ。」

「あいつ、周りに人一倍気使うだろ？」

「そうね。それが？」

「周りが見えなくなっても、何故か心配りはできるんだあいつ。いつもならな。」

「……どういうこと？」

「周りへの配慮はちゃんとする。こんな暗い所で明かり一つ。もう意味わかるな？」

シュヒアルは無言でうなずいた。

確かに言えているかもしれない。

こんなところで明かりが一つ。そしてそれをキサラが独占するはずがなく。

キサラに何かが起きていることがわかる。

「あと一つ。あいつは暗いところが嫌いだ。」

「……」

理由は簡単だった。

数年前に起きたとある出来事。

とても悲劇的なこと。

「森で拾われたときも、あいつが暴行を受けたのも、暗いところ、更には両親を失ったのは夜だ。」

「暗い所に恐怖心を抱くようになったの、あなたは知ってたの？」

「当然。あいつと俺は心が繋がってた。」

「そうね。でもキサラ君は暗闇を恐れる素振りをしなかった。」

「それは俺が居たからだ。」

彼と彼の体を共有することで、彼の恐怖心を和らげること努めた。そのため再び戻って来たのだと知ったから。いつしかそれを忘れていたけれど。

彼を憎む気持ちが好意に変換されたかどうかはわからない。

だがこれだけは言える。

ウラキは、キサラを愛していた。

キサラであり、キサラではないものを。

憎む気持ちが生まれたのも、愛していたからだと知った。

（何もかも思い出すには時間がかかる。）

ひとつ、思い出した。

自分はキサラから生まれたのではない。

キサラの為に死んだのだ。



本当に、それは突然だった。

自分は知っていた。

彼女が誰を愛していたのか。

それなのに、自分は彼女の傍にずっといた。

こちらを少しでも向くように。

でも、彼女が揺れることは一度もなかったように思う。

『私はね、何のために生きているかわからなかった。』

むしろ生きているかさえも疑問だった。

あるのは、存在のみ。

でも彼女の姿が見えるのは一部の特別な人間のみ。

『でも、あの方に出会った。』

カミサマに。

天空にすみ、尊敬され、崇拜される存在に。

多くの天使が、仕えていた。

その中に、彼女ともう二人、彼女と同じ天使。
そして悪魔^{じふん}。

いつも四人でいた。・・・人になりたかった者同士で。
その当時は天使も悪魔も対極な存在でこそあれ、対立する存在ではなかった。

人間に、なりたかった。

自由な存在になりたかった。

『おい、—————。聞ってるのか？』

『あ、いや、悪い。』

『私はお前が悪魔でも同士として、友として接しろとナジェスに
いったんだけど、守ってるか？』

『あー全然。今日もつれないぜ。』

『なんだと！あいつも全然私の話を聞かないな！今度締めてやるっ。』

』

（締める・・・？おいおい仮にも天使だろ・・・。）

女の容姿をしているくせに、男のような口調の天使がいた。

天使は敬語でいつもおとなしいと思っていたが、例外はいるらしい。
だからこそ、俺ともやってこれたんだと思う。

『そういうなよ、ベリエル。』

『あー！ナジェス！！』

口喧嘩とは名ばかりのジャレ合いが始まった。

それを傍観する俺と、もう一人。

『おい、笑ってる場合じゃないぞ！！キサラ！』

ベリエルは「キサラ」と、とても仲がよかった。

それは女同士ということと、人間になりたいということが作用したのかもしれない。

「キサラ」がベリエルにとって初めての友人として受け入れた存在、というのもあるだろう。

「キサラ」は誰より天使らしく。

誰よりも慈しみの心をもつ女性の容姿をした天使だった。

そんな彼女を、誰よりも悪魔らしい俺が愛した。

おかしな話だ。

ナジェスとベリエルも笑っていた。

でも、馬鹿にはしていなかった。

揃って「やっぱりな」と言われたときは少し腹が立った。

心底二人は喜んでいたのだ。

なのに。

それが、いつの間にか対立するようになっていた。
根本的に何かが違っていたのだ。

そして、それは起こった。

『……もうカミサマの下にはいれない』

そう言ったのはナジェスだ。

今ならその意味が少しはわかる気がする。

最初はカミサマを裏切ったのだと思っていた。
でも、違った。

彼が“堕ちた”のは、すべてカミサマのためだった。

いや、カミサマに愛され、恐らく愛していたであろう女の天使のため。

結局ナジェスが守ろうとした彼女は死に、転生した。

半人間・半悪魔として。

そして転生した現代でもナジェスは彼女を守りきれなかった。
……
何の皮肉だと思ったが。

戦いが、あったからだと俺だけが知っている。

悪魔と、カミサマに不満を募らせた天使たちの反逆軍。

その中にはあのナジェスがいた。

そして片や、カミサマを守るための天使の軍。

その中にはベリエルが。

『何故……!』

ベリエルが叫びながらナジェスと剣を交えるのを横目で見た。

ナジェスは見事に最後まで悪役を演じきった。

俺より悪魔に向いてるかもしれないと思っていたが、どうやら違ったようだ。

その混乱の中で、俺はひたすらキサラを探した。

彼女はカミサマがいるはずの玉座の間の、玉座に座っていた。
カミサマの身代わりになるために。

『キサラ……』

彼女は、俺を見つけて微笑んだ。

『最後に会えて嬉しいわ。』

美しい微笑が、やけに切なく映った。

『貴方が私を殺せば、すべては終わるでしょう。』

だからいいのだと。

自分の身さえ、戦いが終わるのならばと。
最後まで天使として、彼女は在った。

カミサマの、ために。

『逃げよう！キサラ。』

叫んだのは俺だった。

逃げよう。

そしたら、お前も俺も死んだも一緒だ。
生きていけるならそれでいいだろうと。

『逃げよう、一緒に……』

彼女は、首を縦に振ることはない。
わかっていた。

わかっていたはずだった。

『ごめんなさい、貴方と行くことはできない。』

崩れる音がした。

俺の何かが、崩れる音。

『いけないの、――――。』

『聞いたぞ、副官のテージエルが死んだんだろ！』

『・・・彼のは事故よ。』

『お前が心を痛めていたのを知ってる！事故と割り切っていないことも！』

『テージエルがお前に恋心を抱いた！それだけであいつは』

『・・・やめて。』

『テージエルはお前を愛していただけなのに。』

キサラの顔から微笑が消える。

『こんな不自由な世界の何がいいんだ、キサラ！』

他を愛することさえ許されない。

密かな恋心を抱くことさえ罪。

そんな世界に自由なんてない。

『キサラ、行こう！』

それは彼女の全否定。

彼女が守ってきたことをすべて否定した。

だからこそ自分は悪魔なのだ、彼は改めて思った。

『キサラ・・・！』

『—————、私にはできない。』

『キサラ！』

『—————。』

彼女はもう一度、笑って見せた。

『私には、あの方しかないの。』

その言葉を聞いた瞬間、何故か視界が途切れた。

そして目が覚めたら。

俺は「ウラキ」になっていた。

彼女の、裏側に。

彼女は人間になっていた。
それも、平凡な少年に。

L v. 88 「裏」の真実（後書き）

ベリエルとナジェスは両思いです。

これでベリエルは「誰」になったのかわかるでしょうか？

人間を捨て、ナジェスのために生きたあの女性です。

それともう一人、男性の天使がいました。

テージエルさん。

彼も実は転生しています。

彼は一体「誰」になったのでしょうか。

少しづつ書いていきたいと思っています。

L v. 89 回り始めた彼らは

彼は、一体何なんだろう。



階段が続く。

暗闇の中を降りていく。

（・・・なんで降りてるんだっけ。）

わからないけど、足が進んでいく。

ゆらゆら揺れる灯りが少し不気味に僕の影を映す。

ぼんやりと、恐怖が滲んできた。

でもそれすらどこか人事で。

と。

「あっ・・・。」

急に階段がなくなった。

どこかに着いたようだ。

ボーっとして、こけそうになる。

「危な・・・。」

頭がボーっとしたまま、動かない。
ただ足が進んでいく。

でも深くは考えない。いつもそうしてきたから。

（僕今まで何してたんだっけ。）

そうだ、シーラとタスラ・・・二人はどうしているだろう。

ウラキはどこに行ったんだろ。ああ、シュヒと一緒にか。なら大丈夫。兄さんはなんだか様子がおかしかったな。元々か。

ジェリエ君はきっと兄さんのことちゃんと見てくれる。

オルデルさんはちゃんと帰れるといいな。家まで。きっと家族が待ってる。

フアリオンさんはきつと無事なはず。またフラツと現れるかな。あ、ちよつとそれは怖い。

じゃあ、僕は・・・？

急に、胸が痛んだ気がした。

ぎゅつと胸元をつかむ。

嗚呼、ちゃんとここに存在している。

大丈夫だ。消えていない。

暗闇の中でもちゃんと、僕は僕だ。

すると不意に灯りが揺れた。

「？」

不思議に思って立ち止まる。

そしたら偶然右側に通路が見えた。

まっすぐ進んでもよかったけど、せっかく見つけたんだからそっち

から行くことにした。

（あっちは忘れてなければ後で。）
そんなことを考えながら。

キサラは通路を進んだ。



「おい、どういうことだ。」

「何がですか？」

「さっきから何をしている。」

「置き土産・・・ってところですかね。」

にっこりとファリオンが笑む。

しかしそこには胡散臭さしかなかった。

「・・・それは預言者へのか？」

「いいえ。彼はこんなところには興味ありませんよ。」

「なら誰へ。」

「借りを今のうちにたくさん作っておくんです。後でこき使えるように。」

「ほお。ずいぶん下準備が面倒そうだな。奴隷を作るのはそんなに大変なのか。」

「ええ。正直ここまで骨が折れるとは思わなかったです。」

そう、さっきからファリオンは偽者の貴族を見つけては捕まえて、ひとつの場所に集めている。

手間もかかるしとても面倒な作業だ。

これが好んでやる作業とも思えないが、それだけ借りを作られる側は彼には必要な人材なのだろう。

「まあでもここまでやれば大丈夫でしょう。」

「名簿・・・はいいのか？」

「彼らなら自分でなんとかできるでしょう。今思えばそこまでお節介する必要はありません。」

「そうか。」

ディジラウがファリオンに背を向ける。

「ここに未練は？」

「・・・ありません。」

その日からファリオンの行方が不明となる。

元々は彼を同行しての旅となるはずだったため、キサラ一行にはとても痛手となるが

テイザが喜んだことは言うまでもない。



「あ、あんたら！」

「おお、君たちは。」

本物を探すキサラ一行が寄り道を始めていた同時刻。

偽者を捕まえるはずのテイザたち一行は、本物を発見していた。

「なんか予定と違うけどまあいいか。」

「ああまあ。いや、戦う場面にならなくてホントよかったよ。」

「でも面倒なことは嫌いですー。」

「はつきり言うねジェリエ君は。」

「あ、僕いいこと思い付きましたー。」

「「いいこと？」」

「皆さん僕についてきてくださいー。」

ジェリエが本物を先導する。

オルデルもテイザもよくわからなかったが一応従うことにした。

（なんせ俺らの仕事全部あいつがやっちまったからな。）

たぶん自分たちと別れたとき、彼はすでに偽者を捕まえることは考えていたはずだ。

彼は頭がよく回る。認めたくはないが。

「この分だとフアリオンって人は僕らが考えていること、結構前に行き着いてましたねー。」

「そうだな。」

「別行動とるって別に一人であんなに縛り上げなくてもいいと思いませんかー？」

「ああ、俺たちの一人くらいは連れてった方が楽だろうな。」

「本当は別のことをすることが目的で別行動とったと思うんですー。」

「で、偽者を縛り上げることはついで。うわ、ムカつくな。」

どこまでもいやーな男だ。

心底二人は思った。

そうすると彼はもうすでにその目的とやらを果たして行方をくらましている可能性がある。

それに関しては手放して喜べる気がする。

「随分なめてくれちゃってますねー。」

「だな。で？ジェリエ坊、どこ行くんた。」

「さっきの偽者が縛り上げられていたところですよー。」

「え？本当かいジェリエ君。」

「ええ。そこで本物さんと偽者さんには入れ替わってもらいますー。」

「ああ、そういうことか。」

現在、ジェリエ、オルデル、テイザの三人は囚人の服は着ていない。ごく一般的な服に着替えたからだ。

が、他の囚人たちは囚人服のまま。見つかったら言い逃れはできない。

「魔法で顔はそっくりにされてるからそれぞれ自分の顔をした奴と服を取り替える。」

「そういうことですー。」

「で、でも囚人の中には農民がいるはずだ。俺みたいに不当逮捕で。」

「そしたらさっき見つけた服の部屋まで行って着替えればいいだろ。」

「それにアナタとその不当逮捕の方々は面識あるんでしょー？」

「あ、ああ。」

「それで農民同士確認とればいいですよー。」

「そうだな。で、それ以外の奴は本物の悪者ってことで偽者と一緒に縛り上げる。」

「なるほど……。わかった。」

歩いている間にいろいろなことが進んでいく。

オルデルはそこで一つ、疑問に思ったことがあった。

（テイザ君とジェリエ君、俺より年下だよな？）

そう、二人は年下で。

しかし大人よりも頭が回っている。

というよりもなんとなくだが、場慣れしている気がする。

（気のせいか・・・？）

経験があるはずもないのに、状況をどんどんな方向へ変えていく。

（彼らは一体・・・今まで何をしていたんだ？）

テイザもジェリエも。

不自然な程頭が回る。

若いのに。

憶測ではあるが、大体の状況を把握している。

それに些細なことも気づいていつて。

そして自分たちが何をすべきなのか正確に考える。

今のところ読み間違いも失敗もない。

（いや、ジェリエ君とテイザ君だけじゃない。）

彼らより先に行くフアリオンという青年。

魔女だという貴族の少女。

動物に変身でき、体術に長けているウラキという少年。

そしてそれらの人間を実質まとめている少年、キサラ。

一人ひとりが彼を守ろうとしている気がする。

ジェリエ君以外の全員が。

守られるだけではなくて、考えることもできる。

（あれ、そういえば）

最初に男爵や子爵が偽者だと気づいたのもキサラ。
脱獄して管理所に導いたのもキサラ。
名簿から名前を消すという明確な目的を掲げたのも。
二手に分けて二つのことをやるように支持したのも。
そして二つのチームは実にいい編成になっていた。
・・・火がでた最初の牢も。

（え？）

キサラが、全て中心に近いところにいる気がした。
必然なのか、偶然なのか。

よくよく考えてみればおかしい気がする。

他の人物がもちろん関わっているが、一番の決定的な決め手になる
のはキサラだ。

そしてあの年にして子供が二人。

弟や妹ではなく、娘や息子と呼んだキサラ。

おかしい。

彼だけでなく、彼を取り巻く全てのものが。

オルデルには、彼らが違和感を感じさせる存在になりつつあった。

L v. 89 回り始めた彼らは（後書き）

オルデル「変だ。なんか変だ。」

ジェリエ・テイザ「「こいつ（この人）が？」」

オルデル「……どっちも。」

L v. 90 隠された罠

未来を知ることができる力があれば。何度それを願っただろう。



「よし、これで全員だな。」

「はいー。」

「案外早く終わったな。」

オルデルがホッと息をつく。

フアリオンが縛り上げた偽者と、本物との入れ替わりが無事に完了した。

また、オルデルの馴染みの農民と、その知り合いたちも着替えが渡され、囚人服を脱いだ。

もちろん他の地方から拘束され連れてこられた善良な者たちもいたので同様に扱った。

そして案の定、本当の罪人もいたらしく、囚人服のまま縛り上げられた。

その際に思い切りテイザとジェリエが暴れたことは予想の範囲内だったこともあり、オルデルは驚きというよりも呆れを感じていた。

（若さ・・・？にしてもひどいな。）

テイザの行動は正義感からくるものというよりキサラに動向できなかったことへの八つ当たりだった。

ジェリエの方はテイザに動向していることに対する八つ当たりを感じ

じる。

暴れっぷりを見た貴族たちは、拍手喝采。割と盛り上がっていた。元々田舎で暮らしていたこともあり、庶民にも通ずるものが多い。故に、庶民の敵を成敗する（ただの八つ当たりだが）テイザたちの存在はとても好印象らしい。

（いやいやそれでいいのか？）

ともあれ、彼らは無事解放された。

・・・のはいいのだが。

「俺はまだ帰れないのだろうか？」

「当たり前ですー。」

「お前は残るべきだろ。」

「ええー・・・。」

そう、他の者たちは紙に自分たちの名前を書き、帰っていった。テイザとジェリエに名簿から自分たちの名前の削除を託して。しかしオルデルはジェリエとテイザから両脇を固められ、逃げ・・・帰ることができなかった。

「お前は元々俺たちと同じオトリ組だ。諦めろ。」

「そんなこと言っただってもうオトリでもなんでもないだろ！」

「まあ確かにな。でも一度引き受けたんだ。最後までやれ。妻子持ち君。」

「そうですよーオルデルさんー。じゃないと僕らすっごく恨んじやうかもですー。」

「うゝ・・・。」

（それは困る・・・！）

一人でも質が悪いのに、一気に二人に恨まれたら命が幾つあっても足りない。

渋々オルデルは最後まで付き合うことを承知した。

「でももう大体の目的はフアリオン君のおかげで達成できたから楽かな・・・。」

「何言ってるんですかー？」

「え？何って？」

「まだ当初の・・・というか本来の目的が達成できていませんー。」

「あ・・・。」

（た、確かに。）

囚人服を脱ぐことなどは二の次でいいのだ。

そして本物と偽者のすり替えは本来予定にはなかったこと。

事実上、何も解決していないことになる。

「なんであんなに走り回ったのに。」

ガックリとオルデルが肩を落とした。

骨折り損もいいところだ。

確かに仲間たちは救えた。しかしそれは表面上だけ。

それどころか状況は何も変わっていないに等しい。

「収穫は偽貴族と本物の罪人だけですかー。」

「そうだな・・・。」

テイザがどこか上の空で答える。

キサラのことでも考えているのだろうと思ったが、違った。

「……。」

「変態さん？どうしたんですかー？」

「その呼び方やめろ。……ちよつと待っててくれ。」

テイザの表情がいつもより真剣なことに気がついた。

何かを考えているらしい。

（こういう顔してたらイイ男なのに。勿体無い奴だな。）
そんなことをぼんやり考えた。

「なあ、確証は無えんだけどなんか引つかかることがあって……
そこからいろいろ考えて……したらあ、これかもってのがあつて。でも若干ありえねえつつうか……だけど憶測だけどう考えればつじつまが合うつつうか……」

「ごちゃごちゃ一人でわけのわかんないこと考えないでくださいー。」

「ジェリエ君の言うとおりだ。でも引つかかるんなら話してみたらどうだ？どっかおかしかったら俺たちが指摘するし。」

「あ、おお。」

テイザが少し意外そうな表情をしてから、自分の考えを話し始めた。

「まず、こいつらを貴族そっくりにした奴の目的がよくわかんねー。」

「ですねー。」

「そこからいろいろ考えてみたら一個の結論が出た。でもそうすると若干腹が立つ。それにありえない。だけどつじつまだけはしっかり合う。そう俺は思う。どんなこと言っても馬鹿にすんなよ？」

「その結論ってやつによりますねー。」

「焦らさなくていいからさっさと言ってくれ。そこまで時間はないかもしれないんだから。」

するとテイザが薄く笑った。

張り詰めた雰囲気も少しだけ緩んだ。

「————貴族を捕らえたのも、貴族そっくりのやつがここにいるのも、全部時間稼ぎにしかなくてないかもっていうのが、俺の出した結論。」

テイザの口から出てきた言葉は、確かにありえないことだった。

「・・・は？」

「言ったらありえねえって。」

「じゃあなんでそんな結論にいったんですかー？」

面食らっているオルデルとは違い、ジェリエは冷静に話を進める。

「警備の兵が一人もこいつらを助けに来ない。警備だけならまだしも見張りもない。俺らが兵の奴らに襲われたのは潜入した最初の方だけ。俺たちは一応この牢に放り込まれはしたけど警備が穴だらけ。じゃなけりゃあの女はあそこまで来れなかった。」

「ちょっと待ってくれ。彼女は魔女だろ？ だったら魔法で」

「使い魔が傍にいたらな。でも聞いた話じゃガキ共を守るためにあいつから離れてる。」

そこで一気にテイザの顔が厳しくなった。

「あいつがいくら俺の可愛いキサラを溺愛していても、自分から危険の中に飛び込むとはしない。それが無謀だとわかっていればな。」

だが、あいつが使い魔も連れずに入ってしかも牢を突き止められたとすれば話は別だ。安全だとわかる。それだけの警備体制だったんだ。」

「確かにそれはおかしいですねー。」

「ああ。偽者の貴族だったら通常の警備かそれ以上の警備はする。でもその逆。ってことは」

「オトリ・・・？」

呆然とオルデルが呟いた。

「そうなる。」

テイザはうなずいて彼の呟きを肯定した。

「ということは、だ。奴らをオトリにすれば引つかかる何者かいたんだ。」

「貴族に関係してる人たちですねー。」

「そ。で更に足止め。でもそれは囚人たちの名簿がここにあることを前提にしてるっていつても過言じゃない。更にその引っ掛ける相手が名簿に目的を定めるであろうことまで眼中に入れてなけりやここに偽者は配置しない。」

「相当頭がいい人ですねー。その人。」

「かもな。で、そいつが引っ掛けたい奴は名簿を手に入れる前後で偽の貴族の存在を知って本物を助けようと考える人物って考えるのが普通だ。」

二人の話を聞いていたオルデルの顔は青ざめていた。

もしその話が本当だとしたら、子爵や男爵貴族すら下に見ているということだ。

貴族が絶対の存在である今、オトリという名目で彼らを利用するその犯人は相当・・・。

「イカれてる・・・そんな奴。」

「そうだな。時間稼ぎのために貴族を捕らえるなんて手間がかかりすぎる。だけどそれが確実だってそいつは考えたんだな。」

「そうすると兵が来ないのも納得ですねー。でもわかりませんー。」

「何がだ。」

「何のための時間稼ぎですかー？」

ジェリエの一言に、テイザが眉根を寄せた。

「それだ。ここに足止めするため・・・というのが一番しつくりくる。」

「そうですねー。それと、引っ掛ける相手っていうのは誰ですかー？」

「恐らく、牢に入れられたはずだ。もちろん監獄のな。」

「それはどうしてですかー？」

「名簿を眼中に入れるだろ。名簿に自分の名前があれば放れない。」

「じゃあ名簿を手に入れる前後で貴族の存在に気がつくのは何故ですかー？」

ジェリエがテイザを質問責めにするが、テイザは文句を言わなかった。

自分の考えをまとめるのにもちようどいいと考えたのだ。

「そこで牢に入れた意味が出てくる。」

「名簿だけじゃないんですかー？」

「そう。牢に入ることと貴族たちの何人かの顔は目にするだろ。」

「あ、わかりましたー。同じ顔の人がうろついてたら異変に気づくってことですねー。」

「そうだ。ちょっと前まで囚人やってた奴が貴族になれるはずない

からな。前後っていうのは仮に異変の明確な理由がわからなくても名簿を開けば子爵や男爵位の奴らの名前が連ねられている。万一名簿にたどり着いてもそいつの手のひらで踊らされる。」

テイザの声に悔しさが滲む。

憶測と言ったが、テイザには確証のようなものが得られたようだ。

「あの牢屋も、この管理所も・・・畏だ。」

ほんの一握りの人物へ向けた。
それだけのものだったのだ。

L v. 90 隠された罠（後書き）

テイザ「やられたな。」

ジェリエ「ですねー。」

オルデル「嘘・・・だろ・・・。」

L v. 9 1 扉の向こうに

そうして、それは現れた。



黒い。暗い。

（ここ、どこだっけ・・・。）

管理所。しかしあまりに不釣合いな地下。
まるでどこかの城の地下みたいな。

（お城。）

やばいワクワクしてきた。

超探検したい。

お城って豪華なもの色々あるんだよね。
金とか銀とか。そんなもの本当にあるのかな？

（いやいや待て待て。ここ管理所じゃん。）

お城なわけがない。何お城って。

メルヘンチックなシーラじゃあるまいし。

どうしてそんな思考になってしまったんだ。

落ち着けキサラ。乙女じゃないぞキサラ。

「あれ・・・？」

気づけば手元に持っていた灯りは消えていた。

「なんで明る・・・」
言葉はそこで途切れた。

そうだ。この黒さは。
この黒さが、光なのだ。

（黒い、光？）

聞いたことがない。

しかしそう考えるのが自然だった。
不気味さが滲んできた。

一本だけ続く通路をそれでもキサラは進んでいく。

（こう・・・壁とかに蝋燭とか灯りがついててもいいと思うんだよね。）

そうすると雰囲気が一層でる。
いや待て雰囲気ってなんのだ。
悪魔が棲む館・・・とか？

と。

「痛っ・・・。」

何かにぶつかった。
目を凝らすとそれは扉だった。

「わぁお。」

怪しげな雰囲気のある扉。

扉にそんなものを求めるつもりはなかった。

しかし管理所建設を担当した人にとんでもない変わり者がいたよう
だ。

こんなところにこんな部屋を作ってどうするつもりなんだろう。

（拷問部屋？ いや、でも管理所には要らない？）

じゃあどうしてこんなに隠されるようにして部屋があるのだろう。

人目につかないような不気味な部屋。

そんなものがここにあってどういう意味を成すのだろう。

しかしそんなことを知ってもきつと得にはならない。

そして同時に気づく。

黒い光はこの扉の中から漏れている。

（ああ、もう。）

ウキウキとかワクワクとか好奇心的なものが総動員して扉を開けよ
うとしてる。

心臓がバクバクと音を立てているのは好奇心なのか恐怖なのか。

「し、失礼しまーす。」

小声で言って扉に手をかける。

不思議なことに、鍵が開いていた。

（うわ、本当に入れるとは思ってなかった・・・）

キサラの目が驚きに見開かれる。

なんと、その部屋には先客がいたのだ。

扉を背に立っており、その顔を見ることはできない。

周りには部屋の天井にも届く程の本棚と、それに所狭しと並べられた本の数々。

村にあったちよつとした図書館以上だった。

その部屋の中心部にはローブを被った長身の人。

そしてその先に黒い光を放つ何かがあるようだ。

キサラには、恐怖を感じる要素が何一つ、なかった。

管理所の人間で、捕まるかもしれない。

恐ろしい人間で殺されるかもしれない。

そんなことすら頭を掠めもしない。

硬直し、立ち尽くしていると、その人物はゆっくりと振り返った。

キサラの顔にあった感情は、喜びだけだ。

「ナトス・・・!!」

ナトスと呼ばれた青年は、優しく微笑んだ。

L v. 91 扉の向こうに（後書き）

ずっと貴方を、探していました。

L v. 92 救われぬ望み

昔々、転生する前の勇者と魔王の話をしようか。



彼女は、小さな小屋で生まれた。

人間たちには彼女が見えなかった。

天使であるということに、彼女は最初は気がつかなかった。

毎日彼女はたくさんの人間に話しかけた。

しかし当然彼女の姿も声も、人間たちに届くことはなかった。

（どうしてかしら。）

それでも毎日彼女は話をしようと人に語りかけた。

そんなある日。

彼女を「見る」ことができる少年が現れた。

「あらあら、そこは玄関じゃないわよ。」

窓から少年が小屋の中に入ろうとしたので、彼女は注意した。
どうせ聞こえないだろうとは思ったが、一応だ。
すると、驚くべきことに、少年は答えた。

「へえ。気がつかなかった。」
「・・・!？」

驚いたのは彼女の方だった。

どうして聞こえるのか。

しかし生まれてから誰とも話したことがなかったので、喜びが溢れた。

「私のことが見えるの？」

「ん？アンタって他の奴らには見えないの？」

「そうなの。話しかけても聞こえないみたいで・・・。」

「じゃ、俺が初めてアンタのことを見つけたってこと？」

「ええ。そうなるわね。」

いたずらっぽく、少年が笑った。

「俺だけがアンタのこと見えるってわけだ。」

何故だか、彼女の記憶にその言葉と表情が鮮明に残ることになる。

「貴方、お名前は？」

「なんで？」

「お名前がなくちゃ、私貴方のことをなんて呼べばいいのかわからないわ。」

「他に呼ぶ相手がいないのに？」

そんな意地悪なことは、少年は言わなかった。

「そっか。俺は、ナトリルトス。長いからナトスでいいよ。リルト

て呼んだら怒るからな。」

「そう。わかったわ。私・・・私は、名前が無いの。」

少し悲しげに彼女は言った。

「そうだなあ。俺、ちょっと女みたいな名前だからアンタは男みたいな名前にしてやるよ。」

「本当に？ 楽しみだわ。」

「アンタ、そこは怒るところだろ・・・。」

「どうして？」

「どうしてって・・・。」

彼女は満面の笑みを浮かべた。

「私に名前をくれるのでしょうか？」

それだけで充分だとばかりに笑ったのだ。

（・・・変なやつ。）

でも、それ以上は何も言わなかった。

（何がいいかな。）

少年は何日かかけて考えた。

（ノリで男みたいになって言ったけど、それじゃやっぱな。）
いじわるをしてやろうと思ったあのときの自分が恨めしい。
なんてこと言ったんだ。

でもそれじゃ、嘘を言ったことになってしまう。

「キサラ。」

「？」

「アンタの名前。」

「本当に？」

「本当。」

すると彼女は微笑んだ。

嬉しそうにくるくる回った。

そしてそのとき少年は気がついた。

（羽……。）

そうか、天使なのか。

何を司るものなのか。

どうして天界にいないのか。

そんなことはどうでもよくなってしまった。

「でもな、それじゃ男みたいだろ？」

「そうかしら。私は好きよ。」

「……じゃなくて。アンタの名前は、今日からキサラ。でもな。」

ナトスは言いながら「キサラ」の目をまっすぐ見た。

「俺はアンタのこと、サラって呼ぶよ。」

「そしたら女らしいだろう？」そういつて少年は微笑んだ。
そしてこうも言った。

「俺だけが知ってる、アンタの本当の名前。サラ。でもアンタの名前はキサラ。皆にはキサラって呼ばれるけど俺だけがアンタをサラって呼べる。いいだろう？」

独占欲。それに一番似ていた。

しかし本人を含め、「キサラ」もそれに気がつかない。

二人ともそれを心地のよいことだと思ったのだ。

優しい束縛でもあった。

地上こゝに居てもいいという、優しい束縛。

幸せな時間が流れた。

いつしか少年は小屋に住むようになった。

「キサラ」と共に暮らして。

毎日二人で一緒だった。

「キサラ」は自分が天使だと気がつかなかった。

そしてナトスもまた、天使と人間が共に生きられることはないのだと気がつかなかった。

その日、までは。

ある日のこと。

ナトスは当然年を取り、青年になっていた。
周りの住民や、村の人間とも仲良く暮らし、うまく付き合っていた。
年頃の娘達との結婚話も幾つか持ち上がった。

ナトスはそれらを全て断っていた。

彼は美青年と呼ばれるに遜色ない人間になったのだ。
しかし誰とも関係を持たない。

それどころか、甘く浮ついた話もでない。
噂すら流れないのだ。

誰かが男色家なのではないかと言ったが、それも現実味がなかった。
そう。

ナトスはいっしょに「キサラ」に恋心を抱くようになっていたのだ。
自分にしか見えない、自分にしかない、尊い存在を。
自覚なしに恋し、愛するようになっていた。

最初は「キサラ」のことを自分が作り出した幻ではと思い、悩んだ
時期もあった。

それすら長く問題になることもなく。

彼は一途に「キサラ」を想った。

しかしそれが、はっきりとした恋情だと気がついてしまった。

気がついて、しまったのだ。

そしてその日を境に、ナトスには「キサラ」が見えなくなってしまった。

声も聞こえない、姿も全く見えない。
気配すら、感じるができない。

「サラ？」

突然失った尊い存在。

これからも二人で共に暮らせると思っていた。

「キサラ」もナトスも。

「ナトス？どうしたの？ナトス？」

「サラ？どこだ。サラ。」

何度「キサラ」が声をかけてもナトスは気がつかなかった。

「サラ。どうして・・・」

ナトスは悲しみを、その心に負った。
日を追うごとに彼はやつれていった。

毎日「キサラ」を呼んだ。

毎日の出来事を、独り言のように呟いた。

「サラ・・・サラ・・・サラ・・・」

「キサラ」はそのうちそんなナトスを見るのが耐えられなくなった。

そして人々が祈りを捧げる、神様へと、祈りを捧げた。

毎日村の小さな教会へと通い、祈りを捧げ続けた。
そしてそれが、カミサマへと通じたのだ。

そこで初めて、「キサラ」は自分が天使だということを知った。
彼が人間だということも。

二人が共に生きることができないと知った。
彼の苦しみが続いていくのだということも。

「私が、貴方にお仕え致します。この命が尽きるまで。」

「キサラ」はカミサマに忠誠を誓った。
彼女の命が尽きるまでの永遠の忠誠を。

「ですから、どうか。」

――――ナトスを、救ってください。

許されないことだとは、わかっています。

ですが、私も彼も。

互いを愛してしまったのです。

こうして、「キサラ」はナトスを救うためカミサマに仕え
ナトスは「キサラ」に関する記憶を全て、消された。

恋心も、愛も。

L v. 92 救われぬ望み（後書き）

それでも、私は貴方を思い続けています。ずっと。

そうして彼女は人になることを望んだ。

L V. 93 裏返った感情（前書き）

愛だの憎しみだの。

LV. 93 裏返った感情

そう、全ては罠だ。



「どうだ、進み具合は。」

「順調・・・ではないです。」

「ほお。」

椅子にゆったりともたれかかりながら、男は部下の報告を聞く。

部下と言っても暗示をかけて作った即席で、忠実だがものを考えるのが少し遅い。

少し苛立ちながら右手に握った何かを潰す。

ぶちりという音を大げさにたて、部下を促す。

「報告しろ。他はどうでもいい。奴の所在は掴めたのか。」

「はい。しかし」

「それは後にしろ。今奴はどこにいる。」

「・・・管理所に。」

「やはりか。」

（計画通りだ。）

焼け落ちたあの場所は表向きには「牢獄」。

しかしそれは名ばかりで、収容した者たちのことを執拗に監視する目的で作られた「監獄」だ。

牢獄だろうが監獄だろうがどちらも一緒だと男は思っていた。

そして監獄の看守にテイザとキサラが実は重罪人であると偽って最重要事項として監視させた。

収容していれば簡単に情報を収集することも手を下すこともできる。だが、脱獄することは目に見えていた。

・・・全焼させるとは思っていなかったが。

もう少しもたつくと思っていたが、たった数日で脱獄。

（昔と変わらない。俺の気に食わないことばかりする。）

どうしてこんなにも腹が立つのか。

最近になってようやくその理由が理解できた。

「テイザ。お前は転生前も、俺を苦しめていたのか。」

復讐に燃える男。

彼の前世は皮肉にも。

「ああ、テージェル、兄上・・・！！」

テイザの弟として生きていたのだ。

「俺こそが、貴方の弟であったのに！」

上官に惚れ込み、自分を捨てた兄。

聞けば、その上官を弟として愛でているという。

「このラーミエルが、悪魔の名の下に、兄上に屈辱と懺悔を与えよう！」

「やめろ。テイザは殺す。」

「ああラジェル。兄上は俺が殺す。」

「は？ふざけるな。」

「たかが人間如きが。真の悪魔に盾突くか。」

「半分天使の癖によく言うな。」

「しかし俺は悪魔の血を選んだ。」

同じ顔。同じ声で。

同じ人間が全く違う調子で喋る。

ただただ気味が悪い状況だ。

……二人の共有される記憶。

ラーミエルがどれだけテージェルを憎んでいるか。
想像するのは容易だった。

ラジェルがテイザを憎む理由。

それは単純で。

そしてそれはとても深く。

(憎い……。)

ぱっと、握りしめていた右手を開く。

ハラハラとバラバラになったものが落ちていく。

先ほど部屋を飛んでいた蝶だったものが。

かつてそれを兄と愛でていたことも忘れて。

どれだけ兄を愛していたかすらも忘れて。



「嘘だろ！」

「あらららら？」

シュルルと音をたてて、ウラキの体がしぼんでいく。
否。小さくなっていた。

「・・・あら、子豚かしら。」

「ウサ・・・ウラキだ！」

「うふふ気持ち悪いわ。」

「お前・・・もっと女らしい反応を。」

「私、小動物嫌いなよねー。」

（この女！俺を小動物扱いしやがって！キサラしか許さん！！）

そこなのか。キサラならそうツツコミをいれるところだが、
生憎とそのキサラを追っている途中なので誰もツツコミを入れる者
がいない。

大歓声を上げるものもない。

「いいから早く追うわよ。」

「・・・無理だな。」

「どうしてよ。」

「見る。この長くてでけえ耳は飾りじゃねえ。遠くまでよく聞こえ
る。」

「だからなんだってのよ。」

「キサラが動いてる音がしない。」

「え？」

シュヒアルは階段の下に向けていた視線をウラキに戻す。
信じがたいような目でウラキを見ていた。

「俺が言うんだから間違いない。音が反響を起してない。」

「じゃあキサラ君はどこに行ったのよ。」

「それがわかれば止めてねえよ。」

「……それもそうね。」

ウラキはくると振り返り、もと来た通り階段を上っていく。

それを見たシュヒアルは眉間に皺を寄せた。

少女の姿に似合わない容貌でその小さな生き物を凝視していた。その視線を受けてもウラキは止まらない。

「あいつは多分外だ。」

「どうしてわかるのよ。」

「勘。二つになっても俺たちはまだ繋がってる。」

「……。」

それでもシュヒアルはついて行こうとしない。

それどころか降りて行こうとした。

「無駄なことするな。」

「無駄じゃないわ!!!」

シュヒアルの魔力を帯びた声が、反響を起こす。

込められた魔力でウラキの頬が切れる。

流れていく血も気にせずにウラキは上っていく。

「何をそんなに慌ててるあいつはいなくならない。」

「どうしてそんなことが言い切れるの!」

「シーラとタスラがいる限りあいつは消えない。」

ウラキでも、シュヒアルでもテイザでもなく。

幼い二人の獣人の為に。

そうウラキは言った。

自分ですら彼は引き留められないと。

「――――ツ、あなたはっ！」

「貴方はキサラが大切じゃないの!？」

シュヒアルの声は怒りにも聞こえた。

どうして彼がいなくてもそうしていれるのかという批難も込めた。
そしてその声に、ウラキは激怒した。

「ふざけるなっ!!」

全身の毛が逆立つ。

目が、赤くギラつく。

「大切? そんな簡単な存在なわけないだろ！」

長い間。

長い間その姿を見てきた。

素朴で。

弱くて。

でも、愛おしくて。

不自由な世界に身を置いた彼女。

カミサマの下に忠誠を誓い。

しかしいつだって彼女はどこか遠くを見ていた。

『あの方』。彼女がそう言った人物は

きっと、カミサマではなかった。

姿が見えない何かに嫉妬して。

結局、彼女を攫っていけなかった。

あの世界から救えなかった。

「俺はあいつが嫌いだ!!!!!!!!!!」

憎い。憎いよ。

自分を選ばなかったあいつが。

表側になったあいつが。

姿が変わっても何も変わらないあいつが。

俺を蘇らせたあいつが。

救いようがないような、深い闇に染まりきった俺を
それでも受け入れたあいつが。

・・・それなのに愛してくれないあいつが。

「憎くて、たまらない・・・!!」

長い間。

忘れようとしていた。

悪魔なのだから一人を想い続けなくてもいいはずだ。

許されるはずだ。

忘れられるはずだ。

だから。

一つの体を共有して。

同じ人を愛して。

そうして、あいつが一部だということを忘れたかった。

報われないのなら、想い続けたくはなかった。

一途に誰かを待ち続けるのは自分の性に合わない。

だから、だから。

あいつの裏側になった。

拒絶をされなかった。

あいつの魂に触れたとき、あいつが愛した人間が見えた。

（何故）

俺が人間だったら愛してくれたか？

俺が悪魔だから愛してくれないのか？

あいつと同じく、人間になることを望んだ。

なのに何故だ。

どうして。

あいつと一緒に転生して。

同じ体を共有して。

錯乱した頭は真っ先にあいつが苦しみから逃れるために俺を産んだ
と思った。

違った。

耐えきれなかったんだ。

本当は俺を守り続けようとしたのに。

死の匂いが強かったから。

肉親が亡くなったから。

俺が起きてしまうのを抑えられなかった。

守ろうと、してくれていたのに。

だからだろうか。

人間にすらなれない。

「憎い！」

自分が憎くてたまらない。

あいつと共有した時間の分だけ。

「平気なわけあるか！」

一緒に、いないのに。

L v. 93 裏返った感情（後書き）

私には、憎いという言葉が「愛している」にしか聞こえなくて。

L v. 94 置き去りの子供

否定的な考えしか、もつことができないのに。



「ねえ。」

「はい？」

魔界。

魔王の城跡地。

そこから数百メートル離れた場所に、デイルシュファとヴェルカはいた。

城に比べて少し簡素な建物の中。

供を付けるのも煩わしく、いつもの様に傍らにはヴェルカのみがいた。

「同じ言葉はどうも、軽々しく感じないか？」

「・・・は？」

デイルシュファはどこか一点を見つめている。

幼さの残る横顔に似合わない表情で。

「申し訳ございません、仰っている意味が」

「愛とは。」

デイルシュファが窓際に寄り、外を見つめながら言う。

「愛しているという言葉。愛。それが最上級の僕たちの気持ちだろうか。」

深く濃い、黒と紺に染まった空はどこか深海を思わせる。
どこまでも深く深く続く、底の知れないところ。

「一言一言に、重い意味をこめ、放つ。それとて、一割も伝わりはしないのではないだろうか。重ね重ね、何度も何度も同じ言葉を繰り返せば、それはどんなに軽薄なことだろう。まるで三流の物語のように。」

窓を開け放ち、瘴気を取り込む。

・・・自分らしくない。

「しかし、我々は愛の他、最も適した表現を知らない。いや、僕が何も知らないだけなのかもしれない。」

「ディルシュファ様・・・。」

ヴェルカが何かを言いかけ、口を閉じる。

彼が今、一体何を考えているのか、わからなかった。

「俺は母上の腹の中で何年も過ごした。出てこれなかった。兄妹様に、父上を殺されたから。」

「存じて・・・おります。」

「だから成長も満足にできなかった。本当なら兄妹様と五つしか違わないのに。腹の中に居続けたせいで。」

「・・・・・・・・。」

それが、彼が幼い理由。

しかし、愛というものについて深く考える理由は一体なんなのだろう。

「腹の中にいた間、毎日母上が俺に語りかけた。『愛している。だが今は出せない』と。僕が殺されると思ったのだろう。しかし、毎日繰り返される『愛』という言葉、理解ができなかった。・・・今でも。」

濁った空気を吸い、溜息を吐くようにデイルシュファは言った。

「だから、母上の腹を破って出てきた。」

「・・・・・・・・。」

「愛という意味を全く理解できなかったが故の愚直な行動だ。純粋に僕は外に出たかった。」

「・・・・・・・・愚かではありません。」

「ヴェルカ・・・？」

「こうして、私は貴方様にお会いできた。ためらいなく貴方様が出てきてくださったおかげで。」

「そうだろうか。」

「そうですとも。少なくとも、私は貴方様の行動に救われました。また・・・デイルシュファ様自身も。」

「・・・・・・・・。」

（本当に、そうだろうか。）

意味もわからず、親を殺めた。兄のように。

それは王魔族としては当然のことだった。
だが、それは異常なことに思えた。
なんとなく、察してしまった。

他の悪魔たちも、魔族たちも、そんなことはしない。

何故自分たちだけそんなに愚かで残酷な所業を平然と行えるのだろう。

兄姉様の側近曰く、それくらいでなければ王は務まらないらしい。

「僕がやらなければきつと、ヴェルカは兄姉様が救っていた。」
「そんなことはっ……！！」

ヴェルカの顔から血の気が引く。
叫ぶ。

何かをしなければ、あの窓からあの人が出て行ってしまう。

不安定だからこそ自分が支えなければいけないのに。
何故、うまくいかないのだろう。

「なあ、ヴェルカ。」

デイルシュファは少しもヴェルカを見ずに言う。

「愛、とは……なんだろうな。」

まるで独り言のように。

「何が・・・仰りたいのですか。」

「愛とは強いのか？」

「・・・はい、とても。」

「弟を捨ててしまう程に？」

「え・・・？」

そこで初めて、デイルシュファがヴェルカを見た。

「たった二人。僕たちの血筋は兄姉様と僕たちだけ。他はもういない。兄姉様が片づけてしまったから。そして僕も。でも、その互いにとって本当にただ一つだけのものを捨ててしまえるほどに、愛というものは強いのか？」

「どういう・・・ことですか。」

デイルシュファは、顔を歪めた。

「兄姉様は、もう帰ってこないかもしれない。」

「愛とやらのために。」



兄姉様。

お願いします。

どうか。

どうか僕を一人にしないで。

ヴェルカが傍にいただけで満足できるくらい大人になるまで。
ヴェルカだけでいいと思えるようになるまで。

真に愛というものを知るまで。

どうか。

僕を置いていかないで。

願うことしか

僕にはできないのです。

悪魔だというのに。

兄姉様の幸せと僕の幸せばかり考えてしまうのです。

許してください。

叱ってください。

今はそれだけで満足できます。

それで兄姉様の関心が引けるのなら。
視界に入ることができのなら。

今だけはそれでいいですから。

僕が上手く生きられるようになったら。

その時は、僕を褒めてください。

L v. 94 置き去りの子供（後書き）

いつの日か。兄弟様の行動を僕が理解できるまで。

L v. 95 はじめましての合流。

さて、どうしようか。



「・・・・・・。」

「・・・・・・。」

「・・・・・・。」

無言。誰も喋ることをしない。

誰もが誰か先に喋れと強く念じる。
そして。

そんな空気を読み取れないのがキサラである。

「ウラキー!!」

「ぶわっ、やめろキサラ！」

ウサギ(?) になったウラキを見て、キサラが猛ダッシュ。

ウラキは一応条件反射で逃げようとした。

が。今は圧倒的にキサラの方が有利である。
サクッと捕らえられ、頬ずりされる。

「「・・・・・・。」」

鬼の形相でウラキを見つめる視線が幾つか。
もちろんキサラは気がつかない。

そしてそこで、呆氣にとられていたジェリエが我に振り返りだす。

「皆さんお疲れ様ですー。で。やっと合流できましたねー。」

そう。二つのチームに分かれていた彼らは見事に合流を果たした。ジェリエとオルデル、テイザ一行をウラキが探し当てたのである。ウラキの頬に血が滴っているのを見て、驚いたのはオルデルのみだった。

『うわ、どうしたんだい？』

『・・・別に。』

『何もなかったわよ。』

シュヒアルの顔色が若干悪いこと、ウラキの負傷、キサラの所在不明。

気になる点は幾つかあった。

しかし誰も何一つ聞かない。

聞きたくてウズウズしているオルデルも場の空気を汲んでも何も聞かなかった。

そして。

『・・・！キサラの声だ』

『『案内しろ（て）！！』』

案の定、真っ先にテイザとシュヒアルが食いついた。

『なんでこんな役ばかり・・・』

『きっとそういう運命なんですよー。諦めてくださいー。』

『ジェリエ君・・・少しフォローが欲しかったよ。』

『ドンマイドンマイ次頑張ろうぜ。』

『君に言われたくないよ。ウラキ君。』

ウラキが小さくなったため、オルデルがウラキを腕に抱いて走る。
テイザがウラキを腕に配置した挙句、脅したからである。

『もっと早く走れ妻子持ち君！』

『オルデルと呼んでくれないか！萎える！！』

そんなこんなで。

今に至るわけである。

「僕だけじゃなくて他の人も疑問に思ってると思うんですけどー。
質問いいですかー。」

ジェリエがナトスに視線を向ける。

ナトスは視線を受けてもスルーし、キサラに頬ずりされている小動物を見る。

『俺に実体を与えたこと、後悔させてやんぜ？』

実体を与えたときに言われた言葉を思い出す。

・・・確かに少し後悔した。

だが、少しだ。

この小動物になら（何故か）勝てる気がする。

根拠の無い自信を持ったのは初めてだ。
うっすら笑みが零れる。

『俺、キサラのこと好きだから。』

思い出してイラッとした。

何を粹がってるんだウサギが。

お前なんぞもう一生ウサギでいい。

人間の姿になれる方法はもう少し後になってから教えたって罰は当たらない。

むしろ感謝されてもいいくらいだとも思う。

「完全に無視ですかー。」

「……すまない。何だ。」

「貴方は誰ですかー？」

ナトスがちよつとだけきよんとした。

（ああ、そうか。）

今は人間なのだ。

他人に自分は誰なのか尋ねられた経験が無くて、戸惑った。

そう、ここでは誰も自分のことを知らない。

居心地さえいい場所。

「私はナキアだ。キサラの旅に同行させてもらうことになった。」

「「「!?!?」」」

絶句したのは三人。

シュヒアルとテイザとウラキである。

「な、なんで?!」

「キサラに許可をもらった。」

バツと三人の視線を浴びた。

しかしキサラはクレッシヨンマークを浮かべるばかりである。

「随分彼美人だけど、どこで知り合ったの？」

「そもそもどこの誰だっ!」

「なんで同行!？」

「美人ですねー。本当にあれ人間ですかー？」

「いいのかあんなの連れてって!」

質問攻めにあうキサラ。

（というか。）

ナトスがナキアと名乗ることにまだ違和感。

本名が知られるといけないのだそうだ。

そして更に。

僕が仮につけた名前が本名だったらしい。

『頼むキサラ。キサラから、私だけの名が欲しい。』

そんなことを頼まれたら。

（断れるわけ・・・ないじゃんか。）

だからナキア。

ナキアってつけた。

なんとなくだけど。

それでも彼は満足してくれた。

あの満面の笑みは反則だと思う。

『今日から、私はナキアだ。』

そしてナトスという本当の名は。

お前にだけ呼ばれたい。

魔界でも忘れ去られた名だ。

呼ぶ者も知るものも誰もいないだろう。

だから偽りの名を得て。

キサラと二人でいるときにだけ呼んでもらおう。

「ナトス」と。



こうして。

一行にナトスが加わった。

そしてその後、管理所で名簿はあっさり見つかる。

とある男の登場と共に。

L v. 95 はじめましての合流。 (後書き)

ナトス「おい、ウサギ・・・あまりいい気になるな。」

ウラキ「おいおい。抱きついてきたのはキサラだZE☆」

ナトス「・・・ (殺気)」

ウラキ「ごめんなさい。」

オルデル「すごい美人だよね本当に」

キサラ「そうですね。」

ジェリエ「僕のほうが可愛いですー。」

テイザ「つか男だろあれ。」

シュヒアル「肖像画作ったら売れそうね。」

「「「おい」「」」」

ナトス「・・・？」

L v. 96 身分不相応

誰が為に。



「魔王様。」

アリファスの声が廊下に響く。
ここは、魔王陛下の自室前。

「魔王様？」

返事は返ってこない。
しかし今は急ぎの用だ。
別に構わないだろう。

「失礼します。」

ドアを開け、中に入る。
ただこれだけの動作がとても長く感じてしまう。
彼の姿を見かけなかったのはたったの数時間。
それでも、姿を捜し求める自分。

（魔王様。）

許してくださいという単純な言葉さえ言えなくて。
彼に対してだけ、臆病な自分がある。

どうしていいのか、わからない。

そして、彼は自分の主人の姿を捉えた。
寝台の上に座る姿。

どこか遠くを見ている、主人。

「魔王様。ご報告があります。」

「……よい、下がれ。」

「……ですが、緊急の」

「下がれ。」

有無を言わせぬ口調。

いつものこと。

大したことではない。

……のに。

不安だけが煽られる。

何故。

「わかり、ました。」

部屋からおとなしく退出しようとする。

（魔王様。）

感情が、感じられない声だった。

本当に自分から興味を失くしてしまったのだろうか。

「一つ、聞かせてくれませんか？」

「……。」

「いつも、の……。」

『愛しているぞ。』

「もう、言うてはくれないのですか・・・！」

望んだことは、真逆のことだったのに。

望んだのは、本当の愛を向けられることだったのに。
望まなかったことこそが、現状。

飽きるほど浴びせられた偽りの愛の言葉。

それすら、もう紡がれることはないのだろうか。

（本当の音が聞きたかった。）

ただ、それだけ。

（魔王様自身を、私は見ていなかった）

ただ、それだけ。

「出て行け。」

嗚呼。

（アナタが遠い。）

過ちを正すことすら、彼にはできない。



まだ、このドロドロとした感情を自覚しだしたときのこと。
この頃はダヴェラのところに通い詰めていた。

そのときに、とある女性の形をした悪魔に出会った。

確か、名前はベラ。

当時はダヴェラの補佐役として配属されたばかりだった。
配属が決まったのはダヴェラの目に留まったからだとか。

部屋に入室すると、ダヴェラは席を外しており、彼女だけが部屋にいた。

少しの間だけ、彼女と話をした。

『似ている』

そう言ったのは彼女だ。

わけがわからず、首を傾げた。

『俺は、主君に恋をしたんです。』

『ツ——————！』

彼女は、私の気持ちを察した。

誰にも、悟られていなかった時期に。

『だから、俺は逃げた。』

『……………』

『迷いなんて、始めからなかったはずなのに』

勝手に契約を解いて。

遠くへ遠くへ逃げた。

だから魔族でいられず、悪魔になってしまった。

恋して、愛してしまったから。

『今でも、彼のことが好きです。いや、愛している。』

離れれば消えてしまう感情だと思っていた。

なのに、今でも苦しくてたまらないのだと。

そう、彼女は言っていた。

彼が自分のことを探しただろうか。

いや、今でも探していればいいのに。

暇さえあれば、彼女はそんなことを考えてしまうのだと言っていた。

『でもきつと、彼は俺を許してはくれない。』
『……何故、ですか。』

『彼の愛する人を殺してしまったんです』

あれは自分が殺したも同然のことだった。
きつと彼は許してはくれない。

なのに、彼に望んでしまう。

なのに、彼に愛して欲しいと願ってしまう。
なのに、許してもらおうとは思わない。

『彼に召喚されて、契約して。』

彼が主君であればそれでよかったのに。

友となり、彼が完璧な主君となり……宿敵と、なった。

引き金が彼女が死んでしまったことなのかは、わからない。

身分不相応な感情を抱いてしまった末路がこれだと、悲しげに語った。

今思えば、彼女は泣いていたのだと思う。

ただ、涙を流していなかっただけで。

『でも、アナタはまだ、大丈夫でしょう？』

（いいえ。）

いいえ。

もうこの時点で、私は手遅れだったんです。

既に私は、彼の肩書きだけを見、愛していた。

人格ではなく、「魔王様」という肩書きを。

偽りの愛の言葉を聞けば、真の愛の言葉が欲しいと願いながら。
それを望んだのは肩書きを持った彼、彼女に、だった。

だからこそ、魔王様もアリファスという人格を見てはいなかった。

そして与えられたのは、完全な無関心。

（いっそ。）

いっそ恨んだり、憎んでくれれば楽なのに。
何も感情を向けてくれないなんて。

そんな価値すら私にはないと、魔王様は思っていらっしゃるのだろう。

・・・まだ、大丈夫だろうと問うたベラは、先日ダヴェラによって死亡が確認された。

ただ一人、彼女の悲しみを知っている私は、彼女がどうして死に至ったのか、理解できる。

彼女は殺されたのだ。

きつと、自ら望んで。

彼女が愛したと言う相手に。

（ベラ、さん。）

私は、アナタのようににはならない。

私は、アナタのように潔く死ぬことができない。

「ああ、魔王様」

アナタを、いっそ困らせてしまおう。

アナタに、後悔をさせてしまおう。

私を拾ったことを。

魔王様、魔王様。

愛しい愛しい、魔王様。

アナタを生かすのも殺すのも、私になればいい。

私だけの、アナタになればいい。

永遠のアナタに。

L v. 96 身分不相応（後書き）

ねえ、もう一度言ってください。

L v. 97 奇妙な男（前書き）

主に魔王様の考察。中々出番無かったんで許してあげてください。

L v. 97 奇妙な男

ああ、ほら、アナタは変わらない。兄上。



「おい、ウサギ。」

「ウラキだっ！」

「何を言っている。そっくりであろう。」

「でもウサギじゃねえだろ！わざとか？！」

「ほう・・・よくわかったな。」

「わざとかっ！」

（そもそもこいつのせいでこんな姿に・・・！）

この男。精神世界で一度だけ会ったことがあった。

素性も名前も知らなかったが、彼は「ナキア」と名乗った。

そしてウラキに実体を与えた張本人。

ウラキの謎の体質も、きつとこの男のせい。

その確信が、今できた。

わからないことはたくさんあった。

自分が知らないことや、存在の理由まで知っている感じではあった。
それにどうやって実体をウラキに与えたのか。

（き、詮索なんざできないけどな。）

実際探りを幾度となく、それもさり気無く行った。

しかし何もつかめるものは無かった。

彼についてわかることは一つ。

「ナキア」という名前だけ。

（偽名だったら・・・）

ウラキは何も掴めていないことになる。

面白くない。自分ばかり何も知らないのは何だか嫌だ。
いつか尻尾を掴んでみせよう。

「なんだ・・・ニヤついて。気味が悪いぞ。」

「うるさいっ！」

（余裕かましやがって！）

「・・・。」

（二人とも、仲が良いなあ。）

なんだか初対面には見えない。

二人の雰囲気落ち着いているせいだろうか？
馴染んでいるような。

とても自然な。そんな感じ。

・・・。

（いいなあ）

何かなんて言わないけれど。

だって、それはおかしいことのはずだから。

（ねえ。ウラキ。）

僕はおかしいのかな？

いつもすぐにくる返事は、今はない。

ウラキはもう、自分の中にはいないのだから。

でも何故かウラキが全くの他人に感じてしまう。
似通った部分がどこにもないからかもしれない。

（変なの。）

僕は、おかしいのかも。

「キサラ、どうしたの？」

「……。」

「キサラ？」

「え？何、シュヒ。」

「ボーっとしてたわね。」

シュヒアルは笑いながら言っただ。

確かに、考え事をしてた。

・・・バレただろうか。

「さて、探しましょ。名簿。」

「名簿？」

「あ、ナキアさんは知らないのね。」

「僕たち、名簿を探してるんだ。」

「・・・そうか。」

(ふむ。)

どうしてキサラ一行がここにいるのかわかった。恐らくは名簿から自分たちの名前を削除しに行くのだろう。だが、この管理所の仕組みはそんなに単純ではない。魔術に長けている者の存在が必要不可欠だろう。

(幸いこの女、魔女だろう。)

とりあえずは自分の魔力を使うことはないだろう。今使えば疲労は避けられない。……気がする。

第一、現在ナキアことナトスは、精密な分身を一体、作っている。自分が居ないということをうるさい側近二人にバレないように、だ。今頃はきつと寝室にいるだろう。

黒真珠の力を借りているとはいえ、少し負担が掛っている。極力魔力の使用は避けたいところだ。

「名簿さえ見つければこんなところとつと出て……」
「おやおや、これは。」

キサラ達の後方、通路の奥から声が響いた。叫んでいるわけではないのに、大きな声。通路が妙な反響を起こしているようだ。

「名簿……とは、これかな。」
「……ッ、ラジェル?!」

「ラジェル。よかったな。まっ先に反応を返してくれた。」

「うるさい、お前には関係ないだろ。」

「ラジェル………?」

その場に突然現れた男とナトス以外の表情が曇った。

目の前にあるのは、一人の男が一人で会話をしているという異様な光景。

それも、一人の男が、声と表情を変え、瞬時に別人に変化するのだ。

「テイザ、俺を覚えているようで嬉しいなあ。」

「そう言うならもっと嬉しそうな顔をしたらどうだ。」

「ははっ、ラジェルの顔じゃあ無理だろう。」

「……お前は誰だ。何があつた。」

テイザが言うと、今まで嫌そうな顔をしていた「ラジェル」が無表情に変わった。

「俺は俺だ。」

「俺も俺だ。」

同時に男が喋る。

同じ口から違う声が、同時に。

「ラジェルと……誰だ。」

テイザが眉根を寄せる。

わからない。

この男が何なのか。

「……ラーミエル。」

少しだけ寂しそうに、男は言った。

「ラーミエル？」

「俺のことをお忘れか？ 兄上。」

「は?!」

明らかにラーミエルと名乗る男はテイザを見ている。
そしてテイザを兄と呼んだ。

「ふざけるな、俺の弟はキサラだけだ。」

テイザは当然のことを言った。

確かに、彼の弟は一人だけ。

しかしそれにラーミエルは激怒した。

「兄上……!! やはりアナタは!!!!!!」

「ラーミエルつつう名前も初めて聞いたぞ。どうしたんだ、ラジェ
ル。」

「さあな。ラーミエルは気性が荒い。……デリケートなんだ。
大切に扱ってくれ。」

「ラジェル、やはり兄上は俺がいただこう。」

「ふざけんな。あいつはテイザだ。テージェルじゃない。」

ブツブツと二人が変な会話をしだす。

この異様な光景を、テイザはもちろん、他の人間も受け入れられな
い。

・・・ナトスを除いては。

（同じ器に魂は一つ。）

だが独立した人格が二つ。

キサラとウラキと、似ているようで全く違う境遇。

（禁術にでも、手を出したか。）

キサラとウラキの場合、二つの魂がくつついていた。

それ故二つの人格ができあがるのは頷ける。

魂の相性は特別悪くは無かったが、均衡が崩れた。

そもそもキサラから生まれたわけではないので、別々にわけることができた。

だが、目の前にいるラーミエルと名乗る男とラジェルと呼ばれる男は違う。

完全に一つの魂なのだ。

融合した形跡は見られない。

魂が一つなのに二つの人格が同時に存在することはあり得ない。どちらかの人格がどちらかの人格を産んだのであれば別だが。

しかし、彼らの時の流れが違う。

（前世と、現世）

二つの記憶が合わさった。

それでも人格が二つになるという前例はない。

余程、互いに互いの自我が強いのだろう。

そして恐らく。

（テージエルというのは）

テイザと呼ばれた男の前世。

ラーミエルと名乗る男の兄だったのだろう。

（ふむ。）

確かこの男はあの雨の日に見た男だ。

この男は自らをキサラの兄と名乗った。

（兄弟か。）

ならば、あの光景が少々、不安を煽らなくなってきた。

少しだけなら許せる気がする。

この痛みはどこから生まれるかを知っている。

けれど、キサラを縛ることはできない。

するりと、どこかへ消えてしまう気がするから。

（賢者には程遠い、愚者だな。私は）

誉れ高き、魔王陛下。

残念ながら、あの少年の前では威厳を保つことすらできなそうだ。

ウサギに意地悪をして。

彼の兄にまで警戒心を抱く。

これを、人はなんと言おうのだろう。

（とにかく）

あの名簿を取り返せたのなら。

キサラを自由にすることが出来るわけだ。

あのラジェルとラーミエルという男がなんなのか、関係はない。
今はキサラの為に、何かがしたい。

（私は、おかしい。）

どこからかおかしくなった。

でもそれに嫌悪感は抱かない。

・・・嫌じゃない。

するべきことと、やりたいことがなんなのか。

今ならそれを自由に選択できるのだから。

L v. 97 奇妙な男（後書き）

それは嫉妬っていうんですよ。魔王様。

L v. 98 忘れられた男

その感情は、どうして生まれたのか。
考えたこともなかった。



「ラジエル・・・その名簿を渡せ。」

「どうして俺がそれに従わなければいけないんだ？」

陰悪な雰囲気の中、口を開くのは今のところ、三人だけ。
ラジエルとテイザ、そしてラーミエル。

誰も口を挟まない。

個人的なことは、誰もわからないからだ。

「なあ、キサラ君。あの、ラジエルっていう男は誰なんだい？」

「あの、それが・・・知らないんです。」

「キサラ君が知らないんじゃ、私たちも知らないわねー。」

「そうだな。ちなみに、俺も知らないぞ。」

「誰なんでしょうねー。」

小声でキサラ達が情報の共有を試みる。が。

実質、テイザ以外は誰もラジエルのことを知らなかった。

「もしかしたら、仕事先の知り合い・・・とか？」

「あの変態仕事してたんですかー。」

「てつきりキサラ君が全部稼いでいるものだと思ってたよ。」

「「ねー。」」

「失礼なことを言うな！」

「あー聞こえてたみたいですよー。オルデルさんー。」

「そうみたいだね。ジェリエ君。」

「お前ら……。」

オルデルは、管理所突入当初から半端ではない緊張感から、顔色が悪かった。

が、あまりに多くのことが一気に起こり、最早感覚が麻痺しきっていた。

奇妙な男の登場は、まさにとどめであった。

（こいつ、顔色が……）

「おい、お前。」

「なんだい？ウサ……ウラキ君。」

「おいふざけんな。じゃなくて、しゃがめ。」

「え？何でだい。」

「いいから。」

（脈が早い。）

熱もあった。

やはり、一般人だ。

成人した男だが、寝食を取っていない。

疲労は大きい。

（まずいな。）

しかし、妙だ。

テイザとキサラは特殊な体質をしている。

“討伐者”という一族の末裔だからだ。

一族を辿れば天使が先祖にあたるという、特殊な兄弟。

翼はとうに遺伝から姿を消したが、特殊な体質と、特殊な力を受け継いでいるはずだった。

直系の血統には、成長が遅く、長寿なものも出るという。

その二人が疲労が他人よりも少ないのには頷ける。

そして今のこのオルデルの状況も。

が。

ジェリエ。

この少年はどのようにして疲労を感じている様子がないのか。

（体術は会得しているっぽいけど。）

体力も見えた目以上にあるだろう。

だが、それにしては異常だった。

（なんなんだ？）

ウラキは、オルデルに視線を向けながら、ジェリエの気配を注意深く捉えていた。

「名簿か・・・。」

「おいラジェル。」

「ラーミエル、悪いがテイザはお前に回さない。その為に俺がどれだけのことをしてきたのかお前は知ってるだろう。」

「知っている。が、お前こそ知ってるだろう？俺が今ここにいる理

由を。」

「そんなものは前世で事をすませなかったお前が悪いだろ。俺には関係ない。」

「前世の悲願を果たしてくれようと考えてもいいんじゃないかな？」

（俺は蚊帳の外か！）

話題の中心にいるのは間違いなくテイザだ。

だが、テイザは会話の中心どころか蚊帳の外。これ如何に。

「言い争いはそこまでしてくれ。ラジェル。さっきから何を言ってるんだ。」

「・・・お前はどちらにせよ、オレに殺されるってことだ。」

「お前らに？」

「ら？ああ、ラーミエルか。気にしなくていい。」

「ところで、だ。俺は何で殺される予定なんだ？」

テイザがおどけながら聞く。

一同はその一言で一つ、察した。

（心当たり無しか————！！！）

ラジェルは、嫌そうに眉根を寄せた。

なんとなく、キサラはラジェルの方に同情した。

「覚えて・・・ないのか？」

「え？」

テイザは首をかしげた。

それを見たラジェルから、怒りは感じられなかった。

ただ、絶望に似た感情が、顔に表れている。
それを見てとったのはナトスだけだった。

（この男……。）

ラジエルは、テイザに恨みを持っているような口ぶりだった。
しかし、何も「覚えていない」ことに対する感情は、絶望。
怒りではなく絶望だったのだ。

（何かあるな。）

各々が考察し、名簿を奪うことを考えているときだった。

ラジエルの影が、揺らいだ。

「!あの男、悪魔と契約してるわ」

「え?!」

「シュヒ、わかるの?」

「ええ、あの影。あの影に悪魔が潜んでるわ。」

瞬間、影からドロドロとした何かが飛び出た。

形が形成されていない、生き物かすら判別が困難なモノだった。

人型の悪魔や魔族しか見たことがないシュヒアルは怯んでしまった。

「お前……そいつは。」

「俺が召換した。」

「おかげで、俺が出てくることができた。」

ラーミエルが狂気を含んだ笑みを浮かべた。

「ほら、ラジエル。記憶の中とあの男は何も変わらない。」

「・・・・・・」

「何も覚えてはしない。兄上の、ように。」

「・・・黙れ。奴は、テイザだ。お前の獲物じゃない。」

「どうして俺を止めるんだ。どうせ魂は兄上のモノ。変わりはないはず。違うか？」

「変わる。お前のことを、奴は知らない。」

「ならば、奴の魂に思い出させるしかあるまい？」

そう言ってラーミエルが左手を前に突き出した。

「ああ、この日を幾度となく夢を見た。大戦のあの日！俺はこれを成すはずだったのに！！」

名簿は最早ラジエルの手にも、ラーミエルの手にもなく。
ただ、宙に漂っていた。

「名簿？ハッ、そんなもの好きにするがいい！俺の目的は今も昔も！アナタだけだ、兄上！！」

辺りの空気を吸い上げるように、ラーミエルの手に風が巻きつく。
廊下のあらゆるものが飛び、灯りは消えてしまった。

暗がりの中で、ラーミエル、ラジエルだけが怪しく浮かび上がるのであった。

「己の行いに悔いるがいい！そして許しを請うのだ！！」

そう叫びながら、テイザに向け、気泡を発する。

喜びをたたえた表情で。

いたぶるように攻撃を重ねるラーミエルの顔はまるで、悪魔のようであった。

L v. 99 遂げられた目的（前書き）

テイザ、一時放置。

L v. 99 遂げられた目的

ああ、なんて醜いんだろう。



明確にその感情を自覚したことはなかった。
むしろ、今ですらよくわからない。

ただ、胸が締め付けられるわけではなく。
感情や関心を向けられることを望んでいるわけでもなく。
喉が詰まったような、息苦しさ。
そして胸にある居心地の悪い違和感。

それに苦しみむことしか、彼にはできなかった。

雨の中、二人が口づけを交わしていただけ。
二人は兄弟なのだ。
あれが普段のあいさつなのかもしれない。
それでも。

（何だというのだ。）

呼吸が、し辛い。

ぼんやりと、視界の端にいる彼。

そして自分も男だ。

いや、いずれは男となる身。

それが、何故。

目が捉えるのは彼。

耳が声を求めるのは彼。

会いたいと願う相手が彼。

手折ろうとした花は、彼。

きつと、彼が男だろうが女だろうが、これは変わらない。

他に、心を揺るがすものはないだろう。

（何だという）

空に浮いた名簿をラジエルという男に勘付かれず、手に取る。

何の為に。

この名簿には自分の名前は載っていない。
恐らく、この先も載ることはない。

焼き払い捨てる為に手に取ったわけではない。

ああ、何のために。

「キサラ。」

口は、自然と言を紡いでいた。

「ナトス・・・あ。」

「今はナキアだ。」

小声で言葉を交わす。

キサラとナトスの秘密。

誰かとの間に、秘め事がある。
それだけなのに。

この胸の高鳴りはなんなのだろう。

高揚感。

こんなものは、知らない。

こんなにも歓喜しているのに、不安になる。
不安で仕方がない。
けれど何が不安なのかわからない。

原因がわかろうとも、何も変わることはないだろう。
けれど。

「これ、名簿？いつの間に！」

「それはいい。用を済ませろ。」

「あ、うん。そうだね。」

ふわりと、キサラが笑った。

ジェリエという少年と、名前を照らし合わせながら名簿の訂正する箇所を示す。

この名簿というのは、魔法で字が練られている。

故に、改変するには魔法が必要だった。

シュヒアルといった魔女が、インクに魔力を練りこむ。

鮮やかに、特殊なインクを使い、字の上から字を重ねていった。

「この名前って誰の？」

「貴族になり変った奴らの名前よ。」

「そんなのいつの間に調べたんですかー？」

「このくらいは朝飯前よ。使い魔に任せたの。」

「え。今使い魔はシーラとタスラと居るって言ってなかった？」

「そうよ。精神系の魔法なら割と通るの。」

（ふむ。）

物理的な影響を及ぼす魔法よりも精神的に影響を及ぼすものを得意

としているようだ。

広範囲に渡り、力を解放。

精神に潜りこみ、各人の名を探った。

おおよそこのようなものだろう。

しかし得意にしているとはいえ、距離が離れている先で、広範囲に力を展開するのだ。

さすがは魔族の、上流階級貴族。

魔力は強大にして、力の使い方を間違っていない。

その技量は確かに手を叩いて褒めたくはなる。が。

その疲労たるや、少年少女、また自分を守る術はもうないはずだ。

（無茶をする……。）

今ならきつと、その辺りにいる下等な悪魔にでもやられる。そんな状態になるような危険なことをこなす。その意味は。

（この魔女の、命令か。）

この魔女の名前も、きつと名簿には載っていない。では、どうしてここまで協力をするのだろう。

魔王・ナトスは首を傾げる。

が、すぐにその理由を知ることになる。



信じられない。

ナトスが来てから、あっという間に名簿が手に入った。

さらには、特殊な名簿であったにも関わらず、あっさり改変することができた。

ジェリエ君も興味津津で見ている。

「すごいですねー。本当に魔女だったんですねー。」

「何よ。その言い方。」

「でもこれ魔力をインクに練りこむだけですよねー？ 割と誰にでもでき」

「おだまりなさい。それとも、そのお口をくつつけて差し上げましょうか？」

シュヒアルの右手がポン、と音をたてて傘のようなものを出現させた。

・・・杖やホウキではなく、今は傘がお気に入りようだ。

「わあ、それって雨の日に屋外で使うものですー。」

「知ってるわよ。」

「なら僕の顔に向けないでくださいー。」

ジェリエが両手をあげて首を左右に振る。

ただ、顔は楽しそうに笑っていた。

「割と誰にもできる。だったわね？」

「わかってるじゃないですかー。」

「魔法が扱えるものだけ、よ。」

「……そうですねー。」

二人が睨みあう。

最早この二人はテイザやラジェル、ラーミエルのことなど眼中にない。

そして、ウラキも。

「おい、アンタ。」

「口には気をつけるのだな。ウサギ。」

「だっ……!く、」

「要件は手短にしろ。」

「人間の姿になる方法、教えろ。」

名簿に集中が集まる中。

ウラキとナトスが会話を始めた。
とても自然に。

周りは、違和感も持たなければ、二人が会話をしていることに気づいていない。

「なんだウサギ。そのままでは不満か？」

「不満っていうか……人間の方が動きやすい。」

「ほお。実体が欲しいとしか聞かなかったが？」

「……アンタから実体もらったってこと、バラさないぜ？」

「ウサギの割には賢いな。」

「取引ってこういうことだろ？」

「どうだかな。」

ウラキの要求は、情報の提示。
ナトスの要求は、情報の漏洩を防ぐこと。
単純なことであった。

「キサラ。」

「何?・・・な、ナキア。」

「マッチは持っているか?」

「マッチ・・・・?」

「あ、それなら僕が持つてるよ。」

オルデルがマッチ箱をポケットから取り出し、ナトスに向かって放り投げる。

「そこの魔女。」

「え?私??」

「木の枝を転送できるか?」

「できるけど・・・・。」

「転送してくれ。」

木の枝という要求だったが、シュヒアルは腕ぐらいの太さの棒を転送した。

「一応、木製よ?」

「・・・・充分すぎるな。」

そして、マッチを擦ってそれに息を吹きかける。

棒を介して、火が膨張した。

わずかに魔力を練りこんでいるため、周りは何が起こっているのかわからない。

そして、その巨大になった炎が、ウラキへと襲いかかった。

「!!?」

と。

反射的に、ウラキはそれを食^くべた。

「え・・・?」

火は、体を駆け巡り、ウラキを包んだ。

そして。

ウラキは人間の姿に変化した。

L v. 99 遂げられた目的（後書き）

ナトス「炎を食べればなれる。」

ウラキ「普通に言えよおおおおお!!」
（泣）

ナトス「それではつまらないだろう。」

Lv. 100 管理所、脱出。

逃げるわけでは、ない。

戦略的撤退だ。

……ってね。

◇

「ッ……」

体中をかける打撃。

避けるだけの能力は、テイザにはなかった。

「痛ってえ！」

そう言いながら身をよじる。

しかし襲いくる空砲から逃れられない。

立っているのすら、やっとだった。

（悪魔がついてるってのは厄介だな……。）

生身の人間ならば、倒せる自信もまだあった。

だが、相手は魔法を使う。

反撃どころか近くに寄ることさえできないのだ。
そんな状況下で彼ができることは限られていた。

「お前ら、走れ！」

斜め後ろに顔を向け、叫ぶ。

「仲間だけは逃がそうってのか！お優しいね！兄上！！」

ラーミエルが不気味な笑みを浮かべて声を張り上げる。

左手から間髪入れずに空砲が発射される。

そしてそれでついに、テイザを吹き飛ばした。

「っは！無様だな！テイザ！！」

今度はラジェルが笑って言った。

ドロドロとした悪魔もゲヒゲヒと下種な笑いを浮かべた。

しかし。

テイザも笑っていた。

「そら、逃げるぞ！！」

そう、今のテイザにできることは。

逃げることである。

「「はああああああ？！」」

オルデル、キサラ、シュヒアルは呆れたように声を上げた。
ジェリエに至ってはラーミエル、ラジェルに背を向けて走り始めて
いる。

「つか、なんだウサギ！お前なんで人間の姿に？！」

「今そんなことを言ってる場合かー！」

余裕のテイザ。

それもそのはずだった。

吹き飛ばされたのは計算の内だった。

連発された風の衝撃はうまく流し、それでいて風に乗って遠くへ着
地した。

大げさに痛みがり、攻撃を煽り、その攻撃を利用した。

「せこい！」

「キサラ、ツツコミはいいから走れ！」

その瞬間、ラーミエルは理解した。

「アニウエツエエエエエ！……！」

叫びと同時に悪魔が追ってくる。
もちろんテイザの後をだ。

が。

すぐに悪魔の進行が止まった。

「ま、やられっぱなしは嫌だから、な？」

悪魔の顔面のような部分。

そこには水が張り付いていた。

「窒息はしないから安心しろよ。」

テイザは打たれたところを少しはらって走り出した。

後ろではラーミエルともラジェルとも取れない男の怒号が聞こえる。
それから、悪魔の声なき呻きが。

「あ。」

フツと笑ってテイザが振り返る。

「早くその水剥さないと、やばいかもね。」

何分、力が目覚めてから時間がたっていないから。
俺にも何が起こるかわからないんだ。

そう言って、ウインクをした。



シュヒアルは、傘をシュツと音を立て消し、ホウキを出した。

「やっぱ魔女の飛行はこれよね。」

ヒラリとスカートをなびかせて、ホウキに乗った。

つい、と名簿を引き寄せる。

「私はこれがあるべき場所へ戻すわ。その間に皆脱出してね。」

「そんな、危ないよ。」

「そんなことないわよ。」

「あの男が追ってくるかもしれませんがー？」

「あの変態しか眼中にないわよ。まあ、任せなさい。」

ヒュゴ、という音がしたかと思えば、シュヒアルはもういなかった。

「つか、おかしくね？」

「確かに……。」

大分走っているが、後ろからラーミエル、ラジェルが追ってきている心配がない。

すぐにでもテイザに飛びかかりそうな勢いだったが。

それもそのはず。

ナトスがさり気無く、目眩ましの術をかけた。

しばらくは、一行が逃げてきた通路が見えないはずだ。

とりあえずは彼らは逃げ切ることに成功した。

「で？」

ウラキがテイザを見た。

「何をしたのか覚えてるのか？」

「全くわからん。」

「・・・兄さん。最低だね。」

「さ、さい・・・いや、それは今まではそうだけど！」

「今までってなんだよ！」

（主に・・・女性関係とか・・・）

興味の無い相手からラブレターをもらったら受け取った傍から捨てたりしてた。

それにひどい振り方なら何度もしたことがある。

キサラが好きだという自覚が出てからというものは本当に丸くなったものだ。

そんなことを言ったら絶対キサラが三日は口をきいてくれなくなる。それは嫌だから何も言わないでおこう。

「あ。」

もしかしたら、女性関係で恨まれているのか？

今までもモテない男が逆恨みで殴りかかってきたことがあった。

返り討ちにしたが。

それとも刺し殺そうとしてきた女の血縁者か何かか？

・・・心当たりが多すぎた。

（でも奴は悪魔に手を出すくらいだからなあ。）

もつと理由がありそうだ。
執着たるや、である。

それに、ラーミエルという男はテイザを兄上と呼んでいた。

（わっかんねー。）

テイザは頭を抱えるのだった。



キサラとナトスは隣に並んで歩いていた。
どうも不思議な気分である。

（ナトスが・・・隣にいる。）

顔が、熱い。

テイザの波動の具現化で出た水でぜひ顔を洗いたい。

そうだ、疲れたんだ。きっとそうだ。

他の人よりは寝たけれど、やはり疲労はあるだろう。

・・・というか、まともに横が見れないのはそのせいだと信じた
い。

「キサ」

ドサッ。

ナトスがキサラに何かを言いかけたと同タイミングで、疲労がピークに達した一般人代表、オルデルが盛大に倒れたのだった。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「あ、俺が運ぶわ。」

沈黙の中、オルデルを運ぶことを申し出たのは気まずさに耐えきれなかったウラキだったとか。

L v. 100 管理所、脱出。（後書き）

これで管理所編、終了です。

L v. 101 子供たちの対面

この一週間は何かと大変だった気がする。



「ありがとうございました。」

「いえ、すいませんでした。本当はもっと早く家に帰せるはずだったんですけど。」

涙を流しながら感謝を述べているのはオルデルさんの奥さんだ。受け答えをしているのは、兄さん。

なんというか、うまいことオルデルさんをこき使ったことを隠している。

オルデルさんは気絶しているというより、寝ているようだった。

割と田舎の方なので、僕らの活躍(?)はすぐに広まった。

ここを納めている貴族は偽の貴族たちが行った徴収を全て返し、土地などの高騰してしまった金額は今まで通りの額に引き下げたそう
だ。

更に、オルデルさんの活躍を受け、農民たちへの援助は今まで以上に惜しまないらしい。

女性のための牢獄の方も、冤罪で捕まった人間は無事解放された。

焼け落ちた男性のための牢獄ができるまで、牢獄は統一化されるらしい。

まあ、詳しいことは後日来たオルデルさんの手紙で知ったんだけど。

「本当に解決したな。お前。」

「え？何を？」

「あの土地の貧困問題。大分潤うんじゃないか？あそこ。」

「はは、だといいなあ。」

「すごい寄り道だったな。」

「だね。」

取り上げられた馬車は何故か豪華になって返品された。
シーラとタスラも無事に保護されて、帰ってきた。

で。

「この人たち、誰？キサラー。」

「綺麗な人いるね！男なのに！」

「あの人なんか怖い・・・。」

「そう？男の中の男って感じ！かけー！」

「あ、あの方は女の人？男の人？」

「男だったら相当やばい気がするよ、シーラ！」

「ちよ、タスラ。しーっ。（皆ちゃんと男だから！）」

なんですか、ジェリエ君も付いてきた。

「えーと、こっちが」

「ジェリエですー。男で相当やばい方ですー。」

「あ、はは（聞こえてたー！）」

「俺はウラキだ。よろしくな。」

「じゃ、こっちの綺麗なお兄さんは?!」

「こっちはナト・・・」

「ナキアだ。」

(やば。)

また間違うところだった。

「なんていうか、絶世の美男って感じですよー。」

「女だったらよかったのにな、勿体ない。」

「黙れウサギ。」

「今は人間の姿してるだろ!」

(まあ、女にもなれるが。)

その事実を知っているのは、今のところキサラだけだ。

しかし両性の意味も何故女の姿になれるかも知らないキサラには口止めが必要だ。

「おい、キサラ。」

「何? ナ・・・キア。」

「・・・慣れろ。」

「う、はい。」

「私が女になれるということは秘密にしておいてくれないか。」

「あ・・・うん、まかせてよ!」

すると、ナトスは少し微笑んで頭に手を置いた。

「まかせたぞ。」

「・・・う、あ、うん。」

と。

ナトスの腕をテイザがチョップした。

「ちょ、兄さん!？」

「キサラに触わるんじゃない。」

「……。」

ナトスは氷のような視線をテイザに投げかけた。
魔界の猛者たちですら疎んでしまうその視線を、テイザはキサラへの愛一つで持ちこたえた。

(愚兄め……。)

キサラにいつまでこうして触れられるかわからないというのに。
キサラが生まれてから同じ屋根の下でのうのうと暮らしてきた人間が何の権利があって邪魔をしているというのか。

生まれてから長年兄という位置に収まり。
血の繋がり故の揺るぎない絆があり。
なんとも羨ましいことだ。

誰かを羨むなんてことはナトスにとって初めての経験であった。
ただ、それはキサラが関わることにのみ、感情も心も、動く。

(しかし……)

見た目通り、髪の毛がふわふわしていた。
触わり心地が実にいい。
どこぞの側近と比べると、遥かによかった。

近距離にいたせいか、キサラの香りがした。
魔界にいたときは感じられなかった、日だまりを近くで感じられた
気がする。

キサラ事態が、日だまりなのかもしれない。
そんなことを思った。

（体温は高そうだな。）

何故か、キサラに触れたところが熱くなった。

（顔・・・）

喋りかけると、少し戸惑ったような様子を見せる。
でも決して目を逸らさない。

ナトスの目を、見ている。

それで・・・心が躍る。

「触れるのには許可がいるのか？」

「「?!」」

（ど、堂々と何を言ってるんだこいつ・・・・・・・・!!!!!!）

そもそもどこから湧いて出てきた。

キサラは何だか楽しそうに話をしているし。
あんな顔をして喋るキサラは、初めて見た。

（・・・・・・・・）

「あいつは許可をもらっているのか？」

「え？」

ナトスの指さす先には、シュヒアルがいた。

「ちょ、シュヒ？」

「キサラ君♪」

キサラに抱きついている。

「な！てめ、離れろ！！」

「いやよ！私（の使い魔）が今までシーラちゃんとタスラちゃんを守ってたのよ？ご褒美ぐらいもらったっていいじゃない！！」

「そんなご褒美お前にはもったいないだろうが！むしろ俺が！」

「黙れ変態！！」

（あの女・・・邪魔だな）

確かあの生意気な魔族の契約者の人間。

主従揃って邪魔だ。実に邪魔だ。

是非ともどこかに行って欲しいものだ。

まあ、今は疲労からかあの魔族は眠っているようだが。

「キサラ！僕もく！」

「私もー！」

「シーラ、タスラ」

二人にハグをされて、とても幸せそうにキサラは笑った。

「何もできなくてごめんね！」

「でもでも、泣かなかったんだよ！」

「本当？偉いね。」

「あの二人の子供は誰ですかー？」

「誰だ。」

「一遍に聞くなよ。えっと・・・シーラとタスラだぜ。キサラが自称父親。」

「あー。この子たちですかー。」

「父親・・・？」

ナトスが首を傾げる。

それを見てウラキがニヤリとした。

「その顔を今すぐにやめろ、ウサギ。」

「俺はウラキだっつーの！見ろよこのかっこよさ！あんな小動物と一緒にするな！」

「なんでウサギさんなの??」

「ああ、こいつはな」

「あーあー！こいつの言うことは聞いちゃだめだ！」

「気になるねータスラ。」

「そうだね、シーラ。」

ヒュッ。

「えゝ。」

ウラキの視線が急に下がる。

タスラやシーラよりも更に視点が下がってしまった。

「「ウサギだあー!!」」

「!!」

「ウサギじゃねー！」

ウサギの様な姿になってすぐに飛びついたのはシーラでもタスラでもなく。

キサラだった。

「キサラから離れろ！」

叫んだテイザを心の底から応援するナトスとシュヒアルであった。

L v. 101 子供たちの対面（後書き）

ナトス「ウサギめ・・・」

シュヒアル「本当に腹立たしいわね。」

テイザ「締め上げてやる」

ウラキ「八つ当たりやめろ！」

L v. 102 平穩の馬車

ま、一段落ついたということですか？

◇

「すっかり大所帯になっちゃったな。」

「何言ってるのよ。二人増えただけでしょ。」

「でも大人数じゃない？ 割と。」

「今何人だ？」

テイザが馬車に揺られながら中腰になり、人数を数える。
だるそうに「1ゝ2ゝ」とか言っている。

「・・・7ゝで、俺で8つ。多いな。」

（本当はもう一人いるけど。ま、キサラ君たちにはわかんないかゝ。）
使い魔。力を酷使させてしまって、ぐったりしてる。

（あと何日か動けそうにないわね。アナタ。）

「うる、さいな・・・。静かにしてくれないか。」

（普段静かにしないでくせによく言うわね。）

「いじつ、わる、だな。はっ、いじわるは、されるよりする方が、
好みなんだ、が」

（知らないわよ。そんなこと。）

「くっ、う・・・やっぱり、無理、しすぎた、な。」

（あれだけ魔力消費激しければね。）

「わかつ、て、てやら、せた、く、せに・・・ひどいな。」

（もう黙んなさい。回復に時間かかっちゃうでしょ。）

「・・・そ、だな。しばらく、く、寝る、よ。」

そう言って、シュヒアルの使い魔は魔界に帰っていった。

影と、使い魔のリンクが外れるのを感じ取る。

長い間。影と使い魔が繋がっていたので、少し違和感を感じるが。

（いつもは手を抜くはずなのに・・・今回は全力だったわね。）

それも、魔界へ帰ってしまうほどに。

心境の変化、とは考えられない。

（ま、好都合ね。）

命令に忠実に動いたのだから。

「オルデルさん、短い間だったけどいなくなっちゃうと寂しいね。」

「そうですねー。」

「アイツも家族のもとに帰れて幸せだろ。」

「うん。帰れてよかったね。」

あのまま収容されていたら、間違いなく年内に出ることはできなかっただろう。

「そういえば、ジェリエ君はこれからどうするの？」

「僕ですかー？」

「うん。都まで一気に行くの？どこかに寄ったりする？」

「そうですねー。皆さんに合わせますー。」

ジェリエ君は、都に用事があるとかで、僕らと最終到着地点は一緒になった。

シーラやタスラの面倒をよく見てくれる。

正直どっかの変態よりもずっと貢献してくれてる気がする。

「おい。お前はどうすんの。」

「・・・私か？」

「そうですねー。僕も気になりますー。」

（ふむ。理由が必要か。）

確かに、何かなければ不自然か。

都。最早自分の所有物に等しい。

目的はもう果たしている。

地上を支配することで。

都は拠点なのであって、目的はない。

しかし馬鹿正直に答えるわけにもいかない。

「都に用があつてな。」

「どんな」と聞かれれば危なかった。

しかし誰も、用があるという返答だけで満足したらしく、何も聞かなかった。

ウラキは「ふうん」とか言いながらしつぽをパタパタふった。

「なんつーか、あんな足止めもう嫌だなあ。」

「そうだな。下僕その1。何も問題を起こすなよ。あ、飲み物取って来い。」

「今回の件は俺のせいじゃないだろ。自分で取りに行け。」

結局、管理所の件で二日程オルデルさんの家に滞在した。

滞在中はラジェルに恨まれる原因についてずっと考えていたらしい。

けれどその二日があっても兄さんは相変わらず何も心当たりがないと言っていた。

「食料確保の為に次の町で買出し行くわよ。」

「なあ、お前お嬢様だよな。下僕その2。」

「そうよ。それが何か？」

「従者雇えないのか？」

「・・・これ以上人数増やしてどうするのよ。」

「あー、そうか。従者が来るってことはつまり人数が増えるってことか。」

「そうよ。」

そして、シュヒアルがあることに気が付く。

「大変、この馬車を操れる人間がもういないわね。」

「は？」

「次の町までって男爵が貸してくださった方なの。その先は自分で探しますって言ったわ。」

「捕まえる前に雇ってた奴は？」

「さあ。どうなったのかしら。見逃されたはずよ。そのまま逃げたんじゃないかしら。」

「てか、どうするの？僕は馬操れないよ？」

「タスラは？お馬さんとお話できるんでしょ？」

「うん。でもねシーラ、あいつら子供の相手はしないよ。気高いんだって。」

「子供の相手をしないのが気高いなんて笑わせるわね。まあいいわ。誰か馬操れる人いない？」

「僕も無理ですー。ナキアさんとその変態はどうですかー？」
「できる。」

「できるぜ。」

「え。本当ですかー？」

「おい、キサラ、下僕その1はそんなこともできたのか。」

（いや、初耳。でもいろんな所で働いてたからできるのかも。）

「あとあのナキアって奴もすげえな。なんだアイツ。」

（確かにすごいね。お菓子とか作れるかなー。）

「いや、なんでだよ。」

（え、何でもできそうだって。）

「いやいや、何で菓子だよ。」

（シーラとタスラに何かおいしいもの食べさせてあげたいから。）

「あ・・・そ。」

ウラキは呆れたように首を振った。

「じゃあ二人で交代で。」

「ん。わかった。」

「・・・ああ。」

二人も同意したので、当分は大丈夫だということになった。

束の間の平穏の中を、馬車は揺れる。

L v. 102 平穩の馬車（後書き）

次話あたりからまた何とか編が始まりそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6502h/>

主人公にはなれない

2011年11月12日11時37分発行